
異世界迷宮で奴隷ハーレムを

蘇我捨恥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界迷宮で奴隷ハーレムを

【Nコード】

N4259S

【作者名】

蘇我捨恥

【あらすじ】

ゲームだと思っていたら異世界に飛び込んでしまった男の物語。迷宮のあるゲーム的な世界でチートな設定を使っがんばります。そこは、身分差があり、奴隷もいる社会。となれば、やることは一つ。俺様、最強、ハーレム、性奴隷の要素があり、人も死にます。

プロローグ

自殺サイト。

もちろん知っている人は知っているだろう。自殺する方法が載っていたり、一緒に自殺する仲間を募集できたりするサイトのことだ。

そんな自殺サイトの奥に、俺は紛れ込んでいた。

別に死ぬと決めたわけじゃない。

しかし、死への誘惑がないわけでもない。

俺は、この世の中に軽く絶望していた。

学校では軽いいじめを受けている。

はつきりとしたものではない。陰湿に無視されるようなやつだ。

授業中も、昼休みも、登下校のときも一人ぼっち。

小学校のころは直接暴力を振るわれたりもしたので、これでもマシになった方が。

俺は今、剣道と合気道を習っている。いじめられるのが嫌で小学生のときに始めた。

だいぶ力もついてきたので、最近では暴力を振るってくるようなやつはいなくなっている。

情けない連中だ。

弱い者には暴力を振るえても、勝てなくなると無視するくらいしかできなくなる。

まあ、こつちもそう思っで見下しているのだから、仲よくなれるはずもないか。

家での親父の態度も似たようなものである。

母親が亡くなったところは家庭内暴力を振るわれたりもしたのだが、このごろでは怯えて話しかけてもこない。

世の中なんて所詮こんなものだ。

建前をどんなにつくろつても、結局この世では力がものをいう。

力でかなわないとなれば、面と向かって直接何かをしてくるやつはいないのだ。

かといって、力があるくらいでは、今の世界でてっぺんを取ることとできない。

本当に腐った世の中だと思う。

そんなことを考えていたからだろう。

ネットで偶然見つけた自殺サイトに、俺は吸い込まれるように入っていた。

考えてみれば、この世に未練はほとんどない。

頼れる家族も、恋人も、友達さえいない。

他にどんな未練があるというのか。

成績がいいわけでもない。

親父から虐待を受けているようでは、大学進学も無理だろう。

うちは貧乏だ。

ちなみに、合気道と剣道は寺の住職が子どもたちに無料で教えて

いる。

でも、俺は知っていた。

住職が気に入った女の子にベタベタと触りたがるのを。

世の中なんてホント、こんなもんだ。腐ってやがる。

未練があるとすれば、あれか。

正直、童貞は卒業しておきたかった。

経験しないままに死ぬのは惜しい。

性欲盛りの男子高校生の考えることなんて、こんなもんだ。

あと、自殺するのはやっぱり怖い。

痛いのも怖いのも嫌だ。

人間死ぬ気になれば何でもできるといっしな。

合気道と剣道にはかなり打ち込んだ。他にやることもなかったし。

それなりの力はあるはずだ。

ひよっとしたらなんとかなるような気がしなくてもないと言った
ら嘘になることはないと思わなくもない。

自殺への決意を固めきれないままサイトを巡っていると、「自殺
の決意をする前に」と書かれたリンクが目飛び込んできた。

そう。これよ、これ。

健全な青少年、まだ高校二年生の俺に自殺なんか勧めちゃいかん。
こうというのがほしかった。

やっぱり死ぬのは怖い。

広告っぽいけど、とりあえずクリックする。

……なんだ、これ？

そのページに移動した俺は、思わずつぶやいていた。

内容を簡単にまとめると、この世界で生きづらいなら異世界で生きればいいじゃない、ってところか。

それどんなマリィ。

あなたが生きるのに相応しい世界、とかで、何か選択できるようになっている。

科学技術が発達した世界、海賊が跋扈する世界、古代世界、剣と魔法の世界……。

魔法がある世界なんていうのもあるのか。

それを選んで進めると、人間だけがいる世界、人間とエルフとドワーフのいる世界、人間と亜人と獣人のいる世界、など、これまたずらずらと出てくる。

分かった。

これはネットゲームへの入り口だ。

まあ広告リンクだったしな。

自殺志願者が集まるようなところに広告を出してどうするつもりなのか、と思わなくもないが、進めることにする。

今はネットゲームもいいかもしれない。

少なくとも、自殺を考えるよりかはよっぽど健全だろう。

案外、そんな風に思うやつが多いから、広告として成り立ってい

るのか。

ネットゲームは、高校に入ったばかりのころ、少しやった。リアルで友達のいない俺はネットゲームでもソロプレイだったが。

だからだろうか。深くはまることはなく、しばらくすると自然にプレイしなくなっていった。

それでも、それなりには楽しんだ。別に嫌いというわけではない。

ページをさらに進めていくと、文化の数や国の数を選ばされる。

いろいろあった方が面白いか。

飽きたときに他の国に行く手もあるしな。

次のページは、戦争の頻度だ。

国同士が積極的に戦う世界か、友好的な世界か。

ネットゲームだと、ギルドに加入してのギルド戦ということになる。

どうせソロプレイヤーの俺には関係ないな。

真ん中より少し友好的に傾いた四番目の世界を選んでやる。

それから、ダンジョン型かフィールド型か。

これはどちらかを選ぶのは難しい。

両方だな。

運営のおしきせじゃなくて選べるようになってるのが謎だが、最後に、あなたにお勧めのゲーム、とかでも出てくるのだろう。

しかし本当に選ぶ項目が多いな。
使用する言語まで選ばされたぞ。

しかも日本語とかじゃねえし。
何だよ、ブラヒム語って。

よく分からないのでデフォルトのままにしておく。

項目の多さにいいかげんうんざりしていると、ボーナスポイントの設定というページになった。

おお。

ゲームっぽいな。

やり直すを何度かクリックして、数値を変えてみる。

俺は、こういうのは凝るタイプだ。

いい数字が出るまでは進めない。

合気道が好きなもの、型に凝ったという面もあるかもしれない。
同じ型を何回も繰り返す。あれはあれで楽しいものだ。

ボーナスポイントは、基本的にかなり低い数字しか出ないみたい
だ。

十台二十台が多い。一桁も結構ある。

どのくらいが最高の数値なんだろうか。

おおっと。62。

多いのか、もっといけるのか、微妙な数字だ。

さらに繰り返す。

四十台はときに、五十台もたまには出るという感じが。さっきのより上は狙えそうだ。

71。

数値が緑色になっている。

これならまずまずということだろうか。

でも下一桁が1だからなあ。

最高が75なら十分だが、79までいけるならもう少し上を目指してみたい。

思いきってやり直しを選ぶ。

しかし、それ以降七十台が出ることはなく、六十台がごくまれに出るだけだった。

失敗したか。

そう思いながら、クリックしていく。

六十台で妥協すべきだろうか。

そんなことを考えながら惰性でクリックしていると、一瞬、8という数字が目の前を通りすぎた。

今八十台だった？

八十台だったよね？

ページ上の数値は、次の数字である19で止まっていたが。

ぐああ。しまったあ。

勢いに任せてやり直しを押してしまった。

はあ。仕方ない。

やり直しをクリックする作業に戻る。

六十台が何度か出たが、一度八十台を見てしまうと、もう六十台で止める気にはならなかった。

どれくらい時間が経っただろうか。

あの後には、七十台さえ出ることにはなかった。

仕方なく俺はクリックし続ける。

なかなか高い数字が出ないのに痺れを切らしながら、クリックし続ける。

さっきみたいにやり過ぎてしまつのを防ぐため、一つクリックした後は必ず数値を確認する。確認してから、やり直しを選ぶ。

やり直し。確認。やり直し。確認。やり直し。

そもそも、俺はなんでこんなことをしているのか。

もう逆にボーナスポイント一桁でよくね？

そんなことを考えながらも、クリックし続ける。

こうなれば意地だ。

クリックし、数値を確認し、またクリックする。

延々と、俺はクリックし続けた。

クリック。クリック。クリック。

クリック。クリック。クリック。

その数字はご丁寧にも金色に輝いていた。ついに、ついに出了た。

これを出すのに、どれくらい時間がかかっただろうか。やっとのことでも出した数字。

おそらく三桁はないので、これが最高値だろう。

99。

その数値を見ながら、しばらく満足感にひたる。

長時間にわたる苦闘の末、ついにたどり着いた。必死の想いで、搾り出すようにして出した。

苦難と忍耐と絶望の日々も、今となっては懐かしい。

あれだけの格闘を繰り返したのだ。

もうゲームなんかどうでもいいや。

ともいかないので、満足感を味わいながらも、俺は設定するをクリックする。

ボーナスポイントの設定の次は、キャラクター設定だった。

課金の説明も何もないのに。

これはブラウザー上で行うゲームなんだろうか。

せつかく高いボーナスポイントを出したのだ。いまさらやめるのも気が引ける。

とりあえず続けるしかない。

キャラクターの設定では、筋力上昇、体力上昇などの各種パラメ

ーターの設定や、ボーナス装備の設定、ボーナス呪文の設定、ボーナススキルの設定が、ボーナスポイントを使用して行えるようになっていた。

試しに筋力を99上昇させると、ボーナスポイントが0になる。それ以外の変化はない。

経験的には、この手のゲームの場合、パラメーター上昇の恩恵があるのは序盤だけで、レベルが上がれば最終的な強さは変わらないことが多い。

ポイントは他のものに振った方がよいか。

ボーナス装備もどうか。

ゲーム内で入手できる最強装備以上のものが手に入るのだろうか。単に、序盤が少し楽になる程度のものであるような気がする。

ボーナス呪文は使えそうだな。

ワープとか、ガンマ線バーストとか。

しかし何を選ぶべきか。

どこかに攻略サイトでもないかと思っただが、考えてみればこのゲームの名前すら知らないんだよな。

それなのに、ゲームをやるうとしている俺。

ボーナスポイント99が出たから、後日やり直すというのも嫌だ。99を出したのがゲーム提供者の策略だったとすれば、見事にはまってしまったことになる。

さてどうするか。

と思っただが、ボーナススキルの一番下、最後の最後に、キャラクター再設定、という項目があるのを見つけた。

このボーナススキルがあれば、やり直しが利くのではないだろうか。

このページがキャラクター設定だから、キャラクター再設定とは、普通に考えればこの同じページをやり直せるということだろう。

それならば、深く悩まずに適当な設定で始めていい。

キャラクター再設定をクリックして、チェックを入れる。
ボーナスポイント98。

ボーナススキルであと使えそうなのは、と。

必要経験値減少。

もちろん必要だ。

が、その隣には獲得経験値上昇のスキルもある。

どう違うんだ？

とりあえず両方選んでおくか。

必要経験値減少にチェックを入れると、ボーナスポイントが97になり、必要経験値減少が必要経験値二分の一に変わった。

必要経験値減少の強化バージョン、というか進化バージョンのようだ。

そのまま必要経験値二分の一をクリックすると、ボーナスポイントが95になり、必要経験値二分の一が必要経験値三分の一に変わる。

必要経験値三分の一をクリックすると、ボーナスポイントが91になり、必要経験値五分の一に変わる。

必要経験値五分の一をクリックすると、ボーナスポイントが83になり、必要経験値十分の一に変わる。

ボーナスポイントが一気に減ったな。
どうやら、1、2、4、8と必要なボーナスポイントが倍倍にな
っていきらしい。

試しに必要な経験値十分の一をクリックすると、ボーナスポイント
が67になり、必要経験値二十分の一に変わった。

83 - 67 = 16。

やはり倍か。

必要経験値二十分の一のチェックをはずしてクリックすると、ボ
ーナスポイント83、必要経験値十分の一に戻る。

もう一度クリックして、ボーナスポイント91、必要経験値五分
の一の表示まで戻した。

これで必要経験値三分の一までのスキルを得ているはずだ。

今度は獲得経験値上昇を選ぶ。

獲得経験値上昇にチェックを入れると、ボーナスポイントが90
になり、獲得経験値上昇が獲得経験値二倍に変化した。

こっちも同じパターンか。

獲得経験値二倍をクリックすると、ボーナスポイントが88にな
り、獲得経験値二倍が獲得経験値三倍に変化する。

獲得経験値三倍をクリックすると、ボーナスポイントが84にな
り、獲得経験値三倍が獲得経験値五倍に変化する。

ここままでしておくか。

その他は、と。

セカンドジョブ。

これは使える。疑いなく。

普通、ジョブ制になっているゲームでは、ジョブごとに固有のスキルや魔法が使える。セカンドジョブがあれば、二つのジョブのスキルや魔法が使えることになる。

ボーナススキルになっているのが不思議なくらいだ。

ボーナススキルで設定しなかったプレイヤーはどうするんだろう。

セカンドジョブにチェックを入れると、ボーナスポイントが83になり、セカンドジョブがサードジョブに変わった。

これも一緒のパターンか。

序盤から就けるジョブが多くあることはないだろう。

サードジョブ以上は必要になったら再設定でいい。

隣にはジョブ設定のスキルもあるな。

どう違うのか。

ジョブ設定ができないと、ジョブは勝手なものが設定されるところだろうか。

とりあえずこれも再設定時に回そう。

MP回復速度上昇や詠唱短縮も、使えるスキルではあるのだろうが、最初から魔法が使えるかどうか分からないので、再設定用で。

値引交渉。買取交渉。

これも何か買う必要が出てきたときに再設定するか。

鑑定。

攻略サイトも見ずにゲームをするには役立つだろう。

どうするかな。

後はいいや。

ボーナス呪文はとりあえず全スルーだ。
Lv99デスとか、MP全解放とか、大丈夫なのか、といたく
なる呪文もあるし。

しかしHP全解放は使わないぞと。
使わないといったら使わない。

ボーナス装備に戻る。

序盤に限れば、絶対的に有効なのはボーナス装備だろう。

武器にチエックを入れる。

ボーナスポイントが82になり、武器が武器二に変わった。

ボーナス装備までこのパターンなのか。

武器六までクリックし続けると、ボーナスポイントが20になり、
表示は、武器六のまま、かすれ文字になった。

ここまでらしい。

後は、アクセサリ二までクリックし、ボーナスポイントを17に
する。

そして、必要経験値五分の一にチエックを入れてクリックし（ボ
ーナスポイント9）、続いて獲得経験値五倍をクリックした。

残りボーナスポイントは1。

鑑定か、ボーナス呪文か、あるいは何かのボーナス装備にするか。
しかしボーナス装備は六まであるのだから、一ではたいした装備
じゃないだろう。

鑑定。

俺はこれを最後にクリックした。

これでボーナスポイントがゼロ。

決定を選択し、キャラクター設定を終了させる。

画面が切り替わった。

警告！

あなたはこの世界を捨て異世界で生きることを選択しました。

二度とこの世界に帰ってくることはできません。

続けますか？

はい いいえ

なんだろう。課金の警告でもない。

課金じゃなきゃどうでもいいや。

俺は適当にはいをクリックする。

最終警告！

本当に二度と帰ってくることはできません。

それでも続けますか？

はい いいえ

しつこいな。はいをクリック。

あれ？

実はやばいメッセージだった、ような気が、する、かも……。

冷静に考える暇もなく、俺の意識は何かに吸い込まれるように遠く離れた。

既戸

気づいたら、俺はわらの上で寝ていた。

なんでわらなんかの上に。

しかし、わらであることは間違いない。

どこかの物置小屋みたいところに、わらが積まれており、俺はその上で寝ていた。

東京にわらのある場所なんかあるのだろうか。

いや、そもそも俺はなんでこんなところに。

考えよう。

昨日は何をしていたか。

確か変なネットゲームみたいなのをしようとしていた。

途中で意識が遠くなって……。

気づいたら、わらの上だった。

何が起こったのか、よく分からない。

するとここはゲーム？

完全なヴァーチャルリアリティーで。

まさかな。

そんな話は聞いたことがない。

しかも、クリックするだけでゲームの中に入れるとかありえない。

夢の中とか？

「ブルルオ」

そのとき、何かがいなくなき音がした。
うおお。びっくりした。

小屋の中に何かいる。
俺は目をこらした。

馬

あれ？
なんだ？

馬という情報が、突然頭の中に浮かんできた。

馬がいるのは間違いないようだ。

起き上がって近づいてみると、馬が一頭いた。
足の太さとか、サラブレッドではないっぽいけど、まあ馬だ。
馬の種類なんかよく知らん。

小屋の大きさは、ワンルームマンションの部屋くらいはあるだろ
うか。

そこに一頭とか。いいご身分だな。
四畳半と六畳のアパートである親父と二人暮らしの俺に謝れと言
たい。

と、そんなことを怒ってもしょうがないので、辺りを見回す。薄暗いが、窓の外が赤らんでおり、かすかに光が入っていた。夕焼けか、朝焼けか。周囲に人の気配はない。

窓ガラスも木窓もなく、窓は開け放たれている。

馬はおとなしくしていた。

何だろう、と考えると、やはり、馬、という情報が頭に浮かんでくる。

これはなんだ、と思うと、頭に浮かんでくるようだ。

鑑定。

俺はそれを思い出した。

昨日、ゲームのキャラクター設定で、最後につけ足したスキルだ。

自分を見て、鑑定、と念じる。

加賀道夫 男 17歳

村人Lv1

おおッ。

情報が浮かんできた。

加賀道夫は俺の名前だ。

つまり、ここが昨日のゲームの中なのは疑いない。
完全なヴァーチャルリアリティーってやつか。

でもどうやって？

大体、名前なんか登録しなかったぞ。

俺の格好は昨日着ていたのと同じジャージ姿だ。
いつもの部屋着である。

それをゲーム上で再現？

装備ならともかく、ジャージを？

しかも裸足だ。

気温は暑くもなく寒くもなく。

この格好でも困るわけではないが、外に出るのに裸足は困る。

外が赤いのは朝焼けだったのか、先ほどより少し明るくなった小屋の中を見渡すと、サンダルみたいなものが置いてあった。

あれは何だろうと念じると、また情報が浮かんでくる。

サンダルブーツ 足装備

俺はそれをはくことにした。

靴下もないので、裸足ではく。

紐で縛って、脱げないように固定した。

自分の体を確認しながら念じると、情報が浮かぶ。

加賀道夫 男 17歳
村人Lv1 盗賊Lv1
装備 サンドルブーツ

……えっと。

盗賊Lv1ってのは、あれだよなあ。

悪かったよ。俺のものじゃない装備品勝手につけてとんだところでセカンドジョブを手に入れてしまった。

ちなみに、ジャージは装備には当たらないらしい。ゲームの外から持ち込んだものだからだろうか。

そういえば、ボーナス装備があつたはずだ。と思つて部屋を探すと、わらの横に剣が置いてあつた。

デュランダル 両手剣
スキル 攻撃力五倍 HP吸収 MP吸収 詠唱中断 レベル補正
無視 防御力無視

さすがはボーナス武器六だ。
壮絶な力を秘めているらしい。

剣の横に、指輪も置いてある。

決意の指輪 アクセサリ
スキル 攻撃力上昇 対人強化

アクセサリ二はスキルの方もそれなりか。
俺は指輪をはめ、剣を手にとった。

加賀道夫 男 17歳
村人Lv1 盗賊Lv1
装備 デュランダル サンダルブーツ 決意の指輪

やはりここはゲームの中なのだろう。
キャラクター設定で選んだボーナス武器まであったことで確定だ。
どうやってヴァーチャルリアティーを実現しているのかは知らないが。

俺は馬小屋の外に出ることにした。
ジャージの紐ベルトの隙間から、デュランダルを武士がやるみたいに腰に差す。
いつまでもここにいて、サンダルを盗んだことが見つかったはずい。

外の風景はどこかの田舎村のようだった。

木造平屋建てのあばら家が何軒かと、周囲には菜園。

太陽のある東の方には畑が広がっており、北は森が迫っている。

まだ太陽が完全に出ていないというのに、村人たちは早くも活動を始めたようだ。

二人連れの間人が道を歩いてきた。

俺は馬小屋の後ろにあわてて隠れる。

隠れる必要があったのかどうかよく分からないが。

しかしここがどこかも分からない。

慎重に行動した方がいいだろう。

サンダルも盗んでいるし。

物陰から二人連れを見た。

ザイヤン 男 38歳

村人Lv8

ガナツク 男 35歳

村人Lv7

二人の情報だ。

まず、姓がない。

ノンプレイヤーキャラクターなんだろう。

レベルはあまり高くないが、そういう風に設定されているだけかもしれない。

もっとも、俺はLv1だけだな。

俺は馬小屋の横から森の中に入って、村を観察することにした。
このまま村人の前に出て行っても何の問題もないかもしれないが、
成り行き上。

村は、南西の方向に結構な広さがある。

民家が三、四十軒ほど。

真ん中の方には二階建て、三階建ての家もあった。

家の外に出てくる人を監視する。

村人LV11

村人LV4

農夫LV5

お、この人は村人じゃないな。
横にいる人は奥さんっぽいけど、女性の方は村人LV6だ。
村人と農夫の違いが分からん。

ゲームならどこかにチュートリアルがあってもよさそうだが。
鑑定がなかったら、それこそ何も分からんぞ。

監視を続ける。

農夫LV2

村人LV7

村人LV25

このおっさんが一番レベル高いな。
話しかけるなら、一番レベルの高いこの人が。
あるいは逆に、レベル低いやつにすべきか。

村長LV8

微妙にレベル低い村長。六十八歳だそうだ。

商人LV6

行商人なのか、村の中に商店があるのか。
三階建ての家から出てきて、すぐ中に引っ込んだ。

商人LV3

今度は女性。

やはり三階建ての家から出て、井戸のあるところへ行っただ。

さっきの人と夫婦だとすると、住んでいるこの家が商店なのか。
話を聞くなら商人もよさそうだ。

などと考えていると、突然、村の中に大きな声が響き渡った。

盗賊

村全体に響くような大きな声が轟いた。

声のする方を見る。

さつき村の外に出て行った二人連れの男が、大慌てで戻ってきていた。

なにやら叫んでいるが、何を言っているのかは聞き取れない。そのうち、村の人たちが武器を持って家から出てきた。剣や鍬を持っている。

まさか。見つかったか。

と思っただが、どうやら俺目当てではないようだ。

村人たちは何人かまとまると東に向かって駆けていく。俺も森の中をひっそりと移動した。

東の方を見ると、砂煙が立っている。

何人もの人が村に押し寄せてきていた。

盗賊Lv7

装備 銅の剣 皮の靴

盗賊Lv11

装備 銅の剣 皮の鎧 皮の靴

盗賊Lv4
装備 銅の剣

盗賊たちはまだ遠くにおり米粒ほどにしか見えないが、必要な情報
報は浮かんでくる。

便利だな、鑑定スキル。

何が起こっているのか、この鑑定結果を見れば明らかだ。

ゲームスタートが盗賊襲撃イベントかよ。

このまま森の中に隠れていればやり過ごせるのかもしれないが。

盗賊たちのレベルはおしなべて低い。

レベル一桁なら俺でも十分相手になるだろう。

こっちには聖剣デュランダルがある。

村人までが持っている初期装備っぽい銅の剣では対抗できまい。

村人たちは、俺が寝ていた馬小屋の少し先、村の境目に陣取つて
いた。

そこで盗賊を迎え撃つようだ。

さっきのLv25のおっさんが中心にいる。

村長もいた。

無理すんな、Lv8。

対する盗賊は……。

盗賊Lv41

装備 鉄の剣 盗賊のバンダナ 鉄の鎧 皮の靴

この男が頭目だろう。

一人だけレベルが高い。

盗賊のバンダナなんていうしゃれた装備品まで身に着けている。

その次は、がくつと落ちてLv19。

さっきのLv11で三番目だ。

あとは一桁。

レベルが低いのは最初のイベントだからか。

頭目に注意すれば、俺でもなんとかなりそうだ。

盗賊たちは、やがて村にたどり着くと、剣をかざして斬り込んできた。

村人がそれを迎え撃つ。

すぐ目の前で、敵味方入り乱れての戦いが始まった。

何か叫んでいるが、何を言っているかはさっぱり分からない。

戦っている場所は俺が隠れている森の端からはすぐ先だ。

森から飛び出せば不意をつくことができるだろう。

盗賊も村人も両方レベル低いせいとか、どちらかが圧倒することはなく、互角のつばぜり合いを展開している。

Lv41の頭目はLv25のおっさんが相手をしていた。

しかし、さすがにレベル差があるせいとか、やがて頭目が優位に立

っ。

頭目がおっさんを押し倒して馬乗りになった。おっさんを抱きかかえ、腕を動かしてなにやら懸命に突いている。

何をしているのか。

おっさんが着けている鎧の間から、剣を刺しているのだろう。

甲冑を着けて戦うことが前提の古武術ではこうすると聞いたことがある。

おっさんを組み伏している頭目は、当然下を向いていた。

ひょっとして、今がチャンスか？

今なら、気づかれずに頭目のところまで行けそうな気がする。

聖剣デュランダルで背後から一撃を加えれば、かなりのダメージを与えられるだろう。

心臓が高鳴った。

腰に差していたデュランダルを鞘から抜き、両手で握り締める。

デュランダルは、木刀よりは重いが、振り回せないほどではない。剣道をやっていた俺には楽勝だ。

ゲームの初期イベントなら、Lv1の俺でも倒せない相手ではないだろう。

ならば行くしかない。

大きく息を吸う。

周囲の音が聞こえなくなった。

もう、誰が何を言っているのかさっぱり分からない。

俺は森の中から飛び出す。

Lv41の頭目めがけ、一目散に駆けた。

途中、気がついた賊の一人が間に立って防ごうとする。

俺はデュランダルを振り落とし、盗賊Lv2を一刀の下に斬り捨てた。

Lv2だとこんなものか。

再びデュランダルを振り上げ、走り寄る。最後に少し飛び上がり、頭目の横に着地した。

勢いを殺すことなく、そのまま腕に伝える。しっかりと足を踏ん張り、剣を振り下ろした。

下を向いている頭目の首元に剣を落とす。デュランダルが盗賊の首を捉えた。

頭目の頭が撥ね跳ぶ。

残された首元から、赤い血が吹き出た。

うわっ。

どんなスプラッターだよ。

クソゲー決定。

などと考えている余裕はない。

俺は他の盗賊に挑みかかる。

頭目の周りにいたレベル一桁は、全部一刀で片がついた。

デュランダルを振るうたびに、血しぶきがあがり、敵が数を減らしていく。

俺は頭目の次にレベルが高いLv19を探した。

レベル一桁の雑魚を片づけながら、首を左右に振り、盗賊たちを

チエツクする。

盗賊Lv19は、頭目からは少し離れた位置で村長のいるところを攻撃していた。

村長の周りには何人かの村人が集まり、防御を固めている。

誰かが何かを叫んでいた。

盗賊Lv19がこちらを見、やはり何かを叫ぶ。

盗賊たちが戦いを止めて逃げ出し始めた。

頭目がやられたので撤退するのだらう。

むしろ背中を見せる今がチャンス。

俺も追撃戦に移る。

何人かの盗賊を背中から屠った。

目の前に、Lv11の盗賊が立ちふさがる。三番目の男だ。

左から振られる剣を右から受け止め、今度は俺が左から剣を振って、受け止めさせた。

相手は鎧を着けているので、胴に一撃を入れても倒せないだらう。

俺は素早く判断すると、剣を小さく動かし、小手に入れる。

剣道をやっていたらこその動きだ。

盗賊Lv11の右手首がすぱりと切断され、斬り落ちた。さすがはデュランダル。

手首から吹き出る血を無視し、返す刀で切り上げる。手首を落とされては、剣で受けることはできない。

盗賊Lv11の首を跳ね飛ばした。

血しぶきの中を駆ける。

盗賊たちは完全に退却モードに入っていた。

盗賊Lv19は我先にと逃げている。情けないやつだ。というか、所詮は盗賊か。

俺は逃げようとする盗賊をさらに屠った。そして、盗賊Lv19にも斬りつける。

逃げ出そうと無防備な背中を見せるLv19はデュランダルの相手ではなかった。

残っている残党を蹴散らす。

結局、盗賊たちは誰も逃げ出すことができず、俺の経験値になった。

「ふっ」

すべての盗賊を倒すと、俺はその場にへたり込んだ。

ゲーム上のこととはいえ、息が荒い。

大きく息をはく。気を落ち着けた。

周囲の音が再び耳に入ってくるようになる。

フィールド上には、盗賊の死体や血しぶきが散乱していた。

こんなところまでリアルにしなくてもいいのに。

倒した相手が消え去るのに時間がかかるようだ。

テストは文句を言わなかったのだろうか。

完全なヴァーチャルリアリーのゲームなんて聞いたことがないので、ひょっとして俺が今やっているのがテストかもしれないが。

なら俺が文句をつけてやる。

座って息を整えていると、村長が近づいてきた。
Lv8の微妙にレベル低い村長。

「xxxxxxxxxxxx」

「何言ってるか分かんねえ」

「失礼。ブラヒム語の話者でしたか」

あつたな。そんな設定。

「そうだ」

「おお。さすがです。冒険者の方ですか」

何がさすがなのか。あんたもしかべってるじゃん。

「そんなところだ」

適当に相づちを打っておく。

「村の窮地を救っていただき、ありがとうございます」

「いや。よい」

そういうイベントだし。

しかし妙に生意気そうだな、俺。

村長がへりくだりすぎなのが原因だ。

レベル低いとはいえ、一応村長なのに。

丁寧語を使うのも面倒だし、なんとなく、こっぴどくしてしまう。

「できる限りのお礼はさせていただきます」

「そうか。では、どこか横になる場所はないかな。少し疲れた」

ゲームとはいえ、実際に体を動かしたような疲れがある。さすがヴァーチャルリアリティー。

それに、盗賊の死体が転がっているここには長居したくない。早く消える。

「それでは、わたくしどもの家へお越しく下さい。村長のソマールと申します」

ソマール 男 68歳

村長Lv8

装備 銅の剣 ロープ サンダルブーツ 村長の指輪

情報に間違いはないようだ。

「頼む。俺の名はミチオだ」

こいつら苗字ないみたいだし、道夫だけでいいだろう。

村長が先に進みだしたので、あわてて立ち上がり、追いかけた。

「xxxxxxxxxxxx」

「xxxxxxxxxxxx」

村長と村人たちの会話は、何を言っているのかさっぱり分からない。
い。

どうなってるんだろうね、このゲーム。

「ブラヒム語を話せる人間は少ないのか？」

「この村では、わたくしと商人のビツカー、宿屋の女将だけでございましょう」

「ふうん。そんなものか」

「ミチオ様も見たところまだお若いのに、ブラヒム語を操るとはさすがでございます」

「うーん」

何がさすがなのか。

ちなみに、ブラヒム語は日本語ではない。日本語ではない変な響きだ。

もちろん俺に話せるはずはないのだが、何故か完全に理解し、しゃべることができる。

よく分からないヴァーチャルリアリティー。

「もう一人、ブラヒム語を話せる元冒険者の男がおったのですが、先ほどの戦闘で……」

村長が声を落とした。

Lv25のおっさんだろうか。あるいは、元冒険者ならジョブは村人以外なのか。それらしい人間はいなかったが。どうなっているのだろう。

俺は自分を見る。

加賀道夫 男 17歳

村人Lv2 盗賊Lv2

装備 デュランダル サンドルブーツ 決意の指輪

おおっと。

先ほどの戦闘でレベルが上がったようだ。
激闘だったから当然というべきか。あれほどの戦いだったのに1
しか上がっていないと嘆くべきか。

俺たちはそのまま村長の家に向かった。

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「お湯を用意させましょう」

「悪いな」

村長が家の者に何か話しかけ、俺を家の中へと導き入れる。

村長の家は二階建ての民家だった。土壁造りの、田舎風のたたず
まい。

あまり文明レベルは高くないようだ。古代から中世前期といった
ところだろうか。

銃も弓もなかったしな。

玄関から入ると大きな土間がある。

そのすぐ横の小さな部屋に、俺は案内された。

「こちらの部屋でしばしお休みください」

「そうさせてもらおう」

「それでは」

部屋は、やはり土間であることに変わりはないが、奥に木の板が
渡りあつた。

俺は板の上で横になる。

「ふう」

ため息をはいた。

いったん、ログアウトするか。

……。

あれ？

ログアウトって、どうやるんだ？

現状把握

ログアウトできない。

俺はあわてた。

考えてみれば、俺はログアウトのやり方を知らない。
説明も、チュートリアルも受けてはいなかった。

どうやって現実に戻るのか。

「ログアウト……」

つぶやいてみるが、何も起こらない。

「ログオフ。終了。中断。エンド。メニュー。オープン。セーブ」

何も変わらない。

「メニューオープン。メインメニュー。終了メニュー。オプション
メニュー。終了オプション。ウィンドウ。ウィンドウオープン。メ
ニューウィンドウ。終了ウィンドウ。記憶。保存。保存して終了す
る。上書き保存。リセット。クリア。戻る。リターン。終了する。
終わる。終わって。終わった……」

考えうる限りのことを言ってみるが、何も起こらなかった。

これでは現実に戻れない。

いや、そもそもこれは本当にゲームなのだろうか。

感覚は、この場所が完全に現実であると告げている。それは疑いようがない。夢などではありえなかった。

現実で、かつゲームの中だとすると、ヴァーチャルリアリティーだが、完全なヴァーチャルリアリティーが実現したという話など聞いたことがない。

それも、ブラウザの画面をマウスでクリックしただけで。ヘッドギアとか何とか、それらしい装置を着けたわけでもないのだ。

現実感があるのにヴァーチャルリアリティーでもない世界。それは何かといえは、要するにただの現実だ。

それでも、ここがゲームだと思える理由。鑑定、と自分の姿を見て念じる。

加賀道夫 男 17歳

村人Lv2 盗賊Lv2

装備 サンドルブーツ 決意の指輪

こんなことが可能なのは、ゲームの中くらいだろう。

しかし、自分の姿を確認したことで、俺は見てしまった。ジャージについた返り血を。

ゲームなら、返り血なんかを残すだろうか。

ここがゲームの中なら、何故いつまで経っても振り返り血が消えないのだろう。

本当にここはゲーム内なのか。

いや、ゲーム内だったとしても、ログアウトできなければ同じことだ。

俺は現実に戻るのだろうか。

警告！

あなたはこの世界を捨て異世界で生きることを選択しました。

二度とこの世界に帰ってくることはできません。

続けますか？

自宅にいたときの最後の記憶。

設定の最後に、こんな表示が出たはずだ。

あれは本当のことだったのではないだろうか。

確かに、鑑定もできるし、武器六であるらしいデュランダルも持っている。

だからといって、ここがゲームの世界だと安心できるものではない。

もしここが設定どおりの世界なら、設定のときに出た警告もやはりそのとおり事実なのだろうから。

「失礼いたします」

そんなことを考えていると、村長が入ってきた。

木製のタライに入ったお湯を持ってこさせている。

「あ、ああ」

「こちらのお湯で体をお拭きください」

下女らしきおばさんがタライを置き、粗末なタオルを手渡してきた。

タオルというよりただの布切れだ。

「すまん」

「それと、着替えを用意いたしました。今お召しになっているものは汚れてしまったので、洗濯させましょう」

「頼む」

別のおばさんが折りたたまれた衣服を板の上に置く。

66歳という年齢と受けた感じからいって、村長の奥さんだろうか。

用事を済ませると、村長と一緒に出て行った。

一人になった俺は、ジャージを脱いで、タオルで体を拭く。

ジャージにはところどころ赤い染みがついていた。

盗賊たちの血だ。

いつまで経っても消える気配はない。

ゲーム中でないのなら、もちろん消えたりはしないだろう。やはりここはゲーム中ではない。

息を大きく吐き出す。

なるほど、鑑定もできるし、武器六も持っている。
だからといって、ここがゲームの中だと誰が決めたのだろう。

最終警告！

本当に二度と帰ってくることはできません。

最後の警告まで含めて、あの設定のすべてが有効な世界。
それはつまり、ただの現実だ。

警告がいつところの異世界である。

そう。

俺は認めるべきなのだ。

俺は気づいてしまった。俺が現実逃避していることに。

何から現実逃避するのか。

殺人。

ここがゲームの中なら、俺はゲームキャラを倒しただけだ。
ゲームの中でないとすると、俺はゲームキャラでない人を殺した
ことになる。

だから、俺はここがゲームの中だと思いたいのだ。

それは現実逃避であり、願望だ。

希望的観測にすぎない。

俺は認めるべきなのだ。

ここが現実であると。

殺人を犯してしまったと。

人を殺してしまったと。

斬ったときはただのゲームイベントだと思って必死だったが、デユランダルの手ごたえははっきりと手のひらに残っている。

俺は人の命を奪った。

しかし、ものは考えようだ。

ここは盗賊が普通に村を襲うような世界である。

このままログアウトできなければ、また誰かを殺すことになるだろう。

おそらくそれは避けられない。

避けられないのならば、ゲームだと思っているうちに済ませられてよかったのではないか。

いざというときに腰が引けて、こちらがやられては目も当てられない。

相手は盗賊。

悩んだり、落ち込んだりすべきではない。

やらなければやられる。

その現実を受け入れるべきだ。

俺は一つ深呼吸をして、覚悟を決める。

ここは現実だ。

そして、俺はこれからこの世界で生きていかねばならない。生きていくためには、これからも手を汚す必要があるだろう。それを恐れてはならない。

できることは何でもすべきなのだ。

そういえば、ここがあの設定の中だと思える理由がもう一つあった。

キャラクター再設定、と念じてみる。

脳裏に、キャラクター設定の画面が浮かんできた。

カーソルもイメージで動かせるみたいだ。

設定したボーナススキルのキャラクター再設定は有効らしい。やはりあの設定のすべてが適応されるのだろう。最後の警告まで含めて。

ボーナスポイントが何故か1になっている。

使い切ったはずだが、見落としたのだろうか。

とりあえず、そのままキャラクター再設定を終了した。

村長が置いていった服に着替えることにする。

ブツカブカのシャツにブツカブカのズボン。ともに藍色だが、ズボンの方が色が濃い。

ごわごわしてあまりよい着心地ではないが、着れないほどではない。ありがたいただくことにする。

加賀道夫 男 17歳

村人Lv2 盗賊Lv2

装備 サンドルブーツ 決意の指輪

装備品には当たらないようだ。

装備にデュランダルが入ってないのは、腰から抜いて横に立てかけてあるせいだろう。

そういえば、ボーナス装備ははずした方がいいか。

デュランダルは確かにすごい剣だ。すごすぎる剣だ。盗賊との戦いで実感した。

それだけに、狙われやすい。

ゲームの中ならば、盗まれないだろう。

しかし、ゲーム中でないなら、そんな制約はない。

俺は今、サンドルブーツをはいている。これは誰かのものだったはずだ。

誰かのものであったサンドルブーツを俺のものにできるのなら、俺のデュランダルも誰かのものにできるのではないだろうか。

これは二つの意味で危険だ。

一つは、デュランダルを奪われたとき、ボーナスポイントの63ポイントが失われる可能性があること。

ボーナスポイントは、俺がこの世界で生きていくための数少ない味方だ。

いや、今はただ一つの味方とっていい（99ポイントあるが）。それを失うわけにはいかない。

もう一つは、デュランダルをさらおうとする者が、俺の命をも奪う危険性があることだ。

この世界におけるデスペナルティーは何だろう。

レベルが下がって教会で生き返るのだろうか。普通の死だろうか。

いずれにしても、デュランダルは普段あまり持ち歩かない方がいい。

どうしても必要になったら、再設定すればいいのだ。

デュランダルを盗まれたときに消せるのかどうか。

試しに、デュランダルを持たないままでキャラクター再設定と念じる。

武器六はいじれなかった。

指輪ははめているので、アクセサリ二ははずせる。

やはり、デュランダルを奪われたとき、ボーナスポイントは失われるらしい。

いったんキャラクター設定を終了させ、立てかけてあったデュランダルを持つ。

頭の中でキャラクター再設定と念じた。

武器六をはずす。ボーナスポイントが67になった。

ボーナスポイントは何に回すか。

必要経験値十分の一と獲得経験値十倍を選ぶ。残りボーナスポイ

ント35。

必要経験値二十分の一を選んで、ボーナスポイント3。
ジョブ設定とサードジョブ（ボーナスポイント2）を選んで、ボ
ーナスポイント0だ。

キャラクター設定を終了する。
持っていたデュランダルが消えた。

ジョブ設定、と念じてみる。

頭の中に俺のジョブが浮かんだ。

村人Lv2 盗賊Lv2 英雄Lv1。

キャラクター再設定でサードジョブを選択したせいか、一つ増え
ている。

英雄Lv1を選ぶと、情報が浮かんできた。

英雄	Lv1				
効果	HP中上昇	MP中上昇	腕力中上昇	体力中上昇	
	知力中上昇	精神中上昇	器用中上昇	敏捷中上昇	
スキル	オーバーホエルミング				

最初から持っていたのだろうか。
それはないか。

サンダルブーツを盗んだときに盗賊ジョブを獲得したのなら、英
雄ジョブを得たのはその後だ。

盗賊たちから村を守ったことで、このジョブを獲得したのだろう。

ファーストジョブを英雄に変えようとしたが、できなかった。

ファーストジョブとしては村人が盗賊しか選べない。何故だ。

村人の効果は体力微上昇らしい。スキルなし。しょぼ。

しょうがないので、セカンドジョブを英雄Lv1に設定する。

英雄の効果はかなりすごい。少なくとも村人とは比べ物にならない。

サードジョブを盗賊Lv2にした。

盗賊の効果は俊敏小上昇だ。こっちもスキルはない。

村人よりはマシ、というところだろうか。

ジョブ設定を終え、ステータスを確認する。

加賀道夫 男 17歳

村人Lv2 英雄Lv1 盗賊Lv2

装備 サンドルブーツ

現状把握（後書き）

投稿して一日で思ってもみなかったほど多くのかたがたに読んでいただき、またお気に入り登録していただきました。厚く御礼申し上げます。

検分

「失礼いたします。よろしいでしょうか」

村長が再びやってきた。

「ああ、かまわない。何用だ」

いかな。どうも態度が尊大になってしまふ。
というより、村長がへりくだりすぎなのだ。
俺なんか一介の高校生にすぎないのに。

まあ、高校生といってもここでは通じないか。
ただの一般人、通りすがりの村人、しかもLv2である。

「盗賊の装備を集めましたので、確認をお願いします」

デュランダルの力を借りて盗賊たちをバツタバツタと屠ったから、
警戒もあるのだろう。

返す刀で村民にまで暴力を振るわれてはたまらない。
さりとて村を救ってくれた恩人に何もしいわけにもいかず。下
手に冷たく接すれば報復もありうる。

村長の立場から俺を見れば、俺はさぞ厄介な存在だろう。
したてに出て、いなくなってくれるのを待つ、という作戦なのか。

「分かった」

とは言ってみたものの、分かっていない。
確認ってなんだ？

装備品を俺のものにしていいのだろうか。

俺が倒した盗賊の装備だから、俺のものにしてもよさそうではある。

力のあるやつなら、村人が下手にくすねでもしたら暴れかねないし。

「こちらです」

「装備品は俺のものにしていいのか？」

村長の後をついていきながら尋ねた。

「はい。ミチ才様が倒された盗賊の装備は、当然ミチ才様のものです」

「そうか」

盗賊の装備品は倒した者がもらっているようにうだ。

現代のように警察や司法が発達した社会でなければ、普通のことなのだろう。

「今回、わたくしども村民は二人の賊を倒しました。つきましては、その二人分の装備品は倒した村人に分け与えていただきたいのですが」

村民は二人しか盗賊を倒していないのか。

そういえば、村人と盗賊はちまちまと打ち合っていただけで、デュランダルを使った俺はほとんど一太刀だったのに。

「分かった。かまわないだろう」

この世界の慣習も分からないし、提案を受けることにする。
おそらく、戦いに勝てたのは俺のおかげだから、全部俺のものだ
とごねることも可能なだろう。

しかしそれはやらない方がいい。

実際にはこっちは村人Lv2なのだ。今はデュランダルもないし、
村民全員で本気でかかってこられたら危ない。

「ありがとうございます。村民に成り代わりまして、お礼を申し上
げます」

さすがにLv2の俺に対して取る態度ではない。

「気にするな」

おそらく、鑑定はポーナスキルだから、村長やこの村の連中に
は使えないのだろう。

村民から見ると、俺のレベルは30以上くらいに思えるのではな
いだろうか。

村民がほとんど互角だった盗賊をなぎ倒したわけだし。

村民の中で最高レベルの村人Lv25は盗賊の頭目にやられてい
るから、村民の中で俺にかなうやつはいないことになる。
であればこそ、ここまでへりくだっているのだろう。

村長に連れられて出た村はずれの一角に、盗賊の装備品が置かれ
ていた。

一人の男がそばに立っている。

ビツカー 男 31歳
商人Lv6
装備 木の鎧 皮の靴

今朝ほど見た商人かな。

「こちらはビツカーと申しまして、村でただ一人の商人です」

「ビツカーと申します。このたびは村や私どもを救っていただき、感謝の念に耐えません」

「ミチ才だ。あまり大げさにするな」

感謝されるのは嬉しいが、会う人ごとにやられてもうざいだけだしな。

「かしこまりました。こちらが盗賊たちの装備品になります」

置かれている装備品を確かめた。

皮の鎧 胴装備

皮の靴 足装備

銅の剣 両手剣

どれも普通の装備みたいだ。

「xxxxxxxxxxxx」

「おお、そうですか。盗賊を倒した村人も喜びましょうか
かまわん」

俺が二人分の装備品を要求しないことを村長が商人に話したよう
だ。

ブラヒム語でやってくれればいいのに。

「ミチ才様は、空間はあまっておられないのでしょうか」

商人が問いかけてくる。

「空間？」

やべ。

早くも知らない用語が。空間があまっているってなんだ？

「私のブラヒム語がつかないでしょうか。装備品などを収める空間
でございます」

「……多分、あまってない、と思う」

分からん。ここに置くスペースじゃ足りないのか？

「ミチ才様は冒険者ではないのですか」

「いや、まあ、そのようなものだが」

冒険者に特別な定義があるのだろうか。
早くも化けの皮がはがれてしまった。

「冒険者のようなかたであれば、アイテムや装備品などを収納する空間を作る空間魔法スキルが使えるはずでございます。先ほどまで持っておられた剣を収納している空間に、空きはございませんでしょうか」

村長が助け舟を出す。

そうなのか。便利そうだ。

インベントリとか道具袋とかアイテムボックスみたいなものか。

デュランダルはキャラクター再設定で消えた。

村長から見れば、どこかの空間に入れたように見えるのだろう。

「インベントリのことかな」

「インベントリというのですか」

「インベントリ、オープン。アイテムボックス、オープン。道具袋。

アイテムスペース……オープン……」

小声でつぶやいてみるが、何も起こらなかった。

呪文が違うのか。あるいは覚えていないのか。

いずれにしても今の俺には使えそうにない。

村長と商人の目が冷たい、ような気がする。

変なことをぶつぶつとつぶやいている俺の姿は、客観的に見れば相当に痛い。痛すぎる。

完全に中二病患者だ。

し、鎮まれ、俺の左手。

「……いかがでございますしょう」

「残念ながら、空間はいっぱいなのようだ」

本当は使えないのだが、使えないというと、デュランダルをどこにやったのかという話になるしな。

というか、デュランダルはどこへ行ったんだ？

「私は明日の明け方、商品の仕入れのためにベイルの町までまいります。よろしければ、装備品を荷馬車に乗せて町まで運びましょう。ベイルの市場ならば武器屋も防具屋もございます。市でお売りになられればよろしいでしょう」

商人が申し出る。

装備品をこの商人が買い取ってくれるのかとちょっと期待したが、違ったようだ。

そんなことをされても中間マージンを取られるだけか。

「それはありがたい。そうさせてもらおう」

装備品は、売らずに自分用に流用するのもありだろう。

皮の鎧と皮の靴を一つずつ。

折れることがあるかもしれないので、銅の剣は二本にしておくか。

鉄の剣 両手剣

頭目が持っていた鉄の剣があるが、どうしよう。

銅の剣よりもワンランク上の装備なのだろうが。

いいものを持っていても盗まれたり狙われたりするだけだからな。別にレアな装備ではないみたいだし、これは売るか。

「こちらが盗賊たちのインテリジェンスカードでございます」

商人がメモ帳サイズのカードを出してきた。

「インテリジェンスカード？」

なんだ、それ？

オウム返しに訊いてしまう。

「盗賊の中には懸賞金がかけられていた者もいるはずでございます。これをベイルの町の騎士に差し出せば、懸賞金がいただけるでしょう」

「なる、ほど」

話自体は分かった。

盗賊が跋扈している世界なら、懸賞金は有用だろう。

カードは、盗賊を倒した証明になるようなものか。

この世界では誰でも知っている常識的な事柄のようだ。

あまり変に思われてもまずい。

俺は、カードを受け取ると、変にジロジロ見たりせず、受け取るだけに済みます。後は装備品をチェックするように振る舞った。

銅の剣 両手剣

銅の剣 両手剣

装備品を見ていくと、一つ変なものがある。

銅の剣 両手剣
スキル 空き

スキルというのは、デュランダルにもついていた。

「何かございましたか」

剣を手に持った俺に、商人が目ざとく訊いてくる。
空きというスキルがあるのではなくて、スキルスロットがあいて
いるのだろう。

「これはよい品のようだ」

「お分かりになるのですか」

もっとも、スキルをどうやってつけるのかは知らない。

「スキル。スキルスロット。スキル付与。スキル操作」

またぶつぶつとつぶやいてしまった。

何も起こらない。

何も変わらない。

というか、つぶやいて何かを起こしたことってないよな。

鑑定もキャラクター設定も念じるだけだ。

「鍛冶職人がモンスターカードを铸造するとスキルがつく場合があると聞いたことがあります。その剣に何かスキルがついているのでしょうか」

「いや。ついてはいないな」
「さようございますか」

スキルをつけるには特定のジョブが必要なようだ。
モンスターカードというのは何だろう。

「しかしこの剣は悪くない。俺の指物にしよう」
「スキルがついているかどうか、お分かりになるのですか？」

村長が訊いてくる。

「だいたいだな。冒険者の勘というやつだ」

鑑定はポーナススキルだから、持っている人は少ないだろう。
自分が持っていると言いつらすことはない。

「先ほど申し上げた元冒険者の村人、彼が使っていた剣がございませ
す。それを見てはいただけないでしょうか。よい物ならば、残され
た者たちの暮らしも楽になりましょう」

「俺に分かることであれば」

「ありがとうございます。早速、持ってまいりますよう」

村長が立ち去った。

俺はその後も装備品を見ていく。

他にスキルやスキルスロットのあるものはないようだ。

バンダナ 頭装備

頭目の装備品だったこの二つも同様だ。

あれ？

頭目の装備って、バンダナだったか？

窃盗

目の前に並べられた盗賊たちの装備品。その中に、バンダナがある。

違う。

頭目が頭につけていた装備は、これではない。

盗賊Lv41の男がつけていたのは、バンダナではなく、盗賊のバンダナだった。

ただのバンダナと盗賊のバンダナ。

バンダナを頭に装着すると、盗賊のバンダナになるとか。

そんなわけはないよな。

おそらくは別の装備品だ。

では、このバンダナは何か……。

「このバンダナは何だ？」

「盗賊がつけていたものだと思いますが」

商人には分からないようだ。

村全体で仕組んでいるのではないということか。

それならば、ここは強気で押してもいいか。

ただのバンダナをつけた盗賊はいなかった。

盗賊Lv41の男がつけていた盗賊のバンダナはここにはない。

となれば、すり換えられたと考えるのが妥当だろう。

現代日本ならば、俺は泣き寝入りするかもしれない。別に目立ちたくもないし、もめごとは嫌だ。

しかしここは現代日本ではない。

こつちの世界では、なめられたら終わりのような気もする。

この世界にやってきて、村を守って盗賊を殺した（まあ村を守るためにやったわけではないが）。

その仕打ちがこれではひどすぎるだろう。

あるいは、思い違いか。

いや。頭目がつけていたのは、確かに盗賊のバンダナだった。

「あの男がつけていたのは、盗賊のバンダナだ」

「そ、それは……」

商人の顔が驚愕にゆがむ。

商人は無実のようだ。よほど芝居が上手ければ別だが。

「××××××××××」

「××××××××××」

そこへ、村長が戻ってきた。

反応を見るに、村長もぐるではないようだ。

「まさか……。すぐに調べさせましょう。少々お待ちください」

村長が足早に去っていく。

さて、どうなるんだろう。

本当のところ、俺は村人Lv2だ。
あまり騒ぎが大きくなるのはよろしくない。

盗まれた装備品がそんなに簡単に見つかるものなのか。

ひょっとして村長がぐるだったら、村民全員でこちらに襲いかかってくるかもしれない。

村民全員でかかってこられたら、俺では勝てないだろう。

早まったか。

とはいえ、盗まれて黙っているのも癪にさわる。

こちらの世界では変な我慢はしない方がよいだろう。

せめてデュランダルを準備しておくか。

と思って周囲を確認すると、剣を三本持った女性が立っていた。

元冒険者の人の剣か。

「あの剣が」

商人に訊いてみる。

「さようございます」

「見せてもらってもよいか」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

商人が何か言うと、女性が剣を差し出してきた。

ティリヒ 女 31歳

村人Lv12

装備 ほむらのレイピア

元冒険者の未亡人だろうか。

東欧の田舎にでもいそうな金髪の女性である。

高校生の俺から見ればババアはババアだし、薄汚れた田舎のおばさんだが、悪くはない。

外国の人は年齢がよく分からんしな。

一生面倒を見る、と言われたら嫌だが、一夜を共にするくらいなら大歓迎だ。

他の村人たちを見ても、この世界、美男美女ばかりというわけではないようだ。ゲームの中でないのなら、しょうがない。

このおばさんでも十分美人の部類に入るだろう。

正直、ちよつと食指が動く。

一晩くらい是非お願いしたい。

未亡人だしな。

ありだな。

俺の妄想が爆発する。

こちとら村を救った英雄だ。

お礼に今夜ゆきずりの関係を、とか迫ってこないものか。

せめてここは親切にしておくか。

剣を手を取って見る。

ほむらのレイピア 片手剣
スキル 火炎剣

「これはなかなかよい剣のようだ」
「さようでございますか」

俺はほむらのレイピアをかまえた。

「火炎剣！」

そのままレイピアを振り抜く。

……。

何も起こらなかった。
剣はただ振られただけだ。

またやってしまった。

テイリヒさんと商人が不審な目で俺を見ている。
フラグが折れたな。

しかし、振ってみたことで呪文が頭の中に浮かんだ。
これを唱えるのか。

この剣が火炎剣のスキルを持っていることは間違いない。

スキルの名称からいって、斬りつけたときに火炎による追加効果があるのだろう。

「呼びかけたるは我が心、感じ現る剣の意思 奔流、火炎剣！」

俺は呪文を口に唱え、レイピアを振る。

すると、レイピアの周囲を炎がおおった。

おおっ。

すごいな。

「はう……」

ティリヒさんも驚いた表情で見ている。

あんたの旦那の剣じゃないのかよ。

まあ、知っていたらわざわざ俺に鑑定させることもないか。

視界の端っここでは、村長が村人と何か話していた。
その村人も今のを見たようだ。驚いたような顔でこっちを見ている。

他人の持ち物をくすねるとどうなるか。いいデモンストレーションになっただろう。

俺も他人のサンダルブーツをくすねているのだが。

「
××××××××××
××××××××××」

商人とティリヒさんもなにやら話している。

うーん。

しかしなんか体が重いな。

肉体的な疲れではなく、精神的な疲れ。

ドツと疲れて、何をするのも億劫になる感じがする。

あれか。

スキルを使ったので、MPを消費したのか。

多分魔力的なものが足りていない。

村人Lv2では、連発は難しいのだろう。

「高く売れそうでございますでしょうか」

商人が訊いてきた。

「どうかな。すまんが、相場にはあまり詳しくないんだ。どの程度の値がつくのか、まったく分からん」

「ミチ才様に買い取っていただくわけにはまいりませんか」

「本当に相場が分からんのだ。一度武器屋に見せて、値段を聞いた方がいい。もし武器屋にこの剣の価値が分からないようなら、俺が高く買ってもいい」

相場どころか、通貨単位さえ知らないからな。

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

商人が何を伝えると、ティリヒさんが俺に向かって頭を下げる。

よいよい。

その代わり、今夜はゆっくりと。

た、たまらんツ。

俺はほむらのレイピアをティリヒさんに手渡しして、次の剣を見た。

シミター 片手剣

スキル 空き 空き

空きのスキルスロットが二つある。
かなりいい剣だと考えた方がいいよな。

「スキルはないが、こちらもいい剣のようだ」

「亡くなった元冒険者が大切にしていたものだそうでございます」

空きのスキルスロットがあることを知っていたのだろうか。

冒険者の勘か。あるいは偶然か。

「相場が分からないので、これも一度武器屋に見せた方がいいな。
武器屋が買い渋るようなら、少々色をつけて俺が買ってほしい」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

頭を下げるティリヒさんにシミターを渡す。

タガー 片手剣

最後の一本は、何の変哲もない剣のようだ。
ただのタガーではな。
あまり金にはならないだろう。

「これは普通のタガーのようだ。悪い剣ではないが、高くは売れぬであろう。この剣であれば女性にも使えよう。元冒険者の遺品として、大切に使うてあげてはどうか」

俺はタガーをティリヒさんに手渡した。

「xxxxxxxxxxxx」

商人から話を聞き、ティリヒさんの目が赤くなる。

あれ。

やばい。

対応間違っただろうか。

ティリヒさんは涙をこらえ、剣を持って帰っていった。
最後に亭主のことを思い出させて、フラグがバキバキに折れたように気がする。

こ、今夜待ってますよ、ティリヒさん。

ティリヒさんが去ると、入れ替わりに村長が数人の男とやってきた。

「ミチ才様、申し訳ありませんでした。こちらの男が、バンダナをすり替えておりました」

村長の後ろでうつむいている男には、木の手枷がはめられている。
単独犯なのか。それともスケープゴートか。

「xxxxxxxxxxxx」

「xxxxxxxxxxxx」

「こちらが正しい遺留品でございます」

村長が促すと、隣の男がバンダナを差し出した。

盗賊のバンダナ 頭装備

スキルはないみたいだ。

「確かに。これで間違いない」

「それで、この男の処罰ですが……」

村長が俺の表情をうかがうように問う。

うん。まあ、いいたいことは分かった。

つまりは罪を軽くしてくれということだろう。

村の中で内々に処理すれば、大ごとにはならない。

「村には村の規定もあるであろう。俺としてはそちらの処罰に異議を唱えるつもりはない」

これで完璧だろう。

俺は空気の読める男だ。

「さ、さようでございませうか」

村長の目に軽い失望の色が浮かんだような気がする。

あれ？

また対応間違った？

「××××××××××××」

「××××××××××××」

村長が犯人の男に何か告げた。

犯人の手枷を持ち、目の前に引き上げる。

「滔々流るる霊の意思、脈々息づく知の調べ、インテリジェンスカード、オープン」

村長が唱えると、犯人の左手の甲からカードが飛び出した。

うおお。

なんだ、あれ？

すごいな。

先ほど俺に渡された盗賊たちのインテリジェンスカードと同じものだ。

どうなってるんだ？

村長は、犯人のカードに何かつぶやいている。

「何をしたのだ？」

「この男のインテリジェンスカードに奴隷身分であることを書き込みました。これで、この男は解放されるかお金で買い戻されない限

り、奴隷身分となります」
「分かった」

いや、全然分かっていないが。
とりあえず、インテリジエンスカードはその人についての大事な
情報が書き込まれたものであるらしい。

だからこそ、懸賞金のかけられた盗賊たちの身元証明にもなるの
だろう。

「村の規定では、盗みがあったとき、家族の働き手が犯人である場
合には、犯人を奴隷身分に落として売却し、売却額の半分を家族へ、
残り半分を賠償金として被害者へ支払うことになっております」

厳しいな。

奴隷なんてのがあるんだ。

なるほど理解できた。

村長としては最初、俺に罪には問わない、と言ってほしかったの
だろう。

被害者である俺がよいと言えば、なかったことにできると。

いまさら遅いが。

「初犯であるとも限らん。情けをかけるだけでは村人のためにもな
らんだろう」

「確かにおっしゃられるとおりでございます。申し訳ございません。
村人が大変なご迷惑をおかけいたしました」

「犯人は捕まったのだ。村長が謝られることではない」

「ありがとうございます。装備品の検品は終わられましたでしょう
か」

「ああ」

「それではわたくしの家にお越しく下さい。そろそろ支度ができるところでございます。朝食を差し上げましょう」
「すまんな」

話題を変えてくれるならありがたい。

俺はとつとつこの場から逃げ出すことにした。

魔物

「今夜はこの家にお泊まりください。夕食もご用意いたします」

朝食を食べながら、村長が告げた。

朝食は、オートミールにサラダとチーズ。

美味いとまではいえないが、取り立てて不味くもない。

このくらいの食事を取れるのなら、俺はこの世界でも生きていけるだろう。

夕食はもう少し豪華になるだろうしな。曲がりなりにも村長の家だし、村を救った英雄への饗応だから、これでもよい食事なのだろうが。

昼食については何も言われなかった。人類が朝昼晩の三食を食べるようになったのは最近のことらしいから、この世界ではまだ一日二食が普通なのだろう。

「その言葉に甘えさせてもらおう」

「明日はベイルの町まで商人が馬車を出します。出発は早い時間になるでしょう。一緒にまいられるのでしたら、今夜はお早めにお休みください」

「ベイルの町まではどのくらいかかるのだ」

「馬車で三時間ほどでございます」

三時間というのは地球時間と同じでいいんだろうか。

八時に出発すると、向こうに着くのが十一時。商人が一日で往復

するつもりなら、十八時に帰ってくるには向こうを十五時に出なければならぬ。商人がベイルの町にいられるのは四時間ということになる。

商人は仕入れも行うと言っていたから、それでは短いか。

早い時間に出発というのは、本当に早いと考えた方がよいだろう。まだ暗いうちの出発になるかもしれない。

朝釣りに行くような気構えでいた方がいい。

「ではそうさせてもらおう」

「商人にも伝えておきます」

さて、それまでは何をするか。

「この村の付近には、モンスターなどはいるか」

「それは、魔物のことでしょうか」

「ああ。それだ」

魔物というのか。やっぱりいるんだ。

「森の奥へ行けば、スローラビットがおります」

「ふむ。戦ったことはないな」

いかにも弱そうな名前の魔物だが、一応は情報収集に徹する。

出会ってみたらやたら強い魔物だったという可能性もないわけではない。

知ったかぶりなどはしない方がいだろう。

「スローラビットは、人に向かってくることをしないので、比較的戦いやすい魔物でございます」

「おお。そうなのか。ではちょっと行ってみるかな」

ラッキー。

まあスローラビットだしな。遅いウサギ。楽勝でしょう。時間もつぶせるし、ちよっくら行ってくるか。

「……スローラビットをお狩りになられるのでございますか？」

村長が声を落とした。

あれ。

また対応間違ったか。

「戦いやすいと聞いたのでな」

「確かに、このあたりの村人でも数人がかりでがんばれば倒せます。考えてみれば、ミチ才様なら、楽勝でございますよ」

「そ、そうか」

おいおい。

数人がかりでがんばれば、ってどんだけ強いんだよ。

「スローラビットを倒せば、兎の毛皮が残ります。稀に兎の肉が残ることもございます」

兎の毛皮が通常ドロップで、兎の肉がレアドロップというところだろうか。

残るといのがよく分らんが。

「ふむ。どうしようかな。魔物を狩ることに問題はないか？」

「魔物を退治するのに問題のあるはずがございません」

問題があつてほしかった。

数人がかりで倒すような魔物だとやばいだろうか。

しかし、この世界で生きていくなら、いつかは最初の魔物を狩らなければならぬだろう。それがスローラビットよりも弱いという保証はない。

結局やらなければならぬなら、早い方がいいだろう。

別に地球に帰りたいたいと思わない。最悪この大地に屍をさらしたとしても、それはしょうがないことだろう。人間いつかは死ぬのだ。考えてみれば、俺がこの世界にいるのは自殺サイトがきっかけだった。

自殺するのも、圧倒的な強さの魔物に蹂躪されて殺されるのも、たいした違いではない。

行くと言つた以上、行くしかないか。

まあ、遅いウサギだしな。

「では、夕食までの間、少し森の奥に行つてみることにしよう」

デュランダルを出せばなんとかなるだろう。

村長も楽勝だと言っている。

「ミチ才様。村の若者の中にも、スローラビットの狩猟をしてみたいと考えている者がございます。できますれば、一緒に連れて行つてはもらえませんかでしょうか」

「ふむ」

「ミチ才様と一緒にならば、その者たちもよい経験ができるでしょう」

どうすべきか。

仲間がいた方がもちろん安全だろう。

しかし、俺が弱いとばれると厄介なことになるかもしれない。

俺は村に住んでいた一人の男を奴隷身分に落としている。家族や親しいものによる報復も考えられた。

「いや。今回は遠慮してもらおう。俺はスローラビットと戦ったことがない。その者たちを守ってやれるかどうか分からん」

「確かにおっしゃられるとおりでございます。差し出がましいことを申し上げます」

適当に理由をつけて断る。

食事を終わると、俺は盗賊たちのカードを置き、銅の剣を持って外に出た。

森の中を、奥へ奥へと入っていく。

いけどもいけども、魔物は現れなかった。

ゲームだと村を一步出たらモンスターだらけだったりするんだが、考えてみれば、そんな危険な場所に村を作っておちおち住んではいられんわな。

「インテリジェンスカード、オープン」

一人になったので、気になったことをやってみる。

……。

やっぱり何も起こらなかった。

まあこれは分かっていた。少なくとも呪文が違う。一回聞いただけであれは覚えられない。

俺にもインテリジエンスカードがあるのだろうか。

仕方ないので、今は気にせずに進む。

ちょっと歩き疲れたぐらい森の中を進むと、ようやく一匹の変な動物が目に入った。

体長五十センチくらいのも、毛に覆われた白い動物。

あれがスローラビットだろうか。

あれは何だ、と念じると、情報が浮かんできた。

スローラビット レベル1

おお。

やっぱり鑑定は使える。

というか、レベルあんのかよ。

スローラビットがどれだけの強さか分からない。

ここは慎重にデュランダルでいくべきだろう。

キャラクター再設定と念じて、設定画面を起動させた。必要経験値五分の一と獲得経験値五倍まで戻して、ボーナスポイント64をあまらせる。そしてそのボーナスポイントを武器六にまで注ぎ込んだ。

ボーナスポイント残り1。

何に使うべきか。

ボーナス呪文でも使ってみるか。

メテオクラッシュ。

いかにも強そうな魔法だ。

メテオクラッシュを選択して、キャラクター再設定を終了する。

左の手のひらにデュランダルが現れた。

魔法を使うならデュランダルいらなくね、と思ったが、一撃で倒せるとも限らない。

デュランダルを腰に差す。

慣れていないせいかわ、剣を二本も腰に差すのはちょっと邪魔だ。

銅の剣は横の木に立てかけた。デュランダルを鞘から抜いて両手でしっかりと握り締める。

スローラビットはまだ俺に気づいてないみたいだ。

ここは木の陰から闇討ちする。行け。

「メテオクラッシュ！」

大声で叫んだ。

……。

……？

……。

何も起こらない。
何も変わらない。

俺とスローラビットの間をただ風が吹き抜けた。

誰かが見ていたらメツチャ恥ずかしいシーンだ。

森の奥でよかった。

呪文だ。呪文が違う。

メテオクラッシュの呪文が頭に浮かんできた。
それを使ってみる。

「無限の宇宙の彼方から、滅ぼし尽くす空の意志、滅殺、メテオクラッシュ！」

今度こそ決まった。

……。

と思ったが、何も起こらない。
何も変わらない。

これはあれだな。

MPが足りない。

食事も取ったし、疲れもなくなっているので、火炎剣で使ったMPは回復していると思う。

メテオクラッシュともなると、Lv2ごときのMPでは発動できないのだから。

しょうがないので、デュランダルをかざして駆ける。

体が少し軽くなっているような気がした。英雄Lv1の効果か。

スローラビットは、こちらを向いて立ち上がる。

人を恐れて逃げ出さないあたり、さすがは魔物か。村人数人がかりで倒せると言っていたから、人間一人よりは強いのだろう。

しかし、こちらには聖剣デュランダルがある。

デュランダルの切れ味をとくと味わうがよい。

スローラビットに近づいた俺は、上段から魔物の肩口あたりへと斬りつけた。

デュランダルが魔物を抉り、肩からわき腹へと一刀の元に切り裂く。

スローラビットはそのまま倒れ伏した。一撃だ。

魔物の体から緑色の煙が小さく吹き出し、やがて溶けるように消え失せる。

煙の跡に、小さな白い毛皮が残された。

兎の毛皮

なるほど。

だから、兎の毛皮が残ると村長が言ったのか。

兎の毛皮を持って、銅の剣を置いた場所に戻る。

デュランダルはオーバークイルのような気もするが、あと二匹くらいは狩っておくか。

今のスローラビットがたまたま弱かっただけ、ということも考え

られる。

俺は銅の剣の横に兎の毛皮を置いて移動した。

その後、スローラビットを二匹狩ったが、やはりデュランダルではオーバーキルのようだ。

いずれも一刀で斬り捨ててしまった。

これで兎の毛皮が三枚。

次は銅の剣でいつてみるか。

デュランダルを消そうと、キャラクター再設定と念じる。

あれ？

ポーナスポイントが1になっていた。

何かのタイミングで増えるのだろうか。

とりあえず、ポーナス武器六を消し、必要経験値二十分の一と獲得経験値十倍を入れる。これでポーナスポイントは0だ。メテオクラッシュにチエックが入ったままなので、先ほどよりはポーナスポイントが増えている。

デュランダルを消した俺は、銅の剣で次のスローラビットに襲いかかった。

先制攻撃が華麗に肩口に決まる。

あら？

剣が全然入っていかない。

切り裂くどころか、ほんの少しめり込んだだけで止まってしまっ

た。

すぐに振りかぶって第二撃を入れるが、これも同様に止まってしまふ。

斬り込んだというよりも喰い込んだという感じだ。

スローラビットが体をぶつけてくる。

うおお。危ねえ。

なんとかよけた。

お返しに一撃入れる。

全然駄目だ。ダメージを与えている気配がない。少しづつは与えているのだろうが。

とにかく、スローラビットの動きに気をつけながら、剣で攻撃を続ける。

動きが素早くないのが、せめてもの救いだ。

スローラビットだしな。

と思つたら、飛び上がりやがった。

頭はぎりぎりよけるが、体全部は避けきれず、体当たりを喰らうてしまふ。

ぐおお。

体当たりだけですごい衝撃。

これはやばい。全身バラバラになりそうだ。

剣を何度も叩きつける。

スローラビットが頭を振った。

なんとか避け、あいた肩口に剣を入れる。今のは手ごたえありだ。

スローラビットが再び飛び上がる。
しかし、その攻撃は読んでいた。右へ倒れるように攻撃を避けると、すれ違いざま一撃を喰らわせる。

くそっ。まだ駄目なのか。

二度三度と打ちつける。

攻撃する隙をつかれて、また体当たりを喰らってしまった。

ぐわッ。

攻撃だけに意識が向いて、防御を考えていなかった。これはまずい。あと何撃か喰らったら確実に死ぬる。

続く攻撃は避け、体勢を立て直した。

頭を剣で振り払い、腹に一撃を与える。剣がめり込んだ。ある程度手ごたえがある。

体当たりを避け、再び一撃。

まだ倒れないのか。

もう一撃。もう一撃。もう一撃。

三度四度と剣を入れると、ようやく、魔物が地にはいつくばった。

煙となって消え、兎の毛皮が残る。

「はぁ………」

肩で息をしながら、大きくため息をついた。

全身がきしむように痛い。息をするのも一苦労だ。

今のはやばかった。

デュランダルと銅の剣でここまで違うものか。

あるいは、今のスローラビットだけが特別に強かったのか。

そういえば、スローラビットにはレベルがあった。確認してなかった。Lv1ではなかったのだろうか。

とはいえ、もう今後の攻撃はすべてデュランダルで行うことになる。

銅の剣では何回攻撃する必要があるか分からん。

確かデュランダルにはHP吸収のスキルがあった。

この苦しさも、デュランダルで敵を倒せば回復するのではないだろうか。

俺は、銅の剣と集めた兎の毛皮を置き、デュランダルを出して移動する。

スローラビット Lv1

いた。

小走りでスローラビットに近寄ると、デュランダルを振り下ろす。

スローラビットが消え、兎の毛皮が現れた。

体の痛みも和らいだ。

いくらかでもHPを吸収したのだろう。プラセボ効果ではない、と思う。

あと一匹か二匹狩れば、全快だ。

銅の剣を立てかけた場所まで兎の毛皮を置きに戻り、再び獲物を求めて移動する。

スローラビット Lv1

やっぱりLv1だ。

スローラビットは、人間を恐れて逃げもしないし、向こうから先に攻撃してもこない。考えてみれば非常に戦いやすい魔物だ。先制攻撃をほとんど確実に入れられるから、一撃で屠れるデュランダルがあれば楽勝である。

今度も先制攻撃を決め、一撃で魔物を屠った。

スローラビットが煙となって消える。

すると今度は、毛皮でないものが残った。

兎の肉

これが兎の肉か。

ご馳走になってばかりでも悪いので、今日の夕食の食材として村長宅に提供するか。

兎の毛皮もあるし、村まで戻ることにする。

ステータス確認。

加賀道夫 男 17歳

村人Lv3 英雄Lv1 盗賊Lv3

装備 デュランダル サンドルブーツ

レベルが上がってら。

午後の農作業

魔物を倒して鑑定してみると、レベルが上がっていた。

やはり、レベルを上げるには魔物を狩って経験値を稼ぐのが早道なのだろう。

ボーナスポイントが何故か1増えていたが、レベルが上がったことで増えたのではないだろうか。

レベルが2になったときにも、ボーナスポイントが増えていたよ
うな気がする。

レベルが上がることにボーナスポイントが増えるステキシステム
なんだろうか。

キャラクター再設定のスキルがない人はどうやって利用するんだ
ろう。

クソゲー決定。

いや、人生なんてクソゲーだ。

……なにげにひどいよな。

いずれにしても、レベルの上げかたは分かった。

次の問題は、ジョブをどうやって増やすかだ。

村人は最初から持っていた。

盗賊はアレな方法で手に入れた。

英雄は盗賊から村を守ったおかげだろう。

あと、これまで見た中にあったジョブは、村長と商人と農夫だ。

村長に、村長にはどうやったらなれますか、と訊くのはやめた方がいいような気がする。

ノンプレイヤーキャラクターならそれもありなんだろうけど。

下手をすれば、おまえは村長失格だから俺と替われ、と言っているようにとられかねん。

商人になら、どうやったら商人になれるか尋ねるのはありか。

農夫は、どうするか。

そういえば、サンダルブーツを盗んだときに盗賊のジョブを得た。ものを盗めば盗賊になれるのなら、何か農作業をしたら、農夫のジョブが得られるのではないだろうか。

農作業か。

村で何かできるだろうか。

俺はデュランダルを消し、村まで帰ることにする。

デュランダルを消すときに思ったのだが、なにもデュランダルか銅の剣かの二択ではなく、武器五から武器一まで、全部試してみればよかったのではないだろうか。

しかし、一撃で倒せなければ、魔物の攻撃を受ける可能性がある。回復するには、デュランダルのHP吸収が必要だ。

いちいち剣を取り替えるよりは、デュランダル一択で正解か。

銅の剣を腰に差し、右手には兎の毛皮五枚、左手に兎の肉を持つ。兎の毛皮は、ずいぶん小さい。これで毛皮のコートを作ろうと

思ったら、いったい何枚いるんだろうか。

百枚とか二百枚とか、あるいはもつと必要かもしれない。

きつと買取値は高くない。

まあ、初心者でも狩れる魔物だしな　デュランダルがあれば。

デュランダルさまさまだ。

森の中を通って裏から村に入り、村長宅へ戻った。

「夕食の足しにしてくれ」

村長に兎の肉を渡す。

「いただいてもよろしいのでしょうか」

「夕食を馳走になるからな」

「かしこまりました。これは……兎の肉!？」

村長が何故か驚いた。

兎の肉が残ると言ったのは村長なのに。

「たまたま残ったのでな」

「兎の肉はスローラビットを十匹ほど倒してようやく出るか出ないかというものでございます」

「ふむ」

ドロップ率十パーセントというところか。

「一匹目で残るのは相当な幸運でございます。ミチ才様はよほど神に愛されていると思えません」

「いや、一匹目で出たわけではないぞ」

俺は右手を持ち上げて、持っていた兎の毛皮を見せる。

「まさか……」

村長がつばを飲み込んだ。

いや、なんで驚くのさ。

俺なら楽勝だろうってあんたが言ったじゃん。

「そこまで強い魔物だとは聞いていないが」

「ミチ才様なら倒すことは間違いなく倒せる魔物でございます。しかし、ミチ才様が行かれてから、まだ半日ほどしか経っておりません」

「まあそんな時間か」

まだ日は高い。日が沈むまでには多少余裕があるだろう。

「スローラビットは、村人が何人も集まって、長時間かかってようやく倒せる魔物でございます」

「ふむ」

確かに銅の剣だと少ししてござりそうではある。

デュランダルだと一撃だが。

「それに、一匹と戦った後、体力の回復も待たなければなりません。怪我人が出ればその手当ても必要です。普通、魔物を続けて狩るよ
うなことはいたしません」

「なるほど」

銅の剣を使っていたら、何度かはあの体当たりを喰らうだろう。攻撃を受ければ体力の回復も必要か。

俺の場合、体力の回復もデュランダルのHP吸収に頼ったしな。

「ミチ才様が強すぎるのでございましょう。たった一人で短時間に何匹もスローラビットをしとめる者など、この村にはおりません」「そうか」

他の村人には厳しいのかもしれない。

そういうことにしておこう。

強いと言われて悪い気はしない。

「できますれば、お持ちになっておられる兎の毛皮は先ほどの商人へお売りください。この村でも縫合を行っております。なかなか、そんなにたくさんは狩れませんが」「うむ。そうさせてもらおう」

スローラビットはこの村の近くに棲息しているから、ドロップアイテムの兎の毛皮もここの特産品なのだろう。

あまりよそには売ってくれるなということだろうか。

「ありがとうございます。商人の家は三軒隣でございす」

「では、行ってこよう」

「その前に、少々お待ちください」

家を出ようとした俺を、村長が呼び止める。

「
××××××××××××××××
××××××××××××××××
」

村長と家の者が話し、奥さんらしき女性が何か持ってきた。

「こちらの袋をお使いください」

「おお。すまんな」

村長が袋を俺に渡す。

ポーチみたいなおきな袋だ。紐で閉じるようになっていて、巾着袋というところか。

俺はその袋の中に兎の毛皮を入れた。

「ではいつてらっしゃいませ」

三軒隣の商家へ行く。

右か左か聞いてなかったが。

あっちか。

ものは置いてないが、入り口が大きく開けられた家がある。あそこが商家だろう。

と。行く前に、買取交渉のスキルをつけておくか。キャラクター再設定と念じた。

どうせ使わない、というか使えないメテオクラッシュのチェックをはずし、買取交渉にチェックを入れる。

買取交渉が買取価格十パーセント上昇に変化した。

またこのパターンか。

必要経験値と獲得経験値を操作して、64ポイントを捻出する。

買取価格は、十五、二十、二十五と上がって、三十パーセント上昇でかすれ文字になった。

本当に使えるんだろうか。

「邪魔をする」

声をかけて、商家らしき家に入った。

「これはミチ才様。どのようなご用件でございますよう」

さっきの商人が中から出てくる。

「ここでは何を売っているんだ」

「私どもはこの村で唯一の商店でございます。基本的に、注文をお受けした品を町の市で手に入れて、お渡ししております」

商品が置いてあるわけではないのか。

ずいぶんと侘しいな。

その程度の文明レベルなんだろうか。

「商品が置いてあるような店はないのか」

「……商品を常に手元に置いておくような商家は、そうしなければならぬ奴隷商くらいだと思います」

商人がいぶかしげに語った。

さすがに、奴隷は必要なときにすぐ調達というわけにいかないのだろう。

だから奴隷商人ならある程度のストックを置いている。それ以外の店では商品を置いておくようなことはしないと。

ひょっとして、奴隷を買いに来たとも思われたか。

「悪い。変なことを聞いた。なにしろ、田舎から出てきたのでな」

あわててごまかす。

「田舎であれば、商品を置いているような店はまったくないと思いますが」

「いや。町にはそのような店があるという話を聞いたのだ」

「さようでございますか。ベイルの町にも、そのような商家はございません。武器屋や防具屋なら、もっと大きな町に行けばあるいはそういう商家があるかもしれませんが」

「田舎者だと思われるホラを吹かれたのかもしれん。気にするな。それより、兎の毛皮を見てほしい」

話題を変えた。

「兎の毛皮でございますか」

「村長にここで売ってほしいと言われたのでな」

巾着袋から兎の毛皮を取り出す。

「これは……またずいぶんとお持ちなのですね」

ずいぶんとといっても五枚だけだ。

さつき狩ったことは、いちいち言わなくてもいいだろう。

「買い取ってほしい」

「兎の毛皮の買取価格は、一枚二十ナールが相場でございます」
「うむ」

ぶっちゃけ二十ナールと言われても分からん。

「もつたいなくも私どもの店を利用していただくのです。今回は全部を百三十ナールで買取させていただきます」

二十ナールが五枚で百ナールだから、見事に三十パーセントアップ。

どうなってるんだろう。

まあ、高く買い取ってくれるなら文句はない。

「それでよかるう」

「こちらでございます」

商人は、白い硬貨を一枚と銅貨を多数、ジャラジャラとテーブルの上に置いた。

白いの銀貨かな。銀貨一枚が百ナールというところか。

「……二十六、二十八、三十。確かに、受け取った」

銅貨を数えてみると、やはり三十枚ある。

俺は兎の毛皮を入れてきた巾着袋に小銭を入れた。

商人も兎の毛皮をしまう。

「私どもの菜園に今キュピコの実がなっております。取引させていただきます。いただいた記念に、キュピコの実を差し上げたく存じます」

「キュピコ？」

「はい。よい苗を仕入れまして。ゆくゆくは村の特産品にしたいと考えております」

俺がキュピコを知らないことはスルーされた。

この世界では誰でも知っている有名なものなんだろうか。

「そうか」

「採ってまいりますので、ここでお待ちいただけますか」

「あ、いや待て。俺もキュピコがなっているところを見たい」

奥に入ろうとする商人を引き止める。

農作業をするチャンス。

「ミチ才様がございますか」

「田舎の出身なのでな。そういうのには興味がある」

「かしこまりました。それでは、一緒に菜園まで来ていただけますか」

俺は商人と一緒に表から外に出た。

「菜園を持っているのか」

「村に住んでいるものなら誰もが持っている程度の小さなものでございます」

歩きながら、商人と会話する。

情報収集は必要だ。

「この村には、農夫もいると思うが」

「村の外の畑は、農夫ギルドに属する者が耕しております」

「農夫ギルド……」

そんなものがあるのか。

「この辺りの農夫はすべて農夫ギルドに属しておる者たちでございます」

なんだかよく分からないが、大変らしい。
農作業なんかしても無駄か。

「そういえば、……ビッカー殿はどうやって商人に」

商人の名前を確認するのに鑑定を行ったことは内緒だ。
便利だな、鑑定。

「私も商人ギルドに所属しております」

基本的に、農夫になるには農夫ギルドに入り、商人になるには商人ギルドに入る必要があるようだ。

「俺が商人になるには、ギルドに入ればよいのか？」

「ミチ才様は商人になれるおつもりがおありになるのでございましょうか」

「いや。例えばの話だ」

あわてて否定する。

「ミチ才様もどこかのギルドに加入しておられると思いますが」

「加入しては、おらんな」

いないハズ。

「ミチ才様は冒険者ではいらっしやらないのでしょうか。冒険者ならば、冒険者ギルドに入っておられるのが普通ですが」
「正式には冒険者ではないのだ」

やへ。

冒険者ギルドなんてものもあるのか。

「さようでございますか。ギルドに加入しないのは大変でございますよ」

意外とあっさりスルーされた。

「まあ、な」

「ご存知でしょうが、ギルドは一つのギルドにしか入ることはできません。また、一度加入したギルドをやめることには厳しい制限がございます」

「う、うむ」

そうなのか。

「どこのギルドにも加入しておられないのであれば、商人ならば簡単になることができますよ」

「ギルドに登録すればよいのか」

「もちろん、どの職業であっても神殿で承認を受けなければなりません」

「当然だな」

何が当然なのか。自分で言ってるて分からない。

どうやら、ややこしい手続きが必要のようだ。

「商人系のギルドには、この他に豪商ギルドもございます。こちらのギルドに入るには、長い間の経験を積まないと神殿で認められることはありません」

「そうか」

よく分からないが、豪商は商人の上級職といったところだろうか。適当に相槌を打って、菜園に急ぐ。

村のはずれに、どこにでもありそうな畑が広がっていた。

「ここが私どもの菜園でございます」

「おお。広いな」

家庭菜園というには結構な広さの畑に、何種類かの植物が植えられている。

どれも地球にもありそうな植物だ。

あ。ニンジンがあるな。

高さ一メートルくらいの植物の茎に、赤いニンジンがぶら下がっていた。

へえ。ニンジンって、こんな風に実るものなのか。

あれ？

ニンジンって、実だったか？

「そちらが、キュピコでございます」

ニンジンに近寄ると、商人が教えてくれた。

「ほほう」

ニンジンではなくて、キュピコか。

ニンジンは根っこだよな。こんな風に実ったりはしない。

「赤く実っているのが食べられるでございます。どうぞお召し上がりください」

「手でもいでいいか？」

商人に確認して、収穫する。

「……いかがでございますでしょうか」

二つほどニンジン、じゃなかったキュピコをもぎ取ると、商人が不安げに尋ねてきた。

特産品にしたいと言っていたか。

「このあたりにはニンジンはないのか？」

「薬用人参のことでございますでしょうか。森の中に行けば、あるいは」

この世界にニンジンはないらしい。

別に好物ではないのでどうでもいいが。

いや。食べられないわけではない。ちょっと苦手なだけだ。なくてラッキー。

「俺の住んでいたところにこういう野菜があつてな。少し似ている」「さようでございますか」

商人が期待を込めた目で見つめてくる。

「よ、よく実っているな」

「お味の感想を、お聞かせ願いますか」

「やっぱ食うのか。」

俺は意を決して、見た目ニンジンのそれにかぶりついた。

おおっ。

結構美味い。

うん。味は悪くない。

ちょっと酸っぱいサクランボ。

ただし見た目ニンジン。

すっごい違和感がある。

「……うむ。まあ味は悪くない。これならば売り物になるであろう」
「さようでございますか。ありがとうございます」

商人がほっとしたように礼を述べた。

ニンジンを知らなければこれもありだろう。

ようやく日も傾いてきたようだ。

俺はさっさと立ち去ることにする。

帰り道、ジョブを確認してみた。

ジョブ設定と念じ、ファーストジョブをいじってみる。

農夫 L V 1

効果 腕力小上昇

あつた。

意外と簡単に手に入るものだ。

この農夫のジョブは、収穫を行ったから手に入ったのだろう。

何故かファーストジョブにも設定できる。

前は駄目だったが、英雄もファーストジョブに設定できるようだ。

サイドジョブまでしか持っていないので、どれか一つ、はずさなければならぬ。

効果が体力微上昇の村人より、腕力小上昇の農夫を選ぶべきか。

必要経験値五分の一か獲得経験値五倍をはずせば、フォースジョブは設定できる。

スローラビットと戦ったときに体が軽かったので、多分ジョブの効果は重複するのだろう(一番効果の大きい英雄の中上昇だけが効いている可能性もあるが)。

効果の面では、ジョブは多ければ多いほどいいと思う。

問題は経験値だ。

四つのジョブを設定すると、経験値はどうなるだろう。

サイドジョブの盗賊が3にレベルアップしているから、サイドジョブでも経験値が入ることは間違いない。

入る経験値は、ジョブ一つのとおりと同じ経験値が四つのジョブすべてに入るのだろうか。それとも、四分の一ずつになるのだろうか。

経験値が分割されるなら、ジョブを絞ってレベルアップした方がいいかもしれない。

分割されない場合はどうか。

その場合でも、結局サイドジョブまでの方がいい。

ジョブが三つなら経験値は三倍、四つに増えても四倍だ。獲得経験値五倍の方が効率が高い。

ジョブの数はサードジョブの設定のままで、ファーストジョブの村人Lv3を農夫Lv1に入れ替える。

加賀道夫 男 17歳

農夫Lv1 英雄Lv1 盗賊Lv3

装備 銅の剣 サンドルブーツ

ファーストジョブとサードジョブには何か違いがあるだろうか。レベルの高い盗賊Lv3をファーストジョブに持つてくるべきか。しかし、今まで見た人間が誰一人持つていない英雄と村を襲つてきたやつらだけが持つていた盗賊は、あまり人目に触れさせたくない。気分的にできれば下の方で隠れていてほしい。

村長宅に戻ると、ちょうど夕食の支度ができたところだった。

夕食は、兎の肉のシチューと、何かの魚がメインの炒め煮。両方とも、かなり美味しい。

この世界の料理は結構な水準にあると考えていいだろう。

夕食に満足した俺は、明日のため早めに床につくのだった。

あれ？ ティリヒさんは？

午後の農作業（後書き）

付録

村人Lv25のおっさんの儂く悲しい生涯。

（一部未確定の設定を含みます）

0歳。

田舎の村で生まれる。

両親はともに村人。三つ年上の兄がいた。

10歳。

次男でもあり、将来は家を出ることを考えるようになる。

戦士として雇われるような堅苦しいのは好きではなく、特殊職、生産職に就けるような技術も頭もない。自由に生きたいと願ったし、幸い、腕白で力は強かったので、冒険者への道を志す。

12歳。

村近くに魔物が出たときの討伐に進んで参加する。

17歳。

戦闘面では村のリーダー的存在になった。

商人が町へ出るときの護衛も積極的に勤め、見聞を広める。

18歳。

村を強力な魔物が襲った。

中心となって戦い、なんとか倒すも、村民に多数の死者を出す。周囲の畑も荒らされた。

畑を荒らされたことから飢饉となり、体力の弱まった村民をさらに疾病が襲う。

19歳。

疾病で家族を失い、村を捨てて町に出た。

以前からの知り合いの冒険者に頭を下げ、パーティーに入れさせてもらう。待遇面などは劣悪だった。冒険者に転職した後に脱退することだけは認めさせる。

33歳。

ティリヒさん（17歳）を見て一目ぼれ。

しかし、雇われ探索者の身では積極的なアプローチもできず。

35歳。

こつこつとレベルを上げ、探索者Lv50となる。

神殿で冒険者にジョブ変更し、冒険者ギルドに加入した。

晴れてパーティーを抜けて一人立ちし、ついでにティリヒさん（19歳）にアプローチを開始する。

人生で一番輝いていたころ。ほむらのレイピアもこのころ入手した。

37歳。

ティリヒさん（21歳）と結婚。

ただし冒険者としては苦労する。長年パーティーの下っ端だったため、装備もそろわず、人脈もなく、人と交渉したりする経験もなかった。冒険者ギルド内でもやがて浮いた存在に。

40歳。

無理がたたって、怪我を負ってしまふ。

怪我のときでも仕事を押しつけてくる冒険者ギルドともめる。冒険者のジョブを捨てて村人に戻ることを条件に、ギルドを正規に脱退した。

冒険者として生きることは諦め、ティリヒさん（24歳）の実家が

ある村へ一緒に行くことにする。

41歳。

長男誕生。

自身が中心となって、村近くの魔物の狩りも行う。片手剣に適性のある冒険者を辞めたため、村人としては鉄の剣をふるって戦った。愛する妻のため、子どものため、村のために戦って生きる、それなりに充実した日々を過ごす。

47歳。

村を襲った盗賊と戦い、戦死を遂げた。

特別篇 別ルートエンド（前書き）

主人公の主人公による主人公のための妄想。

ティリヒさんがこの夜に寝所を訪れた場合の別ルートエンドです。

あくまでも妄想です。本編とは関係がありません。

続きのみが気になるというかたは読まなくても何の問題もないですよ。

登場人物や設定については、今後の変更もありえます。ヒロイン先出しです。

ハーレムというタイトルにしておきながら、ヒロインが十一部まで登場しないので。

あ。これ投稿したので最初のヒロインが出てくるのは十二部になります。

こんなの書かずにさっさと続き書け、ってことだよな。
ものは投げないでください。

特別篇 別ルートエンド

「この村に何かあるのでしょうか、ご主人様」

ミリアがそのネコミミを立てて訊いてきた。

「いや。まあ何かあるわけではないが」

「そうですね、保養地でもないようですし」

セリーもキヨロキヨロと左右を見回している。

警戒、というよりは好奇心か。

「昔来たことがあるというだけだな」

その頭に手を乗せた。

彼女たちを連れ、村に入る。

どことなく昔と変わったような気もするが、ほとんど変わっていないような気もする懐かしい村。

村に入っすすぐ右に、馬小屋があったはずだ。

ピッカー 男 41歳

商人Lv14

馬小屋の前に、男がいた。

顔を見ても、こんな顔だったか、というほどの記憶しかない。

十年経つてもレベルはあまり上がっていないようだ。

「xxxxxxxxxxxx」

話しかけてくるが、相変わらず何を言っているのか分からない。

「xxxxxxxxxxxx」

「xxxxxxxxxxxx」

ロクサーヌが何か答えると、商人は小さく頭を下げ、村の方に戻っていった。

あの商人は、ブラヒム語でも通じたはずだがな。

「ご主人様、この村に何かご用なんでしょうか」

「ああ。さっきの男に聞いてな、キュピコがあったら、いくつか買ってきてくれ」

ロクサーヌに頼む。

ロクサーヌがミアを連れて去ると、俺は馬小屋に近づいた。
馬小屋の中には馬が一頭いる。

「馬小屋ですね」

セリーが右隣にやってきてつぶやく。

「ご主人様、その馬小屋が何か？」

「いや、こんなだったかなあ、と思って」

左に立ったベスタを見上げ、ついでに馬小屋の屋根も見ながら答

えた。

懐かしいといえは懐かしいが、覚えていないといえは覚えていない。

「はあ」

いぶかしげに返事をするベスタの背中を軽くなで、窓から馬小屋の中を覗き込む。

十年前、この世界に最初に来たときにいた馬小屋。

俺の旅はここから始まった。

とはいえ、十年も経っていると本当に同じかどうかは分からないが。

あの商人がここにいたということは、この馬小屋は商人のものなのだろう。

考えてみれば、気づいてもよさそうだった。

この村に何頭もの馬はいない。荷馬車を曳く馬が一頭いるくらいだろう。

その荷馬車は商人が持っている。荷馬車を曳く馬も多分商人のものだ。その馬を飼っている馬小屋も商人のものだろう。

つまり、あのサンダルブーツは商人のものだったのだ。

「俺のこと、覚えてるか」

声をかけながら、馬の肩をなでた。

もつとも、十年も経っていれば別の馬かもしれない。

あのとときと同じ馬だとすれば、この世界で俺を見た最初の生き物

ということになる。

「ご主人様、もらってきましたあ」

道の向こうから、ミアアが走ってきた。

両手に赤い果物を持っている。

「あつたか」

「はい、ご主人様」

ミアアは俺に二つキュピコを渡すと、すぐに駆け戻った。
向こうからはロクサーヌが歩いてきている。

「お姉ちゃん、早く」

「はい」

ミアアはロクサーヌの元に駆けつけると、手を引っ張った。
ロクサーヌも引っ張られて走り出す。

俺は、見た目ニンジンのそれを、セリーとベスタに渡した。
そしてロクサーヌを待つ。

「あつたようだな」

「はい、ご主人様。この村の特産品だそうです」
「そうか」

商人は栽培に成功したようだ。

「ご主人様、どうぞ」

ロクサー又は、袋からキュピコを取り出し、麗しい笑顔で渡してきた。

この笑顔は十年前と変わらない。

俺はロクサー又からキュピコを受け取る。

二つ受け取って一つはルティナに渡した。

「ご主人様、ありがとうございます」

ルティナが頭を下げる。綺麗な金髪の間からのぞく、エルフ特有の長い耳が可愛い。

ルティナに見とれていると、ミアが期待のこもった目で俺を見ているのに気づいた。

別に先に食べてくれてもかまわないのだが。

俺はキュピコにかじりつく。

うん。キュピコ。

なんだっけ。サクランボに味が似てるのだったか。

サクランボの味なんてあんまり覚えてないなあ。

「甘酸っぱくておいしいです」

「ああ。うまいな」

ミアの頭に手をやり、ネコミミをなでさせてもらう。
なんか触り心地がいいんだよね。

村はずれの菜園に目をやった。

キュピコとはどんな植物だったか。

菜園では小さな男の子が働いている。
感心なことだな、黒髪の男の子。

……黒髪の男の子？

胸の辺りまでの高さがある作物の陰に見え隠れしながら、黒髪の男の子は何か作業をしていた。

この辺りは金髪や茶毛の人が多い。

黒髪は少数派だ。

この村に黒髪の男性がいただろうか。

胸の高まりを感じながら、鑑定と念じる。

ミオ 男 9歳

村人Lv1

……。

ミオとミチオ。

うん。

まあそうだよな。

そうなんだろう。

多分、きっと。

苗字は受け継いでいないとはいえ。

俺はこの子に何かできるだろうか。

「はにゃあ……」

耳をなで続けていると、ミリアが小さく声を漏らした。

耳をなでられてほづけたのか、果物の甘さに満足しているのか。

「ロクサーヌ、通訳を頼む」

「はい、ご主人様」

菜園に足を運んだ。

「ちょっといいか」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

ロクサーヌの言葉で、男の子が菜園から出てきた。

顔は、……似ているのか？

「何を作ってるんだ」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「キュピコだそうです」

まあ見れば分かる。

赤い実がなっていた。

「親は元気か」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「母親は元気だそうです。父親は生まれる前に亡くなったと」

そうか。

そうだよな。

俺はアイテムボックスから一本の剣を取り出す。

いかりのシミター

スキル 攻撃力五倍 HP吸収

もう使わなくなってしまった古い剣。
パッシブスキルだからちよūdよい。

「母親のいうことはちゃんと聞いているか？」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

ロクサーヌが通訳すると、男の子はうなずいた。

「おまえの父親を、俺は知っているような気がする」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「この剣を母親に渡し、母親がいいと思ったら、使っんだ。母親を
守ってやれ」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

男の子が剣を見つめる。

かなり興味がありそうだ。

「遠慮するな」

「xxxxxxxxxxxx」

うながされて受け取った。

「この剣を使って強くなったと思ってても、それはおまえが強いんじゃない。この剣が強いんだ。それを忘れるな」

「xxxxxxxxxxxx」

つかを放す前に、警告を与える。

どこまで耳に届いただろうか。

母を捨てて冒険者になるなどと言い出されても困るが、まあ後はこの子の人生だ。

ロクサーヌが通訳し終わるのを待って、俺は手を放した。

「xxxxxxxxxxxx」

「ありがとうって」

男の子は大きく頭を下げる。剣を大事そうに抱え、走り去った。

おそらく、家には母親テイリヒトがいるのだろう。

来る前に去るか。

「ご主人様、あれは大切にしていた古い剣では」

「悪いな、ロクサーヌ。おまえに最初に渡した剣でもある」

「いえ。私は気にしません。そういえば、ご主人様から最初にいただいたのはシミターでしたね」

昔のことを思い出したのか、ロクサーヌが笑顔を見せる。

うん。いつ見ても可愛い。

十年間、見飽きなかった笑顔だ。

「じゃあ帰るぞ」

この村にはまた来ることがあるかもしれない。
あるいはないかもしれない。

俺は村を背にして、空間移動魔法を念じた。

特別篇 別ルートエンド（後書き）

俺たちの戦いはまだまだこれからだ。
蘇我捨恥の次回作にご期待ください。

（本編はまだまだ続きます）

街道

その夜、ティリヒさんは来なかった。

……分かっていた。

もちろん分かっていたさ。

そんな旨い話はなかったということだ。

あるいは、イケメン限定だったということだ。

どこに住んでいるか知らないの、こっちから赴くこともできない。

俺は、寂しく一人寝をし、村長宅の土間横にある部屋で目覚めた。何か夢を見ていたような気がするが、思い出せない。

目覚めたら東京のアパートだった、という展開も期待したが、無理のようだ。

ティリヒさんも来なかったし、目覚めとしては最悪だ。

ベッドに身を横たえたままため息をはく。

ベッドは板の上にマットと毛布を敷いただけの粗末なものだ。

この扱いはどうなのか、という気もするが、この世界の標準が分からないので、こんなものかもしれない。

ちなみに、この世界がヴァーチャルリアリティーだなんていう幻想はトイレに行ったときに捨てた。

病院に入ってシビンがあてがわれてでもない限り、俺の本体が別にあつたら、えらいことになっているはずだ。
むしろ目覚めたくない。

ここは現実の世界であり、俺はここで生きるのだ。

「んー」

せめて腕を伸ばす。

「失礼いたします」

村長の声がした。

「村長か」

「もう起きていらっしやるでしょうか。そろそろ、出発の時刻になります」

「分かった」

荷物を持って部屋に出る。

荷物といっても、銅の剣と巾着袋だけだ。巾着袋には、大枚百三十ナールと盗賊たちのインテリジェンスカードが入っている。

今の俺の全財産だ。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

「こちらが、昨日着ていたお召し物でございます」

「ジャージがあつたか」

忘れてた。

銅の剣と巾着袋だけが全財産じゃなかった。

入り口近くの台の上にジャージが置かれているのがなんとか分かる。

土間の中はまだ暗い。玄関が開け放たれているが、外もようやく白ずんできた程度だ。

俺はジャージの代わりにもらった服を着ている。

どうやって持っていた。

「こちらの衣装はとても珍しい布で作られているようですよ。さぞや貴重なお召し物かと存じます」

「貴重というほどでもないが」

安物のジャージだし。

まあ、ポリエステル繊維はこの世界には存在しないのだろう。

「よろしければ、こちらの袋をお使いください」

村長が割と大きめの袋を差し出してきた。

肩紐がついている。

リュックサックだ。

「ほう」

「それと、こちらは朝食になります。馬車の中でもお召し上がりください」

「いろいろとすまんな」

リュックサックも朝食もありがたくもらっておく。

リュックサックの中に、ジャージと巾着袋、朝食が入った包みを入れた。

包みの感じだと、中身はパン一個というところか。まあ贅沢を言っ
つてはいけない。

「それからこちらが、村を救っていただいたお礼でございます」

村長が袋を渡してくる。

昨日もらったのと同じ巾着袋だ。

「うん？」

なにげなく受け取って開くと、硬貨が入っていた。

明るければ山吹色を示すだろう鈍い光。金貨か。十枚以上はあるな。

「あまりにも些少で心苦しいのですが」

「いや、かたじけない。ありがたくいただいておく」

「なにぶん、その程度のお礼しか差し上げることができず、申し訳
もございません」

少し考えるが、もらっておくことにした。

もらっておくことによるデメリットは少ない。

向こうから出てきたのだし、強欲なやつだなどと後ろ指を差さ
れることはないだろう。

遠慮するメリットもない。

目立つつもりもないし、清廉なやつなどという評判をもらって
しょうがないだろう。

この村に特別に恩を売っておく理由があるのでもなく。

ティリヒさんも来なかったしな。

すべての荷物を入れ、リュックサックを肩に担いだ。

村長に連れられて外に出る。

村はずれまで行くと、商人が荷馬車を準備していた。

「おはようございます」

「うむ。おはよう」

商人と挨拶と交わす。

「明るくなったらすぐに出発いたします。馭者席の横にお座りいただけますか」

「分かった」

荷馬車に乗り込んだ。

揺れなければいいが。

荷台には、盗賊たちの装備品、ティリヒさんの剣が二本、それに犬小屋みたいなケージが置いてある。ティリヒさんはタガールを売るのはやめたようだ。

ケージは、三面が板で囲まれ、一面だけ格子がはめられていた。

あれは何だ、とっていると、男が連れてこられてケージの中に入れられる。

昨日の盗人だ。

「この者もベイルまで連れて行き、奴隷商人に売却いたします」

村長が説明した。

「そうか」

「売却金の半額がミチ才様への賠償金になります」

「……い、いや。正しい装備品は返ってきたので、そこまででもらわなくともよいが」

「売却金を全部家族に渡してしまうと、早期に買い戻すことが可能になってしまいます。それでは罰を与えたことになりません。どうぞ、お納めくださいますように」

なるほど。

それはそれで合理的なような気がする。

村の掟によそ者が異を唱えることではないだろう。

俺はうなずいて同意を示した。

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

「xxxxxxxxxxxxxxxx」

盗人の家族だろうか。男が一人来て、ケージの中の男となにやら言葉を交わしている。

小さな娘さんがいて、パパ行かないで、とか言われなくてよかった。

言葉は理解できなくても、雰囲気で分かるだろうしな。

この家族の人は、ある程度諦めがついているのか、淡々と会話している。

「それではそろそろ明るくなってまいりました。出発いたします」

商人が隣に乗り込んだ。
手綱を操作し、馬を発進させる。

まだ日は昇りきっていないが、村の近くだし慣れているのだろう。

「世話になった」

「いえいえ。村を救っていただき、本当にありがとうございました」

村長と別れの挨拶を交わした。

荷馬車が村の外へと走り出す。

この村へ来ることはもう二度とないかもしれないが、俺にとっては最初の村だ。

後ろを振り返り、村の様子を記憶に留めた。

荷台には、ケージや装備品の上からシートが張られている。

奴隷に落とされた男はおとなしくしているようだ。

「道中は安全なのか？」

走り出して少し落ち着いたところで、商人に問うた。

「ベイルの町までの街道沿いは、定期的に魔物の討伐が行われております」

「なるほど」

「危険は大きくございません」

辺りがようやく明るくなり始め、荷馬車がスピードを上げる。

荷馬車がガタガタとかなり揺れた。

道が悪いのか荷馬車が悪いのか。おそらくはその両方だろう。

街道の周囲には広葉樹の森が広がっている。

奥へ行けば分からないが、街道に沿った辺りでは木の高さもそれほど高くない。

あまり深い森というわけでもないようだ。

森が続いているだけなので楽しめるような景色でもない。それ以前に、この揺れでは景色を楽しむどころではない。

俺は黙って揺れに耐えるしかなかった。

朝食のパンもかじってみるが、揺れながらでは結構大変だ。他にやることもないので、前方を凝視し続ける。

うーん。

結構暇だ。

ただし、時々座る位置を変えないと、けつが痛くなってくる。

と。前の方で、小さな影が蠢いた。
何かいるようだ。

スローラビット レベル1

「スローラビットがいるな」

「お分かりになるのですか」

「昨日狩ったからな」

スローラビットだと分かったのは鑑定スキルのおかげだ。

あまりに小さすぎて、ここからではよく見えない。

「さ、さすがでございます。スローラビットならば安心です。このまま速度を落とさずに進みます」
「うむ」

荷馬車はみるみると魔物に近づき、スローラビットの横を通りすぎた。

俺一人なら狩っていきたいところだが、ベイルの町に早く着いた方がいいだろう。

「た、確かにスローラビットがおりましてございます」

さらに進むと、遠くの方にまた何かいるのが目に入る。
距離がありすぎるので、何かいるかも、という程度だが。

グミスライム レベル1

結構魔物が出るのかね。

「グミスライムだな」

「グ、グミスライムでございますか」

商人が荷馬車の速度を落とした。

「どうした」

「グミスライムは人を見ると襲ってくる魔物でございます。しかも、

体が柔らかいのでこちらの攻撃がなかなか効きません」
「それならば問題ない」

デュランダルがあれば大丈夫だろう。

「こ、この辺りでは一番の難敵にございます。グミスライムに捕ま
って覆われると、体が溶けてしまいます。出現したときには村人総
出でかかるほどの魔物でございます」

商人がグミスライムの恐ろしさを説明してくる。
さすがにやばいのだろうか。

とはいえ、捕まるようなドジを踏まなければ大丈夫だろう。Lv
1だし。

一度問題ないと言った以上、やるしかない。
どうせ遅かれ早かれ戦うことになるはずだ。

「大丈夫だ。このまま進め」

商人に命じる。

「か、かしこまりました」

商人が荷馬車を進めた。

デュランダムを出そうと、キャラクター設定画面を呼び出す。
あれ？ 2ポイントあまっていたはずのボーナスポイントが0に
なっていた。

いや。今は魔物が優先だ。後で考えよう。

買取価格三十パーセント上昇をゼロにして、武器六までつき込む。

そういえば、英雄のジョブにはスキルがあつたはずだ。デュラン
ダルで倒せない場合、それを使ってみるしかあるまい。
ジョブ設定と念じて、確認する。

スキル オーバーホエルミング

なんだかよく分からん。

「オーバーホエルミング？」

と、頭の中に呪文が浮かんできた。
これを唱えるのか。

「……いかがいたしましたか」
「いや、なんでもない。進め」
「かしこまりましたございます」

中二病患者の俺に商人が気を使ってくるが、無視する。
俺はリュックサックを下ろし、身軽になつた。銅の剣も足元に置
く。デュランダルを鞘から抜き、鞘だけを腰に差した。
荷馬車が近づくと、グミスライムもこちらを認めたのか、俺たち
の方に向かって進んでくる。

「よし、とまれ」
「は、はい」

荷馬車のスピードが緩くなったのを見計らい、馭者席から飛び降

りた。

馬の横を駆け抜け、グミスライムの正面に出る。デュランダルを左後ろにかまえ、バットを振るよう横殴りにスイングした。デュランダルがグミスライムの青い身体を切り裂き、グミスライムの右に抜ける。

一撃では倒せないようだ。

「受け渡されし英……おおっと」

ならばとスキル呪文を唱えようとした俺に向かって、グミスライムが跳ねた。あわてて体をひねり、なんとかグミスライムをかわす。戦闘しながら詠唱なんて、無理無理。

剣をかまえたところにまたグミスライムが飛びかかってきた。今度はグミスライムの動きをよく見ていたので、剣を使って軽くいなす。

着地したところに上段からデュランダルを振り下ろした。脳天から体の下部まで打ちつける。さすがにこれを喰らってはおしまいだろう。脳天があるかどうか知らないが。

グミスライムは、力なくうなだれ、地の上に広がった。緑の煙となり、溶け込むように消え失せる。

緑のモヤがかき消えると、白い何かが残った。

スライムスターチ

なんだかよく分からないドロップアイテム。
とりあえずもらっておこう。

グミスライムを倒すにはデュランダルで二回攻撃する必要があるようだ。

あと、戦闘中にスキルを詠唱することは難しい。集中力が持たん。先制攻撃にのみ使うか。

ピンチに陥ってスキルを使いたい場合にはどうするか。訓練する必要があるな。

先ほどの戦闘について省察していると、商人が荷馬車を進めてきた。

「お倒しになったのでございますか」

「うむ」

「こんな短時間で……さすがでございます」

「まあ、な」

そうは言ってもデュランダルだと二発だからなあ。

銅の剣だったら何回攻撃すればいいかわからん。多分その前にやられるだろう。

「ひょっとして、ミチ才様は魔法使い様でいらっしやますか」

商人が訊いてくる。

「剣で倒したのは見たと思うが」

「確かに。昨日も剣を使っておいででした」

盗賊を倒したとき、俺は魔法を使っていない。というか使えないし。

「だろう」

荷馬車に乗り込む。

この世界には魔法が存在するはずだ。設定でそう選んだ。魔法使いも普通に存在するのではないかと思うが、違うのだろうか。

「それはスライムスターチでございますか」
「そうだ」

「いかがでございます。守っていただいたお礼もかねて、買い取らせてはいただけませんかでしょうか」

あわててキャラクター再設定と念じた。
武器六をはずし、買取価格三十パーセント上昇を身につける。

商人に見えないよう、デュランダルを後ろに隠してから、設定画面を終了させた。

変に思われるのも嫌だし。

「そうだな。そうさせてもらうか」

スライムスターチを商人に渡す。
間にあつたのかね。

「スライムスターチは水で溶いてから醗酵させると、お酒になります。スライム酒といって、好む者が多い一品です」
「ほう」

「通常の買取価格は八十ナール。馬車を守っていただいたお礼に十倍の対価を出させていただきたく存じます。ミチ才様がお相手ですから千四十ナールでお引き取りいたしましょう」

「悪いな。遠慮なく受け取っておこう」

サンパニジュウシに足す八百で千四十。
きつちり三割アップが効いているようだ。
商人から銀貨十枚と銅貨四十枚を受け取る。

巾着袋に入れ、リュックサックを背負った。

「魔法使いがこの辺にいるか？」

気になったので訊いてみる。

「さあ、存じません。魔法使いになるためには、五歳までになんとかいう特別な薬を飲まなければならぬそうです。魔法使いになれるのは貴族や大富豪の子弟だけ。この辺りでは聞いたことがありません」

「そうか」

魔法使いになるのにそんな制約があったとは。
俺は魔法使いにはなれないのだろうか。
いや、あるいは……。

それより、今は他に考えるべきことがあった。
荷馬車に揺られながら、ボーナスポイントについて考える。

増えたと思ったボーナスポイントがあまっていなかった。

今使っているのは、買取価格三十パーセント上昇で63。
必要経験値五分の一で15。

獲得経験値五倍で15。

ここまで合計93。

サードジョブで3、計96。

鑑定、ジョブ設定、キャラクター再設定の99だ。
残り0だから、最初からまったく増えていない。

と、計算したところで分かった。

ボーナスポイントが増えたのは村人のレベルが上がったときだ。
今は村人Lv3をはずして農夫Lv1にしているから、ボーナス
ポイントが当初と同じなのではないだろうか。

試しに、ジョブ設定と念じて、ファーストジョブを村人Lv3に
戻す。

そしてキャラクター再設定を行うと……。

ほら、やっぱりボーナスポイントが2ポイントあった。

ベイルの町

ポーナスポイントについての疑問が解消したところ、荷馬車はさらに進んでいた。

急に森が開け、前に城壁が見えてくる。

「おおっ、あれがベイルの町か」

「さようでございます」

「なかなかでかいな」

城壁の長さは、一辺が一キロメートル以上はあるだろうか。

もちろん現代日本の都市とは比べ物にならない。それでも、城壁を造るコストを考えれば、なかなかの都市だろう。

城壁の周囲には、町の住人が育てているのか、畑が広がっていた。森が急に開けたのはそのせいだ。

太陽はまだ半分も上がっていない。

グミスライムを狩ったりと、いろいろあったが、時間にすれば三時間くらいか。

一時間の長さは地球と同じと考えていいのだろう。

「この辺りでは一番の都市でございます」

商人が自慢げに話す。

都市の周りには何台かの荷馬車が集まっていた。

商人の荷馬車も、その中に入って町に近づいていく。

城門はあるが、門番はいない。

検問も行われてはいないようだ。

「町には自由に入れるのか？」

「もちろんでございます。高い城壁でもございませぬし、統制しようにも移動魔法がございますから」

移動魔法。そんなものがあるのか。

確かに、魔法で移動できるなら、城門で検問しても無駄か。

あれ？

じゃあ城壁は何のためにあるのだろう。

そもそも、移動魔法があるのなら、ベイルの町まで荷馬車で来ることはなかったのでは。

「そ、そうか」

いろいろ疑問点はあるが、スルーする。

城壁があるのは魔物対策か。

荷馬車で来たのは、俺の空間が使えなかったからだ。

荷馬車は町の中へと入っていった。

「まずは、奴隷商のところへまいります。その後、騎士団の詰め所へ行き、武器屋、防具屋の順で回りたいと存じます。それでよろしいでしょうか」

「任せる」

町に入ると商人がこの先の予定を告げてくる。

荷馬車が町の中を進んだ。

道は広く、石畳が敷いてある。左右の建物は、漆喰の塗られた四階建てくらいの立派なものだ。

商店もないような文明レベルにしては、たいしたものだろう。雑踏というほどでもないが、人も結構歩いている。落ち着いたよい街といえるだろう。

歩いているのは、村人、商人、農夫、戦士、剣士もいた。都市に住む市民なのに村人とはこれいかに。

「市はこの先、町の中心に立っております。ですが、今は右に入ります」

「分かった」

荷馬車が道を右に曲がる。

「この先は治安の悪いところもございます。娼館などもございますが、あまり奥に入るとは勧められません」

「気をつけよう」

娼館ってなんだろう、と思ったが、娼婦のいる館で娼館かあ。

「ザ、娼館。風俗店。ぱふぱふしてくれるお店。めくるめく官能ワールド。」

やはりこの世界にもそういう需要はあるのだろう。

治安が悪いということは、この世界でも、娼館のある場所はスラム街近くだったり暴力団が支配していたりするのだろうか。

これは調査が必要だ。

是非とも行かざればなるまい。

この世界で生きていく以上、どのような危険があるか知っておくことは重要なことだ。

そこが危険なところであるなら、その実態を解明しておかねばならないだろう。

調査のためにも、俺は行くべきなのだ。

いや、あくまでも調査だ。

異世界の調査である。

調査のためにあんなことやこんなことをするとしても、それは仕方のないことなのだ。

うむ。調査のためであればやむをえない。

是非におよばず。

などと考えていると、荷馬車は右に入ってすぐ、二軒目の家の前に止まった。

ここが奴隷商か。赤いレンガ造りの三階建て。見た目は普通の民家のようなのだ。

「何かご用でしょうか」

荷馬車が止まると、家の中から若い男が飛び出してくる。

商人Lv3。レベルが低いから、まだ見習いだろう。

「奴隷身分に落とされた犯罪者を引き渡しにまいりました。荷台をご確認ください」

村の商人の言葉に、男は荷台のシートをはずしケージを確認した。

「承りました。それでは、店の中にお入りください」

俺と商人が店の中に入る。

「奴隷は俺が売ることにしておいた方がよかるう」

奥に案内される途中で、商人に告げた。

俺なら三割アップがある。

「かしこまりました。それでは、こちらをお持ちください」

商人が二つ返事で引き受ける。なにやら手紙を渡してきた。

「これは？」

「村長からの委任状でございます」

そんなものがあつたのか。

手紙を受け取り、案内された部屋の中に入る。

座り心地のいいソファーに座っていると、やがて一人の男が現れた。

アラン 男 63歳

奴隷商人 Lv44

奴隷商人なんていうジョブもあるのか。

そして、いきなりの過去最高レベル。なかなかやり手のようだ。

あるいはあの村が田舎過ぎるのか。

「当家の主、アランでございます」

「ミチオだ」

「ソマーラの村のビッカーでございます」

「どうぞおかけください」

立って挨拶し、促されてまた座る。

ソファアの座り心地がいいのは、奴隷商の客がそれだけ上客ぞろいだからだろう。

奴隷を買えるような金持ちでなければいけないし。

「本日は市もなかなか盛況のようでございます」

商人が切り出した。

まずは雑談からか。

「ご存じないのですか？ 二日前に迷宮が見つかったのです」

「迷宮でございますか」

ふむ。迷宮があるのか。

そういえば、フィールドとダンジョンの両方がある設定を選んだのだけ。

俺は黙って情報収集に徹する。

「町の近くで魔物に遭遇しませんでしたか」

「ベイルの町近くではありませんが、今日に限り二度も」

「他の迷宮の活動も強まるのかもしれない」

「しかも本日はグミスライムまで」

「それは……。大丈夫だったのでしょうか」

奴隷商人が心配顔で問いかけてきた。

「グミスライムはこちらにおられるミチ才様が退治してくださいました」

「お一人ででございますか？」

「ミチ才様は昨日村を襲ってきた盗賊たちをも相手にしなかったおかたなのでございます」

なんかほめられて居心地が悪いな。

話題を変えよう。

「その盗賊の装備を盗もうとした男がいてな。村の掟で奴隷身分に落とすことになった」

「さようでございますか」

「これが村長からの委任状だ」

手紙を出す。

奴隷商人が受け取った。

「拝見させていただきました」

「売却額の半分をミチ才様にお渡しすることになっております」

書状を見ている奴隷商人に村の商人が説明する。

「なるほど。確かにそのようでございます」

「いかがかな」

「男は確認させていただきました。健康体で働き盛り、およそ三万ナールほどが買取の相場かと存じます」

俺は村の商人を見た。

相場なんて俺には分からん。
商人が軽くうなづく。

「分かった。それでよろう」

「ありがとうございます」

「それでは、私とミチオ様に半分ずつお支払いいただけますか」

三割アップは効かなかったようだ。

奴隷だと駄目なのだろうか。

「お客様は当家をご利用になられるのは初めてでしょうか」

奴隷商人が俺に訊いてくる。

「この町には初めて来たところだな」

「なるほど。冒険者のかたでございましたか」

なんでそうなるのだろう。

俺の顔はそんなに冒険者に見えるのだろうか。

もっとも、盗賊に襲われるような田舎の村近くをブラブラしているのは冒険者くらいなものなのかもしれないが。

「いやまあギルドにも入っておらんがな」

「それでは今後、奴隷をお買いになられるご予定がございますでしょうか」

待て。なんと言ったか。

「奴隷を……買う……冒険者は多いのか？」

なんとか話を繋げた。

「それはもちろん多々ございます」

奴隷を買っつ。

何故かそんなことはまったく思いつかなかった。

現代日本の常識にとらわれすぎだろうか。

この世界には奴隷がいる。

奴隷を売ったのだから、奴隷を買っつこともできるはずだ。

女奴隷を買っつてはべらすことができるのだろうか。

女奴隷を買っつてウハウハできるのだろうか。

女奴隷を買っつて……。

「そうなのか。いや、俺はまだ師匠のところから独り立ちしたばかりでな。山奥での修行だった故、いろいろと疎いこともある」

考えていた言い訳を持ち出す。

田舎の出身で山奥で修行していた、ということにしておけば、この世界の常識を知らない言い訳になるし、強さの説明にもなるだろう。

俺が強いのはデュランダルを出せるおかげだが。

「さようでございますか。確かに、見たところまだお若いようにお見受けいたします。この町近くの迷宮には行かれないのでしょうか」
「ふむ。それも悪くはあるまい」

ダンジョンがあるなら、入ってみるのもいいだろう。
穴があるなら入れてみたい。それが男というものだ。

「それならば是非一度、説明させてくださいませ」

「そうか。ではまた来よう」

なんか巧いこと営業されてしまった。

奴隷商人はいったん部屋の外に出て、お金を持って戻ってくる。

「こちらが半金の一万五千ナールになります」

「確かにお受け取りいたしました」

商人が代金を受け取った。

金貨一枚と銀貨がたくさん。金貨一枚一万ナールか。

「今後のお取引にも期待して、お客様には一万九千五百ナールで買取らせていただきます」

続いて、奴隷商人はお金の入ったもう一つの皿を俺に差し出す。

金貨一枚と銀貨がものすごくたくさん。

俺だけ三割アップなのか。

ちらりと村の商人を見るが、特になんとも思っていないようだ。

三割アップについても、奴隷を買えと言われたことについても。

「確かに、受け取った」

しかし、奴隷を買えだなんていう心臓に悪いエクスキューズはやめてほしかった。

実際問題、奴隷を買うなんてどうなのか。奴隷を買うのは犯罪だろう。

いや、それは現代日本の倫理なのか。この世界にはこの世界の倫理がある。

考えてみれば、俺は奴隷を売りに来たのだ。村の掟だとはいえ、奴隷を売った以上、買うこともそんなに変ではあるまい。

そうか。そもそも奴隷を売るなんて駄目だよな。汚れっちまった悲しみに。

などと悲嘆にくれていてもしょうがないので、とっとと逃げ出すことにする。

「それでは、ミチ才様のまたのお越しをお待ちしております」

名前まで覚えられてしまったようだ。

これでは逃げられない。

まあいいや。また来よう。

迷宮のことも聞きたいし。

俺と商人が奴隷商の館を出る。

商人が荷馬車をリターンさせた後、俺も荷馬車に乗り込んだ。

先ほどの道に戻った後、中心部に向かって進む。

「おお。あれが市か」

広い道の両側に、屋台が設けられていた。

食料品や衣料品などが置かれ、人が集まっている。

戦士LV41

剣士LV47

神官LV35

料理人LV28

結構いろいろなジョブがある。
レベルが高い人もそれなりにいるようだ。

冒険者LV13

本当に冒険者というジョブもあった。

「あそこが、騎士団の詰め所になっております」

市の中を進んでいくと商人が指差す。

町の中心だろうか。道が広場を伴ったロータリーになっており、
左手前に、鐘楼を備えたレンガ造りの建物がある。

荷馬車はその建物の前で停まった。

「
××××××××××××××××
」

「xxxxxxxxxxxx」

中から騎士が出てきて、商人となにやら話す。

騎士Lv4

レベルは低い。

まだ見習いだろっか。

「ミチ才様、盗賊のインテリジェンスカードをお出してください」

商人が話しかけてきた。

「うむ」

あ、そうか。

何のために来たのか、分かっていなかった。

盗賊の賞金をもらえるのだった。

リュックサックを下ろし、巾着袋を開けて、中からカードを取り出す。

見習いの騎士に渡した。

商人も渡している。村人が倒したという二枚だろうか。

盗賊のインテリジェンスカードは、見てみたが何も書かれてはいなかった。

あれで分かるのだろうか。

「それでは、インテリジェンスカードを確認させてもらう」
「お願いします」

騎士Lv4の言葉に商人が腕を伸ばす。
左手の甲を騎士の顔の辺りに上げた。

「滔々流るる霊の意思、脈々息づく知の調べ、インテリジェンスカード、オープン」

何をするのかと思ったが、確認するインテリジェンスカードって、俺たちのか。

やばい。

俺のも確認するのだろうか。

はたして俺にインテリジェンスカードはあるのか。
なかったらどうなる？

騎士が商人のカードを確認し終える。
商人が腕を戻した。騎士は次に俺の方を見る。

まあいくしかないよな。

仕方がないので、重心を移動し、左手を伸ばした。
騎士の顔の前まで腕を上げる。

「これでよいか」

「滔々流るる霊の意思、脈々息づく知の調べ、インテリジェンスカード、オープン」

内心の不安をよそに、俺の手の甲からはあっさりといんてリジェンスカードが飛び出してきた。

いや、出てくるのは出てくるので心配だが、どうなっているのだろう。

「……………どうだ？」

騎士が黙っていることに気をもんで尋ねる。

その沈黙が怖い。

「……………苗字持ち？……………いや。自由民のかたでしたか。結構です」

合格のようだ。

騎士は詰め所に入っていた。

俺は自分のいんてリジェンスカードを見つめる。

加賀道夫 男 17歳 村人 自由民

漢字とアラビア数字で書かれていた。

苗字があるのはこの世界では珍しいのだろう。

俺は自由民のようだ。

自由民の他に奴隷があることは確かだが、貴族とかもいるんだろ
うか。

「何を調べたのだ？」

「ジョブが盗賊になっていないかどうかです。盗賊に懸賞金を渡す

わけにはまいりませんので」

商人の答えに一瞬硬直する。

俺は盗賊のジョブを持っていた。

もつとも、インテリジェンスカードに書かれている俺のジョブは村人だ。

ファーストジョブがジョブとして反映されるのだろうか。

村人がファーストジョブでよかった。

「そうか」

軽く息を吐く。

インテリジェンスカードは引つ張っても手から離れないようだ。

先端部分を軽く押すと、手の甲に引つ込んだ。

本当にどうなっているのだろうか。

「盗賊のカードは中で確認を行っております。すぐに結果が分かりましょう」

「盗賊のインテリジェンスカードは、どうやって取ったのだ」

「人が死亡して三十分経つと、自然にインテリジェンスカードが出てまいります」

商人が説明する。

インテリジェンスカードが取れない間は生きているということか。

やがて、詰め所の中から一人の女性が出てきた。

騎士Lv27
装備 マジカルアーマー 加速のブーツ

レベルはそれほど高くないが、見たことがない装備の上に、名前も複雑だ。

おそらく名家の出身なんだろう。

引き締まった体躯のきりりとした美人である。多分、胸は大きくない。

亜麻色の髪を後ろでまとめていた。

「盗賊を倒したのはそのほうか」

艶やかな目元をこちらに向けてくる。

「そっだ」

「あれはこの町のスラムを根拠としている盗賊団の一味だ。現在壊滅作戦を展開中なので一部が逃げ出したのだろう。そのほうが倒した中の二人に懸賞金がかけている。その他の者にはまだ賞金がかかっていない」

美人の騎士がちらりと商人の方を見た。

「さようでございますか」

商人が渡した二枚は駄目だったのだろう。

詰め所の中から、先ほどのLv4が走り出てくる。

美人の騎士に白い袋を渡した。

「これがその賞金だ。受け取るがよい」

美人の騎士はその袋を俺に投げてよこす。

「うわ」

あわてて受け取った。

扱いひどくない？

「受け取ったら、さっさと立ち去るがよいぞ」

美人騎士は、そう言い残してすぐに詰め所の中に戻っていった。

え？

これだけ？

いやいや。せつかくの美人なのに。せめて名乗りあうとか。

「ありがとうございます」

商人はそう言って荷馬車を出発させる。

ホントにこれだけなのか。

にべもない。

騎士団のくせに、村が襲われたことについても何も無いのか。

いや。分かっていた。

分かっていたさ。

美女と仲よくできるのはイケメン限定であるという事は。

地球でもてなかつたやつは異世界でももてないのだ。

地球でもてなかつたのに異世界ではもてるなんていうことがどうしてありえようか。

いや、ない。

「次は武器屋か」

疲れた声で商人に確認する。

はあ。

「さようございませす」

商人はそのまま荷馬車を進ませた。

賞金はリュッククサククに入れる。三十パーセントアップは効いたのだろうか。

懸賞金だからそれはないか。

あのすげない態度ではな。

しよ、賞金は三割アップにしといたんだからね。

と、こつという反応がほしかった。

ロータリーを渡ってしばらく行くと、剣を置いてある店が目に入る。

ここが武器屋か。

ひもろぎの剣 両手剣
スキル 知力二倍 火炎剣 浄化

店の真ん中に立派な大剣が飾ってあった。
スキルが三つある。なかなかのものなのだろう。

荷馬車が止まったので、俺が降りる。
男が寄ってきた。

武器商人Lv21

武器商人なんてジョブもあるのか。

「ちょっといいか」

「いらっしやいませ。どのようなご用件でしょうか」
「剣を売りたい」

武器商人に荷馬車の剣を見せる。

「武器に宿りし魂よ、その力を解き放て、武器鑑定」

武器商人がつぶやきながら銅の剣を見た。

うわっ。

結構こっ恥ずかしい。

インテリジェンスカードのときにはカードが出てくることにびっくりして気をとられていたが、これはいたたまれない。

多分、武器鑑定というスキルがあるのだろう。
ポーナスキルの鑑定には呪文がなくて本当によかった。

「いかなかな」

「銅の剣は全部で十八本になります。銅の剣の買取価格は一本二百五十ナールでございます」

商人を見ると、軽くうなずいている。

十八本のうち二本は村人の取り分だ。

「よかろう」

「鉄の剣が一本、買取価格は千ナールになります」

「うむ」

「それから……」

武器商人がほむらのレイピアを取り上げた。

「どうだ？」

「スキル付きの武器でございますか……。ほむらのレイピア。一万八千ナールで買い取らせていただきます」

さすがはスキル付きの武器か。桁が違う。

商人を見ると、驚いたようにしていたが、軽くうなずいた。

「分かった」

「シミターの買取価格は五百ナールでございます」

武器商人はシミターをちらりと見ただけで告げる。

「それはスキルスロットを含んでの値段か？」

「お客様、おたわむれは困ります。こちらの剣にはスキルはついておりません」

注文をつけた俺を、武器商人が蔑むような目で見てきた。

武器商人には空きスロットが分からないのだろうか。

「いや。スキルはついていないが……。ちなみに、これだといくらになる」

腰に差していた銅の剣を武器商人に見せる。

「武器に宿りし魂よ、その力を解き放て、武器鑑定……。ただの銅の剣でございます。二百五十ナールが相場でございます」

武器商人は『ただの』を強調した。

俺が差していた銅の剣には空きスロットがある。

武器商人にはその空きスロットが分からないのか。いずれにしても、値段に反映されないことは間違いない。

「分かった。シミターは俺が引き取る。買い取りはその他の剣だけで頼む」

「ありがとうございます。大量にお持込みいただきました。つきましては、全部で三万五百五十ナールでお引き受けたく存じます」

それで三割アップなんだろうか。

どうなっているのかほんとに分からん。

「それでよかるう」

「かしこまりました。少々お待ちください」

武器商人が一度奥に引き込み、硬貨を皿に載せて持ってきた。金貨が三枚と、銀貨が五枚、銅貨が大量に。やはり金貨一枚一万ナールか。めんどくさいので銅貨は数えずに受け取る。

「確かに、受け取った」

「ありがとうございます」

金貨一枚と、銀貨、銅貨を巾着袋に入れる。

金貨二枚を商人に差し出した。

「村の取り分はこれでよいか？」

「これでは多すぎます」

銅の剣二本、ほむらのレイピア、シミターでしめて一万九千ナールだ。

「多いのはシミターの分だ。高く買わせてもらおう」

「かしこまりました。ありがとうございます」

商人は買取価格が三割アップしたことについては何も言わなかった。

その分はもらっておいてもいいだろう。

俺のスキルだし。

続いて、隣の防具屋へ行く。

「村人が倒した盗賊は防具を着けておりませんでした。仕入れも行わなければなりません。防具屋に荷を置いたら、私はおいとまさせていただきます」

「そうか。世話になったな」

「いいえ。こちらこそ何から何まで本当にお世話になりました。もう一度、お礼を述べさせていただきます。村を救っていただき、感謝の言葉もございません」

ティリヒさんは来なかったけどね。

商人は防具屋の近くに荷を降ろすと、荷馬車を進めて去っていった。

こっちの店の中央には、さっきの美人騎士も着けていたマジカルアーマーが飾られている。

マジカルアーマー 胴装備

スキル 魔法ダメージ軽減

スキルつきのよい防具のようだ。

皮の鎧と皮の靴をそれぞれ一個ずつ、状態のよさそうなものを選んで別にする。

それから商人を呼んだ。

「ちょっとよいか」

「いらつしゃいませ」

防具商人Lv33

武器商人と防具商人は別のジョブになっているらしい。
だから武器屋と防具屋は別々なのか。

「これらを買ってほしい」

「我は尋ね力を見る、守りの魂立ち出でよ、防具鑑定」

防具商人が装備品を見る。

やっぱり恥ずかしいな。

武器鑑定と防具鑑定は別スキルなのか。

武器商人は武器鑑定しか使えなくて、防具商人は防具鑑定しか使えないのだろう。

「いかがか」

「盗賊のバンダナは五百ナール、鉄の鎧は千八百ナール、皮の鎧は二百ナール、皮の靴は二十ナールで買い取らせていただきます」
「分かった」

相場も分からないし、向こうの言い値でうなずくしかない。

盗賊のバンダナは思ったほど高くなかった。

五百ナールというのが、そのために奴隷に落とされてしまうような金額なのかどうか。

「皮の鎧が二個、皮の靴が七個あります。全部で三千六百九十二ナールでお引き受けさせていただきます」

「頼む」

多分三割アップになっているのだろう。
その値段で了承する。

防具商人が代金を持ってきた。

小銭がいっぱいだ。

ロクサーヌ

ベイルの町でやるべきすべての用事を済ませた。

俺は今、自由だ。

そして自由であると同時に空虚でもある。

何をしてもよい代わりに、何かをしなければならぬわけでもない。

商人と別れたことで、俺のことを知る人間もいなくなってしまうた。

そう考えると、急に寂しくなってくる。

この世界には俺のことを知る者は誰もいない。

その中で、俺は一人ぼっち、生きていくのだ。

不安だ。

そこはかとなく不安になる。

そういえば、一人いたか。

奴隷商人。彼が待っていてくれるはずだ。

別に待っていてほしくもないが。

情報収集もかねて、行ってみることにする。

迷宮のことも聞かなければならない。

俺は皮の鎧と皮の靴を持って、建物の陰に入った。

皮の鎧を服の上から着け、皮の靴はリュックサックにしまっ。

腰には銅の剣とシミターを二本差した。まあ日本人だしな。侍スタイルだ。

誰も見ていないことを確認して、渡された懸賞金の小袋も開けた。金貨が十六枚と銀貨が大量にある。

懸賞金は十六万何千ナールということか。

また銀貨が増えてしまった。

五円玉十円玉を使い慣れた身には、百枚ごとに上がっていくこの世界の通貨は不便だ。

村長がくれた礼金の方は金貨十五枚だった。

価値は分からないが懸賞金とほぼ同額か。

現在の持ち金は、金貨三十三枚と、銀貨、銅貨がたくさん。

金貨だけをまとめて礼金の入っていた巾着袋にしまう。

リュックサックを閉じ、背負った。

市が開かれている通りに戻る。

道は結構なにぎわいを見せていた。

よく見ると、人間ではない種族も交ざっているようだ。

ケモノミミの男性、しっぽのある子ども、耳の尖った女性もいる。

エ、エルフだ、エルフ。

あまりジロジロと見るわけにもいかないので、商品を見る振りをしてしながら、こっそり覗いた。

人間以外だと、男、女ではなく、 になるようだ。

顔はかなりの美人さん、胸も多分それなりにある。年齢は37歳
ということだが、まだ二十代にしか見えない。

と。店の人らしい商人がやってくる。

捕まる前に逃げ出した。

基本的には人間が多いようだが、他の種族も違和感なく馴染んで
いる。

さすがは異世界だ。

市を冷やかしながら歩いた。

相場を見てみたいが、値札が張られてないので分からない。

客と商人の会話も、半分以上はブラヒム語ではないので聞き取れ
ないし。

見た目ニンジンのあの果物も売っていたが、値段は分からなかつ
た。

市を抜け、奴隷商の館へ向かう。

「ちょっといいか」

「あ、先ほどの」

前と同じ、見習いらしい若い男が飛び出してきた。

「主人のアラン殿にお会いしたい」

「それでは、中に入って少々お待ちいただけますか」

館の中に通され、入り口横の部屋に案内された。

さつきとは異なる応対だ。

売りに来たときとは違って客扱いということか。

部屋には絨毯が敷かれ、壁に高そうな絵が飾られており、ソファ
ーではないが高級そうなイスとテーブルが置かれている。
いかにも上客のための待合室という風情だ。

「ミチ才様、お待ち申し上げておりました」

奴隷商人はすぐにやって来た。

まだイスにも座っていないのに。

「うむ」

「それでは、こちらへどうぞ」

主人自ら案内する。

もっとも、案内されたのはさつきと同じ部屋だった。

「先ほどは迷宮があると言っていたが、どこにあるのだ」

奴隷商人から営業を受ける前に、聞きたいことは雑談として訊い
てしまおう。

「この町の西側、森に入ってすぐのところでございます。おかけく
ださい」

「西というと、来た方向とはちょうど反対だな」

太陽を背に進んできたので、ベイルの町には東から入ったはずだ。ソファーに腰かけると、使用人が俺と奴隷商人に飲み物を持ってきた。

使用人というか、メイド？

ロクサーヌ 16歳
獣戦士Lv6

白いエプロン部分と広がったロングスカートが特徴の紺のワンピースを着ている。

メイド服だ。この世界にもメイドがいるらしい。

顔は、

……。

美人。

ものすごい美人である。

女優やアイドルでもなかなかここまではいないというくらいに美しい。

いやすごい。この世界の美人は地球より上だ。

華麗な唇に、魅惑的などび色の瞳。髪はそれよりも薄い鮮やかな栗色だ。三角巾みたいな白い帽子をつけていた。

「どござ」

その美人さんが俺の前に飲み物の入ったカップを置く。
置くときに胸がたゆんと揺れたよ。
すごすぎです。

「あ、ありがとうございます」

素で答えちゃった。

この世界の衣服はゆったりとしたただぶだぶのものが多いようだ。
女性の胸の大きさは結構分かりにくい。

このメイド服も、前かけのエプロン部分も相まって、かなりゆったりしている。

しかし揺れた。

確かに揺れた。

俺の目が、胸元の揺れを観測した。

あの揺れだと中身は相当のものだろう。

「迷宮は二日前に入り口が見つかったばかりなので、まだ殺すには時間がかかると思えます」

「そうか」

奴隷商人の話など耳に入っていない。

いや、だって美人の上にあの胸ですよ。

身長は俺と同じか少し低いくらい。多分百六十ちよつとか。

服からの露出はほとんどないが、手や顔を見るに、決して太ってはいないだろう。

それなのにあの揺れなのか。

と出たからにはロクサー又は人間以外の種族なのだろう。
耳は、帽子と髪の毛で見えない。

ロクサー又が奴隷商人の前にもカップを置く。

「どうぞ、お飲みください」

「……悪いな」

いまさらだが。

奴隷商人に勧められてカップを手取る。
何かのハーブティーみたいなものだろう。
俺はゆっくりと口につけた。

ロクサー又がお辞儀をして部屋を出て行く。

「お気に召していただけたようで」

「え、あ」

かろうじて、口の中のものを吐き出さずに抑えた。

「なによりのことでした」

「……わ、悪くない飲み物だ」

「もちろん、彼女のことです」

やっぱりそうか。

「彼女は？」

「今うちで持っている中でお客様にもっともお薦めの奴隷です」

ます」

うん。

まあそうなんだろう。

奴隷商人が普通の使用人や見合い相手を薦めてくるはずはない。

そうか。

ロクサー又は奴隷なのか。

「……そういえば、冒険者なら奴隷を買うとのことだが」

話をごまかした。

ロクサー又を買えるのか？

あんなに綺麗な女性を。

「そうですね。どこから説明いたしましょうか。ミチ才様もパーティーを組んだことはおありになるでしょう」

「ああ」

ほんとはないが、当たり前のことのように言ってくるので、あることにする。

あの美人のロクサー又が買える？

頭に血が上ってくるのを感じる。

俺の顔は今赤くなっていないだろうか。

いかん。落ち着け。

奴隷だからといって、何も自由にできるとは限らない。

「パーティーを組めば、より効率よく狩りを行うことができます。

ミチ才様のようにソロやコンビの冒険者のかたもおられますが、六人全員をそろえた方が有利です」

「そうだな」

パーティーメンバーは六人までらしい。

とはいえ、二十四時間一緒にいれば。

少なくとも添い寝させるくらいのこととはできるはずだ。

ロクサーヌと添い寝……。

「しかし、六人をそろえることにも問題があります。迷宮は一攫千金が狙える場所です。その分配はどうなるでしょう。白金貨が出たら。あるいは、魔物が非常に高く売れるアイテムを残したら？」

金貨の上に白金貨というものもあるのか。

そんなものが出れば当然、ロクサーヌを買う。いや。

どうなるのかというと、高価なアイテムが出たら独り占めしようとするやつが出てくるだろう。

「もめると？」

「価値のあるものであれば、犯罪に走る者も出てくるでしょう」
「なるほど」

あの美しいロクサーヌが買える。

いや、うざい。

うざいが、頭の中はそれでいっぱいだ。

あれほど綺麗な女性だったのだ。

俺が今までに見たことがないほどの。

その彼女を買う、俺のものにできると言われれば、心がざわめかないはずがない。

「もちろんパーティーメンバーはよほど信頼の置ける人物でなければなりません。あるいはミチ才様のように、師匠と弟子というほど明確な力量差があれば、問題を防げるかもしれません。しかし多くの場合、それでも起きてしまうのがパーティー内でのもめごとでございます」

ロクサーヌのことは必死に頭の隅に追いやって考える。

ゲームの中なら、パーティー内でもめごとが起こってもおおごとにはならない。

ゲームキャラならば変なことはしないし、人間同士でプレイするネットゲームであつてもシステムのことにできることには限界がある。

それが現実の中ならばどうか。

どこまでいっても結局は他人であるパーティーメンバー。そのパーティーメンバーと顔をあわせて実際一緒に迷宮に入る現実。その中に、超高価なお宝が投げ込まれれば。

「例えば、迷宮の中で後ろから一突きということも？」

「ありえます」

やっぱりあるのか。

やっぱりロクサーヌを買うのか？

「そうか」

「そこで使われるのが、奴隷でございます。パーティーメンバーが奴隷ならば、迷宮で見つけたものはすべて主人のものになります」

奴隷ならばもめることはない、と。

奴隷のものは俺のもの、俺のものも俺のもの、のジャイアニズムか。

ロクサーヌも俺のものにしたい。

「奴隷が後ろから刺すとか」

「それはごさいません。所有者が亡くなった場合、基本的に奴隷も殉死します」

「し……死ぬのか？」

ロクサーヌが誰かに買われてそいつが死んだら、ロクサーヌも死ぬのか？

「まあ、たいていの場合には遺言を用意します。奴隷を誰かに相続させたり、よく働いてくれた奴隷の場合には遺言で解放することもございます」

「なるほど」

俺が死んだらロクサーヌも解放してあげたい。

「しかし迷宮で殺されるような場合には遺言を用意しているひまがありません。従って、奴隷がそのような行為に及ぶ可能性はほとんど考えなくてよろしいかと存じます」

「殺せないなら、逃げるとか」

「そうですね。よほどひどいところなら、逃げることもありえますが。奴隷が逃げ出しても元のところよりよい生活を送れる可能性はかなり小さいでしょう。奴隷ならば、主人が食事や寝る場所を用意する義務もございます」

俺もロクサーヌに食事と寝る場所を提供したい。
特に寝るところを。

いかん。

さつきから頭の中がこればっかだ。

「しかし、一生遊べるほどのお宝があれば」

「逃亡奴隷は盗賊に落とされます。奴隷を殺せば罪になりますが、盗賊を殺せば持っているものを合法的に自分のものにできます。よほどの準備がなければ、こっぴどく買い叩かれるのが関の山でしょう」

盗賊から親切にものを買収するやつはいないということか。

盗賊って、奴隷よりも下のような。

ロクサーヌより下なのは間違いないが。

「それなら逃げる可能性も小さいか」

「はい。ですから、冒険者は奴隷を買われるかたが多いのでござい
ます」

「分かった」

よほど信頼できるものでないとパーティーが組めないというのは
問題だ。

俺は地球からやってきて一人きり。この世界の常識も知らないし、
そこまでの仲間を見つけることは難しいだろう。

ダンジョンにこもる以外に生活の糧を見つけれられるのか。

ロクサーヌを買わなければ、いつまでもソロプレイということに
なる。

いや、ロクサー又じゃなくてもいいが。
でも美人だったよな。

「先ほどの彼女は獣戦士でございます。パーティメンバーとしてすぐにもお役に立ちましょう」

奴隷商人がロクサー又を薦めてくる。

「獣戦士……」

「お分かりになられたでしょうか、彼女は狼人族でございます。獣戦士は狼人族のみが就けるジョブでございます」

「うむ」

ロクサー又は鑑定で だったからな。

「お客様は奴隷をお買いになられたことは」

「いや。ないな」

「彼女は当家で今お売りできる中でも一、二を争う美人でございます。聡明で性格もよく、お客様が初めて買われる奴隷にはぴったりと存じます。しかも狼人族の獣戦士。狼人族というのがまた、お客様に彼女をお薦めできる理由でございます」

奴隷商人がグイグイ押してくる。

何かデメリットがあるはずだ。

営業トークに流されてはいけない。

いや。ロクサー又は素晴らしい。

非の打ちどころのあるうはずはない。あるうはずはないが。

「狼人族が薦められる理由とは」

「お客様は、エルフは長寿だという話を聞いたことがございますでしょうか」

「ああ」

それはよくある。

この世界でもやっぱりそうなのか。

「それは都市伝説でございます」

「え？」

「エルフも、人も、獣人も、知的生命の寿命はみな一緒でございます。それでもエルフが長寿だとされるのは、エルフの多くがみな若々しいからでございます」

「なるほど」

町で見たエルフの女性は鑑定だと三十七歳だったのに二十歳そこそこに見えた。

顔はロクサーヌの方が美人だ。彼女もかなりの美人ではあったが。胸はロクサーヌの方が大きい。

「人と他の種族とでは、老化するポイント、あるいは老化を見分けるポイントが違うのです。例えば二歳の犬と八歳の犬を見て、八歳の犬が老化しているとは人はあまり感じません」

「確かに」

「六十、七十ともなれば獣人も人の目から見て分かるほどに老化しますが、四十、五十ではまだ若々しいままです。狼人族の彼女は、人であるお客様から見て、いつまでも若く美しくあり続けるでしょう」

「そうなのか」

ロクサー又も若いままなのか。

ロクサー又は俺より一つ下だった。

五十歳のロクサー又から見て、五十一歳の俺は若々しく見えるのだろうか。

「それに、人以外の種族であることはお客様から見てもう一つメリツトがございます」

「それは？」

「人は他種族の女性との間に子をもうけることができません」

「それは……」

やりたい放題ってことですか。

この世界に近藤武蔵さんがいるとも思えないし。

ロクサー又と……た、たまらんッ。

「もちろん、彼女は処女でございます」

そうなのか。

ロクサー又が。

「処女の奴隷は価値が違うのか？」

「処女であれば病気の心配がございません。この町にも娼館がございますが、お客様が娼館に行くことはお勧めできません」

ダメだしされちゃったよ。

この世界にも性病があるのか。

抗菌剤なんかは、もちろんないだろうしな。

調査は諦めざるをえまい。

「了解した」

「それに、彼女は性奴隷となることを了承した奴隷でございます」
「なっ」

ロクサーヌが性奴隷……。

「彼女の場合、所有者の夜伽の相手となることを明示的に了承しております」

「……ふむ」

なんだそういうことか。

ロクサーヌが亀の甲羅状になっている姿を想像してしまったではないか。

それはそれでたまらん。

「もちろん実際のところ、若い女性であれば、どの奴隷であっても違いはございませんが」

「そうであろうな」

この世界でも、若い女奴隷を買うなら目的は一つらしい。
俺だけがおかしいというはなかった。

「しかし、お客様のようなかたの場合には意味が出てくるかと存じます」

「何故」

「お客様は奴隷に手を出すことに心理的な葛藤がおりでしょう」

ロクサーヌに手を出す、ことには葛藤はないが、奴隷として考えると微妙だよな。

金で無理矢理いうことを聞かせるというのは。

「まあ、そうだな」

「初めて奴隷を手にもされるお若い方かたというのはえてしてそうなのです。そして、奴隷の中にはそれを逆手に取るものもおります。思わせぶりな態度を示して、いつまでも体を許しません。初めから性奴隷であることを了承している彼女なら、そのようなことにはならないでしょう」

「なるほど」

「最後にもう一つ、彼女はブラヒム語を話すことができます」

「そういえば」

どうぞと言われてありがとございますと答えてしまった。日本人な俺。

あの揺れを見て動揺した。

あれはすごかった。是非また見たい。

「以上が、私がお客様に彼女をお薦めする理由でございます」

奴隷商人の営業トークが終了した。

売約

ロクサーヌ。

奴隷商の館で現れた狼人族の女性だ。

今までに見たこともないような美人。吸い込まれそうなとび色の瞳が麗しかった。

そんなロクサーヌを買えるのか？

カップを置こうと目の前で小さくかがんだときに胸元が揺れていた。

あの胸が俺の自由に？

彼女をものにできることは嬉しい。

嬉しいが、奴隷を買うというのは正直微妙だ。

しかし、俺が買わなければ誰か他のやつが買うことになる。

もちろん性奴隷として。

それは許せん。

俺はまあ、この世界に奴隷制度があることを否定しようとは思わない。

社会制度を変えるなんて無理だ。

現在の地球にだって、公的な奴隷制度こそなくなったものの、人身売買、臓器売買、児童買春といった問題はある。

俺よりものを知っているはずの地球の大人たちが解決できない問題を、地球では高校生だった俺にこの異世界で解決できる道理はな

い。

地球の先進国ほどにこの異世界を豊かにすることができれば奴隷制度はなくなるかもしれないが、地球でだって貧困問題は解決してないのだから、一緒のことだ。

コンピューターとか飛行機とか太陽電池の原理や製造方法を知っているわけもなく。

最初の村がそうであったように、この世界では奴隷制度が司法と結びついている。

奴隷制度だけをなくして万事解決というわけにはいかない。少なくとも刑務所を建てる必要があるだろうことくらいは俺にも分かる。

刑務所を建てるには税金がいる。税金を上げようとするれば、官僚機構を整備し、官僚を育成するには教育制度が必要で、あるいは整備された官僚が何をしでかすか、と問題はどんどん広がっていく。他にもどんな結びつきがあるか分かったものではない。

俺はこの異世界で、社会変革者になるつもりも、奴隷制度を否定するつもりもなかった。

だからといって、奴隷を買うことが許されるだろうか？

とはいえ、もう奴隷を売ってしまったわけだが。

ロクサーヌ。

あの美しい顔を思い出す。

ロクサーヌを買いますか？
はい いいえ

いやいやいや。

ロクサーヌを買いますか？
はい いいえ

もちろん、いいえを選ぶことはできない。
カーソルは、はいから動かない。

フリーズしたままだ。

ロクサーヌを買いますか？
はい いいえ

考えてもみるがいい。
俺はティリヒさんにも美人騎士にも相手にしてもらえなかった。
イケメン限定で起こるような美味しい話が俺に降りかかることは
ない。

つまりまあ、そういうことなのだ。

「性奴隷だと、高いのではないか」

せめてもの抵抗として、奴隷商人に訊いてみる。

「いいえ。ほとんど変わりません」
「何故」

普通に考えたら、性奴隷だと高いのではないだろうか。

「相場というものがございます。若い女性であれば、性奴隷であるうとなかろうと、実質的に職務の違いはありません。同じ仕事を求めるなら、値段は同じところに落ち着きます」

「性奴隷でない若い女性奴隷も性奴隷と同じ仕事をするか？」

奴隷商人は、はつきりとうなずき、話を続けた。

「戦闘能力や仕事をする能力でいえば、男性も女性と同等かそれ以上の力を持っているでしょう。しかし、働き盛りの成人男性の奴隷でも売値は十二万ナールほどが相場。若い女性であればこの倍以上美貌によってはさらに値が大きく上昇いたします。これはそういうことなのです」

単に働かせるだけなら、男性の奴隷も女性の奴隷も値段に大差はないはずだ。

しかし実際には若くて美しい女性奴隷の値段は高い。

もちろん、そういう需要が大きいからだ。買った奴隷をショーウインドウに飾っておくようなことはすまい。

性奴隷もそうでない奴隷もさせることは一緒。
であれば、値段は変わらないと。

奴隷商人の話がだんだん核心に近づいてきた。

おそらく、これ以上話を訊くならアレがいるだろう。
アレを設定するということは買うことを認めるということだ。
しかし、買わないと決めただけでもない。アレを設定せずに話を
進めるわけにはいかない。

俺は、キャラクター再設定と念じた。

値引交渉にチェックを入れる。

値引交渉が十パーセント値引に変化した。

やっぱりこのパターンか。

買取価格三十パーセント上昇をはずし、三十パーセント値引まで
ゲットする。

値引のスキルも、買取価格上昇と同じく六段階、三十パーセント
値引で終了し、かすれ文字になった。

「彼女ならば高いのではないか」

「そうですね……」

奴隷商人の顔がほころぶ。

こちらの買う気を見て取ったか。

「うむ」

「ズバリ、六十万ナールほどが相場でございます。先ほどの衣装も
おつけして、ここまでお勧めしたのですから、四十二万二千八百ナ
ールでお譲りいたしましょう」

奴隷商人が意気込んで告げてきた。

その言葉に、俺は大きく息を吐き出す。

四十二万ナールか。

買える値段ではない。

買える値段だったら、飛びついたかもしれない。飛びついたらもう。飛びつかずしてなんとする。

ロクサーヌのとび色の瞳は魅惑的だ。そこまでの価値がある。

しかし、俺は金貨を三十三枚しか持っていない。
倫理とか俺の感情とかは関係ない。
ない袖は振れない。

「残念ながら、俺には手が出んな」

「さようでございますか」

さほど残念でもない風に、商人が答えた。

俺は残念だけどな。

「仕方ないな」

「それでは、当家にいる他の奴隷も見ていかれてはいかがでございますしょう」

なるほど。

最初に一番綺麗な女性を見せてこちらの買う気を高め、安いブスを売りさばく策略か。

AV女優が働いているとされる風俗店なんかでは、彼女の名前を出して客を集め、店に行くと急に都合が悪くなったとかいって、別の女性をあてがったりするという。

俺は風俗に行ったことはないが、ネットに載っていた騙しのテクニクだ。

それと同じような策略。しかし今の場合、別に騙されたわけでもない。

単に俺が買えなかったただけだから。

いいだろう。乗ってやる。

「うむ。それもよからう」

「ありがとうございます」

奴隷商人は頭を下げると、俺を別の場所へと案内した。

建物の一番奥に行き、階段で三階に上がる。狭く、急な階段だ。

「いらっしゃいませ」

三階にはおばさんがいた。

階段のそばは小さなフロアしかなく、左右に二つのドアがある。

「整列させよ」

「かしこまりました」

おばさんが持っていた鍵で左のドアを開け、奥に消える。

「三階は女性奴隷の部屋となっております。基本的に、この階の管理はすべて女性従業員が行っております」

「うむ」

「処女の確認も、彼女らが行っております」

立ったまま奴隷商人が説明した。

男にやらせているわけではないということか。

隣の部屋からおばさんの声が響いてくる。
やがて、物音が収まり、おばさんが戻ってきた。

「準備できましてございます」

「お客様、こちらへどうぞ」

奴隷商人が俺を部屋へと案内する。

部屋には大勢の女性が横一列に並んでいた。

特に、臭いとかぼろを着ているとかガリガリで栄養状態が悪いと
かはないようだ。

まあ商品だからな。

管理はしっかりしているのだろう。

「彼女らが」

「はい。どうぞ奥まで進み、ご覧になってください」

「うむ」

俺は一人一人見ながら女性奴隷の目の前を進む。

奴隷を見せるときには裸にするんじゃないのかと思ったが、そんなことはなかった。

まだ買うと決めたわけではないからか。

向こうもこっちを見ているので緊張する。

しかし恥ずかしさはない。

というか、彼女たちは見ているといっても、見るというよりはぼんやり眺めている感じだ。

買われる奴隷が所有者候補を見る目はこんなものなのか。

奴隷を買うということの意味を実感する。

しかし、彼女たちだって少しでもよい主人に買われた方がいいだろうに。

キラキラした目で見てほしいとはいわないが、もう少し何かあってもいいんじゃないだろうか。

「ここでは食事もきちんと取らせております。商品でございますから。彼女たちが前にいた場所よりも、よほどよいところでございませう。」

俺の疑問を感じ取ったのか、奴隷商人が後ろから説明してきた。

「なるほど」

この場所の居心地は悪くないということか。
やらされる仕事もないだろうしな。
奴隷に売られるくらいならば、いつまでもこの場所にいたいのだらう。

最初の女性は、やる気なさそうな目で前を眺めていた。
俺のことなどまったく無関心だ。

次の女性なんかは絶対ふてくされているよな。

普通、あれを買おうとは思わないんじゃない。

「売れ残るということがどういうことか、言い聞かせてはいるのですが。なかなか分かつてはくれません」
「うむ」

それは俺も分かりたくはない。

ただ飯を食われても奴隷商人は困るだけだ。
売れ残れば、値段を下げ、条件の悪いところに押し込めようとする
だろう。

次の女性は、目は死んでいないが、顔のつくりが。

その次は、……うん、ないな。

次のこの女性は、まずまずか。

女、27歳、村人。さすがに年上すぎ。

次の子もちょっと可愛い。

でも胸はない。

もう一人、その先に可愛い子がいる。

まあ可愛いのだろう。可愛いのだろう、が。

最後まで進んだ。

確かに若い女性奴隷だけのことはある。可愛い子も何人かはいた。
悪くはないかもしれない。

最初にロクサーヌを見ていなければ。

ロクサーヌが美人すぎるため、彼女と比較して、どうしても劣った
ものと見てしまう。

奴隷商人の策略は失敗だな。

初めにブスを出して、後から美人を見せるべきだったのだ。

並んだ女性をもう一度見ながら、先頭に戻った。

奴隷商人と二人、部屋を出る。

部屋の外に、ロクサーヌともう一人おばさんがいた。
給仕から戻ったところか。

やっぱり綺麗だなあ。

ロクサーヌが頭を下げる。

あ、イヌミミだ。イヌミミ。

着替えて帽子もとっていたので、特徴のある耳がはっきり見えた。
大きくてフニャンと垂れている。ゴールデンレトリバーみたい
なたれ耳だ。

よく注意して見ないと、髪の毛に隠れて分かりにくい。

「いかがでしょうか」

奴隷商人が尋ねてきた。

「やはり彼女を見てしまつとな。残念だが」

「さようでございますか。お客様はおまえを気に入られたようだ」

奴隷商人がロクサーヌに告げる。

「……」

ロクサーヌは一度無言で俺を見た。

俺と目が合うと、うつむくようにして視線をそらせる。

困ったような、はにかんだような。

なに、今の。

メツチャ可愛い。

でもまあ、無理なものは無理だ。
先立つものがない。
人間諦めが肝心である。

「いかがでございます。十日ほどなれば、お待ちできますが」「は？」

「市は五日に一度開かれます。五日ではさすがに準備するにも短すぎるでしょう。ですので、次の次の市が開かれる十日後までお待ちします。その間に、必要なものをご用意ください」

奴隷商人は勝手に話を進めた。
最高級品を見せて、普及品を見せて、やっぱり最初の高級品がよかつたと思わせる策略だったのか。
油断した。

「あ、い、いや……」

「お客様はおまえのことをお求めでいらっしやるが、急なことで持ち合わせが足りないのだ。なので、契約まで十日待つ」

ロクサーヌにも宣言する。

「ありがとうございます」

ロクサーヌが頭を下げた。

なに、この連携プレイ。

こうなればもう断ることなど不可能だ。

ひょっとして奴隷商人とぐるだったのではないかとも思えるが、そうだったとしても、それが悪いわけではない。

これだけの美人が手に入るのだから。

そもそも、ロクサーヌと奴隷商人がぐるだったとして、どうやって俺を騙すのか。

奴隷商人は彼女が処女であると明言している。おそらく変な女ではないだろうし、複数の客に売るのも難しいだろう。

後から取り戻すとしても、奴隷商人の説明が嘘でなければ、俺が死ねばロクサーヌも死ぬことになる。

あるとすれば、金を用意させて殺して奪うくらいか。

単にロクサーヌを売るために奴隷商人とロクサーヌが手を組んだのなら、俺としては困ることは何もない。

「用意できるとは確約できんが」

「そうなれば新しい売り先を探すだけです。彼女の美しさです。すぐにも見つかりましょう」

「十日の間に、彼女にはもっと条件のいい客が現れるだろう」

せめてもの抵抗を試みる。

「そのようなことはお客様が気になさることではございません」

「彼女にとってもいい客が現れたらその方がよいのではないか」

「私なら、お待ち申し上げております」

え？ なにこの商売上手。

なんで売り込んでくるの？

ロクサーヌが俺を見てニツコリと微笑んだ。

流麗な唇の隙間から、白い歯が覗く。

美しい。
超絶して美しい。

「では、彼女は売却済みの部屋に移してくれ」

奴隷商人がおばさんに命じた。
ゲームセットです。

「はい。それでは、こっちへ」

おばさんは、俺たちが見てきた部屋とは階段を挟んで反対の方に
ロクサーヌを導く。

「はい。あの、よろしくお願いします」

ロクサーヌは三度俺に頭を下げた。
イヌミミが揺れる。

うん。

もういいや。ゲームセットでも何でも。

「まいりましようか」

奴隷商人が階段を下り始めた。

ペイル亭

「本当に資金を用意できるとは限らんが」

奴隷商人の後を追って階段を下りる。

「そのようなことにはならないでしょう。盗賊を倒したと聞きました。ならば昨日今日だけで二十万ナールや三十万ナールの収入があったはずでございます」

奴隷商人はこちらの懐具合をかなり正確に見積もっているようだ。四十二万ナールというのも、それを見越しての価格だろうか。

たとえそうであったとしても、一品ものであれば相手の言い値に従うしかない。

しかし奴隷商人の知らないことがある。

おととい以前の俺は、この世界のお金など一ナールも持っていなかったのだ。

「それを含めても、足りないのだが」

「きつと大丈夫でございますよ」

その自信がどこからくるのか。

俺は奴隷商人の後ろについて先ほどの部屋に戻った。

この世界で俺が金を稼ぐ方法は、今のところ二つある。

一つは、地味にダンジョンにこもることだ。

ドロップアイテムが一個百ナールで売れるとすれば、一日に百個集めれば金貨一枚。十日で十万ナールになる。

正直、ちよつと厳しいか。

兎の毛皮が二十ナールだったし、平均百ナールは楽観的な数字だろう。

一日に百匹狩れるかどうか分からない。百匹狩ったらドロップアイテムが百個になるかどうか分からないが。

今まで狩った魔物は一個ずつアイテムを残したが、全部同じだとは限らないだろう。

強い魔物なら落とすアイテムに希少価値がつくだろうが、その強い魔物を俺が相手にできるかどうか分からないし。

もう一つの手段は、盗賊を殺して賞金を得ることだ。

盗賊二人の懸賞金が十六万いくらなのだから、同程度稼ぐくらいでいい。

奴隷商人の自信も、ここからきているのだろうか。

心理的な抵抗は、ある。

村で戦ったときには、ゲームだと思っていたし、正当防衛という大義名分もあった。

金のために、必ずしも食うに困っているわけでもないのに、人を殺す、というのはどうなんだろう。

十日の間に都合よく盗賊が見つかるかという問題もある。

この二つ以外だと、地球の知識を使う、鑑定を使う、今あるお金を元手に増やす、といった方策が考えられるが、具体的なやり方は思い浮かばない。

何か思いつくかもしれないが、十日という短期間では難しいだろ

う。

「迷宮に入れば、金を稼げるか？」

ソファーに座ってすぐ、奴隷商人に問いかける。

不審がられない程度に情報収集をしなければならない。

「あまり多くはありませんが堅実にお金を稼ぐことができますし、
一攫千金も狙えます」

「うむ」

まあそうなんだろう。

あまり多くはないと言っただから、やはり通常のドロップだけで稼ぐのは厳しいか。

「アイテムは探索者ギルドか冒険者ギルドで買い取ってもらえます。特別に必要としている者があれば、もっと高く買い取ってもらうこともできます」

「ギルドか」

「探索者ギルドは、前の道を大通りに出て向こう側、右へ二番目の黄色い看板の建物でございます。冒険者ギルドは、町の中心を挟んで反対、西側にあります。探索者ギルドとは仲が悪いので」

冒険者ギルドと探索者ギルドは仲が悪いと。

探索者というジョブもあるのか。

「分かった」

「他には、賞金首を狙う手もあります」

奴隷商人の考えも、俺と似たものであるらしい。

「そうだろうな」

「あまりお勧めはしませんが、お金にはなるでしょう」

「駄目なのか？」

「そうですね。例えば、賞金稼ぎギルドは帝都にしかごいません」
「賞金稼ぎ……」

そんなジョブがあるのか。

俺はジョブ設定と念じる。

ものを盗んだときに盗賊になって、農作業をしたときに農夫のジョブを得た。ならば、懸賞金をもらったときにあるいは。と思っただが、何もなかった。

「賞金稼ぎになるには戦士として長い経験をつまなければならぬ
そうです」

「そうか」

思うに、ジョブ獲得条件があるのではないだろうか。
戦士Lv10とか。

「それだけの強さがあっても、すべてを守りきることはできません。
盗賊にとって賞金稼ぎは絶対に排除したい相手です。帝都以外に賞
金稼ぎギルドを建てても、すぐに壊されてしまうでしょう」

盗賊の立場からすれば、賞金稼ぎは憎らしい相手だろう。

そんな相手であれば、当然排除にかかる、と。

あるいは報復ということも考えられる。

すでに盗賊を殺している俺は大丈夫なんだろうか。

「あまり賞金を稼ぐと、狙われるか」

盗賊を倒すのを勧めないのは、人を殺すことが忌み嫌われているからではないようだ。

殺す者は殺される。

この世界の単純なルールだろう。

「そういうことでございます。それに、賞金は、盗賊に親族を殺された者などが懸けたりしなければ、その危険性に比してあまり高いものではありません」

村で倒した盗賊の懸賞金がそのために特別高かったということも考えられるのか。

いや、奴隷商人はその収入を正確に見積もっていたが。

いずれにしても、盗賊を倒すのは最後の手段だろう。

最初は迷宮で稼いだ方がいい。

「分かった。最後に一つ、しばらくこの町に留まりたいが、どこかお勧めの宿はあるか。あまり高いところは困るが、安全で枕を高くして寝られる場所であればならん」

「町の中心にあるロータリーの南西側にあるベイル亭が、旅亭ギルドの経営している宿屋でございます」

「ふむ。そこへ行ってみよう」

旅亭ギルドというのが分からないが、ギルドが経営しているなら安心なんだろう。

俺は立ち上がる。

方針も決まったし、いつまでもここにいる用はない。

「それでは、十日後までお待ちしております」

奴隷商人に見送られて建物を出た。

日はまだ高い。

この町の道路がきつちり東西南北に沿っているなら、やや西に移動したところ。正午を少し過ぎたあたりか。

まずは大通りに出た。

道を渡って二軒右、探索者ギルドに入ってみる。

探索者Lv17

うん。探索者というジョブがあるようだ。

ギルドは、奥にカウンターがあり、田舎の郵便局みたいな感じになっていた。

道路側の壁になにやら貼ってある。

中にいる人は数人。一人は、カウンターに荷を置いていた。

「これを頼む」

「買取ですね」

カウンター越しに従業員が対応している。

聞き耳を立てながら、何か貼ってあるボードに向かった。

……字が読めん。

なにやら書いてあるが、なんと書いてあるのか分からない。
インテリジェンスカードは漢字だったのだが、ここの文字は違
ようだ。

探索者ギルドが特別なのか、インテリジェンスカードが特別な
か。

「兄ちゃん、読めないのかい」

そんな俺に誰かが声をかけてきた。

俺と同じくらいの歳の女の子。

村人Lv2だ。同じくらいじゃなくて同い年だった。

「ああ」

「読んでやってもいいよ。六分十ナールだ」

なるほど。

識字率の低い世界では、こういうバイトもあるのだろう。
代読屋だ。

「頼むか」

リュックサックを下ろし、巾着袋から銅貨十枚を取り出す。

十ナールというのがどのくらいの値段かは分からないが。

三割引は効いてなさそうだ。

文字の読める人間に対する報酬だから、多少高いのかもしれない。

「こちらでお願いします」

カウンターでは奥の従業員が客に金を渡していた。言葉だけでは、何をいくらで売ったのか分からない。結構気を使っているようだ。

大金を渡せば狙われるおそれもあるだろうし。

俺は十ナールを女の子に渡した。

顔はそれなりに可愛い。胸は、例のだぼだぼの服のせいか、よく分からない。

いずれにしてもロクサーヌの方が上だな。

「じゃあ、この時計が落ちるまでだよ。いいね」

彼女がベルトに着けられている砂時計を見せ、ひっくり返す。

意外にきつちりしているようだ。

まあ、あの砂時計が五分で落ちるものだったとしても驚かないが。仮にそうだとして、文句を言っても、地球時間の五分はこの世界の六分にあたる、とは返してくれないだろう。

「分かった」

「何か知りたい情報でもあるのか。それとも、売りたいものがあるのかい」

彼女が聞いてきた。

そんなことを言われても、このボードにどんな情報があるかも分からないのだが。

「そうだな。兎の毛皮があるか」

「兎の毛皮だね」

彼女は腕を伸ばし、張り紙を順に追っていく。

「頼む」

「これだね。兎の毛皮、ソマーラの村のビツカー、ダシエル工房の二つだね」

彼女が指差した。

ソマーラの村のビツカーは昨日今日と世話になった商人だ。

村長も村の商人に売れと言ってきた。普段でも兎の毛皮の買取を行っているのだろう。

ギルドに張り紙を出して、高く買い取ると宣伝しているわけだ。

どこをどう読めばソマーラの村のビツカーになるのだろう。

「買取価格は書いてないのか」

「値段はギルドの買取価格の二倍だよ」

そうなのか。

ギルドの買取価格は兎の毛皮一個十ナールということになる。通常ドロップだけで稼ぐのは厳しそうだ。

「兎の肉はあるか」

「食材ならどこかの料理屋で買ってくれらると思うけど。大量にあるのかい？」

「ああ」

なるほど。

食材は料理屋へ、か。

「兎の肉の依頼を出しているところはないみたいだね」

ボードを一通り確認して、彼女が振り返る。

一通りといっても四分の三ほどだ。

それらが、アイテムを買い取ることの告知となっているのだろう。

「買取の他にはどんな情報がある」

「こっちは探索者の求人、こっちは迷宮なんかの情報だ。この町の近くで二日前に迷宮が出現した。知ってるだろう」

奴隷商人は見知らぬもの同士がパーティーを組むのは難しいというようなことを言っていたが、募集もされているようだ。

ただし、条件は悪いのかもしれない。

「どんな求人があるんだ」

「どんなのがいいんだい？」

「最初のから読んでくれ」

「ネギルバ侯爵の騎士団、Lv70以上、主に運搬業務、委細面談。これは年寄りがやる運搬の仕事だね」

なんだかよく分からん。

パーティーメンバーの募集というわけではないのか。

「次は」

「クストフ子爵の騎士団、運搬業務、十日で八百ナール。こんなんばっかりだよ」

「ふむ」

一日八十ナールか。

彼女の口ぶりからすると、あまりよい仕事でもなさそうだが。

「ダストニア男爵の戦士団、運搬業務、十日で千二百ナール、ただし食事はつかない」
「なるほどね」

下の方が給金が高いから、上のは賄いつきなんだろう。
食費は十日で四百ナール、一日四十ナールか。

つかない場合にわざわざ明記してあるところを見ると、この世界では食事がつくのが標準なのかもしれない。
騎士団といっているから、詰め所や駐屯地での勤務になるのか。
食事つき住み込みの可能性もある。

上と下の張り紙を比較した。
同じ字が、運搬業務なのだと思うが。

これか。
なんだかよく分からん。

などと考えている間に、六分が経ってしまった。

「時間だよ。どうする。もういいかい」
砂時計の砂が落ち切ったようだ。

「ありがとう。参考になった」
「じゃあまたね」

彼女に手を振られ、ギルドから出る。
六分間文字を教わった方が有意義だったんじゃないかという気も

したが、商売の種なので、教えてくれるかどうかは分からない。

町の中心へ向かう。

南西と言っていたので、騎士団の詰め所の向こう側。

あの建物がそうか。

町のと真ん中にあるし、宿泊料も高いのではないかという気がする。

しかし安全には換えられない。

金貨三十三枚も持っている。変なところに泊まることはできないだろう。

俺は宿屋の中に入った。

高級ではないがござっぱりとした感じの宿だ。

ロビーなのかレストランなのか、テーブルがいくつも置かれている。座っている人間は誰もいない。

客がいるような時間でもないのか。昼食のない世界では。

「いらっしゃい」

カウンターに向かうと、奥から声がかかった。

旅亭Lv28

旅亭というジョブがあるようだ。

出てきたのは三十代の男性、俺が着ているのと同じようなラ

フな服装をしている。

「どうやら、特別に高級なホテルということもなさそうだ。値段的にその方がありがたい。」

「長期滞在はできるか」

「迷宮に入るのかね」

「そうだ」

迷宮が見つかったから、迷宮目当てで来る客も増えるのだろう。これからがオンシーズンということになる。部屋は空いているのか。

「一人部屋がいかい、雑居部屋かい」

「一人部屋で」

雑居部屋なんかがあるのか。

江戸時代の木賃宿並みだな。

文化レベルを考えればそんなものかもしれないが。安全のためにも、他の客と相部屋というわけにはいかない。

「部屋のグレードはどうするね」

「普通のにしてくれ。高いのは困る」

「夕食はどうする。別で頼んでもいいが、含んでおくと割引になる」
「いくらだ」

「六十ナール。うちの食堂で夕食を頼むと、八十から百ナールはするぜ。まあ、安いところを探すならそれもいいが」

騎士団の食費一日四十ナールから考えると、微妙に高い。

ただ、食事の値段なんてピンからキリまであるだろうし、高い分

いいものなのだろうから、許容範囲内か。

日本から来た俺に、この世界で生きていくのにギリギリの食事が耐えられるとも思えない。

安く食べられるところを探すのも大変だ。宿に戻ってくればそこで食事を取れるというのも利便性が高いだろう。

「それじゃあ夕食つきで」

「うちは旅亭ギルドの宿屋だ。インテリジェンスカードのチェックをするけど、いいね」

「かまわない」

変な客が入り込まないようにするためのチェックか。
便利だな。

「そうか」

「ちなみに、泊まれないのは盗賊だけか」

「他に何かがある」

「いや。まあそうだが」

奴隷でも貴族でもオツケーらしい。

「ああ。亜人なら山賊、獣人なら海賊になるな。後、残忍な行為を積み重ねた盗賊は兇賊になるといふ噂だ。兇賊なんてお目にかかったことはないがな。これらも一応駄目だ」
「なるほど」

盗賊にも上級職があるのか。

「一番安い一人部屋は二百六十ナール、夕食は六十ナールで、ええつと、ステイ利用だしお客さんのことだから一泊二百二十四ナール

でいい。料金は先払い、ただし、一日分からでかまわない」

二百六十足す六十で三百二十。サンシチニジュウイチのニシチジユウシで二百二十四か。

三割引が効いている。

「分かった」

リュックサックを下ろし、巾着袋を出した。

「食事は入り口横の食堂で取ってくれ。朝食は宿泊代に含まれる。正規には日の出三十分後から。通常はもう少し早くから食べられる。夕食は夕方から、日没三十分後がラストオーダーだ。こっちは時間通り。遅れたら食べられない。遅れないようにな。食堂の明かりは日没後二時間しかつけない」

「了解だ」

銀貨四枚と銅貨四十八枚をカウンターに置く。

せこい気もするが、日数を指定できるなら、短く区切って様子を見た方がいいだろう。

銅貨の数も減らしたいし。

巾着袋を丸ごと失ってしまう危険性もあるから、一日分くらいは余計に払っておく。

旅亭の男が硬貨を数えた。

「二日分だな。受け取った。じゃあ腕を出してくれ」

「うむ」

「滔々流るる霊の意思、脈々息づく知の調べ、インテリジェンスカード、オープン」

男の前に左手を伸ばす。
宿帳に記入させるよりも合理的だ。

「よいか」

「ああ。ミチオ・カガだな」

インテリジエンスカードには漢字で加賀道夫と書いてあるはずだが、苗字が先だと分かるんだろうか。

「そうだ」

「それじゃあ部屋に案内するので、きてくれ」

男がカウンターから出てきた。

俺のリュックサックを、持ってくれたりはしないようだ。

「うむ」

男の後をついていく。

階段を二つ登った。部屋は三階にあるらしい。

「迷宮に入るなら、油や蜜蝋はうちで買い取れる。どれだけあっても困ることはあまりないからな。食材は応相談だ。多くても困るが、メニューに載せるからある程度の量は必要になる」

「そうか」

「体を拭くお湯がほしい場合は、帰ってきたときに申し出てくれ。お湯は二十ナール。夕食後に部屋まで持っていき、回収は朝に行く。カンテラを使う場合は貸し賃が十ナールだ。大体一時間分の油が入っている。油を自分で足してもいいが、火事は出さないようにしてくれよ」

「気をつけよう」

こまごまとした説明を聞いている間に到着したようだ。
男がドアの鍵を開ける。

「ここだ」

「ほっ」

部屋は、十畳くらいはありそんな縦長長方形のワンルームだった。入ってすぐ横にクローゼットと、その隣にベッド、ベッドの奥に机とイスが一つ置いてある。イスの向こう側の壁には木窓がはめられていた。

悪くない部屋だろう。

村長宅のあの部屋は何だったのか。

タダだったとはいえ。

「クローゼットの下の棚は鍵がかかるようになっていて、うちは遮蔽セメントも使っているが、貴重品を置いて出ないようにな。貴重品の管理は自分でしっかりやってくれ。昼に一度、従業員が掃除に入る。洗い物がある場合はそのときにでも係りの者と交渉してくれればいい。外に出るときには、鍵を預けてくれ。ここの部屋番号は三一一だ」

旅亭の男は鍵を見せるとクローゼットに置く。

「分かった」

「それじゃあ、いゆっくり」

男が出て行った。

ベッドに腰かけてみる。
特別柔らかくもないが、硬くもない。
悪くないベッドだ。

リュックサックを下ろして、荷物を出した。
ジャージは部屋に置いていても大丈夫だろう。村長は貴重だと言
っていたが、盗まれて困るものでもない。
安かった皮の靴も同様。

リュックサックには、お金の入った巾着袋二つと、懸賞金が入っ
ていた小袋を一つ入れる。

どっちか迷って、銅の剣もクローゼットに入れた。
剣道をやっていたので両手剣の方が動きやすいだろうが、戦うと
きにはどうせデュランダルを出すし。

普段腰にぶら下げしておくには軽いシミターの方が楽だ。

部屋の鍵も見てみる。
なにやら文字が書いてある。部屋番号だろう。
二つ並んでいるのが、一だろうか。

さて、ここでじっとしていてもしょうがない。
迷宮にでも行ってみるか。

俺は立ち上がってリュックサックを背負った。

探索者

鍵を預けて宿屋を出る。

市を冷やかした後、道なりに城門まで進んだ。

城門には、やはり門番も誰もいない。

門を出て、森の方へ進む。

迷宮があるのは森に入っただと云っていた。

畑の中を歩く。

森に入る直前、左側の木に黒い壁が出現した。

あれは何だ？

と思っていると、壁から人が出てくる。

冒険者LV19

騎士LV14

剣士LV42

探索者LV41

神官LV39

魔法使いLv40

おおつ。魔法使いだ、魔法使い。

あれが移動魔法なんだろうか。
すごいな。

使ってみたい。

この六人はパーティーだろうか。

「こちらです」

「うむ」

冒険者が言うと、騎士がうなずき、森の中へと入っていった。

偉そうだな。

騎士が一番レベル低いのに。

六人が向かった方についていくと、道から少しはずれたところに、土が盛り上がった小山があった。その山に、先ほどと同じような黒い壁が張り付いている。

あれが迷宮の入り口だろうか。

山というより、土でできたかまくらという感じ。地下からその部分だけがニョキニョキと顔を出したのだろうか。

入り口のそばに誰か一人立っている。

「どこまで進んでいる」

「まだ三階層です。出てきたばかりですから」

探索者二人が会話した。

質問したのが今来た探索者だ。

「どうしますか」

「一階層からでいいだろう」

探索者が騎士に伺い、騎士が指示を出す。

やはりあのパーティーでは騎士が一番偉いようだ。

六人は黒い壁に近づいていくと、そのまま中に消えた。

やはりあそこに入るのか。

俺も行くとするか。

キャラクター再設定と念じ、値引をゼロにして武器六をつける。

2ポイントあまっているボーナスポイントのうち1ポイントを、詠唱短縮に振った。

スキルの呪文を戦いながら唱えることは難しい。

詠唱短縮にチェックを入れると、スキルが詠唱省略に変わる。

次が詠唱時間10パーセント短縮とかじゃなくてよかった。

もう1ポイントは、クリティカル率上昇にでも入れておくか。

クリティカル率上昇にチェックを入れると、スキルがクリティカ

ル率十パーセント上昇に変わる。

こっちは次が十パーセントか。多分最大に入れて三十パーセント上昇。微妙な数値だ。

設定画面を終了した。

デュランダルを腰に差し、入り口に近づく。

なるべく無視するようにしたのが功を奏したのか、入り口そばにいた探索者は別に何も言っただけだった。

おっかなびつくり、黒い壁に入る。

ぶつかることなく中に進んだ。

一瞬だけ真っ暗な領域を通り、迷宮の中に出る。

出た場所は、小部屋風の洞窟、あるいは洞窟風の小部屋か。

四、五メートル四方はありそうな、正方形に近い小部屋だった。明るくはないが、全体がぼんやりと光っている。

小部屋からは道が延びていた。

前に一本、右に一本、左にも一本。

後ろには黒い壁がある。

そこが出入り口であり、俺が入ってきた場所だろう。

小部屋から延びる道は、どこかのトンネルのような、薄暗い空間だった。

幅は三メートルもないくらい。割と狭い。

薄暗いため、奥の方まで見通すこともできない。

前に進む道はすぐ先が十字路になっている。
結構複雑にできているようだ。

マッピングの準備もなんにもしていないが大丈夫だろうか。

というか、迷宮の中が真っ暗だったらどうするつもりだったんだ、俺。

まああの六人も特に灯りは持っていなかったしな。

魔法使いが発光魔法を使えるのかもしれないが。

マッピングに関しては、とりあえず常に壁を左側において進むことで対処しよう。

迷路を歩くとき、常に左右どちらか決まった方の壁に沿って進めば、迷うことはない。

小部屋から左側の道に入った。

左側の道は、すぐ先が二つに分岐しており、その向こうに左に折れる道もあるようだ。

壁も床も割としっかりしている。

床を踏むと、踏まれた部分がぼんやりと発光した。

これなら明かりは必要ないだろう。

ただし、魔物に見つかりやすいだけのような気もする。

少し進むと、後ろから物音がした。

振り返ると、小部屋の壁が一部黒くなっており、そこから人が出てきている。

騎士五人と探索者一人の六人パーティーだ。

六人は出入り口の黒い壁に入り消えていった。

やはりあの黒い壁が出口で間違いないようだ。

俺はジョブ設定と念じる。

迷宮に入ったことで、何か獲得したかもしれない。

探索者 L V 1

効果 体力小上昇

スキル アイテムボックス操作 パーティー編成 ダンジョンウォーク

あつた。

なるほど、探索者とは迷宮を探索する者なのか。
迷宮に入ることので獲得できるジョブなのだろう。

ジョブをいじってみるが、ファーストジョブには村人L V 3か盗賊L V 3しか設定できない。

前のときと同じだ。これはおそらく、ボーナスポイントを使い切っているからだろう。

インテリジェンスカードのことを考えれば、盗賊をファーストジョブにはしない方がいい。

インテリジェンスカードに表示されるジョブはファーストジョブが反映されるみたいだから、ファーストジョブを盗賊にするとインテリジェンスカードを確認されたときに困ったことになる。

ファーストジョブは村人L V 3のままにする。

セカンドも効果の大きい英雄L V 1のままです。

サードジョブを探索者Lv1にセットした。

スキルを唱えてみる。

「アイテムボックスそ」

全部言う前に、手元に箱のようなものが現れた。

箱、もしくは箱の入り口。横から見ると、出入り口だけで奥行きはないようだ。

これが空間魔法だろうか。

アイテムボックス操作と唱えようとしたら、途中で出てきてしまった。

呪文が頭に浮かんでくるのではなく成功したのは詠唱短縮のおかげだろう。

会話の中でアイテムボックスの話になったらどうなるのだろうか。詠唱短縮の意外な弱点を発見した。

アイテムボックスの出現を念じないから、会話の中に言葉だけ出てきても効果は発現しないのかもしれないが。

腰からシミターをはずして、入れてみる。

何事もなく奥まで入った。

手を離すと、入り口が消える。

もう一度アイテムボックスと唱えると、また箱が現れた。

箱の中にはシミターが入っている。

どうも見た感じ、シミター一本でアイテムボックスがいっぱいに

なってしまったような印象を受ける。

いろいろと試してみたいが、迷宮内で変な作業はしない方がいいだろう。

魔物から不意打ちを喰らってはことだ。

手を離してアイテムボックスを閉じ、次のスキルを試してみる。
パーティー編成、は一人しかいないから関係ない。

「ダンジョンウォーク」

唱えると、頭の中で何か入力を求められるのが分かった。
どこに行きたいかについての情報だ。

最初に入ってきた小部屋を思い浮かべる。

洞窟の右の壁が黒く変色した。

黒い壁に入り、壁を抜ける。

出たところはさっきの小部屋だ。ダンジョンの出入り口となる黒い壁もあった。

後ろにあった黒い壁は、俺が抜けるとすぐに元の壁に戻る。

なるほど。

思い起こせる場所なら、移動できるようだ。

スキルの名称的に、ダンジョン内だけだとは思うが。

いや。迷宮に入る前に森の入り口のところでも黒い壁を見た。
六人連れのパーティーが出てきた壁だ。

「ダンジョンウォーク」

森の木を思い浮かべながら、スキルを詠唱する。
目の前の壁は、黒くはなったが、入ることはできなかった。
やはりダンジョンの中でないと駄目なのか。

しかし、これで迷子になる心配はない。
マッピングも必要ないのかもしれない。

「ダンジョンウォーク」

もう一度スキルを唱え、さっきいたところに戻ることにする。
元の場所を思い浮かべながらスキルを詠唱し、目の前に現れた黒い壁に入る………ことができなかった。

また失敗？

何故。

MP不足か。

いや、違うな。黒い壁は現れた。

思うに、移動できる場所が限定されているのではないだろうか。
ここみたいな小部屋とか、または出入り口のあるところとかに。

仕方がないので、歩いて移動する。

次に試してみるのには、英雄のスキルであるオーバーホエルミン
グだ。

しかし、俺はこのスキルを戦闘時に使用するものだとなんとなく
思い込んでいたが、正しいのだろうか。

考えてみれば根拠はない。

パッシブスキルで今までずっと発動していた可能性も。

いや、ないか。詠唱呪文が必要だった。

先に進む。

迷宮の奥で何かが蠢いた。

二ドールウッド Lv1

近寄ると、茶色の体に緑の頭をつけた人型の魔物だ。
そんなに大きくないし、細い。

デュランダルでどこまで通じるか。

剣を抜いて駆け寄る。

「オーバーホエルミング」

掛け声とともに振り下ろし、左の肩口から袈裟切りにした。
茶色の体が倒れ伏す。

うむ。

一撃だ。

はたから見ると多分かつこいい、はず。

必殺技が決まった、ように見える、かもしれない。

最強の魔物をその技で屠った、と想像してみてほしい。

もちろん、一撃だったのはデュランダルのおかげだ。

何も起きなかった。

何も変わらなかった。

いや違う。

MPが足りない。

MP不足で発現しなかったのだろう。

オーバーホエルミングのスキルはレベルで習得しているのだから、英雄レベルのMPでも使えるはずだ。

スキルは覚えただけでMPが足りないので使えません、ということはない、と思いたい。

多分、ダンジョンウォークでMPを浪費しすぎたのだろう。二回失敗したのが敗因だ。

ブランチ

ニードルウッドが消えると木の枝が残った。

アイテムボックスを出して入れようとしてみるが、やはり無理のようだ。

シミター一本でいっぱいになるアイテムボックス。
なんだ、これ。

しょうがないのでブランチはリュックサックに放り込む。
十センチもないような細い木の枝だ。薪にでもなるのだろうか。
どう見ても高く売れそうにはない。

次の獲物を求めて移動した。

デュランダルのMP吸収でMPも回復しているはずだが、念のためもう二匹くらい狩っておいた方がいいだろう。

MPがどれだけあるか把握できないのは不便だ。

ニードルウッド L V 1

現れた魔物に近づく。

近づく、ニードルウッドは左の枝を振り上げ、こちらを攻撃する。かまえを見せた。

しかし俺の攻撃の方が速い。

右肩から左の脇腹にかけて、一刀の元に斬り捨てる。

ニードルウッドが煙となって消え、ブランチが残った。

リュックサックに突っ込み、先に進む。

さらに一匹を屠り、次の分岐点を左に曲がった。

前に別のパーティーがいる。

全員でニードルウッドを囲み、ぼこっていた。

しょうがないので、この分岐はまっすぐ進む。

常に左側の壁に沿って進むのはここまでになってしまったが、大丈夫だろう。

ダンジョンウォークがあれば最初の小部屋に戻る。

次の四つ角も、開き直ってまっすぐに進んだ。奥で何か蠢く。

ニードルウッド L V 1

やはり足元が微妙に光っているこちらは不利だ。
不意打ちを喰らわないように気をつけなければいけない。
魔物が視覚を頼りに動いているかどうかは知らないが。

「オーバーホエルミング」

魔物に駆け寄りながら、スキルを唱えた。

何も起こらない。

いや、違う。何かが変わった。

魔物の動きが遅くなる。

一瞬、ほんの一瞬、魔物の動きがスローモーション再生しているかのようにのろくなった。

俺はその間に魔物に近づく。

何もやりたくないというネガティブな思考が何故か浮かんでくるが、それを押さえつけた。デュランダルを振り上げる。

魔物の動きが遅かったのはいつまでだったか。

いや、俺の動きが速かったのはいつまでだったか。

デュランダルを振り下ろし、まだこちらを攻撃する態勢に入っていないニードルウッドを斬り捨てた。

魔物が煙となって消える。俺の気持ちも落ち着いた。

スキルの効果は、加速、時間延長、もしくは体感時間の緩慢化、といったところだろうか。あるいはステータスの敏捷をアップさせているだけかもしれない。

敵よりも速く動けるようになるなら、相当に使えるスキルだろう。

思考が落ち込み、また元に戻ったのはMPの関係か。

MPが残り少なくなると、気分が大きく落ち込むようだ。

スキルを唱えたときにMPをこっそりと持っていかれ、デュランダルのMP吸収でいくらか回復したのだろう。

躁鬱の波がジェットコースターのように激しく上下した。

精神的にきつい。

繰り返したらほんとに病気になりそうだ。

MPに余裕ができるまでは、あまり頻繁には使わない方がいいだろう。

気を落ち着かせ、自分の腕を見て鑑定と念じる。

加賀道夫 男 17歳

村人Lv4 英雄Lv1 探索者Lv1

装備 デュランダルの皮の鎧 サンダルブーツ

レベルが上がっていた。村人だけ。

英雄と探索者のレベルは上がっていない。

ここまでニードルウッドを四匹倒した。

必要経験値五分の一×獲得経験値五倍が生きているなら、通常の二十五倍、ニードルウッド百匹分の経験値を得ている計算になるはずだ。

結構レベルを上げるのは大変なのか。

この世界のレベルは、全般にあまり高くないような印象を受ける。ゲームと違って、何十年もかけてコツコツとレベルを上げていくのだろう。

百匹狩ってもレベルが上がらないということは、一日に一匹狩るとして、探索者は三ヶ月以上かかってもLv2にならないことになる。

さすがにもうそろそろではないだろうか。

あるいは、経験値の二十五倍が巧く働いていないか。

探索者のレベルが特別上がりにくいのか。村人がLv2からLv4になっても英雄はLv2にならないのだから、ジョブによって必要な経験値に違いはあるはずだ。

セカンドジョブ、サードジョブは傾斜配分されて入る経験値が少ないということも考えられる。

もっといえば、三つのジョブをつけることで経験値が三分の一ずつになっているのかもしれない。

ああ。攻略本がほしい。

ないものはしょうがないので、また残ったランチをリュックサックに入れる。

キャラクター再設定と念じた。

ファーストジョブの村人がレベルアップしたので、やはりボーナスポイントが1ポイントあまっている。

使い勝手が分からないクリティカル上昇をはずし、詠唱省略を入れた。

まだ四回しか攻撃していないから、クリティカル率が五パーセントだとすると、今までクリティカルが出ていなくても変ではないが、というか、全部一撃で倒しているのだから、クリティカルが出てもしようがない。

2ポイントあったボーナスポイントが0になり、詠唱省略がかすれ文字になった。

わずか3ポイントで無詠唱のスキルが獲得できるのか。
素晴らしすぎるな。

まあ、詠唱十六・六七パーセント短縮とかあっても、わけが分からないだろうが。

詠唱短縮の場合、呪文ではなくスキルの名前を唱えればいいよう
だ。

詠唱省略なら念じるだけでいいだろう。

試しに、アイテムボックスと念じると、手元に出し入れ口が現れた。

魔物部屋

また突き当たりか。

迷宮を探索していると、何度も行き止まりにぶち当たった。今度は丁字路を左に曲がったところ、その先がほんの二メートルほどで壁になっている。

どうもこの迷宮には突き当りが多いらしい。

さっきから繰り返し行き止まっていた。

さすがは迷宮か。

ひょっとして、同じところをグルグル回ってないか。と思ったが、この突き当たりは初めてだ。

二メートルほどなので、行き止まりまではつきり見える。洞窟の壁が大きく立ちはだかっていた。道と同じような洞窟の壁だ。

いや。

微妙な違和感がある。

何かずれているような。

確かめようと、突き当たりに近づいた。

薄暗い中、目を凝らす。

突然、ガラガラと音がした。

壁が崩れる。

崩れるというか、落ちた。そのまま下にスライドした。壁が下がり、道が開かれる。

壁のあった向こう側に、小部屋が現れた。

隠し部屋か。

もしかして、今までの突き当りにもあったのだろうか。気づかなかった。全部回りなおすか。

小部屋の中には先客がいた。

騎士が六人。

四人は座り込み、二人は大の字に寝ている。

座っている中に、懸賞金を投げてよこした美人騎士がいた。俺が中に入っていくとちらりとこちらを見るが、すぐに興味なさそうに視線を戻す。

座っていた男が一人、こっちに近づいてきた。騎士団の建物にいた見習い騎士だ。

町の騎士団の面々なのか。

「ここは大丈夫みたいですよ」
「そうか」

何が大丈夫なのか。

「一人ですか」
「そうだ」

見れば分かるだろう。

こんな見習い騎士じゃなくて、美人騎士と話したかった。美人にはどこまでも縁がないということか。

「こんな迷宮じゃあ金も稼げないでしょうに、大変ですね」
「そうだな」

「二階層に降りるなら、入り口から右側らしいですよ」

そうか。

とばかり返すのも悪いので、話題を振ってみる。

「ここはニードルウッドばかりだな」

「一階層ですからね」

あれ。

何かおかしなことを言っただみみたいだ。

これ以上ぼろを出す前に、立ち去ることにする。

「うむ。邪魔して悪かったな」

「いえいえ。気をつけて」

入ってきた場所から小部屋の外に出た。

前に立つと扉が開き、通りすぎると閉じられる。

自動ドアみたいな感じだ。

突き当たりにも見えても、こうなっている場合もあるのか。今まで見た突き当たりも、もう一度試してみるか。

道を戻りながら、見習い騎士との会話のことを考える。

大丈夫だと言っていたのは、きっとあの小部屋には魔物が出ないという意味なんだろう。寝転がっていたし。

後、この迷宮では金は稼げないと。

二階層に行くには、最初の小部屋を右か。

突き当りをチェックした。

一つめは何もない。

二つめは、壁がスライドして小部屋が現れた。

やっぱりこうなっている可能性があるのか。

などと考えながら、部屋の中に足を踏み入れようとする……。

いた。

茶色い体に緑の頭。

右足を踏み込み、右上から袈裟切りにする。

いや、一匹だけではない。

ひしめいている。

ニードルウッドの茂み、というか林、というか森だ。

右から来る一撃を、右手右足を引くことでかわした。

右肘を上げ、左から来る攻撃をデュランダルで受ける。剣を返し、脳天からまき割りにした。

ダンジョンウォーク、と念じてみるが、黒い壁は現れない。

そんなことだろうとは思った。

多分、エンカウントしている間は駄目なのだろう。

敵が一匹のときに試しておけよ、というのは正論だが、いまさら遅い。

敵は十数匹、いや数十匹か。とにかくすぐたくさん。

俺は小部屋の入り口に陣取っているので、囲まれていないのが幸いだ。

逃げるか。

無理だろう。

どのみち追いつかれるなら、ここで戦った方がましだ。

右にいたニードルウッドを斬り捨てる。

その隙を突いて、左にいたニードルウッドから攻撃を受けてしまった。

左肩に痛みが走る。

小部屋の入り口は結構広く開いていた。

俺一人でいつまでも塞ぐのは無理だろう。

後ろに回られてしまったら、三百六十度全方位から攻撃を受けることになる。

せめて壁を背中にするか。

左側の魔物は無視して、右に移動する。

オーバーホエルミングと念じた。

動きたくねえなあ、と湧き上がる思いを抑えつけ、左足を踏み込んで右手前のニードルウッドにデュランダルを叩き込む。続いて、右足を前に出しながら斬り上げ、その奥の魔物をなぎ払おう、としたところで時間遅延の効果が切れた。

そのままスイングして奥の魔物を倒す。

もう一步移動して、右にいたニードルウッドに痛撃を浴びせた。

これで小部屋の中に移動したことになる。

壁を背にすれば、攻撃を受ける範囲は百八十度だ。

部屋の四隅にまで移動できれば攻撃される範囲を九十度に狭められるが、今はそこまで移動するのは無理だろう。

俺が急に移動したことで一瞬だけ左側にいた魔物の動きが鈍る。

その隙に、手前にいたニードルウッドを伐り倒した。

魔物がすぐにスペースを詰めてくる。

足を引き、壁を背にしてデュランダルをかまえなおした。

左から振り下ろされた枝を剣で防ぐ。

と、あいた右肩に右から打撃が加えられた。

ぐっ。

手首を返して、右のニードルウッドをなで斬りにする。

と、あいた左肩に。

ぐわっ。

左の魔物を袈裟がけにする。

と、右の脇腹に。

いってえ。

攻撃を受けてしまった。

一対一でない以上、しょうがない。

デュランダルをスイングして、右にいたニードルウッドを上下に切断する。

俺にはデュランダルがある。

デュランダルで吸収するHPが攻撃を浴びて失うHPよりも少なくなければ、問題ない。

今のところどっちが多いのか。大体の感覚でしか分からないのが難点だ。

デュランダルにはMP吸収もある。

俺はオーバーホエルミングと念じた。

何もしたくないという気持ちを抑えつけ、手前に迫ってきていた魔物を二匹屠る。

効果が切れると、速やかに壁に戻った。

後ろに回りこまれてはたまらない。

振り払われた木の枝を体を引いて避け、右にいたニードルウッドを斬る。

できれば、もっと右に流れて、部屋の角にまで移動したい。

オーバーホエルミングで消費したMPをデュランダルで吸収するのに、ニードルウッド数匹では足りないようだ。

負の感情をなるべく抑えるには、MPが満杯になってから使った方がいい。

かといって出し惜しみしていたらギリ貧に追い込まれるおそれもある。

感覚的にMPが十分になったら、積極的に使った方がいいだろう。躁鬱のエレベーターは嫌だが、そんなことを言っている場合ではない。

左からかけられた攻撃をデュランダルで受け、枝ごとニードルウッドをなぎ倒す。

と、あいた右肩に打撃を浴びた。

一進一退の攻防が再び始まる。

感覚的には、攻撃を浴びて失ったHPはデュランダルによるHP吸収で十分にカバーできているようだ。

とはいえ安心はできない。

数発も連続して攻撃されたら、たちまち瀕死に追い込まれるだろう。

今は危ういバランスを保っているにすぎない。

自分の死を意識する。

異世界とはいえ、ここは現実だ。

ここで魔物に倒されることは絶対の死を意味するだろう。

うむ。

死が身近にある。あまりにも身近にあった。

恐ろしいが、おびえるほどではない。

震えがくることはないが、かといって笑い飛ばすほどでもない。

あるいは戦闘中だからだろうか。

俺は、感じた死の印象だけを、冷徹に見つめていた。

ニードルウッドを切り裂き、はいつくばらせる。

横から攻撃を浴び、叩かれる。

魔物との攻防は一進一退だ。

振ってくる枝を避け、お返しにデュランダルを叩き込んだ。

なるべく右の魔物を蹴散らすようにしながら、部屋の隅を指す。いつの間にか、部屋の右隅と俺との間にいるニードルウッドが二匹に減っていた。

ここはチャンスだ。

俺はホーバーホエルミングと念じた。

まず邪魔な手前の一匹を屠り、続いて右の一匹を斬り飛ばす。その時点で効果が切れるが、デュランダルを上段に振り上げ、残った右のニードルウッドの頭上から斬り下ろした。

ようやく俺の動きに追いついてきた魔物の攻撃を避けながら、隅に陣取る。

これで攻撃を受ける角度は九十度。

デュランダルを正眼にかまえ、魔物を見据えた。

敵が数を減らしている。

落ちて見渡したことで、初めて気がついた。

冷徹に死を見つめているように感じたが、全然冷静ではなかったらしい。

残りはあと数匹だ。

無理に隅を確保する必要はなかったか。

もっと落ちて見渡して、敵の状態を常に把握しておくべきだった。

手に汗もかいているようだ。

気をつけなければ。デュランダルがすっぱ抜けたら、多分そこで終わる。

右の手と左の手を順番に離し、ズボンで汗をぬぐった。

その間に何度か攻撃を浴びてしまいが、やむをえない。

デュランダルを握り締め、右に駆ける。

一番右側にいたニードルウッドに抜き胴を喰らわせた。

この残り数なら、激しく動いても大丈夫だろう。

前に進みながら右に振り上げたデュランダルを揺り戻し、後ろの魔物を袈裟切りにする。

左から突き出された枝を払い、あいた肩口にデュランダルを振り下ろした。

続いて右のニードルウッドに斬りかかる。避けられたところをもう一步踏み込んで斬り上げた。

正面の魔物と打ち合う。

枝を払ったところで、左からニードルウッドが打ち込んできた。

一度身を引き、かわす。

すれ違いざま胴をなぎ払った。

デュランダルを上段にかまえ、正面のニードルウッドの頭上から落とす。

残り一匹。

魔物に逃げるつもりはないようだ。

打ち込んできた枝を小さく払い、反動でデュランダルを持ち上げると、左足を大きく踏み込んでニードルウッドの肩口から剣を振り下ろした。

「ふう……」

音を出して空気を吹き出す。

最後に倒した魔物も煙となって消えた。
深呼吸して息を整える。

小部屋を見渡した。

大きさは四、五メートル四方ほど。出入り口のある小部屋と同じくらいだ。

魔物が残したブランチがいくつも転がっていた。
ブランチの他にも何かある。

リーフ

ただの木の葉っぱだ。

三枚ある。

葉っぱの方がレアドロップなのか。

他のものはない。

部屋の中に宝箱があるとか伝説の剣があるとかいうわけではない
ようだった。

散らかったブランチをリュックサックに入れながらも一度確認
するが、やはり何もない。

魔物がいるだけの部屋だったのだろうか。
思わせぶりな。

デュランダルがなければ確実に殺されていた。

迷宮は思ったよりも恐ろしいところだ。

さっきの騎士六人のパーティーとか、この部屋に対応できるのだ
ろうか。

しかも、部屋の中に何かあるわけでもない。
木の枝と葉っぱとか。あまり金にはならなそうな。

見習い騎士が金を稼げないといったのはこのせいか。
二階層に行けば、他の魔物もいるみたいだが。

ブランチをすべて集め、小部屋を見渡して何もなかったことを確認すると、腕を見て鑑定と念じた。

加賀道夫 男 17歳

村人Lv6 英雄Lv3 探索者Lv4

装備 デュランダル 皮の鎧 サンドルブーツ

一気にレベルが上がっている。

探索者にいたっては三つアップだ。

最後の方にオーバーホエリングを使ったとき、気持ちがあまり落ち込まなかったように感じたのはレベルが上がったからだろうか。回復したという実感がないので、レベルアップ時にHPやMPが回復しているという事はなさそうだ。

HPとMPはデュランダルで回復しているだろう。
もう少し迷宮を歩いてみるか。

いや。まだはもうなりだ。

まだいけると考えるのは、もう駄目なときだろう。

疲労が残っているはずだ。
デュランダルでは精神的な疲れまでは取りきれないに違いない。

俺は宿に帰ることにした。

ダンジョンウォークと念じて、出入り口のある小部屋を思い浮かべ、現れた黒い壁に突入する。

最初の小部屋に出た。奥にある黒い壁に入る。

一瞬の間真っ暗な領域を通って、迷宮の外に出た。

日が傾きかけている。

ほんの一時間くらいだと思ったが、感じたよりも長い時間、ダンジョンにこもっていたらしい。

ずっと気を張っていたからだろう。

あまり長時間になりすぎないように注意した方がいい。

やはり、まだはもうなりだ。

キャラクター再設定を呼び出し、デュランダルを消して三十パーセント値引を取得した。

ポイントが2ポイントあまっている。

村人がLv6になったからな。

何をつけるべきか。

考えるのは宿に戻ってからにしよう。

アイテムボックスと念じて、シミターを取り出す。

あれ？

シミターを入れた箱の左右に、何か入れられそうなスペースがあ

るような。

こんなだっただろうか。

まあこれも宿に戻ってからだ。

シミターを腰に差し、ベイルの町に戻った。

初めての薬

ベイルの町を歩いた。

夕方近くになって、市も終わりかけらしい。店じまいをしている露店も結構ある。

ほどなくしてベイル亭に到着する。

中に、旅亭Lv28の男がいた。

「よう、お帰り」

どうもあまり高級旅館という雰囲気はない。

「鍵を」

「あいよ」

三三一の鍵をよこす。

「夕食はもういいか」

「ああ。食堂の入り口でメニューを選んでくれ」

「夕食が済んだら、お湯を頼む」

「二十ナールだ」

あれ？

三割引きは？

仕方ないので、リュックサックを下ろして銅貨二十枚を取り出した。

「ちなみに、これは薪にでもならんか」

キャラクター再設定で三十パーセント値引を買取価格三十パーセント上昇につけ替え、リュックサックからランチを取り出して男に見せる。

「それはランチじゃないのか」

「そうだ」

「うちじゃあ火力が強すぎるな。それは鍛冶師なんかが使うものだ。鍛冶師は直接取引きするのを面倒がるから、ギルドにでも売るんだな」

「ふむ」

ギルドに売るしかないらしい。

「この迷宮は一階層がランチを残すニードルウッドらしいな」

「そうだな」

「で、二階層がグリーンキャタピラー、三階層がコボルトとか。こ愁傷様つてとこだな」

迷宮ではニードルウッドしか見ていない。

階層によって出てくる魔物が違うのだろう。

「この迷宮と言ったから、迷宮によって出てくる魔物は異なるよ
うだ。」

「口ぶりからして、いい魔物の組み合わせではないらしい。」

「まあしょうがないさ」

「確かに、浅い階層はな。そういうところを見ると、あんた相当強

そうだね」

浅い階層はしょうがない。

深い階層に潜れる自信がある。

強い。

ということか。

話をごまかそう。

「行けるところまで行くつもりだ。ところで、この町の冒険者ギルドはどこにある」

「四軒左だ」

男が指差した。

それらしい建物があっただろうか。

「ふむ。行ってきた方がいいか」

「買取だけならすぐ済むから行ってきなよ」

「分かった。ではこれを頼む」

渡してもらった鍵を再び預け、ベイル亭を出た。

四軒左と。

冒険者ギルドの建物に入る。

中は探索者ギルドよりも一回り大きかった。ちよつと大きな郵便局、といったところか。

人が五、六人ほどいる。

奥にカウンターがある構成は探索者ギルドと同じだ。

「買取を頼む」

カウンターの前に立った。

なにせよ、一度ギルドでの買取を経験しておこう。

奥にいるのは、お姉さんというには微妙な年齢のアラサーの村人だ。

顔はそれなりか。

ロクサーヌと比べなければ。

「こちらにお載せください」

女性が大きなトレーを差し出した。

「これを」

リュックサックからアイテムを出して載せる。

ブランチは全部で三十三本だった。

あとはリーフが三枚。

「冒険者ギルドには加入しておられませんよね」

女性が確認してくる。

「加入してないが」

「リーフは毒消し丸の原材料です。冒険者ギルドに加入していれば、リーフを売却したときに同数の毒消し丸を半額で購入する権利が与えられます。毒消し丸は冒険者の必需品ですから」

待て。

毒消し丸があるということは、もちろん毒があるということだろう。毒がなければ毒消しは必要ない。

その毒消し丸が冒険者の必需品ということは、冒険者は毒に冒される危険と常に隣りあわせということだ。

ひょっとして、何も持たずにダンジョンに入ったのは無謀だったんじゃないだろうか。

「毒消し丸が買えるか」

「ギルドに加入していなければ、正価になりますが」

「いくらだ」

「百ナールです」

「ふむ」

高いような高くはないような。

「リーフを食べることで毒は消せます。リーフの買取価格は八ナールとなっております」

逆ザヤになるじゃないか。

それをわざわざ教えてくれる冒険者ギルドのお姉さんは親切だ。

「分かった。リーフを買取に出すのはやめておこう」

「はい。では少々お待ちください」

リーフをしまうと、女性はランチの載ったトレーを持ってギルドの奥に引っ込んだ。

手持ち無沙汰になったのでギルド内を見回す。

左側の壁が突如として黒くなった。

黒い壁ができて、中から人が出てくる。

あれは、ダンジョンウォーク？

迷宮内じゃなくても使えるのだろうか。

壁から出てきたのは冒険者が二人。探索者はいない。

「ターヘラの町、片道の人はいませんか」

出てきた冒険者が告げた。

誰も反応しないのを見ると、なにやら唱え、また黒い壁を出して、その中に消えていく。

ダンジョンウォークじゃなくて、フィールドウォークと唱えたよ
うな。

違うスキルなのか。

そういえば、迷宮入り口近くの木にも黒い壁が現れた。六人の人
が出てきた壁だ。

探索者にダンジョンウォークがあるように、冒険者にはフィール
ドウォークがあるのだろう。

ダンジョンウォークで迷宮内を移動できるなら、フィールドウォ
ークでは他の町と行き来することが可能なのではないだろうか。

おそらく、あの二人はターヘラの町へ行ったのだ。

ここには何のためにきたのだろうか。

と思っていたら、また黒い壁が現れて、人が出てきた。

今度は六人だ。さっきの冒険者の片割れもいる。

六人はギルドの外に出て行く。

うーん。

何がしたかったのか、よく分からん。

「お待たせしました。こちらになります」

頭をひねっていると、女性が戻ってきた。

皿の上には銀貨が六枚と銅貨が何枚か載っている。銅貨を数えると四十三枚あった。

六百四十三ナールか。

ただの木の枝にしては悪くないような気もするが、高くはない。

いずれにしても、一日に金貨一枚は夢のまた夢というところだろう。

もっと長時間こもるか、ダンジョンの深い階層に行ければ、違つかもしれないが。

買取価格三十パーセント上昇をはずし、三十パーセント値引につけ替える。

めんどくさい。

「毒消し丸以外に、ここで売っている薬があるか」

「消毒薬以外では、各種の傷薬、疲労回復薬、柔化薬、抗麻痺薬、万能薬などを扱っております」

察するに、傷薬はHP回復、疲労回復薬はMPを回復する薬だろう。

「柔化薬と抗麻痺薬はいくらになる」

「柔化丸、抗麻痺丸がともに百ナールです」

値段は毒消し薬と一緒にか。

「うむ。では、柔化丸、抗麻痺丸を二つずつくれ」

とりあえず、二つずつ買っておくことにする。

どれだけ使うか分からない。大量に買い込むこともないだろう。

「かしこまりました」

女性は一度席を立ち、すぐに戻ってきた。

白い丸薬を二個と黄色い丸薬を二個、カウンターに置く。

柔化丸

抗麻痺丸

「うむ」

「白いのが柔化丸、黄色い方が抗麻痺丸になります」

色で分けてあるのか。

俺は鑑定が使えるから間違えることはない。

銀貨四枚をカウンターに出す。

抗麻痺丸は、名前のとおり体が麻痺したときの薬だろう。

柔化丸はなんだ。

身体が堅くなったときの薬。石化魔法でも存在するのだろうか。

女性は、一、二、三、四と数えながら、銀貨を一枚自分の方に引き交互に丸薬を俺の方へと差し出した。

せっかく用意したのに、三割引は使えないようだ。

何も入っていない小袋に丸薬とリーフを入れ、リュックサックにしまう。

「ちなみに、冒険者ギルドに入るにはどうすればいい」

「冒険者になるのは比較的条件が単純です。探索者Lv50以上であること、探索者ギルドや他のギルドに加入していないことです。加入したいのであれば、係りのところへ案内しますが」

「いや。そういうわけではない」

あわてて否定すると、リュックサックを背負い、冒険者ギルドを出た。

冒険者は探索者の上級職、ジョブ獲得条件が探索者Lv50というところか。

ギルドへの加入が条件に影響するかどうかは分からない。

探索者ギルドと冒険者ギルドは仲が悪いと言っていた。

それはそうだろう。

探索者ギルドからすれば、冒険者は探索者を踏み台にしていることになる。

よくいえば、探索者は冒険者の卵、見方を変えれば、探索者は冒険者になれなかった残りかすだ。

俺自身がどこかのギルドに入るとは、慎重になった方がいい。

宿屋に戻り、鍵を受け取った。
すぐ横の食堂に入る。

食堂の入り口におかれたテーブルに、食事が四つ置かれていた。

「夕食はここからお選びいただけます」

LV28の男とは別の、旅亭の女性が手を広げて案内する。

彼女が食堂の担当だろうか。

なるほどね。

メニューではなくて、実物を選ばせるのか。

メニューを読めない者がそれだけ多いのだろう。

もっとも、テーブルにはなにやら一文字書いてある。

どこかで見たと、というか、現在手に持っている鍵に書いてあるのと同じ文字だ。

鍵に書いてあるのは、多分部屋番号の三一一だろう。

右上のこの料理が一ということになる。

「これを」

「かしこまりました。お飲み物は何にしましょうか」

ガン。

「一ですね、と復唱してくれるのを期待したが、スルーされた。思惑がはずれた。」

「飲み物は何が」

「ビールか、ワインか、ハーブティー。スライム酒などは別料金となります」

「ハーブティーで」

「かしこまりました。あいている席に座ってお待ちください」

日本にいるときに少しだけ酒を飲んだことはあるが、限界量が分からないので、ここで飲むのはやめておいた方がいいだろう。

リュックサックには金貨三十三枚がある。

席に着くと、料理はすぐにやってきた。

パンと、カップに入ったスープ、野菜を煮込んだシチュー、肉を焼いたもの。

量は結構ある。一日二食だからだろう。

パンは柔らかくて、スープとシチューも美味しい。

肉は牛肉っぽく、こちらもまずまずだ。割とコシヨウが利いている。

コシヨウなんて高いんじゃないのか、という気がするが、勝手な思い込みか。

これなら日本でも金が取れる。

結構レベル高い。

少し高かったが、夕食つきにして正解だ。

食事を堪能し、部屋に戻った。

日が傾いている。

木窓からこぼれる光で部屋の中が赤い。

入ってすぐ、ドアがノックされた。

「どうぞ」

「失礼します。お湯を持ってきました」

初めて見る男がたらいに入った湯を持ってくる。

男は、たらいを床に置き、タオルをたらいにかけて、すぐに出て行った。

チップはいらないらしい。

服を脱いで、体をぬぐう。

この世界にお風呂はないようだ。

あっても、金持ち用の贅沢品なのだろう。

このお湯だって二十ナールだから、安くはない気がする。

しかし汗をかいたままというのも気持ちが悪い。

体を拭いた後、はいていたトランクスを洗った。

俺が持っている唯一の下着だ。

この世界の下着がどんなものか知らないが、市が立っている今日、予備を買っておくべきではなかったらうか。

しまった。

石鹸や洗剤があるなら、それも買っておきたかった。

お湯に付属でつけられていないところをみると、ないのかもしれないが。

後は歯ブラシと歯磨き粉か。

これもあるかどうかは分らん。

あるのなら靴下も買いたい。

次には買えるのは五日後か。
不便だな。

コンビニがほしい。

買い物リストの次は、アイテムボックスについて考えよう。
アイテムボックスと念じた。

まずはシミターを入れてみる。やはり左右に何か入りそうだ。

リュックサックを押しつけてみるが入らない。

大きさに駄目なのかと思って巾着袋を入れてみるが、これも駄目だった。

リュックサックや巾着袋はアイテムではないから駄目なのか。

小袋からリーフを取り出し、シミターの左に入れる。

二枚とも入った。

柔化丸や抗麻痺丸は入らない。

リーフが入ったスペースを右に移動させると、左のスペースに柔化丸が二つ入った。

抗麻痺丸は入らなかったが、さらにその左のスペースには二つ入る。

抗麻痺丸が入ったスペースの左は、一周してシミターの入ったスペースだ。

抗麻痺丸と柔化丸、リーフを取り出す。

硬貨は入らないだろうか。

銀貨

おっと。鑑定できた。

硬貨を鑑定するなんていうことは思いつかなかった。

これで贋金をつかまされるおそれは無くなったわけか。いちいち鑑定するのも面倒だから分らないが。

銀貨は四枚まで収納できた。
隣のスペースにも四枚入る。

銅貨は入らない。

混ぜることはもちろん、単独でも入らないし、鑑定もできなかった。

銅貨はアイテムではないようだ。

金貨を取り出す。

鑑定もできるし、四枚まで入る。

金貨と銀貨を混ぜることはできないようだ。

金貨が四枚か、銀貨が四枚。

シミターを取り出すと、そこにも金貨が四枚入った。

なるほど。四種類のを、四つずつ。

探索者Lv4だからだろう。

探索者Lv1のときにはシミター一本でいっぱいになった。

金貨と銀貨を取り出し、アイテムボックスに、リーフ二枚、柔化丸と抗麻痺丸を二個ずつ入れる。

薬は、リュックサックに入れるよりも、いざというときのためにアイテムボックスに入れておいた方がいいだろう。

続いて考えるのはジョブだ。

詠唱省略は相当に有用なスキルだと考えていいだろう。

詠唱省略を獲得するのに必要なボーナスポイントは3だ。

ファーストジョブがLv4以上であれば、他のものを削らなくても詠唱省略をつけることができる。

現在、探索者がLv4である。

村人Lv6と替えるべきだろうか。

探索者にするメリットは、村人はずして効果の大きなジョブをつけることができることだ。

アイテムボックスやダンジョンウォークのことを考えれば、探索者はずすことは考えられない。

村人にするメリットは、すでにレベルが高いことだ。

村人Lv8まで育てれば、詠唱省略に加えてフォースジョブをつけることができる。

セカンドジョブに必要なボーナスポイントが1、サードジョブに必要なボーナスポイントが2だったから、フォースジョブに必要なボーナスポイントは倍の4だ。

あるいはLv6のままでも詠唱短縮で我慢すればフォースジョブをつけられる。

村人の方が探索者よりも成長が早い可能性もある。

ボーナスポイントが16ポイントあまれば、必要経験値十分の
一か獲得経験値十倍をつけられる。

成長の早いジョブをファーストジョブに置いておくことは長期的
に結構な利点となるだろう。

とはいえ、16ポイントは遠い。

経験値が四分の一に分散されるおそれがあるので、フォースジョ
ブもどれだけ有益かは分からない。

ファーストジョブは探索者にしよう。

ジョブ設定と念じた。

戦士 LV1

効果 体力小上昇 HP微上昇

スキル ラッシュ

剣士 LV1

効果 腕力小上昇 HP微上昇

スキル スラッシュ

商人 LV1

効果 知力小上昇 精神微上昇

スキル カルク

薬草採取士 LV1

効果 知力小上昇
スキル 生薬生成

ジョブが一気に四つも増えている。
何故こんなに。

多分ありがちなのは、村人Lv5あたりがジョブの獲得条件にな
っていたことだろう。

上昇効果が二つある戦士、剣士、商人あたりはくさい。

薬草採取士は、単純に薬草を採取したからか。
薬草ではないが、リーフを拾った。

うーん。

村人Lv10や村人Lv20で獲得できるジョブがあるかもしれ
ない。

このまま村人をつけた方がいいのだろうか。

しかし、村人Lv99で獲得できるジョブなんかがあったら大変
だ。先は長い。

まあそのときはそのときだろう。

ファーストジョブを探索者Lv4につけ替える。

セカンドは英雄Lv3のままで、サードジョブを商人にした。
スキルを試してみたいので。

戦士のラッシュと剣士のスラッシュは、名前からいっても職業か
らいっても、攻撃時に使用するスキルだろう。

商人の方はどうか。

カルク、と念じてみるが、何も起こらない。何も変わらない。何かできるわけでもないようだ。

二二四×三六五とか計算したかったのに。

と思ったら、八一七六〇という数字が頭に浮かんできた。

これが二二四×三六五の答えだろうか。

カルクはパツシブスキルなのか。

一日二百二十四ナールの三百六十五日で、かけることの六十年として。

四九〇五六〇〇。

金貨五百枚あれば、俺はおよそ死ぬまでこの宿屋に厄介になれる。あってるのかな。

百×百は一〇〇〇〇。まあそうだ。

百万×百万は一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

……うん、俺が悪かった。正解がどうか分からん。

商人をはずして、薬草採取士をつける。

使用するのスキル生薬生成だ。

使う対象はリーフ。

日も暮れたのか暗くなってきているが、アイテムボックスからリーフを取り出す。

リーフを一枚手に取って生薬生成と念じると……。毒消し丸が十個生成された。

ボス

目覚めたときはまだ真つ暗だった。

昨夜は非常に早く寝た。

多分、七時すぎくらいには寝たのではないだろうか。

そもそも村長宅で起きたのが早かったし、一日中あれこれ活動していたので、疲れたのだろう。

夜になって暗くなれば、この世界では何もやることがない。

ゲーム機も、テレビも、パソコンも、ネットも、マンガも、本もない。

本当なら、どこかの酒場にでも情報収集に行くべきかもしれないが。

まず第一に億劫だ。

いじめられっ子なめるんじゃねえ。

他人と円滑にコミュニケーションが取れるならいじめられてないだろう。

第二に、金貨三十三枚をもって危険なところをうろつくのはやめた方がいい。

金貨が五百枚あればこの宿屋で一生暮らせるのだ。

金貨五百枚の価値が一億円だと仮定すると金貨三十三枚で六百六十万円。二億円なら千三百二十万円だ。

安全な日本でだって、そんな大金を持って飲みに行くやつは少ないだろう。

第三に、俺が許容できる酒の量が分からない。

酒場で情報収集するならこっちも飲む必要があるだろう。

相手より先に酔ったのでは情報収集にならないし、荷物も危険だ。酔って地球のこともベラベラとしゃべりだしたら、目も当てられない。

はたして俺の酒量はどのくらいか。

アルコールが地球と同じものだとは限らないし、この世界に来たことで俺の体質が変わった可能性もある。手の甲からインテリジェンスカードも出てきたことだし。

第四に、そもそも今の俺に必要なのは金儲けに関する情報だ。

それ以外の情報、この世界の一般常識なんかは、いずれロクサー
。 又から聞けばいい（ロクサー又はもちろん手に入れるつもりである）。

262

酒場なんかには儲け話が転がっているのかどうか。

あつたとしたら、とてつもなくやばい話か、誰かを騙すための甘い罠である可能性が高いのではないだろうか。

この世界の常識を知らない俺のような人間はいいカモでしかないだろう。それも金貨三十三枚をしょった。

結局、情報収集に行くことはかえって危険を招きかねない。

おとなしく寝ていた方がずっとマシだ。

俺はシミターを抱き枕にして眠った。

日本刀を抱いて寝る剣豪の話とかあつたような気がする。
どこまで安全か分からないし。

起きた気分は爽快だった。
それでも周囲は真っ暗だ。

七時から八時間寝たとしても、まだ午前二時である。

部屋にはトイレがないので、トイレに行き、ついでにロビーにも下りてみる。

階段と廊下にはところどころにカンテラが置かれ、明るくはないが歩けるほどにはぼんやりと周囲を照らしていた。

「迷宮へ出かけるのか」

ロビーに下りると、後ろから声をかけられる。

「おっ……おっ」

びっくりした。心臓が止まるかと思うくらいに。

振り返ると、フロントに旅亭Lv28の男が立っていた。

「気をつけてな」

「夜中に出かけてもかまわないのか」

「当然だ。夜中に迷宮に入るやつは多い。こここの迷宮ではそうでもないだろうが、昼間はどうしたって混むからな」

なるほど。

どうせ迷宮の中ならば昼も夜もないか。

迷宮には夜入る人も多い。その迷宮に入る人を客とする宿屋も、夜でも出入り自由というわけだろう。

「そつちは夜中まで大変だな」

「俺たちはエマーロ族だ。エマーロ族ってのは特殊でな。眠りが少ない。いや、眠りが少ないというか何というか、他の種族の者に説明するのにいつも困るんだが、半分ずつ眠れるんだ」

「半分ずつって、右と左でか」

生物の時間に習った。

確かイルカは、右脳と左脳が交替で睡眠をとるのだ。両方同時に寝ると溺れるらしい。

「分かるのか？」

「いやまあ、分かるというか何というか」

「人間の者に分かってもらえたのは初めてだ」

旅亭の男が喜んでいる。

右脳と左脳があることを知っている人間はこの世界では少ないだろうしな。

エマーロ族は海で進化したのかもしれない。

ってゆうか、人魚？

「足は二本足だったが。」

「そうか」

「エマーロ族の者は定住を嫌う。だから、ほとんどの者が種族の固有ジョブである旅亭となって、ギルドの経営する宿で働くんだ。俺たちには合っている仕事さ。あちこち転勤できるしな」

「なるほど」

海で進化したのなら、定住という習慣にはなじめないかもしれない。

俺は旅亭の男に部屋の鍵を渡した。

トイレに行くときに鍵はかけてあるし、リュックサックも背負っている。

何もすることがないなら、迷宮に行くのは悪くないだろう。

「カンテラは必要ないのか」

「大丈夫だ」

と格好をつけて外に出た。

……。

いやいや。

真っ暗だから。

一メートル先さえ見えない。

ほとんど完全な闇。

この世界には月がないのか、出ていないだけなのか。

上を見上げると、満天の星明りだ。

星の光では足元を照らすには弱い。

東京育ちの俺に、この夜の暗さは衝撃だ。

今からでもカンテラを借りてくるか。

しかし、この暗闇だと、明かりがあっても迷宮まで行くのは怖い。

出そうだな。幽霊とか。

別に幽霊の存在を信じてはいないが、異世界があるのなら、幽霊がいても不思議ではない。

ではどうするか。
冒険者ジョブを獲得していない俺にはフィールドウォークは使えない。

しかし、ボーナス呪文の中にワープがあった。
名称的に、移動魔法なのは間違いないだろう。

メテオクラッシュはMP不足で使えなかったが、ワープはどうだろうか。

攻撃魔法っぽいメテオクラッシュと違い移動魔法だからMP消費が少ないだろうこと、英雄Lv3まで成長したこと、よく眠ったのでMPが全快しているだろうこと、から、使えるのではないかと見た。

キャラクター再設定と念じ、値引を消してデュランダルをつける。そして今は使わないジョブ設定を消し、ボーナス呪文のワープにチエックを入れた。

ベイル亭の壁がある方を向き、ワープと念じて、迷宮の出入り口がある小部屋を思い浮かべる。

手を伸ばしてみると、壁があるはずのところは何もなく、手は奥へと入っていった。

成功だ。

成功したのはいいが、気分がどんよりと落ち込んだ。

成功したという喜びではなく、成功してしまったという悲しみが浮かんでくる。

小部屋に抜けるが、なんでこんなところに来てしまったのか、と

しか思えない。

道が三本延びている、迷宮出入口のある小部屋だ。

小部屋は夜でもぼんやりと明るかった。

真っ暗でもよかったのに。

ワープなんて二度と使いたくない。

オーバーホエルミングよりもMP消費がでかいだろう。

さすがはボーナス呪文か。

きつつい。

この状態を脱するには、デュランダルのMP吸収を使うしかない。

戦いたくないという気持ちを抑え、道へと足を踏み出す。

本当は二階層へ下りるためには右へ進まないといけなかったはずだが、まっすぐに進んだ。

二階層になんか下りたくない。進みたくもない。

ようやく、前にニードルウッドが現れた。

逃げ出したくなる気持ちを抑え、デュランダルを振る。

戦う前には絶対に勝てねえと思ったが、終わってみればもちろん一撃だ。

煙が消え、ブランチが残った。

「ああ……きつ」

やっとのことで人心地つく。

大きく息をはいた。

きつかった。やばかった。

MPを大量に消費するのは本当にきつい。

できれば二度となりたくない。

加賀道夫 男 17歳

探索者Lv4 英雄Lv3 戦士Lv1

装備 デュランダル 皮の鎧 サンドルブーツ

とりあえずもう一匹狩ってから、自分を鑑定した。

ジョブ設定をはずしても、設定してあったジョブはそのまま生きている。

サードジョブを戦士にしているのは、育てれば賞金稼ぎのジョブが手に入るらしいからだ。

さらに二匹狩った後、戦士のスキル、ラッシュも使ってみる。

何が起きたのかはよく分からなかったが、デュランダルが心持ち深く喰い込んだような気がした。

やはり攻撃スキルなんだろう。

デュランダルでは魔物を倒すのにどのみち一撃なので、使い勝手が分からなかったが。

この迷宮で魔物に出会うのは、十分は間隔を置かないという感じだ。

この世界の迷宮がそうなのか、この迷宮がそうなのか、この階層のこの部分がそうなのかは分からない。

村近くの森でスローラビットを狩っていたときよりかは、断然速い。

速いが、次から次に魔物が出てくるという感じでもなかった。

午前三時くらいに迷宮に入ったのだとすれば、日の出までは三時間くらいか。

十分に一度魔物に出会うとして、百八十分で十八匹狩れる。実際にはもう少し多いだろう。

というわけで、リーフが二枚出るまで狩りを行った後、俺は迷宮を出た。

ワープは使いたくなかったので、ダンジョンウォークで外に出て、歩いて帰る。

日がちようど昇ったところで、時間的にはばっちりだった。

宿屋に帰って朝食を取り、部屋に入る。

昨日の残り二枚とあわせてリーフ四枚を生薬生成で毒消し丸にした後、ベッドに入って軽い睡眠を取った。

冒険者ギルドでの売却価格は千八百七十八ナールだ。

毒消し丸一個の売値は二十五ナールである。アイテムボックスに入れた分もあるので、全部は売却していない。

ギルドでの販売価格百ナールの四分の一で買取か。そんなもんだろうか。

昨日は毒消し丸を買おうとしたのに今日は売りに来た俺を、冒険者ギルドのカウンターにいるアラサー女性がどう思ったのかは知らない。

変に思ったとしても、顔には出さなかったし、何も言っただけでよかった。

誰が何を売ったかなんていちいち覚えてない、といいな。

その後、午前中に一度迷宮に入り、午後に再度アタックする。

午前の分の売却額は四百八十七ナール。宿に帰らなかったのでも薬生成はしておらず、ランチだけの販売だ。

リーフが三枚出るまで狩りを行い、売ったのはランチ二十五本である。朝はランチ二十三本でリーフが二枚だったから、結構ブレがあるのだろう。

ランチ二十五本×一本十五ナール×三割アップ・端数切捨てで、四百八十七ナールだ。

商人のカルクが間違っていないければ。

午前と午後で、入り口から右側の探索を進めた。

ダンジョンウォークは、出入り口のある部屋だけでなく、似たような小部屋にも行けるようだ。

昨日騎士団のパーティがいた小部屋にも行けた。

同じように見えても、魔物が大量にいた小部屋は無理だ。違いがわからん。

迷宮入り口から右に進んだところにもダンジョンウォークで行ける小部屋があり、午後の探索はそこから進めた。

ニードルウッドを倒しながら進む。

散々迷いながら進むと　その間にリーフが二枚出た　、また似たような小部屋に出た。

壁がスライドして落ちる。小気味のよい音が響いた。中の小部屋が現れる。

中には先客として二組のパーティがいた。

なんか並んでいるみたいな感じだ。
俺もその後ろに座ってみる。

なんで並んでいるのか知らないし、並んでいるのかどうかも分からないが。

しばらくすると、俺の後から別のパーティーが入ってきた。
探索者や戦士などの六人パーティーだ。レベルは低い。

「ちゃんと後ろに並べ」

六人は前に行こうとするが、先頭の男に怒鳴られて戻ってきた。

まったく。

見れば並んでいるのが分かるだろう。

空気読め、空気。

などとよく分かっていたいなかった自分のことは棚に上げて考える。
俺は、日本人としては空気の読める方ではなかったと思うが、この異世界に入っては空気の読める方なのだ。

前の扉が開き、先頭にいたパーティーが入っていった。

これを待っていたのか。

「あなたたち、迷宮は初めて」

「はい」

前のパーティーの女性と、俺の後ろに座ったパーティーの探索者が会話する。

「この向こうに二階層に行く壁へと通じる部屋があるわ。入っていきけるのはパーティー一組ずつ。中にはボスがいるの。そいつを倒せば、二階層へ行けるわ」

「はい。ありがとうございます」

なるほど。だから並んでいたのか。

親切な女性の話に俺も聞き入った。

姐さんと呼ばせていただきます。

「前のパーティーが全滅した場合には、残していった装備品が手に入るわ。これは運ね」

姐さんが俺を見てにやりと笑った。

前言撤回。

親切じゃねえ。

俺が中で死んだら、俺の装備　デュランダルが後ろのパーティーのものになる。

まあ、姐さんたちのパーティーが全滅すれば、姐さんの装備が俺のものになるわけだが。

「分かりました」

「ボスはニードルウッドなんかよりかなり強いわ。自信がないなら、やめておきなさい」

「いえ。大丈夫です」

後ろのパーティーの探索者Lv5は、自信ありげに胸を張った。

Lv5のくせに。

やがてまた前の扉が開き、姐さんたちのパーティーが入っていく。

姐さんたちのパーティーは俺の後ろの組よりレベルが高いから、全滅することはないだろう。

というか、俺は大丈夫なんだろうか。

まあ、デュランダルに加えてラッシュとオーバーホエルミングがある。

きっと大丈夫だろう。

一階層では一日に金貨一枚を稼げないことは確定だ。下に行かざるを得ない。

姐さんたちが通過したのか、再び前の扉が開いた。

俺はデュランダルをかまえ、入っていく。

俺が入ると扉が閉じられた。

部屋は四、五メートル四方のいつもの小部屋だ。

姐さんたちが倒れていたりはしない。

無事通過したようだ。

部屋の奥に煙が集まり、魔物が姿を現す。

ウドウッド レベル1

ニードルウッドを一回り大きくしたような魔物だ。

身長は俺より高い。幹まで緑色をしている。手足の代わりに枝を

二本ずつ伸ばした植物魔人である。

などとウドウッドをじっくり観察していると、魔物の足元に青い光が現れた。
魔法陣だ。

まずい。

青く光っているところを見れば、もちろん有効なのだろう。
見たのは初めてだし、どんな使い方をしてくるのかも分からない
が、確実にやばい感じがする。

魔法を放ってくるのか。

補助魔法や防御魔法の可能性もあるが、いずれにしても使わせない方がいい。

観察なんかしている場合じゃなかった。

俺はデュランダルを振り上げ、あわてて駆け寄る。
ラッシュと念じて肩口に剣を叩き込んだ。デュランダルは魔物の
右肩に数ミリか数センチか喰い込んで止まる。ラッシュを使っても
一撃では倒せないようだ。

しかし、魔法陣は消えた。

デュランダルの持つ詠唱中断スキルのおかげだろうか。

しゃべらない魔物は詠唱を使えないから、その代わりに魔法陣を
使うのだろう。魔法陣は詠唱代わりだから、詠唱中断スキルで魔法
陣も中断させることができるのか。

魔法陣を止められたウドウッドの枝が振られる。

剣は魔物の肩に刺さっているので、受けられない。

相手の肩も動いたのでなんとか抜くことはできたが、攻撃は喰ら
ってしまった。

打撃を受けて息が詰まる。

ウドウッドはニードルウッドやスローラビットよりさらに上の攻撃力を持っているようだ。

ニードルウッドの攻撃だって、そう軽くはなかったのだが。

再び枝が振られた。枝が風を切る音が聞こえる。

落ち着いてデュランダルの受けた。

続いて右から振られた枝を体を引くことで避ける。

かわしたことで隙ができた。それを見てデュランダルを打ち込む。

左から降り戻された枝をバックして避けた。

しっかり動きを見ていけば、戦えない相手ではないようだ。

ウドウッドが開いた距離を詰める。

右から振られた枝を剣で受けた。

そこへ左から枝が振られる。

くそつ。

右からの枝は陽動か。

今度は避けられない。

オーバーホエルミングと念じて、デュランダルを振りかぶりながら下がった。

魔物の枝がゆっくりと動く。振られる軌道上から脱出したところで、効果が切れた。

一呼吸おいて、枝が通り過ぎるのを待つ。
通過したところで右足を踏み込んだ。ウドウッドの脳天からデュランダルを叩き込む。

デュランダルが魔物の頭を半分以上切り裂いた。

ウドウッドが地に伏せる。
なんとか倒せたようだ。
身体が大きく揺れ、煙となって消えた。

ワンド 杖

残ったのは木の枝だ。
いや、杖というか棒というか。ブランチよりは断然大きい。
杖と出たから、武器なんだろう。

ワンドの他には何も無い。
ボス部屋なのに宝箱も何も無いようだ。
あるとしたら、前のパーティーの遺留品だけということか。

ボスを倒したからだろう。入ってきたのとは反対側の扉が開いた。
俺はワンドをアイテムボックスに入れる。
もう一度何も無いことを確かめ、下へ降りる道があるだろう隣の
部屋に移動した。

二階層

ポスを倒した場所の隣の部屋には、黒い壁だけがあった。

その黒い壁に入り、一瞬の闇を抜けると、一階層の出入り口にあったのと同じような小部屋にたどり着く。

大きさは四、五メートル四方ほどで、前と左と右に道が一本ずつ延びている。一階層と同じだ。

後ろには俺が出てきた黒い壁があった。これも一階層と同じである。

目隠しされて連れてこられたら、区別がつかないんじゃないだろうか。

多分ダンジョンウォークが有効だろうから、念じればここにこれるのだろうか。

試してみるか。

いや、試して成功しても、移動したここが二階層かどうか分からない。らん。

後ろの黒い壁を抜けたら、さっきの場所に戻るのだろうか。そっちから試してみるか。

俺は黒い壁を抜ける。

真っ暗な空間を通ると、急にまぶしい場所へ出た。迷宮の入り口だ。

昨日と同じ探索者の男が立っている。

目が見えないが、夕刻まではあと少しというところか。外に出てしまったことだし、今日はここまでにしておこう。

道の反対側から六人のパーティーがやってきた。

パーティーの探索者が入り口近くに立っていた探索者と会話する。

「どこまでだ」

「四階層です」

俺は、少し道をずれ、リュックサックを置いて中を確認する振りをしてながら、聞き入った。

情報収集は大切だ。

パーティーの探索者が騎士の顔を窺う。

このパーティーでも騎士が偉いみたいだ。

そういうものなのかね。

「四階層には何がある」

騎士が直接入り口の探索者に話しかけた。

「ミノです。一階層から、ニードルウッド、グリーンキャタピラー、コボルトです」

「三階層のコボルトはやってられんな。四階層からしよう」

やっぱりこの迷宮の魔物の組み合わせは駄目みたいだ。

騎士がパーティーの探索者を見て、うなずいた。

「八百千五百のお宝を、収めし蔵の掛け金の、アイテムボックス、オープン」

あれがアイテムボックスの呪文か。
パーティーの探索者が何か取り出す。

銀貨

よく見えなかったが、取り出したのは銀貨だ。
さすが、鑑定は役立つ。

入り口の探索者が受け取り、やはりアイテムボックスを出して銀貨をしまった。

「友に応えし信頼の、心のきよむ誠実の、パーティー編成」

入り口の探索者が続いてなにやら唱える。
こっちがパーティー編成の呪文か。

パーティー編成なんかしてどうするつもりなのかと思っていると、パーティーにいた探索者と二人で迷宮の中に入っていった。
そしてすぐに戻る。

騎士側のパーティーにいた冒険者がやはりパーティー編成呪文を唱えた。

「よし。四階層から行くぞ」

騎士が宣言し、六人が迷宮の中に入る。
全員が消えるのを見届けずに、俺も町の方へと歩き出した。

あれは何をしていたのか。
多分、探索者二人で四階層まで行ってきたのだろう。

探索者のダンジョンウォークは、一度行った場所なら迷宮内を移動できる。

六人が移動するところを何度か見たし、唱えた本人だけではなく、パーティーメンバーなら有効なのだろう。

迷宮入り口に立っていた探索者は、案内人で、四階層に行ったことがあるのだろう。

新しく来たパーティーの探索者はもちろんこの迷宮に入ったことがない。

二人がパーティーを組めば、四階層に行ったことのある案内人の探索者が四階層に行ったことのない探索者を連れて四階層に行ける。一度四階層に連れて行ってもらえば、次からは四階層に行ったことのない探索者も自分のパーティーを連れて四階層に行くことができる、という仕組みだ。

パーティーメンバーが五人以下ならば、案内の探索者が全員を連れて行くのかもしれない。

巧いこと考えてるもんだ。

俺も利用すべきか。

しかし、下の階層へ行けば魔物も強くなるだろう。

自分の強さが分からない以上、一階層ずつ順番に降りていくのが安全だ。

昨日、冒険者ギルドで二人の冒険者が出てきたのも、同じことをやっていたのだろうか。

フィールドウォークを使える冒険者が二人いて、片方が行ったところのある町であれば、一度二人で移動することで、両方ともその町に行けるようになる。

この世界では、人の往来はかなり自由に頻繁だと考えていいのだろう。

迷宮の入り口から少し離れたので、キャラクター再設定でデユランダルを消す。

ボーナスポイントが1ポイントあまっていた。いつの間にかレベルアップしたようだ。

使い勝手が分からないクリティカル率上昇とMP回復速度上昇に1ずつ振ってあるポイントと、ワープをはずし、4ポイント消費してフォースジョブを獲得する。

ジョブ設定を利用してジョブを整えた。

加賀道夫 男 17歳

探索者LV8 英雄LV6 戦士LV5 剣士LV1

装備 シミター 皮の鎧 サンドルブーツ

一日としては驚異的な伸びだと自画自賛しておく。

いったん宿屋に戻って生薬生成を行った後の売却額は千九百十一ナール。

今日一日の売上は計四千二百七十六ナールだ。

昨日拾ったリーフの分もあるが、ワンドを売っていないから、差し引きすればそんなに変わらないだろう。

ワンドは、アイテムではなく装備品の杖だから、多分武器商人にでも売るのではないかと思う。

金貨一枚には足りないが、一日の稼ぎとしてはかなりのものではないだろうか。

装備品を整えたり、衣料を買ったり、こまごまとした日用品が必要になれば、もっとお金を使うのかもしれないが。

今のところ、使うのは宿賃二百二十四ナールとお湯二十ナールだけだ。

お湯を頼むときに何故三割引が効かないのかは謎である。

夕食を取ったら、今日はもう寝る。

すっかり早寝早起きの健全な生活が身についてしまった。

日が暮れたら本当にやることがない。

もう一回迷宮に入るという手もあるが、途中で眠くなったら危険だし。

早く寝れば、早く起きる。

というわけで、次の日も暗いうちから迷宮行きだ。

ジョブ設定をはずしてつけたワープで、二階層の入り口に出る。

見た目だけでは一階層の出入り口のある小部屋と区別がつかないが、多分二階層だろう。

今回のワープは、あまり気分が落ち込まなかった。

レベルアップしたおかげか。
とはいえ、まだ連続で使うつもりはない。あれは本当にきつかった。

一階層では二階層への出口は右にあったので、二階層では左に進んでみる。

左側の道は、入った先に十字路があった。

一階層とは違う。無事二階層にこれたようだ。

ニードルウッド L V 2

最初に遭遇した魔物は、一階層と同じニードルウッドだった。

二階層は何かという魔物になるんじゃないのか。

L v 2というのは、単に二階層だから、ということだろうか。

デュランダルで袈裟がけにし、一撃で斬り捨てる。

ニードルウッドもL v 2で強くなっているのかもしれないが、デュランダルを使えばやはり一発だった。

まあ俺がレベルアップしたおかげもあるのだろう。

あるいは、ジョブを四つ重ねている効果とか。

あると思いたい。

グリーンキャタピラー L V 2

次に遭遇したのが、グリーンキャタピラーだ。

そうそう。二階層はグリーンキャタピラーだった。
二階層は二種類の魔物ということだろうか。

緑色のでっかい芋虫である。

正直かなり気持ち悪い。

中型犬くらいの大きさのブヨブヨの幼虫だ。いや、中には筋肉がつまっているのかもしれないが。

観察もそこそこに駆け寄った。上段からデュランダルを振り下ろす。

糸

こっちも一撃のようだ。

緑の煙が消えると、束になった糸が残った。

その後何匹か狩ったが、出てきたのはニードルウッドLv2かグリーンキャタピラーLv2だ。

二階層は二種類の魔物のどちらかであるらしい。

などと考えていると、今度は両方の魔物と遭遇した。

ニードルウッド Lv2

グリーンキャタピラー Lv2

二匹連れなのか、たまたま居合わせただけか。
あの魔物が大量に潜んでいた小部屋を除けば、迷宮内の道で複数の魔物に出会ったのは初めてだ。

まずは寄ってきたニードルウッドにデュランダルを叩き込む。
続いてグリーンキャタピラーの方を、と見ると、魔物の胸部の下にオレンジ色の魔法陣ができていた。

魔法陣はすぐに消え、グリーンキャタピラーが何かを吐き出す。

糸だ。

魔物の口から糸が吐き出され、俺の正面を広く塞いだ。

四方八方に大きく広がりながら、飛来する。歌舞伎の蜘蛛の糸を見ているような感じだ。

デュランダルを振って幾分かは巻き取るが、全部は防げなかった。
防ぎきれなかった糸が手足や頭に絡みつく。

気持ち悪い。だけではなく、手足を自由に動かすことが難しくなった。

粘着テープを体に巻きつけられたような感じだ。

腕の動きを確保しようともがいている間に、グリーンキャタピラーの体当たり攻撃を受けてしまう。

不自由な足でなんとか耐え、デュランダルを振り下ろした。

糸による拘束は攻撃力に影響しないのか、あるいは影響を受けてなお撃破するだけの攻撃力を保てたのか、グリーンキャタピラーはやはり一撃で沈んだ。

魔物が消えると同時に、体に絡みついていた糸も消える。
ドロップアイテムの普通の糸が残った。

グリーンキャタピラーは糸を吐いてこちらの行動を制約するとい
う特殊攻撃をしてくるようだ。

一匹二匹なら多分問題はないが、大量に湧いたらどうしようか。
一階層にあったあの小部屋のように……。

まずい。

かなりまずい結果しか思い浮かばない。

複数のグリーンキャタピラーに囲まれたら、四方から糸を吐かれ、
動きの鈍くなったところをめった打ちにされるだろう。

こちらの動きが鈍くなれば、殲滅速度が遅くなるだけでなく、デ
ュランダルによるHP回復も遅れることになる。

魔物からの攻撃に耐えられるだろうか。

何か対策を考えた方がいいか。

もちろん、何の対策も採らない、という手もある。

考えてもみるがいい。

あそこまで大量に魔物が湧く小部屋は、かなり稀なトラップでは
ないだろうか。

一階層には、見習いを含む騎士の六人パーティーや、ボス待ちの
部屋に来たレベルの低いパーティーもいた。

あの人たちは魔物が大量に湧いた小部屋に対応できるのだろうか。

俺がなんとかなったのはデュランダルのおかげであり、レベルの低いパーティーでは対応できないのではないかと思う。

それなのにあの人たちが迷宮内にいるということは、大量の魔物と遭遇するような危険性は実際にはかなり低いということを示唆している。

大量の魔物が湧く危険性がそんなに高いのなら、レベルの低いパーティーは迷宮にはいかないだろう。

レベルの低いパーティーが実際迷宮にいるということは、大量の魔物が湧く危険性はそんなに高くないということだ。

あまりに楽観的なような気もするが、現実はこのものかもしれない。

あのレベルの低いパーティーも二階層にやってきているだろう。

あの人たちが二階層で戦っていけるなら、俺にもできるはずだ。

とはいえ、危険を放置するのはまずい。

迷宮では安全を過信したやつから死んでいくだろう。

一度あることは二度ある。

魔物が大量に湧く小部屋を経験した以上、これからもあると考えしておくべきだ。

ではどんな対策を採るか。

対策の一つは、レベルアップを続けることだ。

レベルが上がればそもそもその殲滅速度が速くなるだろうし、HPや体力も上がるだろう。

グリーンキャタピラーから攻撃を受けても蚊に刺された程度の痛みしか感じないようになれば、袋叩きにされても問題はない。

ただし、そこまでいくのにどれだけレベルを上げる必要があるのかと考えると、相当に大変だろう。

大量のグリーンキヤタピラーに囲まれても大丈夫だと、いつどうやって判断するのか、という問題もある。

ロクサーヌを買い取るのに期限も設定されている。のんびりとレベルを上げているわけにはいかない。早く下の階層へ行つて、金を稼がなければならない。

もう一つできる対策は、複数の魔物に対する攻撃手段を獲得することだ。

集団リンチされて困るのなら、その集団をまとめて攻撃すればいい。

オーバーホエルミングやラッシュは複数攻撃のスキルではなかった。

剣士のスキルであるスラッシュも使ってみたが、ラッシュとあまり変わりはないようだ。というか、スラッシュは剣士版のラッシュという感じなのだろう。

現実問題として、剣を使って複数の敵を同時に攻撃することは難しい。

分身のスキルでもなければ、無理なのではないかと思う。

しかし、剣が駄目であれば、魔法がある。

魔法を使えば、全体攻撃も可能なのではないだろうか。

村の商人は、魔法使いになるには五歳までに特別な薬を服用しなければならぬと言っていた。

おそらくなんらかのアイテムだろう。

では五歳をとくにすぎている俺は魔法使いになれないのか。

可能性として考えられるのは、魔法を使ってみることだ。

ものを盗んだとき盗賊になり、農作業をしたときに農夫のジョブを得、迷宮に入ったことで探索者のジョブを獲得した。薬草採取士も薬草を拾ったことで入手したジョブだろう。

それならば、魔法を使えば、魔法使いになれるのではないだろうか。

もっとも、空間魔法や移動魔法では魔法使いのジョブを得ていない。

考えてみれば当然だ。ダンジョンウォークで魔法使いのジョブが獲得できるのなら、探索者なら誰でも魔法使いになれることになる。

空間魔法や移動魔法ではなく、攻撃魔法を使わなければならないだろう。

魔法使いはきっと攻撃魔法を使える。

商人になるには何かを売らなければならないし、戦士になるには戦わなければならないし、剣士になるには剣を振らなければならないのだろう。

俺は全部やった。

それならば、魔法使いになるには、攻撃魔法を使わなければならない。

ニワトリが先か卵が先か。

魔法使いになれば攻撃魔法が使えるが、その魔法使いになるには、攻撃魔法を使わなければならないのだ。

だからこそ、特別なアイテムが必要なのだろう。

しかし俺にはボーナス呪文がある。

ボーナス呪文は魔法使いでなくても使えるはずだ。
現にワープは使えている。

ボーナス呪文にある攻撃魔法を使えば、魔法使いのジョブが獲得できるのではないだろうか。

英雄Lv1のときにはMPが足りなかったボーナス呪文の出番がやってきたようだ。

魔法使い

メテオクラッシュ。

英雄Lv1のときにはMPが足りず使えなかったボーナス呪文だ。

ジョブを四つ重ねがけし、英雄Lv6まで成長した今なら使えるだろうか。

メテオクラッシュを使って魔法使いのジョブが入手できればそれでよし。

もし魔法使いのジョブが得られなくても、メテオクラッシュが全体的攻撃魔法なら、俺はそもそもその目的である敵の集団に対する攻撃手段を獲得できたことになる。

キャラクター再設定と念じた。

ボーナスポイントが1あまっている。探索者がレベルアップしたようだ。

ワープをはずしてジョブ設定を取得し、あまっていたポイントでボーナス呪文のメテオクラッシュにもチェックを入れる。

念のため、ダンジョンウォークで一階層に移動した。

ニードルウッドを二匹狩ってMPを満タンにする。

そして次に現れた魔物に。

喰らえ。

メテオクラッシュ。

……。

念じて見るが、何も起こらなかった。

駄目だったか。

ニードルウッドはとぼとぼとこっちへやってきて、杖を振って攻撃を喰らわせようとする。

やむなくデュランダルでなぎ倒した。

英雄Lv6でまだMPが足りないのか。

どれだけ必要なだろう。

消費MPが多いということは、その分威力のある魔法に違いない。せめてそう考えて自分を納得させる。使えたときが楽しみだ。

メテオクラッシュは使えなかったが、俺は別に落ち込んではいない。

想定内の範囲内だ。

こんなこともあるのかと。

俺はもう一度キャラクター再設定を念じる。

MP全解放。

これだ。

名称的に、現在の全MPを解放して敵を攻撃する攻撃魔法だろう。

解放するのだから、現在のMP量にかわりなく使えるのではないだろうか。

ゼロにするだけなら、MPが一だろつが百だろつが百万だろつがゼロにできる。

MPが足りないということにはならないと思う。

問題は、そのゼロになることにあるわけだが。

MPがゼロになっても大丈夫だろうか。

少なくとも、今までにないくらい気分が落ち込むことは疑いない。HP全解放と違って、命に別状はないだろつが。

一応、この前美人騎士たちがいた小部屋の近くで試そう。

何かあったときにすぐ逃げ込めるように。

あそこには魔物が出ないみたいだから、格好の逃げ場所だろつ。

入り口の小部屋も考えたが、人が通りそうなところはあまりよろしくない。

いざというとき外に逃げ出せる利点はあるが、外に出たところで今の時間は真つ暗だ。危険性はそう変わらないだろつ。

小部屋の入り口近くで魔物を探す。

入り口近くという条件がきつすぎたせいか、魔物はなかなか現れなかった。

ようやくニードルウッドを見つけたのは、入り口からはやや離れた場所だ。

引つ張れるか。

俺は魔物に背を向け、小部屋の方へと走り出した。

少し行っただばかりのところ、背中から攻撃を浴びる。

ニードルウッドは思ったよりも速く移動できるらしい。

振り返り、魔物を見据えた。

MP全解放と念じる。

体から何かが抜けていった。

同時に、猛烈に嫌な感じが襲ってくる。

MPが 気力が精神力か、何かそういった類のものが 抜け
ていったのだろう。

成功だ。

いや、成功してしまった。

失敗すればよかったのに。

目の前にいたニードルウッドが爆ぜる。

煙となって飛び散った。

なんとということをしてしまったのだろう、俺は。

こんなところを他の魔物に見つかったら、絶対に殺される。

俺は弱い。才能もない。馬鹿だ。何の取り柄もない。最低の人間
だ。

異世界で生きていこうなど、思い上がりも甚だしい。

地球でだつてろくな行き場も見つけられなかったのに。

俺などどこかでのたれ死ぬのが関の山だ。

あの美人のロクサー又など手に入れられるものか。相手にもして
くれないに違いない。

あれは奴隷商人の罠だ。陰謀だ。ペテンだ。詐欺なのだ。

ブランチを拾い、小部屋に飛び込む。

こんなときでもランチを拾うなどと。せこい。せこすぎる。どこまで卑小で醜い守銭奴なのか。

小部屋の中で一息ついた。

安全な場所で震えているのが俺みたいなやつにはふさわしい。

小部屋の中は安全だろう。

予め逃げ場所を確保しておくなんて、なんてできの悪いやつなんだ、俺は。

考えてみる。

今のこの状態はMPが空になっているから起こっている。

そこから回復するにはどうするか。

デュランダルはMP吸収を使うしかない。

それなのに魔物のいない場所に逃げ込んでどうするのか。

逃げ場所など用意せず、嫌でも魔物と戦わざるをえないように仕向けるべきだったのだ。

下手の考え休むに似たり。やる気のある無能な味方ほど恐ろしいものはない。

姑息な策など弄しようとするから、こうなるのだ。

では外に出るべきか。

何を考えているんだ。馬鹿か、俺は。とんまか。間抜けか。阿呆なのか。

今外に出て、魔物にかなうわけがないだろう。

馬鹿で愚図でヘタレなチキン野郎は、魔物が出ない小部屋で怯えているのがお似合いだ。

いや、ここは本当に魔物が出ないのか？

そんなことを誰が決めた。
憶測だ。

阿呆で間抜けな俺の希望的観測に過ぎない。

そうだ。ここだって安全とは限らない。

逃げよう。

逃げる。

どこへ？

安全な場所などあるものか。

どこへ行っても危険、どこへ行っても敵だらけだ。

逃げ場も、安息の地もない。

俺はきつとここで死ぬのだ。

クソッ、クソッ、クソッ。

俺はなんとか気力を振り絞って、小部屋の外に出た。

戻れ。死にたいのか。

いや。戻っても同じことだ。

小部屋の中にもそのうち魔物が湧くだろう。

どうせ俺では魔物に勝てない。

そうだ。

ここが俺の墓場だ。

ふらふらと歩き出す。

せめてギルドでMP回復薬を買っておくべきだった。

俺はそんなことにも気づけない間抜けなのだ。

惨めにのたれ死ぬのがせいぜいだ。

洞窟の奥に、ニードルウッドが現れた。

逃げる。

まだ間に合う。

さっきの小部屋に駆け込めるはずだ。

いや。間に合わない。

俺なんかが間に合うはずがない。

逡巡しているうちに、ニードルウッドが迫ってくる。

デュランダルを振ったのは、半ば無意識だった。

生存本能か。はたまた戦闘を続けている間に型として身についたものか。

デュランダルの剣先が魔物を捉える。

ニードルウッドを横から斬り払った。

こんな状態でも、もちろん一太刀で撃破だ。

気分が落ち込んででも攻撃力に変わりはないらしい。

当然といえば当然か。

肩を落とし、大きく息をはいた。

きつかった。

万全ではないが、いくぶんMPも回復したようだ。

さっきまでの悲観は霞がかかったかのように淡くなっている。

やばかった。

本当にきつかった。

かつてないほど落ち込んだ。

これがMPゼロの恐怖か。
こんなことは二度とごめんこうむりたい。

大丈夫。俺はやればできる子だ。
自分で自分に言い聞かせる。

改めて辺りを見回すと、回復を祝うかのように、リーフが残っていた。

さらに三匹のニードルウッドを狩ってMPを溜める。
最初の悲観は嘘のように消え失せた。

ジョブ鑑定を行う。

魔法使い L V 1

効果 知力小上昇 MP微上昇

スキル 初級火魔法 初級水魔法 初級風魔法 初級土魔法

あつた。

あつたはいいけども。

初級火魔法というのは、あまりに不親切じゃないか。
これで使えるのだろうか。

フォースジョブの剣士L V 2を魔法使いL V 1と取り替える。

二階層に移動した。

まだ全体攻撃魔法が手に入ったとは限らないが、隠し部屋のあり

そんな突き当りを避ければ、二階層でも大丈夫だろう。

ダンジョンを歩きながら、初級火魔法と念じる。
何も起こらなかった。

火、炎、火炎、火魔法、ファイヤー、ファイヤーボール。
いろいろ念じていくと、いきなり頭上が明るくなった。

見れば、火の球ができている。

おおっ。

これだ。

ファイヤーボールか。

火の球は前の方に向かって飛んでいった。

成功だ。

ついに魔法を取得した。

俺は火球の飛んでいく先を見つめる。

現実に魔法が使えるというのは、えもいわれぬ感動がある。

あの火の球は俺が創り出したのだ。

すごい世界に来てしまったものだと感激にむせぶ。

移動魔法や空間魔法は使えていたが、火魔法というのはまた格別だ。

自然現象を自分の力で起こせたのだから。

感慨もひとしおである。

どん底に落ち込んだことも、過ぎてしまえばいい思い出だ。

こうして魔法が使えるようになったことを思えば、屁でもない。

火の球は、薄暗い洞窟を赤く照らしながら進み、やがて消え失せた。

しばらく魔法使いになった喜びにひたる。

別に何かが変わったわけではない。俺は俺だ。

しかし魔法を使えるようになったのは事実である。

MP回復のため、次に出てきたグリーンキャタピラーはデュランダルで倒した。

その次に出てきたニードルウッドにファイヤーボールをぶち込んでみる。

木の魔物が火にまみれた。

おおっ。

すごい。

さすが魔法だ。

やがて火が消える。

一発で倒しきることはできなかったようだ。

くすぶった煙を上げながら魔物がやってきた。

まあ、初級魔法だし、レベルも低いしな。心なしが動きが鈍いように感じるのはダメージが残っているせいだろうか。

迫るニードルウッドにデュランダルを浴びせる。難なく一太刀で伐り倒した。

初級火魔法がファイヤーボールなら、初級水魔法はウォーターボールか。

俺はもう一匹デュランダルで魔物を狩ってから、ウォーターボ

ルと念じる。

頭上に水の球ができて、正面に飛んでいった。

これが水魔法か。

グリーンキャタピラーを狩ってMPを回復してから、次に現れたニードルウッドにウォーターボールをお見舞いする。

魔物は水球の勢いに押されて一瞬たじろいだが、すぐに立て直してこちらにやってきた。

ダメージを受けている形跡はない。

待ちかまえてデュランダルで一撃にする。

ニードルウッドは植物の魔物だから、水魔法より火魔法の方が有効かもしれない。

その辺は要研究だな。

水魔法の次は風魔法だ。

風ならウィンドボールだろうか。

ウィンドボールと念じてみるが、何も起こらない。

ウィンドアロー、ウィンドストーム、ウィンドカッター……。

どれも違った。

火魔法はファイヤーボールで水魔法はウォーターボールなのだから、風魔法もなんとかボールだろうか。

ウィンドボール、エアボール、ブラストボール、ゲールボール、タイフーンボール、トルネードボール、ブリーズボール。

これだ。

ブリーズボールと念じると頭上になにやらできて、正面に飛んでいった。

おそらく風の球ができたのだろうが、目には見えない。ただ風の音だけが聞こえた。

ブリーズ
そよ風か。初級風魔法だもんな。
初級でトルネードはねえよ。

魔物を狩ってMPを回復したら敵に試してみよう、と思っていたら、次に出た魔物は二匹連れた。

二ードルウッド L V 2

二ードルウッド L V 2

やはり二階層からは二匹連れのこともあるのだろう。
俺はファイヤーボールが複数の敵に有効かどうか試してみることにした。

二匹の魔物を見据えてファイヤーボールと念じる。
火の球が俺の頭上に現れ、……二匹の魔物の真ん中をすり抜けていった。

……うん。まあそうだよな。
二匹の魔物だからといって二個のファイヤーボールが現れたりしないようだ。

火球を敵に当てるには、きちんと標的を狙わなければならないの

だろう。

二匹の魔物をターゲットに指定したので、ファイヤーボールは二匹の魔物の真ん中を抜けていったのだ。

俺はデュランダルを水平にかまえ、左のニードルウッドに向けてスイングする。

聖剣がニードルウッドを切り裂いた。

続いて振り上げた剣で右の魔物の枝を受ける。力押しに弾き、脳天から斬り落とした。

ブランチを拾い、リュックサックに入れる。

ファイヤーボールは全体攻撃魔法ではないようだ。

遠距離の敵に使えるが、標的はあくまで一つである。

では全体攻撃はないのか。

ファイヤーアロー、ファイヤーウォール……。

と念じると、目の前に火の壁が出現した。

下から上まで、幅一メートル半くらい、高さ二メートル以上にわたって燃えている。

火は、十何秒かの間、燃え続けた。

ファイヤーウォールか。

全体攻撃魔法というよりは防御魔法という感じがした。

たくさん敵に囲まれたときに使えば役に立つのだろうか。

全体攻撃魔法はないのか。

ヘルフレイム、バーンアタック、ボルケノイラプト……。

いや。ファイヤーボールにファイヤーウォールだったのだから、

ファイヤーがつく可能性がある。

ファイヤーストライク、ファイヤーアタック、ファイヤーストーム。

と、体の中から何かが抜ける気配がした。

MPを消費したのだろう。

今のファイヤーストームがきつかけだ。

しかし、MPを消費した感じはあるが、何も起こらない。失敗したのか。

そうではなく、ここには敵がないからだろう。

魔物に対して直接働きかける魔法なんじゃないだろうか。

俺は魔物を二匹狩ってMPを回復させる、その次に現れたグリーンキャタピラーにファイヤーストームをお見舞いした。

薄暗い洞窟の中を赤い火の粉が舞う。蛍を見ているような感じだ。火の粉が魔物の周囲に集まり、グリーンキャタピラーに襲いかかった。

青虫が赤く燃える。

魔物は、一度苦しげに体を振ったが、火が消えるまで耐え切った。

ファイヤーストームも一発では倒せないようだ。

くすぶりを残すグリーンキャタピラーにデュランダルを叩き込む。脳天から切り裂き、魔物にとどめを刺した。

魔法名はファイヤーストームで間違いない。

どうやって敵を認識しているのだろうか。あるいは魔物にのみ効

果があるのか。

後は、全体攻撃魔法かどうかの確認だな。

次に二匹連れの魔物が出てきたときに試すか。

と思っただが、そろそろいい時間だろう。

一度外に出てみることにする。

迷宮の外はまだ暗く、迷宮から見るとベイルの町の向こう側が青白く光っていた。

まもなく日の出だ。

ばっちりだったな。

腕時計もケータイもない分、この世界に来てからは体内時計の感覚が鋭くなったような気がする。

実際のところは排水タンク容量との兼ね合いかもしれないが、過信は禁物だ。

一度宿に帰って朝食を取ってから、再度迷宮に入る。

二階層へ行き、デュランダルで魔物を狩ってMPを回復しつつ、魔法のテストを続けた。

最初に現れたグリーンキャタピラーにブリーズボールをぶつける。やはり一撃では倒せなかったが、魔物の表面に細かい傷ができていたので、ダメージは与えただろう。

次のニードルウッドはデュランダルで狩ってMPを回復してから、ウォーターウォールと念じた。

正面に水の壁ができる。

大きさはファイヤーウォールと同じくらい。明らかにファイヤー

ウォールの水版だ。

別に激流になっているわけでもないのに、これで魔物を防げるかどうかは疑問である。

火魔法を使ってくる相手に対して防御幕を張る、という使い方をするのか。

時間が経つと、壁が崩れ、水は床へと落下した。
周囲に水が散る。

俺のズボンにもかかってしまった。

火と違って、水は簡単には消えないようだ。
当たり前か。

いや、当たり前ではないのだろうか。何を判断基準にしているのか、よく分からない。

本当に水ができたのか、試しに、横の壁にウォーターボールをぶつけてみる。

水球が壁で弾け、しずくが壁を伝って流れ落ちた。

確かに水ができたらしい。

水魔法は便利そうだ。

のどが渴いたときに使える。

真水かどうか分からないが。

ニードルウッドを一匹デュランダルで倒し、次にブリーズウォールを試してみる。

風の壁ができたようだ。
音がした。

無色透明なので、見た目には分からない。

見た目で分かなければ使えるのではないか、と考えた俺は、続いて現れたグリーンキャタピラーの前に風の壁を形成した。

さあ突っ込んでこい。

待ちかまえていると、魔物がブリーズウォールの前で止まる。

グリーンキャタピラーの胸の下に、オレンジ色の魔法陣ができた。

失敗した。

見た目ではほとんど分からないブリーズウォールだが、グリーンキャタピラーには分かるらしい。

しかも、こっちから攻め込むには風の壁が邪魔だ。

少し時間を置いて、魔物が糸を吐く。

ブリーズウォールが消えるのを計っていたようだ。

ここでも失敗した。

せめて壁がある間に逃げておくべきだった。

糸が絡まる。

解こうともがいていると、グリーンキャタピラーの体当たり攻撃を受けてしまった。

再び体当たりをかまそうと近づいてきた魔物にデュランダルを振り下ろす。

魔物が倒れ、糸が残った。

一撃で倒せたので、大事には至らずにすんだ。

壁魔法は使いどころが難しいようだ。

どうやって使うのだろう。

というか、魔物が糸を吐くときにこそ、ファイヤーウォールでも張って守るべきだったのか。
失敗した。

壁魔法は幅一メートル半くらいの大さきでできるから、横に動けば移動して攻撃できる。

洞窟の道を塞ぐには、二枚張る必要があるだろう。

火、水、風と試したので、次は初級土魔法だ。

土はなんだろう。

サンドボール。

おおっと。一発で成功した。

頭上に土の球ができ、前方に飛んでいく。

サンドボールだから砂の球というべきか。

魔物を一匹狩った後、サンドウォールも試してみた。

土の壁だ。ファイヤーウォールの土版。

時間が経つと、消え去るのではなく、ウォーターウォールと同じようにバラバラと崩れて、砂が残った。

しかし砂では、魔法で創り出しても使い道はなさそうな。

グリーンキヤタピラー L V 2

グリーンキヤタピラー L V 2

魔物をもう一匹狩ってMPを回復すると、次に現れたのはグリーンキヤタピラーの二匹連れだった。

ちょうどいい。

ファイヤーストームと念じる。

火の粉が舞い、二匹の魔物に襲いかかった。周囲が赤く染まる。やはり全体攻撃で間違いない。

ファイヤーストーム一発では倒せないだろう。

糸を吐かれる前に倒さなければならぬ。

俺は火まみれになっているグリーンキャタピラーの右側のやつにデュランダルを浴びせる。

続いて、火が消えたばかりの左側の魔物にもデュランダルをお見舞いした。

青信号

結局、使える魔法は四系統三種類ずつの計十二個だ。

他にあるのかもしれないが、ちよつと分らない。

ファイヤーヒット、ファイヤーシュート、ファイヤートルネードなど、思いつく限りにいろいろ試してみたが、駄目だった。

使えるのは、単体攻撃を行うボール、防御壁を作るウォール、全体攻撃魔法ストームの三種類である。

それぞれ、火魔法にはファイヤー、水魔法にはウォーター、風魔法にブリーズ、土魔法ならサンドがつく。

水魔法が治癒魔法で風魔法が移動魔法とかいうこともないようだ。ウォーターヒールとかウィンドウイングとか。試してみた範囲内だから、他にある可能性は否定できない。

とりあえず、これだけ使えば十分だろう。

次に試してみるのは、魔法だけで魔物を倒せるかどうかだ。

ニードルウッド L V 2

現れた魔物にファイヤーストームをお見舞いする。

出てきたのは一匹だが、敵の集団と戦うことを想定すれば、ファイヤーストームで試してみなければならぬだろう。

MPが抜けた感じが分かる。単体攻撃のボールよりも全体攻撃のストームの方が消費MPが多い。

火の粉が舞い、ニードルウッドに襲いかかった。植物が燃え上がる。

一発では倒せなかったので、二発めも放った。

二発めでも駄目だ。

魔物が接近する。

三発めを撃つ前に、攻撃を受けた。振られた枝を剣で受ける。

真っ赤に燃えながらこちらに迫ってくる姿は鬼気迫るものがある。

逃げ出したいという気持ちを抑え、三発めのファイヤーストームを放った。

勝てそうにない気がしてくるが、きちんと見て冷静に対応すれば大丈夫だと言い聞かせる。

いざとなればデュランダルで一撃のはずだ。

枝が振られるのをぎりぎりで避けた。

三発めでも倒せないようだ。

四発めのファイヤーストームを念じる。

このまま永遠に倒れないんじゃ。

振られる枝をさばきながら、ネガティブな考えが頭をよぎった。

炎の中、魔物が枝を振る。

攻撃をいつまでもさばききれものではない。

このままでは死ぬ。

なんとか逃げなければ。

背中を向けて逃げ出したくなったとき、ニードルウッドが倒れ伏した。

ブランチ

燃え落ちてもドロップアイテムは大丈夫らしい。
木の枝を拾ってリュックサックに入れる。

ニードルウッドLv2を倒すのに、ファイヤーストームが四発必要のようだ。

気分は結構落ち込んでいるが、四発は撃てた。

これ以上放てるかどうかは分からない。

四発は撃てたが、二回連続でこられたら危ない。

あるいは、ファイヤーストームは敵が二匹のときには消費MPが二倍になるとか。

どうなんだろう。

いかな。

思考がネガティブになっている。

事実としてそうなのか、ネガティブになっているだけなのか、判断がつかん。

魔物を二匹デュランダルで狩って、落ち着きを取り戻した。

今まで二回連続で魔物が湧いたことはない。

大量に湧いた小部屋は一回こつきりだし、洞窟内で連続で湧いたこともない。

魔物が出てくる間隔は結構あいていた。

無視することはできないが、連続で出現する可能性にそこまで深

刻になることはないだろう。

また、ファイヤーストームはファイヤーボールよりも消費MPが多い。

全体攻撃魔法だから単体攻撃魔法より消費MPが多いのだとしたら、敵が二匹になったのでMPが二倍必要になるとは考えにくいだろう。

増えるとしても、もっと緩やかなものになるはずだ。

冷静に判断して、ファイヤーストーム四発で倒せるならなんとかなりそうか。

ニードルウッドもグリーンキャタピラーとそんなには変わらないだろう。十回二十回ということにはならないはずだ。

これで当初の目的である魔物が大量に湧いたときのめどは立った。

次に考えるのは、これから魔法中心で戦うかどうかだ。

魔法で戦うなら、デュランダルをしまえる。

デュランダルをしまえば、武器六に使っているボーナスポイントを経験値アップのスキルに回すことができるだろう。

デュランダルをつけるのに使っているポイントは武器六までの計63ポイントだ。

デュランダルをはずせば、各16ポイントずつの必要経験値十分の一と獲得経験値十倍に加えて、32ポイント消費する必要経験値二十分の一か獲得経験値二十倍のどちらかをつけられる。

現状つけているのは必要経験値五分の一と獲得経験値五倍だから、都合八倍も経験値効率が異なることになる。

デュランダルをしまうのは、正直怖い。

デュランダルには、魔物を一撃で屠れる高い攻撃力と、HP吸収にMP吸収もある。

HP吸収があるから多少魔物の攻撃を喰らっても平気だし、いざとなればスキルや魔法を連発することもできる。

デュランダルで戦っている限り、この階層で俺が死ぬことはないだろう。

そのデュランダルをはずすことには恐怖を覚える。
心細いことこの上ない。

安全を取るか、八倍を取るか。

安全第一でいくなら、このままデュランダルを使うべきだ。

いざというときにはもちろんデュランダルが役に立つ。
具体的にどんな場合か、といわれるとちょっと困るが。

可能性だけならいろいろ考えられる。

ものすごく強いボスが突如現れるとか。

あるいは、それは杞憂というべきだろうか。

迷宮とは戦場であり、戦場であるからには、絶対の安全はありえない。

杞憂ではなく、どんなことでも起こりうるのが戦場だと考えておくべきだろう。

しかし逆にいえば、戦場である迷宮に入る以上、相応のリスクは負わなければならないということだ。

掛け金を出さなければ払い戻し金はもらえない。

合理的に判断するなら、経験値効率八倍を取るべきなのだろう。長い目で見れば、経験値を稼ぐことで結局リスクは減らせる。

魔法だけで魔物を倒せることは確認した。

冷静かつ論理的に言えば、デュランダルは必要ない。

魔法だけで魔物を倒せるのなら、デュランダルはオーバースペックだ。

決意して、息をはく。

武器六をはずした。

考えてみれば、魔法中心で戦うといっても、デュランダルはしまいつばなしではない。

MPを消費すれば回復はデュランダルのMP吸収に頼ることになる。

回復薬を買ってくれば別だが、それはもったいない。

運がよければ、いざというときにデュランダルを装備していることだろう。

ボーナスポイントが1ポイント増えていたので、ちょうど必要経験値二十分の一と獲得経験値十倍をつけることができた。

MP全解放に入っていたチェックもはずし、MP回復速度上昇に入れる。表示はMP回復速度二倍に変化した。

少しは役に立ってくれるだろう。

アイテムボックスからワンドとシミターを取り出す。

今まではデュランダルを持っていたので使わなかったが、魔法を使うのならばワンドが有効だろう。

魔法攻撃力が上がるなどの恩恵があるに違いない。

でなければ、杖という武器はそもそも存在しないか、あっても誰も使わないはずだ。

単純な物理攻撃力なら杖は剣にはかなわない。

それでも杖という武器があるのは、杖という武器に物理攻撃力以外の恩恵があるからだと考えてるのが妥当だろう。

まあ、恩恵が詠唱を補助するとか詠唱が速くなるとかだったら、詠唱短縮を取得している俺には関係がないが。

シミターも腰に差す。

一応、念のためだ。

ニードルウッド L V 2

現れたニードルウッドにファイヤーボールをお見舞いした。

気のせいかもしれないが、若干大きな火の球ができたように思う。やはりワンドは有効なのだろう。

火の球が洞窟の中を進んだ。

と、魔物が壁の方へ寄り、火の球を避ける。

ガーン。

いやまあ、魔物だって避けるのは当然か。

一発では倒せないことが分かっていたから、見つけてすぐに撃つたのが間違이었다。

ファイヤーストームと違って魔物を標的に直接指定するわけではないから、こちらが巧く狙ってやらなければならぬのだろう。

すぐに次のファイヤーボールを念じる。しかし巧いかない。詠唱を省略しているとはいえ、魔法は連発することができないよ
うだ。

近づいてくるニードルウッドにようやく一撃当てた。

魔法を撃つのにどうも微妙にレイタイムがかかる気がする。

頭上に火の球ができてから飛んでいくので、その分の遅れもある。

至近距離まで迫った魔物に次の魔法を放った直後、枝が振られる。
ワンドで受け、後ろに下がった。

攻撃を避けつつ、もう一発叩き込む。

振られた枝を避けた。燃えているときに枝が振られるとすごい音がする。

次に左から振られた枝をワンドで受け、もう一撃当てる。
バチバチと木の燃える音がして、魔物そのまま崩れ落ちた。

ファイヤーボールでも四発か。

ファイヤーストームとファイヤーボールは、威力としては大差がないのだろう。

両方とも初級火魔法だしな。

ワンドを使っても回数までは変わらないのかもしれない。そんな
にたいした武器でもないだろうし。

気分は、少し落ち込んだかな、という程度である。

ファイヤーボールはファイヤーストームに比べてやはり消費MP
量が少ない。

ファイヤーストームをあと四発撃っても多分大丈夫だろう。

グリーンキヤタピラー L V 2

次に現れたグリーンキヤタピラーには少し引きつけてからファイヤーボールを撃った。

魔物はもぞもぞと横に動こうとするが、難なくヒットする。

グリーンキヤタピラーは、芋虫の見た目どおり、横の動きは鈍いらしい。

こちらに来る途中にもう一撃喰らわせる。

魔物が迫ってきた。グリーンキヤタピラーの胸元にオレンジ色の魔法陣ができる。

魔物が糸を吐く瞬間、ファイヤーウォールと念じた。

火の壁が燃え立ち、俺と魔物の間に立ちはだかる。

グリーンキヤタピラーが吐いた糸が火の壁にくべられた。軽い音がして糸が燃え尽きる。

横に移動してファイヤーボールと念じるが、発動しない。

手に持ったワンドを振り下ろし、魔物の頭を叩いた。

グリーンキヤタピラーが突っ込んでくる。

ワンドでいなし、体当たりを避けた。

まだファイヤーボールは撃てないようだ。

ワンドで叩くが、次の攻撃はかわすことができず、正面から魔物にぶち当たられてしまう。

ようやくファイヤーボールができた。

火の球を当てると、魔物が燃えたまま突っ込んでくる。

ワンドを押し当て、防いだ。

グリーンキャタピラーが止まったところに、四発めのファイヤーボールを撃ち込む。

炎の中、魔物が倒れた。

グリーンキャタピラーも沈めるのにファイヤーボールが四発かかるようだ。プラス、ワンドでの打撃が二回だが。

デュランダルを使って一撃で倒すのでないと、結構激しい攻防になる。

やはりデュランダルで戦うべきだろうか。

今の俺が優先すべき目的は、レベルアップではない。

ロクサーヌを購入するための資金を獲得することだ。

そのためには、なるべく早く攻略を進め、早く下の階層に進まなければならぬ。

魔法で戦うと一回の戦闘で一分余計に時間がかかるとして、一日に六十回戦闘すれば、一時間迷宮の攻略が遅れることになる。

九十回なら一時間半だ。

現状デュランダルを使えば魔物を一撃で屠れるのだから、次の階層に進むのにレベルがネックになっているわけではない。

目的を間違えてはいけない。

それにデュランダルを出せば安全だ。

い、いかんいかん。

弱気になっている。

キャラクター再設定と念じた。
体当たり攻撃も喰らってしまったし。

あとファイヤーボール四発なら撃てると思うが、ファイヤーストーム四発は自信がない。

自信がないのは考えがネガティブになっているからかもしれないが、ネガティブになっているのはMPの残りが少ないからなので、慎重にいった方がいい。

ボーナスポイントが1あまっていた。

さすがにすごい成長振りだ。

必要経験値二十分の一と獲得経験値十倍が生きているのは間違いないだろう。

デュランダルをつけ、MP回復速度二倍もつける。次はMP回復速度三倍らしい。

獲得経験値と一緒になら、五倍十倍二十倍と進むだろう。

進めていけば、デュランダルが持つMP吸収スキルの代わりになるだろうか。

フォースジョブをはずせばMP回復速度三倍がつけられるが。

まあそこまではする必要もないか。

デュランダルをつけていた方が安全だし。

とりあえずは二倍でがんばってみよう。

魔物を狩ってMPを回復する。

二匹。

こういつとときに限って二匹連れで現れるのはなんとかならないものか。

ジョブ設定とデュランダルをはずした。

冷静に考えれば、レベルが上がったら迷宮入り口の探索者にお金を払って下の階層に連れて行ってもらおうという手がある。

レベルも一つのネックであることに変わりはない。

それに、一時間くらいロスはすぐに取り返せるだろう。

やはり魔法中心で戦うべきだ。

グリーンキャタピラー L V 2

続いて現れたグリーンキャタピラーにファイヤーボールを浴びせる。

さっきのファイヤーウォールがヒントになっていたが、二発めを撃とうとして分かった。

放った火の勢いが強いうちは次の魔法が撃てないようだ。

おそらく、一度に放てる魔法は一つ、ということなのだろう。

前の魔法が残っている間は次の魔法を発動できないのだ。

二発めを当てると、三発めのファイヤーボールを放つ前に追いつかれる。

魔物の胸下にオレンジ色の魔法陣が浮かび上がった。

タイミングを見計らって、ファイヤーウォールを出す。

吐かれた糸が軽い音を出しながらくべられた。

魔法が一度に二つ放てないかどうか実験してみる。

……やはり火の壁が燃えている間、他の魔法は使えなかった。
ファイヤーボールも、二枚目のファイヤーウォールも出せない。
火魔法だけでなく、ウォーターボールもブリーズボールもサンド
ウォールも出せなかった。

燃えている間はワンドで魔物と相對する。

ワンドで攻撃しつつ、体当たりをいなした。

ファイヤーウォールが消えたので三発めのファイヤーボールを撃
ち込む。続いて四発め。

グリーンキヤタピラーが倒れた。

迷宮の洞窟の幅は三メートルくらいある。

対して、ファイヤーウォールでできる火の壁の幅は一メートル半
くらいだ。

一枚しか張れないとなると、洞窟を塞ぐことはできない。

前後を挟まれたときに片側を遮断するというような使い方はでき
ないようだ。

それに、ファイヤーウォールが燃えている十何秒間か魔法を使え
ないのは隙になる。

壁魔法は使いどころが難しい。

ニードルウッド Lv2

洞窟の先で魔物が蠢く。

近づくのを待って、ファイヤーボールを放った。

火が消えるのと同時に二発めを撃つ。

三発めを放つ前に、射程内に捉えられてしまった。

枝を受けながら、三発めを撃つ。

接近されて攻撃を浴びる前に四回魔法を撃てれば攻撃を受けることがなくなるが、そこまで速く撃てるだろうか。

右から振られた枝をワンドで受けた。続いて振られた枝をスウェーして避け、四発めを叩き込む。

燃え上がる火の中、魔物が崩れ落ちた。

気分が少し落ち込んだように感じるが、もう一匹くらいは大丈夫か。

グリーンキャタピラー L V 2

グリーンキャタピラーにファイヤーボールを放つ。

火が消えると同時に二発め。続いてもう一発。

横の動きが鈍いグリーンキャタピラーは遠くからでも攻撃できること、次の魔法が放てるタイミングが分かってきたことから、攻撃を受ける前に三回撃つことができた。

グリーンキャタピラーはこちらを攻撃できる距離まで接近するが、三回燃やされてそのまま倒れる。

個体差があるのか、レベルアップしたので魔法三発で倒せるようになったのか。

レベルアップしたおかげであれば嬉しいが、気分が落ち込んでどうもそうは思えない。

M P 回復速度二倍ではデュランダルの代わりにならないようだ。デュランダルをつけようとキャラクター再設定を念じる。

またボーナスポイントが1ポイント増えていた。

キャラクター再設定をしながら考える。

魔法を使うことのリスクがもう一つあった。

魔法を使っているところを誰かに見られても大丈夫だろうか。

セカンドジョブもジョブ設定もボーナススキルだ。

この世界の人が探索者と魔法使いのジョブを同時に持てるかどうかは疑わしい。

魔法使いは空間魔法を覚えるだろうか。

ワープとダンジョンウォークで移動し、魔法を駆使するのは変に思われるかもしれない。

じっくり観察されれば、詠唱していないことがばれる可能性もある。

特に一階層で会った見習い騎士は俺のインテリジェンスカードを見ているので要注意だ。

やはり魔法ではなくデュランダルを出して戦うべきか。

デュランダルがあれば安全だ。

いかな。

弱気になっている。

デュランダルで戦う理屈ばかりが思い浮かぶ。

デュランダルで魔物を狩り、MPを回復した。

この二階層ではまだ誰とも会っていない。

ここにはあまり人がいないと考えていいだろう。

どこの迷宮でもそうなのか、まだ迷宮が見つかって間もないからなのか、この迷宮の魔物の組み合わせが美味しくないからなのか、二階層が嫌われているだけなのかは分からない。

糸を吐くグリーンキャタピラーが厄介だということも考えられる。

いずれにしても、人に見られる可能性はそれほど高くないだろう。魔法を使っているところを見かけただけなら、単に俺のことを魔法使いだと思って終わりのはずだ。

見習い騎士たちも、一階層でかなりへばっていたから、すぐ二階層には来ないだろう。

多少のリスクは受け入れるべきだ。

ローリスクローリターン、ハイリスクハイリターンが世の中の常である。

せっかく使える魔法を使わないという手はない。

ダンジョンウォークやアイテムボックスは、周りに人がいないことを確認してから使う必要があるとしても。

デュランダルをはずすときに、フォースジョブをやめ、MP回復速度三倍をつけた。

ジョブは、探索者、英雄、魔法使いの三つがあればとりあえずは十分だろう。

加賀道夫 男 17歳

探索者Lv12 英雄Lv8 魔法使いLv5

装備 ワンド 皮の鎧 サンドルブーツ

レベルはすごい勢いで上がっている。
早朝にジョブを獲得したばかりの魔法使いがもうLV5だ。

使っているボーナスポイントは、
必要経験値二十分のーに63ポイント、
獲得経験値十倍に31ポイント、
MP回復速度三倍に7ポイント、
詠唱省略とサードジョブに各3ポイント、
鑑定、ジョブ設定、キャラクター再設定で3ポイント、
の計110ポイントである。

黄信号

二階層の本格的な探索を開始した。
ときおりはデュランダルでMPを回復しつつ、基本的には魔法で魔物を倒していく。

ニードルウッド L V 2

グリーンキャタピラー L V 2

今度は都合よく、デュランダルを出していないときにニードルウッドとグリーンキャタピラーの二匹連れが現れた。

見つけると同時にファイヤーストームをお見舞いする。

ファイヤーストームは魔物に確実に当たるので、引きつける必要がない。

火が消えると同時に二発めを念じた。

続いて三発め。

グリーンキャタピラーは三発めで斃れる。

ニードルウッドだけが残った。

振られた枝を受け、四発めはファイヤーボールを放って沈める。

ファイヤーストームとファイヤーボールは、魔物一匹に対する火力としてはやはり大差がないらしい。

グリーンキャタピラーは三発で倒せるようになったが、ニードルウッドには四回撃つ必要がある。

魔物の数が多いとファイヤーストームの消費MPが格段に増えるということもなさそうだ。

大量の魔物が湧いて全体攻撃魔法四発で全滅させられるなら効率がいい。

一階層のように魔物が大量に湧く小部屋はないものか。

と期待しているときに限って、そんな小部屋が出ないのはお約束なのか。

魔物が大量に湧くトラップは稀のようだ。

突き当りをチェックして小部屋を確認しつつ、ちまちまとデユランダルを出したりしまったりしながら、魔物を狩っていった。

一度迷宮を出た後、昼すぎからも二階層に入る。

グリーンキャタピラーはウォーターボールでもブリーズボールでもサンドボールでも三発だった。

特に弱点となる属性はないみたいだ。

ニードルウッドもブリーズボールとサンドボールは四回で倒れている。

火魔法が弱点ということもないらしい。

ウォーターボールは、前に当たったときにダメージを与えていた形跡がなかったので、試していない。

試してはみたいのだが、なかなかそのチャンスがない。

魔法を四回も放とうとすれば、どうしても敵の攻撃を受けてしまう。

四発撃つたときに倒せなかったとあわてふためくことを考えれば、テストはデュランダルを装備しているときに行うのが望ましいだろう。

しかし、デュランダルを出しているのはMPに余裕がないときだから、四発も五発もウォーターボールを撃ちたくはない。

デュランダルを装備しているときにニードルウッドを含む二匹連れで現れてくれたら、一匹をデュランダルで狩ってMPを回復しつつ、一匹に魔法を放つことができるのだが。

そうそう都合よく出てきてくれるものでもなかった。

ニードルウッド L V 2

ニードルウッド L V 2

ようやく出てきてくれたのは、そろそろ今日の探索を切り上げようかというころだ。

左側の魔物にウォーターボールを撃ち込む。

左のニードルウッドが半歩遅れたところに、二発めを当てた。

薄暗い迷宮内だ。周囲を赤く照らす火魔法と違って、ウォーターボールでは次にいつ放つていいかの判断が難しい。

ちなみに、魔物からも見えにくいなら遠くから撃つても避けられないのではないか、という希望的観測はきつちりと裏切られた。

グリーンキャタピラーがブリーズウォールを避けたように、何故か分かるようだ。

デュランダルをかまえて足を踏み出す。右側のニードルウッドを
伐り倒した。

左側の魔物が振った枝をぎりぎりで避ける。

三発めのウォーターボールを念じた。

魔物は倒れない。

レベルアップのおかげで、今ではニードルウッドもファイヤーボ
ール三発で倒せるようになっていた。

ワンドが効いていた可能性もあるので、四発めも浴びせてみる。

元気に枝が振られた。受け損なって喰らってしまつた。

やはり水魔法に耐性があるようだ。

一閃、デュランダルをなぎ払つた。

魔物が上下に切り裂かれる。

リーフ

ニードルウッドが煙となって消え、幸運にもリーフが残つた。

グリーンキャタピラーは今のところ糸しか落とさない。

魔物によってはレアドロップのないものもあるようだ。あるいは、
確率が違うのか。

リーフも出たことだし、今日の探索を打ち切ることにした。

ワープと念じ、冒険者ギルドの壁を思い出す。

他にも移動できる場所はあるのだろうか、移動していいものかど
うかがよく分からない。

あまり変な場所には行かない方がいいだろう。

宿屋であるベイル亭ロビーの内壁に移動してくる人もいたから、あそこも使えるが、使用しない方がよい。

建物へ移動する魔法は冒険者のフィールドウォークだろう。

冒険者でないのにフィールドウォークが使えては変に思われてしまう。

冒険者になつたのだと強弁することも可能だが、インテリジェンスカードをチェックされれば俺が冒険者でないことは一発でばれる。

冒険者ギルドの建物内部に出た。

喧騒というほどではない程度に人のいる落ち着いた雰囲気心地よい。

孤独な戦場から一瞬で移動してきただけに、なおさらありがたみを感じる。

「帝都へ片道の人、いませんか」

冒険者ギルドの中に出ると、同じように壁から出てきた人が客の募集をしていた。

帝都か。

行ってみるか。

募集している人も美人だし。

「いくらかかる」

三十パーセント値引をつけ、訊いてみる。

四十代のおばちゃん冒険者だ。

ただし、エルフ、。

見た目二十歳そこそこである。
年齢は見なかったことにしよう。

「通常は銀貨二枚、片道なので銀貨一枚の固定料金です」
「うむ」

三十パーセント値引は多分効いてないみたいだ。
リュックサックを下ろして巾着袋を取り出し、銀貨を一枚渡した。

「そのリュックサックくらいなら大丈夫でしょう。友に任せし信頼の、心のきよむ誠実の、パーティー編成」

エルフの冒険者がパーティー編成呪文を唱えた。

俺の脳裏に、パーティーへの編入を受諾するかどうか、確認メッセージが浮かぶ。

イエスと念じると、すぐに消えた。

なるほど。パーティー編成はこんな風になっているのか。

迷宮の入り口でも同じようにパーティーを編成していた。

移動魔法を使って移動できるのは同じパーティーのメンバーだけなのだろう。

リュックサックなら大丈夫だと言ったから、何でも運べるというわけではないようだ。

リュックサックは手荷物扱いというところか。

アイテムボックスの中身は大丈夫だろうか。

などと心配している余裕もなく、エルフの冒険者がフィールドウオークを唱える。

目の前の冒険者ギルドの壁が黒く変色した。

迷っている時間はない。

考えてみれば、ダンジョンウォークでもワープでもアイテムボックスの中身は大丈夫だった。フィールドウォークでも問題ないだろう。

俺も遅れないようについていく。

壁の向こうには、大きな部屋が広がっていた。

基本的な構造は同じだから、帝都の冒険者ギルドなのだろう。ベイルの町の冒険者ギルドの三倍くらいの大きさだ。

カウンターも十列分くらい並んでいる。

パーティー編成呪文の詠唱が聞こえるとともに、パーティー解放と脳裏に浮かんだ。

一緒に来たもう一人の冒険者が会釈して去っていく。

彼は、自分がパーティー編成呪文を唱えると、続いてフィールドウォークを唱えて黒い壁を出し、帝都の冒険者ギルドにいた五人を連れて入っていった。

あの冒険者はベイルの町に行ったことがなかったのだろう。

そこで、ベイルの町に行ったことのあるエルフの冒険者に一度ベイルの町まで連れて行ってもらい、帰ってきてから、自分のパーティーを連れてベイルの町に行ったのだ。

「そういえばこの前、魔法使いがフィールドウォークをやっていたが、魔法使いでもフィールドウォークを使えるのか？」

せっかくの機会なのでエルフの女性に訊いてみる。

「さあ。聞いたことはありませんが。見間違いじゃないですか」

「そうか。そうだろうな」

「では、私はこれで」

エルフの女性も立ち去った。

やはり魔法使いがワープやダンジョンウォークを使うのはまずそ
うだ。

もっとも、本当に興味はないという感じだった。他人のジョブや
スキルにいちいち興味は持たないのかもしれない。

俺がイケメンだったら喰いついてきたのだろうか。
くっそー。そういうことかあ。

俺は一度冒険者ギルドの外へ出る。

帝都には建物がひしめいていた。

レンガの色そのままの茶色っぽい建物だ。

近代的なビルではないだけに、かえって圧迫感がある。

古代ローマとか全盛期のバグダッドとかに迷い込んだ感じだ。

もちろん行ったことはないが。多分、こんな感じだったのではな
いだろうか。

目の前の道は、広く、まっすぐに延びている。

中世の都市は敵を通さないように道が入り組んで作られている、
という話が歴史の副読本に書いてあった。

道がまっすぐな帝都は、それだけ平和なのだろう。

日はまだ高い。

ベイルの町とは時差があるのかもしれない。

別に観光に来たわけでもないの、すぐに冒険者ギルドに戻る。左側に張り紙を出しているボードがあった。

近づいてみるが、やはり読めない。

キョロキョロと辺りを見回すと、綺麗なお姉さんがにこやかにやってくる。

「お読みいたしましょうか」

さすがは帝都のギルドだ。

代読屋のレベルが違う。優雅で上品だ。

年齢は二十一歳の村人。ロクサーヌのような目の覚めるほどの美人というわけでもないし、服も紺色のだぼだぼの衣装だが、華やかな雰囲気がある。

「うむ」

「六分で十ナールになります」

値段はベイルの町の探索者ギルドと一緒にらしい。

リュックサックを下ろし、銅貨十枚を出してお姉さんに手渡した。渡すときに指先が触れて、ちよっとドキドキしてしまったのは仕方がない。男の子だもの。

「頼む」

「では、この時計が落ちるまでになります」

砂時計のシステムまで一緒のようだ。

お姉さんの腰元を合法的にガン見できるチャンス。

とはいえ、いつまでも見ているわけにはいかない。
くそつ。だから時間課金なのか。

「ブランチの買取をしてくれるところがあるか」
「えつと。冒険者になられたばかりですか？」

初心者がするような質問だったのだろうか。
冒険者ですらないが。

「どうしてだ？」

「買取の募集が出るようなアイテムは決まっています。より強い魔物が落とす手に入れにくいアイテムなどです。ブランチはギルドで買えば在庫がいっぱいあります。わざわざ買取の依頼を出す人はいないでしょう」

質問返しをしてみると、親切に教えてくれた。
なるほど。

ブランチの買取依頼なんかあるはずがない。それを探すのはものを知らないよほどの初心者ということか。

「では、糸なんかもないな」

「ありませんね」

「毒消し丸を買い取ってくれるところもないか？」

旅の恥はかき捨てだ。

どうせ初心者だとばれたのだから、この際、全部聞いてしまおう。

「ギルドで買えますから」

「ワンドなんかはギルドでも買取してくれるのか？」

「魔物の残したアイテムでも、装備品や腐る食材はギルドでは買いません。装備品は武器商人などに、食材は、料理屋などの売り先を探すか、自分で消費するか、市の立っている日に売ることになります。アイテムボックスに入れておけば腐りませんから」

食材はアイテムボックスに入れておけば腐らないと。
いいことを聞いた。

「魔物の討伐の依頼なんかが出ることは？」

「魔物の討伐は領主の騎士団や戦士団が行う業務です。騎士団のメンバーとして冒険者を雇う募集がありますが。お読みしましょうか」

まあ魔物の討伐などで稼げるようなら、奴隷商人がそう教えてくれただろう。

どこの馬の骨とも分からないようなやつにおいしい稼ぎを回したりはしないということか。

「いや。何か単発の仕事を依頼しているようなものは？」

「フィールドウォークで案内を行う仕事があります」

フィールドウォークで稼ごうにも、俺はベイルの町とこの帝都しか知らない。

そもそもフィールドウォークじゃなくてワープだしな。どこまでごまかせるのかという問題もある。

仕方がないので、残りの時間は買取依頼が出ているアイテムを教えてください。

クリアベツ甲、逆鱗、遮蔽セメント、銀の糸。

フカヒレとかサーロインとかは食材だろう。そんなアイテムもあ

るのか。

「時間になりました。続けますか」

「いや。もういい。ありがとう」

延長よりもアフターがしたい。

「アイテムの買取なら、ここよりもクーラタルの探索者ギルドに多くの依頼が出ていると思いますよ」

「クーラタルの探索者ギルドか。分かった」

分かっていないが。

名前を聞いたのも初めてだ。

わざわざ教えてくれた親切なお姉さんと別れる。

その後、カウンターで買取をもらった。

「一番安い疲労回復薬は何になる」

せつかくなのでカウンターのお姉さんに訊いてみる。

「強壮丸ですね。六十ナールになります」

「一番安い傷薬は」

「滋養丸。こちらも六十ナールです」

結構高い。

デュランダルの代わりにほいほい使ったら赤字になる。結局買わずにベイルの町の冒険者ギルドに帰った。

周りに人がいないのを見計らって、「ムニヤムニヤ、フィールド

ウォーク」とつぶやく。
フィールドウォークの呪文は、聞いたけど、覚えられなかった。
そして、頭の中ではワープと念じる。ベイルの町の冒険者ギルドの壁を思い起こした。

目の前に出てきた黒い壁に入る。

これで他人の目にはフィールドウォークで移動したように見えるだろう。

一瞬の間を抜け、ベイルの町の冒険者ギルドに出た。
ベイルの町は夕方だ。

帝都はベイルの町より西の方にあるらしい。

ちなみに、糸の買取価格は十ナールだった。

グリーンキャタピラーは、糸を吐いてきて厄介なのに、ニードルウッドよりお金にならない。レアドロップもないし。

確かに、魔物の組み合わせとしてはよくないのだろう。

今日の総売上は、千百四十四ナールである。

計算間違いではない、はずだ。昨日の四分の一しかっていない。

ただし、生薬生成を行っていないので、リーフ四枚がアイテムボックスに入ったままである。

リーフ四枚で毒消し丸が四十個できる。毒消し丸四十個で千ナールになるから、昨日の半分か。

今日は魔法の使い勝手をテストしていたことが中心だったせいもある。

デュランダルをしまったことで探索に時間がかかるようになったことも影響しているだろう。

ベイル亭に帰った。

「三日分、頼む」

巾着袋を取り出しながら旅亭の男に告げる。

初日に払った宿代は、今朝までの分だ。

「はいよ」

「どこかに両替商のようなところはないか。銅貨ばかり溜まってな」「そういうところはないな。別に銀貨じゃなくて銅貨百枚で払ってくれてもいいし」

両替商はないらしい。

両替商があつて、金貨を三割引の七千ナールで売ってくれ、三割増しの一枚一万三千ナールで買ってくれたら、濡れ手に粟でもうけることができたのに。

考えてみれば、金貨一枚を銀貨百枚と交換したのでは商売にならないか。

両替商があつたとしても手数料を取られるから、この手で稼ぐのは無理だろう。

銀貨五枚と銅貨百九十二枚を置く。

これで銅貨の数をかなり減らせた。

「それと、夕食の後でお湯を頼む」

「ええつと。宿代と夕食つき三日分にお湯だから、六百八十六ナールでいい。特別サービスだ」

何故か銅貨六枚が返ってくる。
お湯が二十ナールだから、三割引が効いたということか。
よく分らん。

「インテリジエンスカードのチェックはいいのか」
「チェックは十日おきだ。二日前に確認したから、まだ先だな」
「夕食は、もう頼めるよな」
「ああ。行ってきたな」

俺にとって、夕食の時間は数字を勉強する時間だ。
昨日は一を確認した。
今日は何を選ぶか。

「いらっしやいませ。今日はサーロインが入ったから、一がお勧めですよ」

食堂に入ると、旅亭の女性に四つあるメニューのうちの一つをお勧めされてしまった。

帝都のギルドでも聞いたサーロインという食材があるようだ。
一の食事には小ぶりだがステーキが入っている。あれがサーロインだろう。

「……では一で」
「ありがとうございます」

見たら食べたくなくなってしまった。
負けた。

四をお勧めにしてくれないものか、と思ったが、お勧めにしたい

順に一から並んでいるのだとしたら、順当か。
明日はリベンジしてやる。

「三で頼む」

次の日の夕食は、お勧めも言っただけだったので、三にした。

「かしこまりました。お飲み物はハーブティーでよろしいでしょうか」

よし。正解だ。

これで部屋の鍵にも使われている三と一の数字は判明した。

夕食のメニューは四つあるので、あと二つは二と四だろう。
どうやって確認するか。

夕食を取りながら作戦を練る。

などとぼんやり考えているのは、現実逃避だ。
分かっている。

実のところ、もっと大きな問題がある。
本当はそつちを考えなければいけない。

今日の総売上は三千三百二ナールだった。昨日の分のリーフを含
んでの価格だ。

リーフの分を考えれば昨日と同じ程度。二階層をうろつろしてい
ただけだから昨日とそんなに変わらないのはしょうがない。
しょうがないが、金貨一枚は遠い。

十日しかないのにすでに三日すぎてしまっている。

期日までにお金をそろえることができるだろうか。

正直、今のペースでは厳しい。

迷宮には、宝箱とか、その手のものもないようだ。

もつと下の階層に行けばあるのか、あるけども俺の気づかない方法で隠れているのか、そもそもそんなものはないのか。いろいろと考えられる。

本当に迷宮で一攫千金ができるのだろうか。

仮にできたとしても十一日後とかではしょうがない。

これからは時間との勝負にもなるだろう。

加賀道夫 男 17歳

探索者LV21 英雄LV17 魔法使いLV19

装備 シミター 皮の鎧 サンドルブーツ

レベルだけは順調に上がっていつているのが唯一の救いだ。

俺は自分の腕を見ながら、ため息をついた。

赤信号

翌日の迷宮探索は二階層の途中にある多分魔物の出ない小部屋からスタートした。

このまま迷宮にこもるだけでロクサーヌを手に入れるだけのお金を獲得できるかどうかはかなり疑問だが、深夜なので他にやることもない。

ベイル亭の玄関を出たすぐ横の壁から迷宮内にワープする。

二階層の探索は結構進んでいたのか、迷宮に入ってすぐ、ボス部屋に隣接するであろう小部屋にたどり着いた。

深夜のせいか、順番を待っている人は誰もいない。

ボスと戦うときはデュランダルを使うべきだろう。

デュランダルを出し、MP回復速度五倍をはずしてフィフスジョブをつけ、小部屋の奥に向かった。

つけるジョブは戦士と剣士だ。

サードジョブのままなら必要経験値十分の一をつけることができるが、やめておく。

ボス戦なので経験値よりも安全を優先した方がいい。

何かのときに魔法やラッシュが役に立つかもしれないし。

奥の扉はすぐに開いた。

気を引き締めて、隣の部屋に入る。

煙が集まり、魔物が現れた。

名前のとおり、グリーンキヤタピラーの白いやつだ。一回り大きい。

一階層のウドウッドもそうだったが、その階層に現れる魔物と近しい種類のものがボスになるのだろうか。

などと考えていると、ホワイトキヤタピラーの胸部の下にオレンジ色の魔法陣ができた。

やば。糸を吐くつもりだ。

グリーンキヤタピラーとは別の魔物だから違う特殊攻撃をしてくるということも考えられるが、同じ芋虫だから口から何かを吐き出す可能性が高いだろう。

魔物の口元を注視しながら、ファイヤーウォールと念じる。

ホワイトキヤタピラーが糸を吐いた。やっぱり糸だ。

ホワイトキヤタピラーが糸を吐いた直後、俺の正面に火の壁ができる。

俺にかかるはずだった糸がファイヤーウォールにくべられた。

糸の燃える音がかすかに響く。

さっそく魔法が役に立った。

ソードジョブのまま魔法使いをはずして戦士にしていたら、どうなっていたことが。

横に移動して、デュランダルで攻撃する。

ラッシュで追撃を加えたところで、また魔法陣が出てきた。

一歩下がり、魔物の動きを見ながらファイヤーウォールと念じる。

馬鹿め。何度やっても同じことだ。

もつとも、こっちは一人である。

ボスだから多分長期戦になるだろう。

敵の狙いとして、まず糸を吐いてこちらの動きを封じようとするのは正しい戦略だ。

逆にいえば、ホワイトキャタピラーの吐く糸に絡めとられてしまつてはまずい。

満足に動けないところをボコボコにされるだろう。

その前に倒す。

横に移動して、デュランダルをスイングした。

続いて剣を振り上げ、ラッシュと念じて斬りつける。

デュランダルが魔物の頭に叩きつけられた。

まだ倒れないのか。

さすがはボスLv2か。

いったん引いて、足元に魔法陣が出ないか観察する。

ホワイトキャタピラーはしかし、糸は吐かず体当たり攻撃をかましてきた。

あわてて避けようとするが、右肘に喰らってしまう。

痛みを堪え、魔物の横つ腹へデュランダルをスイングした。

ようやくに剣が魔物を切り裂く。ホワイトキャタピラーが倒れ伏した。

絹の糸

魔物が煙となって消え、光沢のある糸が残る。
ただの糸よりは高級品だろう。

ホワイトキャタピラーは結構賢いようだ。

最初はこちらの足を止める作戦を行い、余裕がなくなると直接攻撃に切り替えた。

知性があるのか。

もっとも、単純なプログラムで実現できそうではある。

デュランダルで一撃だと分かりにくいのが、グリーンキャタピラーも同じような行動パターンだったかもしれない。

知性と呼べるほどでもないか。

ファイヤーウォールで無効化された特殊攻撃を二度も行ったし。
あるいは二度やって駄目だと悟ったから物理攻撃に切り替えたのか。

部屋の中を見渡す。

別に何も無い。

俺の前に通ったパーティーも全滅することなく通過したようだ。

俺は隣の部屋へ行き、三階層へと移動した。

三階層の入り口となる小部屋も、一階層二階層とほぼ同様だ。
後ろに黒い壁があって、道が三方向に延びている。

二階層のボス部屋は、結局正面の道が近道だった。

一階層は右、二階層は正面だ。

なら三階層は左だろう。

デュランダルは持ったまま、サードジョブにして左の道に入る。

ニードルウッド L V 3

最初に出てきた魔物はニードルウッドだった。

三階層はL V 3なのか。

駆け寄ってデュランダルを振り落とす。

デュランダルだとL V 3でも一撃だ。

魔物がL V 3で強くなっているのだとしても、こちらも順調にレベルアップしているのだから、このくらいでなければ困る。

コボルト L V 3

次に現れたのが、この階層の魔物であるらしいコボルトだ。

濃い青色をした小人。大きな目と尖った耳、牙もはえている。顔がでかい。まさに二頭身、体の半分くらいが顔だ。

右手にはナイフを持っている。あれが攻撃武器か。

刃物は怖い。

魔物の体当たりを喰らってできた擦り傷はデュランダルのHP吸収で消えたが、刃物の切り傷はHP吸収で消えるだろうか。

切り傷なら大丈夫かもしれない。しかし、切断されたらどうだろうか。

腕を切り落とすのは大変でも、指くらいなら落とせそうだ。
あるいは、内臓をえぐられたら。神経が切れたら。
流れ出た血液はHP吸収で復活するのだろうか。

いろいろと不安になる。

もちろん試してみたくはない。

刃物を持った敵には先手必勝だ。

俺はファイヤーボールと念じた。

頭上に火の球ができる。

遅っ。

コボルトの動きは鈍かった。

火の球が近づくまで二、三步しか動けていない。

まごまごしている魔物を火球が捉えた。

コボルトが炎に包まれ、倒れる。

弱っ。

コボルトはファイヤーボール一撃で沈んだ。

弱い。弱いよ、コボルト。

ファイヤーボールで一撃はないだろう。

グリーンキャタピラーレベル2で二発、ニードルウッドレベル2だと

三発は耐えるのに。

コボルトソルト

コボルトが煙となって消えると、白い牙が残った。白い牙、といえば聞こえはいいが、名称的にただの塩なんじゃないだろうか。

レベルが上がって余裕があるので、アイテムボックスに突っ込む。

アイテムボックスは、一応人がいないことを確認しながら出した。

今、アイテムボックスには金貨三十三枚に加えて銀貨も二十一枚入れている。

リュックサックに背負うよりアイテムボックスに入れた方が安全だろう。

人前で出すのは呪文を唱えるのが面倒なので、アイテムボックスの銀貨は使わないかもしれないが。

アイテムボックスの中身を盗むような魔法はない、と思いたい。

三階層の敵と一通り当たるまでは、と思ってデュランダルは出したままできたが、この弱いコボルトが相手なら必要ないだろう。

俺はデュランダルをしまった。

サードジョブのまま、MP回復速度五倍をつける。

グリーンキャタピラー L V 3

コボルト L V 3

次に出てきたのは二匹連れだ。都合がいい。

発見すると同時にファイヤーストームと念じた。火の粉が二匹の魔物に襲いかかる。

コボルトはやはりそれだけで倒れた。

残ったグリーンキヤタピラーにファイヤーボールをぶち込む。
魔物が劫火を耐えた。

グリーンキヤタピラーLv2は二発で沈んだが、Lv3だと二発では足りないようだ。

Lv2からLv3でやはり強くなっているらしい。

近寄ってくる芋虫に三発めをお見舞いする。

最初の一撃が引きつけてからではなくファイヤーストームだったので、三発めも余裕で放てた。

グリーンキヤタピラーが倒れる。糸を残し、煙となって消えた。

コボルトは弱い。

二階層のグリーンキヤタピラーよりも弱い。

何か強力な魔法を撃ってくる可能性もなくはないが、旅亭の男にも騎士にも、三階層のコボルトは残念な魔物扱いされていた。

本来なら一階層にでも出てくるべき初心者向けモンスターなのではないだろうか。

弱いからといって低階層に出てくるべき理由があるかどうかは分からないが。

実際出てこないのだから、そんな理由はないのだろう。

現実はそのようなものであるのかもしれない。

それに、俺の場合限定でいえば、コボルトが三階層でよかったとも思う。

コボルトは、顔がでかいし青くて気持ち悪いが、やや人間に似ている。最初から人型の魔物を相手にしていたら、冷静には対処できなかったかもしれない。

ニードルウッドは明らかに植物だし、グリーンキャタピラーは芋虫だ。

徐々に慣れていくことで、コボルトにも対処できているのではないだろうか。

また、コボルトは刃物を持っている。

刃物を持った敵と対峙すると、どうしても恐怖心が先に立つだろう。

迷宮や魔物にも少し慣れ、何度も戦闘を繰り返してレベルが上がった今だから、その恐怖に打ち勝っているのではないだろうか。

一階層の魔物がコボルトだったら、どうなっていたか分からない。そのときはそのときでどうにかなったのかもしれないが。

コボルト L V 3

火属性が弱点という可能性もある。次は水魔法を放ってみた。ウォーターボールでも一撃だ。

弱いということはこっちが得る経験も少ないだろう。効率的には問題がある。

ジャックナイフ 片手剣

コボルトが倒れると、今度は持っていた刃物が残った。折りたたみナイフらしい。

敵が持っていると恐ろしく感じるが、小型のナイフだ。

折りたたんで刃をしまう。

戦ってみると、コボルトはジャックナイフをよく残した。

ニードルウッドがリーフを残すのは十匹に一匹くらいだが、ジャックナイフは三分の一くらいの確率で残る。

魔物によって落とすアイテムの確率は異なるらしい。グリーンキヤタピラーははまだ糸しか残さないし。

ジャックナイフの売値がどのくらいになるかは分からない。

あまり高くないだろう。

ただのナイフだし、その上コボルトのドロップアイテムだ。

弱いが残すアイテムが高く売れるというのなら、残念な魔物ではない。

思ったとおりだと判明したのは、冒険者ギルドに行ったときだ。俺は、宿屋に戻って朝食を取った後、冒険者ギルドに向かった。

「コボルトソルトの買取はできるか」

カウンターのアラサー女性に訊いてみる。

しかし、何を売ってくるかを見れば、こちらの迷宮探索状況はギルド側に筒抜けだな。

今のところ、別に知られて困るようなものでもないが。

「はい、できます。ギルドで買取を行っているアイテムの中で、一

番安いものですね」

「具体的には」

「一本四ナールです」

安っ。

落ち込んだ俺を見て、アラサーの女性が笑った。

その笑顔はプライスレスだ。

「うむ」

しょうがないので、コボルトソルトを全部トレーに載せる。

三割アップが効くので五本単位で売れば一ナールの得だが、それでも一ナールだ。そこまでする気力はない。

「ギルドではジャックナイフの買取も行っております」

アラサーの女性が告げてきた。

やはりこちらの状況は筒抜けか。

コボルトソルトとジャックナイフを一緒に持ち込む冒険者が多いだけかもしれないが。

「装備品は駄目だと聞いたが」

「装備品の中でもジャックナイフだけは扱っております。数が多いので、鑄潰して銅貨を作る材料にするそうです」

ジャックナイフは赤銅色ではなく普通に白銀色だったが、銅でできているのだろうか。

「ちなみに、買取価格は？」

「一本十ナールです」

安っ。

まあ小さいものだし、一本のジャックナイフから百枚も二百枚も銅貨は作れないだろう。

価格はこんなものか。

「分かった。八百ムニヤムニヤ、アイテムボックス、オープン」

アラサー女性に聞こえないよう、横を向いて小さな声で呪文を唱える振りをした。

八百のお宝というよりは、八百屋の長兵衛さん、略して八百長だ。ジャックナイフを取り出してトレーに載せる。

「それでは少々お待ちください」

しばらくしてアラサー女性が持ってきたお金は八百八ナールだった。

ほんとに八百か。

弱いだけあって、コボルトはやはりお金にならない。

遅い弱い安いの三拍子だ。

と同時に、期限までにロクサーヌを購入する金額を用意することに赤信号が点った。

ロクサーヌを獲得するための資金を迷宮で稼ぎ出すことは無理だと判断すべきだろう。

コボルトが主体の三階層でお金を稼げないことは明白だ。

ならば下の階層に進めばいいかというと、そう甘くはない。

三階層は半分がコボルトだが、ニードルウッドやグリーンキャタピラーも出る。

一階層のニードルウッドが三階層に登場するのなら、三階層のコボルトだって四階層五階層に現れるだろう。

二日に一階層ずつ攻略するとしても、期限までには六階層にしか進めない。

確実にコボルトが足を引っ張る。

迷宮で荒稼ぎすることは絶望的だ。

迷宮入り口の探索者にお金を払ってもっと下の階層に連れて行ってもらおうという手はある。

しかし、下の階層に行ったからといって、ロクサーヌを購入するだけの金額を確実に稼げるという保証はない。

第一に、コボルトの出現で下の階層へ行けばより稼げるだろうという期待が崩壊した。

第二に、危険性を考えれば一足飛びに進むわけにはいかない。

グリーンキャタピラーはLv2からLv3で強くなったから、下の階層へ行けば魔物が強くなることはほとんど確実だ。

四階層や五階層で足を取られないとも限らない。

第三に、三日前の時点で四階層までしか探索が進んでいなかったから、進むとしても、それほど下の階層までいけるわけではないだろう。

迷宮で稼ぐ以外の手段を考えた方がいい。

そちらに力を注ぐべきだろう。

リーフで稼ぐ手も考えたが、どうやら無理っぽい。

毒消し丸は一個二十五ナール、三割アップが効くから十個三百二十五ナールで売れる。

リーフをギルドへ売る価格は八十ナール、倍額が相場だと代読屋の女性が言っていたので、百六十ナールで買い取ることができれば、リーフ一枚から毒消し丸十個が生成できるから、百六十五ナールの儲けとなる。

一日に百枚近くも集められれば、優に金貨一枚以上を稼ぐことが可能だ。

しかしギルドのアラサー女性に訊いたところ、リーフはギルドでは買えないらしい。

冒険者ギルドや探索者ギルドで買えないだけでなく、買取募集の依頼を出すこともできないという。

薬師ギルドとの取り決めで、薬の材料となるアイテムはすべて薬師ギルドに回す契約になっているそうだ。

そして、薬師ギルドがギルド員に分配するのだという。

それではしょうがない。

俺自身がどこかのギルドに加入するのは慎重になった方がいいし、入れたところで一日に百枚もの分配は受けられないだろう。

百枚も分配されたら薬草採取士はみんな大金持ちだ。

まあ、薬草採取士が我も我もと買取依頼を出したら收拾がつかなくなる。

参入障壁を作って、新参者が荒稼ぎすることはできないようにしているわけだ。

世の中はうまくできている。

リーフで稼ぐことは無理のようだ。

迷宮やリーフで稼げなければ、どうするか。

その選択肢は、一番最初からあった。

賞金首、ということになる。

午前は、迷宮に入らずベイルの町の中を歩くことにした。

見かける人ごとに鑑定をして、ジョブをチェックする。

鑑定が使えるのは大きなアドバンテージだ。

誰が盗賊か、見れば分かるのだから。

正直、賞金稼ぎは気乗りしない。

しないが、鑑定をさせる俺にはかなり強みのあるビジネスであることは間違いないだろう。

ベイルの町を出歩く人に、盗賊はいなかった。

午前中から街中を歩いたりはしないようだ。

ただ、盗賊を見つけたとしてどうするか。

人を殺すことには抵抗がある。

魔物を殺すことには慣れたが、倒せば煙となって消える魔物とはやはり異なるだろう。

もちろん、賞金を稼ごうと思ったら、やらなくてはいけないわけだが。

北の方にあるというスラム街にも行ってみる。

南の方や中心部は大きかったり綺麗な建物が並んでいるのに、北に行くにつれて家がだんだんぼろくなった。

確かに貧乏くさい。

どこからがスラム街という明瞭な区別はないみたいだ。

いや……。

一歩足を踏み入れて分かった。

明確に異なる。

ここから先がスラム街だ。

匂いが違う。人が違う。空気が違う。

建物はさらに汚くなり、よどんだ空気が辺りを支配していた。路上生活者もいるみたいだ。

道のかなり先に子どもが立っている。

何をするでもなく、どこを見るでもなく、ボーっと突っ立っていた。

道端で遊んでいるのではなく、ストリートチルドレンの類だろう。

ここはやばい。

初めてだからそう思うだけかもしれないが、第六感が警鐘を鳴らした。

この雰囲気は危ない。

絶対に危険だ。

コンビニの駐車場でヤンキー座りしている兄ちゃんとか、ここに比べたら可愛いもんだから。

俺はただちに回れ右をしてスラム街を後にする。

安全と思える場所まで早足で避難した。

少し戻り、東側に回り込む。

東には娼館があるらしい。スラムとはいえ娼館があるなら、男が
出歩いてても不自然ではないだろう。

行く途中に、人だかりがあつた。

大勢の人が道に集まっている。

何だろう。

鑑定をしながら俺もその輪に加わつた。

行列を見るととりあえず並んでみたくなるのは何故だろうか。

人は道沿いに並んでいる。道の向こうに空き地があり、誰か倒れ
ていた。

皮の鎧 胴装備

鑑定してみると、名前やジョブではなく皮の鎧と浮かぶ。

……つまり死んでいるようだ。

死体は鑑定できないのだろう。

「ありゃあ盗賊だな」

「なんで分かるんですか」

人ごみの左の方で、おっさんの冒険者と商人がブラヒム語で会話を
していた。

「左手が切り取られている。三十分出てこないからな」

あまり見る気もしないが、倒れている人の左手がないらしい。
インテリジェンスカード目当てということか。
インテリジェンスカードは死後三十分経つと自然に排出されるの
だった。

被害者の身元を隠すために持ち帰ったとも考えられるのではない
か、と思ったが、まあ口にはしないでおく。

「ちょっと通してください」

誰かが伝えたのだろう。そこへ騎士団の面々が到着した。

美人騎士や見習い騎士もいる。

騎士団には治安維持の役目もあるのだろう。

「盗賊か。おまえたち、死体置き場に捨てておけ」
「はっ」

美人騎士はしかし、遺体を一目見ただけで命じた。
殺人事件なのに、その程度の扱いなんだろうか。
あまりにもぞんざいだ。

「あれは盗賊だ。全員解散」

美人騎士は、野次馬にそう告げると、左手を上げて振る。
野次馬を追い散らし、大またで帰っていった。
顔を知っていたのだろうか。

美人騎士が去ると、ざわざわと野次馬に喧騒が戻る。

「賞金稼ぎでしょうか」

「どうか。ま、仲間割れってところじゃないか」

商人とおっさん冒険者も会話を再開した。

盗賊ではインテリジェンスカードを持っていても換金できないが、誰か他の人間に頼めば済む話か。

スラム街の路上生活者なら喜んで応じるだろう。

「町を追い出された盗賊が復讐しに帰ってきたらしい」

商人たちの会話を聞いていると、後ろの方で誰かが話すのが聞こえた。

盗賊捜し

町を追い出された盗賊が復讐しに帰ってきた。

文字どおり小耳に挟んだだけだが、捨ておけない情報だった。村を襲い俺が屠った盗賊たちは、元々この町のスラムを拠点にしていたらしい。

町を追い出された盗賊というのは、彼らの仲間だろうか。もしそうだった場合、復讐を遂げる相手とは誰だろうか。

胆が冷えるのを感じた。

冷静に考えて、復讐する相手が俺である可能性は小さい。

第一に、町を追い出されたのがそもその原因だろうから、復讐するならそつちが先だ。

第二に、村を襲って返り討ちにあったのだから、逆恨みもいいところである。

第三に、多分写真がないこの世界で俺の顔が簡単に判明したりはしないだろう。

とはいえ安心はできない。

町を追い出されたから復讐するといっても、騎士団を相手にするのは難しいだろう。

逆恨みだからといって、向こうがそう思わなければやめてくれるわけもない。

村の人間や騎士団から情報を得ていけば、俺にたどり着くことも可能だ。

盗賊の目的が何であれ、俺が狙われる可能性は否定できないだろう。

町を追い出されたという盗賊を見つけて屠るまで、枕を高くしては寝られない。

いやも応もなく、俺は盗賊を狩って賞金を稼ぐはめに追い込まれた。

その日は夕方近くまでベイル町を探索する。

スラムの奥には入っていない。

盗賊も誰一人見つけられなかったが、町の大体の地理や地勢は把握した。

俺にはワープがあるのだから、町の地勢を知っておくことは重要だ。

北にスラムがある理由も分かった。

ベイルの町には川が二つ流れている。いずれも、南から入り込み北に流れ出ていた。

宿屋の裏手などに井戸もあったので、どこまで飲料水として使っているのかは知らない。しかし下水はおそらく川に垂れ流しだろう。

都市に入ってきたばかりの南の水は清浄だが、下流へ行くにしたがって濁ってくる。

スラムの辺りまで来ると、川は悪臭を放っていた。

そんな場所には誰も住みたがらない。

金持ちや力のあるやつから順に、南側から家を建てていつているのだろう。

残った北側がスラムになるわけだ。

盗賊を見かけなかったのは、やはり用心しているからだろうか。鑑定を使える人間がそうそういるとも思えないが、昔この町にいたのなら、顔が知られている可能性はある。あるいは夜が盗賊の活動する時間なのかもしれない。スラムの奥に入らなければ会えないのかもしれない。町の外にいる可能性もある。

いろいろと考えながら、迷宮に着いた。

「どこまで進んでいる」

値引をつけて、迷宮入り口の探索者に訊く。

「七階層です」

「四階層まで、頼む」

「はい」

三階層では金にならない。

下の階層に連れて行ってもらうべきだろう。

コボルトLv3は魔法で一撃、他もデュランダルを使えば一撃だ。

夜中には入り口の探索者もいなくなる。

夕方うちに連れて行ってもらった方がいい。

「……いくらだ」

向こうから何も言っていないので、こっちから訊いた。

「銀貨を、行きたい階層の枚数だけです」
「分かった」

分かりやすい値段設定だ。
常識だったのかもしれない。

リュックサックから銀貨四枚を取り出す。
本職の前でアイテムボックスの呪文をごまかすことはできないだろう。

作動するタイミングがおかしいかもしれないし。

銀貨を渡すと、探索者はアイテムボックスを出してしまった。
おお。あの呪文だ。

考えてみれば、詠唱省略をはずせば済む話か。
詠唱省略も詠唱短縮もなければ、正しい呪文、正しいタイミングで魔法が発動するだろう。

探索者がパーティー編成の呪文を唱える。
編入確認にイエスと念じると、探索者はすぐ迷宮の中に入っていた。

俺も続いて中に入る。

「ここが四階層です」
「え」

中に入ると、すぐに探索者が言った。
突然のことに、反応できない。

壁をくぐった先は、迷宮入り口の小部屋だった。後ろに黒い壁があって、道が三本、前と左右から出ているいつもの小部屋である。

それは予想通りなのだが。

パーティー解放と頭に浮かぶ。

探索者は戸惑っている俺をおいて後ろの壁から出て行った。

一度一階層の入り口に出て、そこからダンジョンウォークで移動するんじゃないのか。

てつきりそうすると思っていたのだが。

探索者は何も唱えず、直接ここに来た。

詠唱省略？

そんなわけないよな。

どうやら入るときに階層を指定できるっぽい。

あるいは詐欺？

いつも迷宮の入り口で商売しているのに、詐欺はないだろう。

とりあえず、デュランダルを出して正面に進んでみた。

三ノ L V 4

四階層であることは間違いないようだ。
L V 4の魔物が現れた。

牛だ。

茶色のバツファロー。ただし、体は長くなく、前後につまった変な感じである。

頭の上からはツノが二本伸びていた。
可愛らしさは微塵もない。

牛が凶暴そうにこちらをにらんだ。

ファイヤーボールを撃ち込んでみる。

ミノが小走りに駆け出した。

避けようともしなかったので、途中でファイヤーボールが当たる。一度押されるが、魔物は火を耐え切り、再度走り出した。

二発めをお見舞いする。

ミノはまたも正面からぶち当たった。

火属性に耐性でもあるのだろうか。そんな感じでもないが。

ただ突っ込んでくるだけの馬鹿なのか。猪突猛進。

イノシシじゃなくて牛だが。

デュランダルをかまえると、ミノは目の前で止まった。そこに三発めを浴びせる。

ツノが振られた。ファイヤーボール三発では倒せないようだ。

剣で受けるが、結構力は強い。こんなツノで下から突き上げられたりしたらおおごとだ。

やばい事態しか思い浮かばない。

俺はデュランダルを上段から叩き込んだ。

皮

残ったのは皮だ。

誰もいないことを確認し、アイテムボックスを出して、しまう。

びびって思わずデュランダルを使ってしまった。

魔物が明らかに害意を持ってツノをぶつけてくる恐怖。これは怖い。

ツノだからな。

人間の皮膚ごときなら、ブツスリいくんじゃないだろうか。

皮の鎧を着けているとはいえ、全身を覆っているわけではない。

ポーナス装備の中の胴装備五や六を出せばフルアーマーだったのでミノのツノ対策にはなるが、ポイントがもつたいない。

ちなみに、足装備三の加速のブーツには、その名のとおり移動速度上昇のスキルがついていて、これで迷宮攻略のスピードが上がると思ったが、速くなるのはエンカウト時のみだった。

武器五であるフラガラツ八にはMP吸収がない。

なのでMP回復にはデュランダルを出さなければならぬ。意外に使えなかったポーナス装備たち。

プレートアーマーのような防具も多分売っているだろうが、重い上に動きやすさを考えればあまり実用的ではないだろう。

今から考えればグリーンキャタピラーはよかった。

体当たり攻撃は、痛かったが、所詮は体当たりだ。

ニードルウッドに至っては、枝を振ってくるだけだもんな。枝で。

コボルトのナイフも怖かったが、コボルトは弱い。魔法でも一撃だ。

それを考えると、三階層でのレベルアップを放棄したのが駄目だったのか。

ミノLv4も魔法三発で倒せるようなら、問題はないだろう。

あるいは、初めて見たから怖いだけであって、慣れの問題だろうか。

ともかく、ここが四階層であることは間違いない。

探索者は何も呪文を唱えなかった。

迷宮に入るときに行きたい階層を選べば、そこに行けるのではないだろうか。

試してみるか。

と思ったが、入ってすぐ出て行くのは、四階層では歯が立たなかったみたいに見えてカッコ悪い。

ワープで冒険者ギルドまで戻り、実験は後日行うことにした。

「夕食の後に、お湯とカンテラをくれ」

「まいど。お湯にカンテラだから、特別サービスで二十一ナールでいい」

ベイル亭まで帰り、鍵を受け取る。旅亭の男に注文すると、男が値段を告げてきた。

お湯が二十ナールに、カンテラの貸し賃は確か十ナールだったはずだ。

何故か三割引が効いてしまった。

しつこく値引スキルをつけ続けた俺の勝利。

というわけでもないだろうが、今までは全部お湯二十ナールだったのに、いかなる心境の変化だろうか。

今日からは常連扱いなんだろうか。

いや。お湯が二十ナールでなかったときが一回だけある。

宿代と一緒に払った日だ。

単品だと二十ナールで、何か複数のものを頼むと三割引になるのだろうか。

お湯が二十ナールなのにカンテラがついて二十一ナールはないんじゃないか、という気がするが、ありがたく払う。

夕食で文字の二を確認した後、部屋に帰ってお湯で体を拭き、カンテラを持って外に出た。

すでに日は暮れており、暗い。

カンテラもそう明るくはない。夜中にこの光で作業することは難しいだろう。

蛍光灯とは比べ物にならない。

ないよりはまし、という程度だ。

明治時代にガス灯の立ったのが文明開化だというのが身にしみて分かる気がする。

ガス灯だって蛍光灯とは多分比較にならないだろうが、カンテラのこの暗さを思うとね。

足元を照らしながら歩く。

しかし暗い中で明かりを持って歩くのは、非常に目立つような。

少ないが、ちらほらと明かりを持って歩く人もいた。

明かりのあるところには誰かいるのだから、鑑定すれば一発で誰か分かる。これは鑑定スキルを持っている俺限定だとしても。

明かりを持たずに歩いている人がどれだけいるかは分からない。闇雲に鑑定してみたが、ヒットしなかった。

北の方に向かって歩く。

旅亭の男にどこか酒場でもないか訊こうかとも思ったが、やめておいた。

酒場に入って酒を飲むつもりはないので、帰って鍵を受け取るときに酒を飲んでいないことはばれる。

泊り客が迷い込んだりしないよう危険な酒場があるところを知っているかもしれないが、俺が行きたいのはその危険な酒場だ。

下手に安全なお勧めの酒場でも紹介されたら面倒である。

北に進んでいくと、一画だけ非常に明るい通りがあった。

道に面した一階部分が開け放たれている建物が何軒も続いている。娼館だ。

飾り窓というのか遊郭の張り見世というのか、一階には女性がいる、道行く男に声をかけたり、道の男が女性を選んだりしていた。

非常に華やいだ雰囲気醸し出している。

夜中に明るいだけでも違うのか。

あるいは、こちらの性欲のせいかな。

いや。入るつもりはない。
入るつもりはないが、見ているだけで胸が高鳴った。
ドキがムネムネとはこのことだ。

待て。

落ち着け。

冷静に考えるんだ。

病気のこともある。

ぼったくられる危険もある。

入らないのが正解だ。

大体、ロクサーヌほどの美人がいるとは思えない。
いたとしても、一見客につくことはないだろう。

入らないと決めて、落ち着いて娼館を見つめた。

娼館街のざわめきが聞こえてくる。

楽しそうだ。

ではなくて、……言葉が通じなかった。

娼館の方から聞こえてくるのは、よく分からない言語だ。

娼館の女性や客や多分いるだろうポン引きが話しているのは、ブラヒム語ではなかった。

宿の旅亭やギルドの女性には完全に言葉が通じるので気にしないでいたが、ブラヒム語を話せない人は多いらしい。

最初の村と一緒にだ。

現地の人が話す言語はブラヒム語ではない。

娼館も現地人相手ということなのだろう。

どこかには、ブラヒム語を解する娼婦もいるのだろうか。

俺はしばらく通りの外側から眺めて雰囲気だけを味わい、そこを立ち去った。

言葉が通じないのに入っていくことはないだろう。

よそ者と見られて変なトラブルに巻き込まれないとも限らない。

娼館に入らず外からうかがうだけだった俺が周囲からどう見えただかは分からない。

明かりがあるので目立った可能性はある。

とはいえ、娼館の前まで来ても結局入らない気の弱い男も多いのではないだろうか。

あまり変には思われていなかったと希望的予測を立てておく。

その後、カンテラの明かりが尽きるまで町をうろつき、ワープでベイル亭に戻った。

内壁に出るのはまずいので、出たのは玄関脇の外壁だ。

街中ではフィールドウォークをしている冒険者は見かけなかった。好き勝手なところに出るのはマナー違反なのかもしれない。プライバシーも何もあったもんじゃないし。

夜中で暗いので、今の時間ならベイル亭の外壁に移動しても大丈夫だ。

宿屋に戻りカンテラを返すと、部屋に入って寝る。

深夜に目覚めた俺は、鍵を預けると、一度ワープでスラム街に出た。

成功だ。暗くて何も見えないが、さつき来た場所だろう。

多分娼館があると思われる方向を見るが、もう寝静まっているらしい。

一応、鑑定と念じた。

一人の情報が頭に浮かんでくる。

誰かいるようだ。

薄暗い迷宮の洞窟で魔物を鑑定できたことから分かっていたが、やはり鑑定は光の有無には左右されないらしい。

二十七歳、村人の女性。

結構向こう側にいる。

この暗闇では、向こうから俺は分からないだろう。
こんな場所で何をしているのか。

と思っていると、突然道の角が明るくなり、松明を持った男が出てきた。

男は三人。三人とも盗賊だ。

この町で初めて盗賊を見つけた。
ただしレベルは低い。全員一桁だ。

村を襲った盗賊のうち賞金が懸かっていたのは二人だけだった。
Lv19には懸かっていたがLv11には懸かっていたいなかった、
というところだろう。

少なくともレベル二桁はないと、盗賊としても半人前だと思われる。

三人は周囲を照らしながらバラバラになって動き始めた。
ここにいとまずいか。

ワープを出そうかと思っていると、向こうの方で音がする。
三人が音の出た方向に向かった。

男たちの持つ松明の光で女性の姿が浮かび上がる。

二十七歳の女性があわてて動き何かにつまづいたようだ。

盗賊たちは女性に駆け寄った。

何か聞き取れない言葉を発しながら、取り囲む。

一人の男が蹴りを女性の腹にめり込ませた。

「顔はやめときな。ボディー、ボディー」

本当にそんなことを言っていたのかどうか知らないが。
まさしくそんな感じだ。

三人がかりで暴力が加えられる。

女性はなにやら訴えていたが、無視された。

やがて一人の男が髪のをつかむと、女性を引きずっていく。

四人は道の角に入って消えていった。

辺りに静寂が戻る。

盗賊もいなくなったので、俺がここにいないことが見つかる心配は
なくなった。

その心配はなくなったが……。

嫌なものを見てしまった。

こんな場所に若い女性がいるのも不自然だから、あの女性は娼婦なのではないだろうか。

逃げ出そうとしたのか、お茶をひいたのか、客あしらいがうまくなかったのか。

盗賊たちが暴力で制裁を加えたというところだろう。

このスラムに盗賊は確かに存在し、暴力支配の一端を担っているようだった。

買い物

嫌なものを見た。

盗賊が三人がかりで若い女性に暴力を振るうのを見てしまった。

ああいうのも、この世界の一面なのだろうか。

綺麗事だけでは世界は回らないということか。

俺は回れ右をしてすべての事象に背を向ける。

前の壁に向かってワープと念じた。

盗賊が出てきた場所は後日確認すれば十分だろう。

今行っても警戒されているだけかもしれない。

迷宮の三階層に出る。

迷宮は暴力が支配する場所だ。

むしろ迷宮こそ、完全に暴力の支配する場所だといえるだろう。

それだけに、ストレートで分かりやすい。

迷宮は、考えるまでもなく、強いものが生き弱いものが滅びる世界だ。

そのあからさまな悪意が、今は気持ちよかった。

三階層入り口の小部屋から、一度外に出る。

迷宮に入るときに階層を選べるかどうかテストしなければならぬ。

外は真っ暗で、誰もいなかった。

すぐ中に戻る。

入るときに、三階層と念じた。

着いたのは入り口の小部屋だ。

全部同じなので、見た目では区別がつかない。

アイテムボックスからワンドと銅の剣を取り出し、替わりにシミターをしまった。

コボルト L V 3

現れたのはコボルト L V 3 だ。

三階層で間違いない。

魔物をファイヤーボール一発で沈める。

やはり迷宮に入るときに階層を選べるようだ。
あるいは外に出るときにも選べるのだろうか。

とりあえず、三階層で狩をする。

四階層のミノは怖い。

あのツノは危険だろう。

慣れれば大丈夫かもしれないが。

というか、慣れてくれば困るが。

選択肢として考えられるのは、慣れるまでデュランダルを使って四階層で戦うか、三階層でレベルアップをしてから四階層に行くか。多分、三階層でレベルアップを図った方が早いだろう。

ミノLv4を魔法三発で倒せるようになれば、ツノは脅威ではなくなる。

スラムに盗賊がいることも分かったし、迷宮で無理に稼ぐ必要はなくなった。

三階層では金は稼げないが、危険な橋を渡る必要はないだろう。

三階層でさらに三匹狩ってMPを消費すると、デュランダルを出して入り口の小部屋に戻る。

外に出るときにも選択できるかどうかのテストだ。

黒い壁に入りながら、四階層と念じた。

入り口の小部屋に出る。

成功だ。いや、多分。

奥に進んでみた。

グリーンキャタピラー Lv4

間違いなく成功だ。四階層に来れた。

駆け寄ってデュランダルを振り下ろす。

剣が芋虫を裂き、グリーンキャタピラーが倒れた。

Lv4でも一撃だ。

ミノ Lv4

ミノ Lv4

コボルト Lv4

次に現れたのは団体さんだ。三匹。

ひよつとして、階層の数だけ敵が現れるとかなんだらうか。

三階層では三匹連れに遭ったことはないが。

三階層はほとんど攻略を進めていないから、確かなことは言えない。

二十階層まで行ったら二十匹、三十階層で三十匹とか。それは勘弁してほしいなあ。

何階層まであるのか知らないが、十階層くらいで死ぬ。中には魔法の効かない敵、効きにくい敵もいるはずだ。

こっちはパーティーが六人までなんだから、上限キャップがあるだろうと思いたい。

とりあえず、サンドストームを放った。

ミノは火魔法に耐性がある可能性もあるので。砂の嵐が魔物たちに襲いかかる。

しかし、一匹も倒れなかった。

コボルトLv4すら成長して魔法二発必要になったのか。

攻略を手抜きして先に進もうとしたのは失敗だった。

もう一度、サンドストームを念じる。

コボルトは倒れた。

ミノ二匹が残る。

走り寄るミノにデュランダルを突き刺した。聖剣が牛の額を貫く。ミノが煙となって消えた。

同時にもう一匹のミノが突っ込んできて、ツノをしゃくりあげる。あわてて避けた左腕にツノがかすった。

うおおおおおおおお。

危ねえ。

かすった。かすったよお、今。

半狂乱になりながら、デュランダルを振り下ろした。

デュランダルが牛の頭を切り裂き、ミノをはいつくばらせる。魔物が煙となって消えた。

皮

皮が残る。

危なかった。

迷宮での戦いは命がけだ。

一瞬の隙が命取りになる。

あるいは、サンドストームを二発撃ってネガティブになっていただけだろうか。

かすったといっても、実際に触れたかどうかは定かではない。風が当たっただけかもしれない。

しかし、冷静に考えてみても四階層はやばい。

ツノの危険は大きすぎるだろう。

一匹ならば、よく見て冷静に対応すれば大丈夫かもしれない。
しかし囲まれたらどうなるか。

突き当りを探索しなければ魔物が大量に沸く部屋は避けられると
しても、ミノ三匹でも普通に危ないでしょ。

ミノが四匹も出てきたらどうなるか分かん。

退却しよう。退却。

俺は三階層に撤収することにした。

戦略的撤退だ。

大本営八三階層へノ転進ヲ命ズ。

その後は三階層で狩を続けた。

いつものように適当に切り上げ、迷宮の外に出る。

迷宮の外へ出たとき、朝日はとっくに上がっていた。

しまった。

まだ暗いうちに娼館街の奥にワープするつもりだったのに。

娼館には泊り客がいるだろう。

彼らは朝に帰るはずだ。

その帰り客の中に混じって、娼館街の通りを抜ける計画だったの
に。

昨夜はカンテラを持ってうろつきまわったから、寝るのが遅かつ
た。

だから、起きたのも多分いつもより遅かったのだろう。

その上でスラムを回った後に迷宮に入ったのだから、いつものよ
うに狩をしていては遅くなるのが当然だ。

明るくなってからワープするのは目立つ。
まあ今日のところはしょうがないだろう。

今日は市が立つ日だ。

宿へ帰って朝食を取り、部屋で一休みした後、俺は市を歩いた。

買いたいものはいろいろある。

まずは服屋を見て回り、黒いマントと顔を隠せる黒めの頭巾を探した。

夜に盗賊を探すなら必須のいでたちだろう。探す方が目立ってはしょうがない。

マントは、着ける人も多いのか、すぐに見つかった。

宿の前にあった露店の服屋だ。

たくさんの衣服が折りたたまれて並べてある。

少し高そうな感じがした。

少なくとも、この市の中では高級品に分類されるのではないだろうか。

「これはいくらだ」

店の商人に訊く。

「四千ナールになります」

やはり高いのではないだろうか。

迷宮での一日の稼ぎが丸ごと吹き飛ぶ計算だ。

「そうか」

「そのクロークはフランネルを使ったよい品でございます」

マントじゃなくてクロークなのか。

服を置き台に戻した俺に、商人がなんとか売ろうと勧めてくる。

よい品というのは間違っていないのだろう。

しかし、俺がほしいのは別により品ではない。

ふと横を見ると、緑に染められたパンツが置いてあった。

生地も柔らかそうだし、下着に使えるかもしれない。

広げてみると、紐で閉じるかぼちゃパンツみたいになっている。

この世界の下着と考えていいだろう。

「これはいくらになる」

「四十ナールになります」

「では、二枚くれ」

着替えも含めて、二枚買う。

高いのかもしれないが、マントの百分の一という値段に金銭感覚が狂わされた。

「ありがとうございます。せっかくなので五十六ナールにサービ
スさせていただきます」

三割引が効いたようだ。

銅貨を五十六枚出して払い、パンツと巾着袋をリュックサックに
しまう。

どうも、一枚のときには値引きするそぶりも見せなかったのに、

二枚になったので急に値引きをしてきたように感じた。

ベイル亭のお湯のときと同じだ。

単独で頼むと、値引が効かないのだろうか。

試してみるか。

俺は防具商人の店に移動した。

五日前にも利用した防具商人だ。複数売却したときに三割アップで買い取ってもらえることは分かっている。

買うのと売るとでは違つかもしれないが。

「いらつしゃいませ」

「籠手を探している」

剣やワンドを持って魔物の攻撃を受けることがあるし、指は怪我をしやすいだろう。

もし指を切り落とされたらHP吸収で回復できるのかという疑問もある。

手に何かの装備をした方がいい。

「こちらでございませす」

防具商人が案内したところには、平台に籠手がたくさん並んでいた。

ガントレットや鉄の手甲など。

欲をいえばもちろん防御力の高いものが望ましい。しかし、あまり値段の張るものもよくないだろう。変に目をつけられかねない。

皮のミトン 腕装備

これが一番安そうだ。
見た目、剣道で使う籠手と変わらない。
ただし、二の腕までを覆う長さはない。手首までだ。

「皮のミトンはいくらになる」
「八十ナールでございます」

そんなものか。
よく分からないが。

「こっちの皮のグローブは」
「百二十ナールです」

やはり皮のミトンが最安か。
ミトンとグローブの違いは、グローブの方は指がちゃんと五本に分かれていた。

ミトンは、剣道の籠手と同様、親指とその他の二つに分かれている。

多分、皮のミトンの使い勝手は剣道の籠手と同じようなものだろう。

デュランダルやワンドを持つには十分だ。

皮のミトン 腕装備
スキル 空き

「ではこれをもらえるか」

スキルスロットつきのものを探して、防具商人に差し出した。

「ありがとうございます」

防具商人はそれだけを告げる。

やはり、単独では値引が効かないようだ。

値引も買取価格上昇も、複数のものを売買しないといけないのだらう。

銅貨八十枚を払って、皮のミトンを手に入れた。

その後、フードつきの外套、靴下二足、手ぬぐい二枚、中くらいの木の桶、小さな木の桶、ロープ二本、蠟燭一本を買った。

小さい方の木の桶はコップ代わり、ロープは洗濯物を干すため、手ぬぐいと中くらいの木の桶と蠟燭は必要になるかもしれないので予備だ。

蠟燭は小さいやつが十ナールだったので、カンテラを借りるのと変わらない。どのくらいの時間使えるのかは分からないが。

フードつきの外套は、よく使われているのだらうか、すぐに見つかった。

大きなフードなのでかぶれば顔をかなり隠せるだらう。

石鹸と歯ブラシと歯磨き粉は、あるのかどうか分からなかった。

買い物を終えた後、夕方近くに宿に戻る。

「夕食つき一泊分、あと夕食後にお湯を頼む」

旅亭の男に告げた。

こうすれば、お湯も割引になるはずだ。

夕食をよそで取ってくることもできるし、考えてみれば実に都合がいい。

一日分ずつの支払いでいいというのは、客に有利すぎる制度ではないだろうか。

あるいは、そうでもないのか。

迷宮に入るような客だ。いつ死んでも不思議ではない。

いつどこで野垂れ死にしてもいいように、一日分ずつの支払いになっているのではないだろうか。

明日の分の宿泊料金など、この世界ではチャンチャラおかしいのかも知れない。

宵越しの銭など持たないのが、探索者というものなのか。

そうだな。

この世界ではいつ死ぬとも分からない。

「えっと。二百三十八ナールでいい。常連さんだしな」
「うむ」

嫌なことを考えそうになったが、頭をゆすって振り払う。

銀貨二枚と銅貨三十八枚を出した。

三十一の鍵を受け取る。

食事の前に、一度荷物を置きに部屋へと向かった。

宿に泊まるだけでも、身の回りに必要なものが結構出てきてしま
う。

この世界で定住するにはどうするのだろうか。

翌日深夜の探索は、四階層から開始した。

魔法使いがLv21になったので、ミノを魔法何発でしとめられるかのテストだ。

一度スラムを見た後、四階層にワープする。

加賀道夫 男 17歳

魔法使いLv21 英雄Lv19 探索者Lv22 商人Lv1

薬草採取士Lv1

装備 デュランダル 皮の鎧 皮のミトン サンダルブーツ

今回はいろいろと違う。

まず、ファーストジョブを魔法使いにした。

ファーストとサードで違いはないかもしれないが、あるかもしれない。

魔法で戦うなら、魔法使いをファーストにして試してみる手はあるだろう。

アイテムボックスに何か入っていると探索者を動かせないみたいだったので、ベッドの上に全部出して大変だった。

そして、必要経験値十分の一をやめ、フィフスジョブをつける。

フォースジョブとフィフスジョブには知力小上昇の効果を持った商人と薬草採取士をつけた。

魔法攻撃力に関するパラメーターは多分知力だろう。

知力上昇を持ったジョブを設定すれば、魔法攻撃力が上がるので

はないだろうか。

レベルを全然上げてないから、効果は小さいかもしれないが。

あとはワンドを持ってさらに攻撃力の上乗せを狙いたいが、得物はデュランダルにした方がいい。

デュランダルの方が安心して安全だ。

ミノ L V 4

ニードルウッド L V 4

いきなり二匹連れで登場したので、すぐにファイヤーストームを浴びせる。

火が消えると同時に二発め、続いて三発めを放った。

ミノが接近する。

ニードルウッドよりミノの方が動きが速いようだ。

突かれたツノをデュランダルで受けた。

どちらも三発では倒れない。

ツノが振られるのをかわす。

ニードルウッドに追いつかれた。

ミノに注意を払っている隙に、枝が振られ、攻撃を喰らってしまった。

痛いが多少はしょうがない。

四発めのファイヤーストームを念じた。

火の粉が魔物二匹に襲いかかる。

ミノLv4のツノの動きを警戒していると、ミノが倒れた。
ニードルウッドも同時に倒れたようだ。

皮

ブランチ

魔法四発か。

ミノもニードルウッドLv4も魔法だけで倒したのは初めてなので、いろいろ試したことの効果があったかどうかは分からない。

いずれにしても、魔法三発で倒せるようにならないと、四階層で戦うのは危険だろう。

皮とブランチをアイテムボックスに入れ、三階層にワープした。

雨

三階層で狩をした後に迷宮の外へ出たら、まだ真つ暗だった。昨日は日の出時刻を過ぎてしまったので、反動で用心しすぎたようだ。

一度四階層に行ってみる。

あまり長時間狩ることはできない。魔法で戦ってMPを消費してデュランダルを出してMP回復とか、一連の作業が必要なことはない方がいいだろう。

それならば最初からデュランダルを出して四階層で戦うのがいい。探索者がLv23に上がったのでミノを魔法三発で倒せる可能性がある。

Lv23になったので、ファーストジョブのままにしておけば、増えたボーナスポイントでフォースジョブを設定できたのだが。

ただし、必要経験値十分の一はつけたまま、ワープとジョブ設定をはずすことで。

探索者をファーストジョブに戻すには、アイテムボックスを空にしなければいけない。

アイテムボックスの中身をこの場でぶちまけることは、やらない方がいいだろう。

ファーストジョブを魔法使いにしたのは失敗だった。

ミノ Lv4

現れたミノにファイヤーボールを撃ち込む。
見つけてすぐ放ったが、やはり避けようもしない。
近づくまでに三発浴びせた。

ミノは三発めも耐え切り、ツノを押し立ててそのまま突っ込んでくる。

デュランダルで受けた。力押しになったがいったん押し戻す。
一歩引き、四発めのファイヤーボールを念じた。

振られたツノにデュランダルをあわせる。

ミノに四発めのファイヤーボールが命中した。
炎の中、ミノが倒れ伏す。

まだ魔法四発だったか。

ミノ Lv4

次のミノには、魔法を使うのをやめ、デュランダルだけで対応した。
突っ込んでくるミノに正面から一太刀。デュランダルを振り下ろしたが、ミノは倒れなかった。

魔法を使わずにデュランダルだけでミノを倒したことはまだなかったか。
一撃とはいかないらしい。

振られたツノを受ける。

横にはじき、牛の頭にもう一撃浴びせた。
ミノが倒れる。

落ち着いてじっくり向き合えば、ミノのツノにも対処できるよう
だ。

あるいは少し慣れてきたのだろうか。

もつとも、複数で囲まれることを考えると怖い。
まだまだレベルアップが必要だ。

二度狩を行ったので、再び外に出た。

こころなしか、明るくなってきたような気がする。
夜明けは近い。

誰かに見られているとまずいので、一度迷宮に戻り、ワープで移
動した。

ワープの黒い壁を抜ける。

建物の影になっていているせいか、出たところも真っ暗だった。
成功していれば、娼館街の奥に出られたはずだ。

日が昇るまでしばし待つ。

なかなか明るくならなかった。

周囲を見渡すと、一角が白ずんでいるのを見つける。
向こうが東か。

東の方を見ると、どうやら曇っているらしい。
雲が出ているので、なかなか明るくならないようだ。

西の方を見た。

出ているはずの星が一つも見えない。

気づかなかったが、全天曇り空だ。

東京では晴れていても星なんかあまり見えないので、違和感なかった。

考えてみれば、この世界に来てからはずっと晴れが続いている。もちろんこの世界にだって曇りの日もあれば雨の日もあるだろう。

傘をどうしようか。

昨日の市でも傘は見なかった。

迷宮の中までは降らないと思うが。

あれこれ考えていると、娼館から人が出てきた。

まだ薄暗いのでカンテラを持っている。

ジヨブ村人の男だ。客だろうか。

男は店を出ると、向こう側へと歩き出した。

やはり明かりは目立つ。

顔までは見えないが、誰かいることは一目瞭然だ。

あまり明かりを持って移動しない方がいいだろう。

しばらくすると、周囲がだいぶ薄明るくなった。

やはり曇り空だ。

いつまでもここには変に思われる。

俺はその場所を出て、道を歩いた。

俺がいたのは、娼館が立ち並ぶ通りの一番奥にある物陰だ。

前に実際ここまで来たわけではない。道の向こう側から覗いただ

けだ。

見ただけでもワープには支障がないらしい。
ワープは目にしたところであれば行けるようだ。

娼館からぼちぼち人が出てきて、道を歩いている。
彼らの中にまぎれて、娼館街を突っ切った。

盗賊が出てきた角の向こう側も確認する。
短い路地があり、その奥に家が建っていた。
娼館ではないようだ。

この家が盗賊の本拠地だろうか。暴力団の組事務所みたいなもんか。

あまりじろじろと見ているわけにもいかないので、すぐに通り過ぎる。

二階建ての、立派でもぼろくもない普通の建物だった。
あそこに立てこもられているうちは手出しすることが難しいだろう。

娼館街も朝は普通の街だ。
スラムという雰囲気もない。

そんな雰囲気醸し出していたら、一般客は寄りつかなくなるだろうが。

宿まで帰る。

帰りしな、奴隷商人の館も通った。
ロクサーヌはまだ寝ているだろうか。

「曇ってきたな」

宿に入り、鍵を受け取りながら旅亭の男と話す。

「この辺りは、雨は少ないが、降ると続く。数日は雨だろう」

「そうなのか？」

「多分な」

あまり降ってほしくない。

傘もないのに。

「朝食はもういいか」

「ああ。大丈夫だ」

しかし、願いもむなしく、朝食を取っている間に雨が落ちてきた。本格的なドシャ降りではないが、しとしとと降っている。

宿の外を見るが、道行く人は誰も傘を差していない。

この世界には傘がないのだろうか。

ほとんどの人は外套を羽織るだけだ。

中には、普段と変わらない格好で走っていく人もいる。

外套は、昨日買ったのと同じようなやつだ。

あれがこの世界の雨具代わりなのだろう。

道理ですぐに見つかったわけだ。

雨具とは知らずに買ったのだが、運がよかった。

これで宿の外に出ることはできる。

一休みした後、外套をまとって冒険者ギルドまで走った。本格的な降りではないが、ポツポツというよりは雨粒が多い。こんな感じで降り続けるのだろうか。

盗賊探しの方は、雨が降っている間は中断だろう。

外套には何か撥水加工がしてあるみたいだが、所詮布だ。雨の中を歩き回ったらびしょ濡れになってしまう。

盗賊だって雨の中をそうそう出歩いたりはずまい。

冒険者ギルドの壁から迷宮にワープする。

幸い、迷宮の中に雨は降っていなかった。

まあ幸いというか、当然のことではあるが。

結局、雨は丸二日間降り続いた。

「雨が弱くなってきた。そろそろ上がるだろうな」

旅亭の男が告げたのは、雨が降り始めた翌々日の朝のことだ。

「そうか。これで出歩けるな」

「ああ」

雨の中冒険者ギルドから走って帰ってきた俺に、旅亭の男が鍵を渡してくる。

宿屋の内壁にワープすれば、雨に降られることもないのだが。

インテリジェンスカードのチェックをするときに、冒険者でないことはばれる。

何かいい方法はないものか。

「何日か前に殺人事件があったとかで、それもあって出歩くのは控えていたんだがな」

ついでなので情報収集もしてみた。

「あの事件か。この宿なら危険はないだろう。スラムや娼館にでも行かなきゃ大丈夫だ」
「どうして分かる」

何か情報を持っているようだ。

「あれはこの町のスラムに巢食う盗賊どもの勢力争いだ」
「勢力争いねえ」

「ここだけの話、盗賊たちの一部が騎士団と結びついたらしい」

旅亭の男が声を落とした。

「ほう」

「どうやったのかは知らない。あるいは片方の盗賊が情報を流しただけかもしれない。それで、しばらく前に騎士団が残りの盗賊を一掃しようとした。町を追い出された盗賊はどこかの村を襲って返り討ちにあつたとのことだ」
「なるほど」

それが俺の倒した盗賊か。

「先日殺されたのは町に残った方の盗賊だな。追い出された方も全滅したわけではなく一部がまだ残っているという噂だ」

「どこかに潜んでいるのかも」

「どつだろつな。まあ、スラムの方は多少ごたつくかもしれんが、騎士団の目もあるし、白昼堂々町中でいざこざを起こすことはないだろつ。この辺りは安全だ」

旅亭の男が仕入れるのは宿や客の安全にかかわる情報がメインだろつ。

盗賊の居場所まで知っていることはないか。

「分かった。朝食はもういいか」

「ああ、行つてきな」

旅亭の話で大体の概要はつかめた。

スラムにいる盗賊と、追い出された盗賊がいるらしい。

狙つとすれば、もちろん町を追い出された方の盗賊だろつ。

俺のことを逆恨みしてくる可能性があるのは追い出された方の盗賊だから、こちらを相手にするのが正しい。

拠点に立てこもっているところを攻撃するのは難しいだろつ。

娼館街の奥にあったあの建物が町に残った方の盗賊の本拠地だとして、こちらから乗り込むのは大変だ。

追い出された方の盗賊は、どこかに潜んでいるなら、警戒はしているとしても守備は手薄だろつ。

騎士団による壊滅作戦を受けた後であるし。

町に残った方の盗賊も、この間の深夜に見た女性に対する暴力を見るとうるくなものではなさそうだが、だからといって追い出された方が正義の味方というわけもあるまい。

村を襲った連中の仲間だし。

同じ穴のムジナだろう。

朝食の後、部屋に戻り、木窓を開けてぼんやりと外を眺めながら雨がやむのを待つ。

雨はなかなか降りやまなかった。

さすがは二日以上降り続いた雨か。

小降りにはなっても、そこから上がるまでもうひと粘りあった。

雨がやんだのは昼近くになってからだ。

こんなことなら迷宮に入っておけばよかった。

魔法使いがLv24になったときにミノを魔法三発で倒せるようになったので、それからは四階層の探索を進めている。

かなり歩き回ったので、そろそろボス部屋が見つかるのではないだろうか。

ミノを倒せるようになるまでもだいぶ時間はかかった。

最初からまじめに探索していれば三階層もクリアできたかもしれない。

四階層に入るために探索者に支払った銀貨四枚がもったいなかった。

雨が上がったので、宿を出る。

まずはアイテムを売りに冒険者ギルドに向かった。

冒険者ギルドそのものは壁を利用する冒険者がいるためか二十四時間開いているようだが、カウンターは昼間しかやっていない。

「滋養丸と強壮丸を二つずつくれ」

代金を持って戻ってきたアラサーの女性に、一応三十パーセント

値引をつけてから頼む。

念のためにデュランダル以外の回復手段も持っておいた方がいいだろう。

迷宮で戦う分には今のところ必要ないが、盗賊を相手にするのなら何が起こるか分からない。

値引スキルをつけたのも念のためだ。

柔化丸と抗麻痺丸を買ったときには、値引は効かなかった。多分今回も有効にはならないだろう。

しかし、何かのきっかけで効くかもしれない。

お湯とカンテラを一緒に頼んだときのように。

考えてみれば、複数のものを売買して値引が有効でなかったのは彼女から薬を買ったときだけだ。

あれは何故駄目だったのだろう。

複数にすれば有効ではないのだろうか。

アラサーの女性は一度席を立つと、丸薬を持って戻ってきた。青い丸薬と赤い丸薬だ。

鑑定してみると、青い方が滋養丸、赤い方が強壮丸である。

ちゃんと色で区別できるようになっていた。

「ありがとうございます。一つ六十ナールになります」
「うむ」

やはり三割引は効かないらしい。

「……申し訳ありませんが、銅貨でお支払いいただけますか」

銀貨二枚と銅貨四十枚を出したまま待っていると、彼女が告げた。何故だ。

滋養丸と強壯丸は銅貨で支払う慣習になっているのだろうか。

「悪い」

しょうがないので、巾着袋から銅貨を出す。

「ありがとうございます。確かに代金をいただきました」

アラサー女性は、銅貨六十枚と引き換えに、丸薬をこちらに渡してきた。

一つずつ、確かめるように振り分けている。

ひよつとすると、彼女は六十×四＝二百四十が計算できないのかもしれない。

あるいはこちらができないと考えたのかもしれないが、二百四十九ナールだと分かっていたら、銀貨二枚のときに二百四十九ナール取ればいいだけか。

この世界の教育水準は分からない。代読屋がいるくらいの識字率だから、そんなに高くはないだろう。

商人には計算を行うカルクというスキルもある。

商人でない一般の村人には計算ができないくらいのは、十分に考えられる。

計算もできないのなら、三割引ができるはずもない。

しかし、ギルドでのアイテムの買取には三割アップが効いている。買取のときには何故有効なのだろう。

「買取金額の計算は誰がやってるんだ」

アラサー女性に訊いてみた。

「ギルドの神殿で行っております。ジョブ変更のときに見たと思いますが」

「……」

見たと言われても困ってしまう。

どうやら俺は冒険者だと思われるらしい。

まあ、フィールドウォークもどきのワープで冒険者ギルドの壁に何度も来ているしな。

「壊れたアイテムなどはそのときはじかれませぬ。コボルトソルトなどは、アイテムボックスに入れておきませんと雨などで溶かしてしまふ人がおります。買取できなくなりますので気をつけください」
「分かった」

幸い、返事をしなかったことをアラサー女性は変に思わなかったらしい。

違うことまで説明してきた。

コボルトソルトを二つに割って二個にするとか、できないわけだ。

丸薬を受け取って、冒険者ギルドを出る。

買取金額の計算はアラサー女性がやっているのではないようだ。

もしかして、彼女がやったら三割アップは効かないのではないだろうか。

これなら理屈は通る。

彼女には買取価格上昇や値引のスキルが通用しないのだ。計算ができないのに、三割を上げたり下げたりできるはずがない。

では逆に、他の人では何故有効になるのだろうか。

カルク。

そのスキルの存在が浮かび上がる。

商人だけでなく、武器商人や防具商人、奴隷商人にもカルクのスキルがあるのだろう。

旅亭については分からないが。

こうした商売人は、計算ができなければ仕事にならない。

価格上昇や値引のスキルは、このカルクに対して働きかけるのではないだろうか。

カルクは計算するときには無意識で使われて答えが脳裏に浮かんでくるスキルだ。

計算するときには必ず使う。

商人が売値や買値を計算するとき、俺がつけている価格上昇や値引のスキルに合わせて、カルクによって自動的にサービス価格の算出が行われるのではないだろうか。

これならば複数のものを売買したときにのみ有効になるのも筋が通る。

単品で売り買いするときには計算をする必要がないからだ。

まあ一つの仮説に過ぎない。

過ぎないが、そう大きくはずしていかないようにも思う。

仮説ができあがったところで、俺は意識を切り替えて、探索に集中した。

盗賊を求めて、町の中をさ迷い歩く。

二日以上雨で無駄にすごしたから、遅れを取り戻さなければなら
ない。

期限まで時間もない。

道行くすべての人を鑑定した。

人がいそぐなだけのところも、あまさず鑑定する。見えても見え
なくても。

木窓の向こう側に、はっきり姿は見えなくても鑑定できることが
あった。

壁越しの場合、建物の中まではさすがに鑑定できないようだ。

スラムの奥はやばい、などと悠長なことと言ってはられない。
意を決して入っていく。

いた。

スラムに入っていくと、路上生活者の中に盗賊を見つけた。

盗賊退治

スラムの中に盗賊がいた。

俺はすぐに物陰へ隠れ、こっそりと様子をつかがう。

気づいた直後に動いたし、こちらのことを気にしたやつはいないと思う。

盗賊は、三十八歳の男、盗賊Lv18だ。

ボロというほどでもない服を着て、路上生活者のように振舞っていた。

しかし様子がちょっとおかしい。

こっそり観察していると分かる。

男はときおり一定の方向をチラチラと見ていた。

今の俺も、第三者が見ていたらあんな感じだろうか。

俺の場合は隠れているからガン見だが。

盗賊は何をするでもなく路上に寝転がっているが、頻繁に体を動かし、そのたびごとに一定方向に鋭い視線を投げかけていた。

男が見ている方向には多分、娼館横の盗賊が出入りしていた建物がある。

そこを偵察していると考えていいだろう。

建物にいたのが町に残った方の盗賊だとすれば、それを探るのは追い出された方の盗賊だ。

この男も一味なのだろう。

内偵をしている割に、あまり上手ではない。
あれでは、よく見たらバレバレではないだろうか。
それとも路上生活者なんか誰も気にしないのか。
俺はその場に潜んで、盗賊の男を監視し続けた。

張り込みというのは膀胱が試されるものらしい。

盗賊が動いたのは、膀胱からの刺激が強くなりかけたころだった。

男が立ち上がり、こちらへやってくる。

隠れている俺の横を通り、道を歩いていった。

向こうへ行けば、スラムの出口だ。

奥の方に進まなくてよかった。

男の向こうからも人がやってくる。

すれ違いざま、盗賊は反対側からやってきた人間を殴り飛ばした。

突然のことに、何が起きたのかと戸惑う。

殴られた男もそうだったのではないだろうか。

盗賊は、逃げ出すでもなく、結果を確認するでもなく、のんびりと歩き出した。

あるいは顔見知りだったのだろうか。

殴られた男は道の端でうつぶしている。

他に気にかける人間もいないようだ。

それがここの日常なんだろうか。

盗賊が見えなくなる前に、俺も動いた。
後ろからつけていく。

テレビで見た刑事ドラマのようだ。
異世界に来て刑事の真似事をするとは思わなかった。

俺自身が誰かに尾行されていないか、後ろに注意することも忘れてはいけない。

前を注視しながら、後ろにも気を配る。

これは結構難しい。

男も、ちらちらと後ろを気にしながら歩いていた。

俺は、ときには盗賊の左側、ときにはかなり後ろと位置を変えているので、気づかれてはいないと思う。

あまり後ろを気にしすぎると、動きが不自然になる。

盗賊の男はあまりこういうことに慣れていないようだ。
半分壊滅した盗賊団だから人材がないのか。

あるいは、雨が続いたので盗賊もあせっているのかもしれない。

雨が上がったのであわてて敵の本拠地を確認しに来たのだとすれば、俺は運がよかった。

盗賊はベイルの町を突っ切ると、南門から外へ出る。

城壁の外には畑があり、さらにその外側に森があった。

人の多い町中ならともかく、町の外までつけていくことは無理だろう。

畑の草丈は高くない。そんなところを歩けばすぐに分かってしまう。

匍匐前進でもすれば隠れられるかもしれないが、それは別の意味で目立つ。

敵や魔物が来たときすぐに分かるように、城壁の外が畑になって

いるのだろうか。

盗賊が森の中へ消えるのを見届けると、俺は尾行を打ち切った。

盗賊たちは町の外にいたのだろうか。

町に残った盗賊のホームグラウンドであるスラムに身を潜めるのは難しいだろう。

スラムにいるよりは、町の外に隠れている可能性が高いと考えていい。

町の外に町を追い出された盗賊たちの隠れ家があり、男はそこへ帰ったと考えるのが妥当だろう。

一度東門に回って、膀胱を空にした後、町の外から南側へ行った。周囲に気を配り、鑑定しながら進む。

キョロキョロしている俺の姿は、他人から見れば怪しいことこの上ないだろう。

まあしょうがない。

森の中を歩く人間は少ない。

盗賊が先に俺を見つけたら、俺のことを知っていようと知ってしまいと関係なく警戒するはずだ。

敵とみなし、不意打ちを狙って攻撃してくる可能性も捨てきれない。

先に盗賊に見つけられたら、チャンスが一転してピンチになる。なんとしても、こちらが先に見つけなければならぬだろう。

音を立てないように、ゆっくりと歩いた。

雨上がりでぬかるんでいるところがあって、歩きにくい。

おまけに、町の南側というだけでは範囲が広すぎる。夕方まで探したが、見つけることはできなかった。

日が暮れるころ、ワープで冒険者ギルドの壁に帰る。夕食を取った後も、町の外へワープしてしばし監視した。

翌日も南側の森の探索を続ける。

しかし、一日中探し回っても、誰も見つけることができなかった。

夕食の後、再度町の外へ赴く。

明日が奴隷商人との約束の期日だ。もう時間がない。

町に残っている方の盗賊を狙うべきだろうか。

しかし、スラムとはいえ街中にある盗賊の本拠地を攻撃するのは大変だろう。

俺とは無関係の、放っておけば襲われる可能性もあまりない盗賊にこちらから手を出すのも気が進まない。

俺が狙われるおそれのある町から追い出された方の盗賊をターゲットにすべきだ。

これなら正当防衛が成り立つ。

成り立たないかもしれないが、襲われてから反応する正当防衛と襲われる脅威があるときに行われる予防攻撃との差は、現実には常に曖昧なものだ。

などと屁理屈をこねていると、視界の隅にちらりと光が見えた。

見つけた。

昨日と同じ、Lv18の盗賊だ。

光源はゆっくりと動いている。

これから出かけるところなのか、あるいは隠れ家に帰るところなのか。

日はすでに暮れている。

辺りは真っ暗で、足元もおぼつかない。

暗いおかげでこちらが目立つことはないが、木の根っこにでも引っかけたらおおごとだ。

転んで大きな音を立てれば、すべてが台なしだろう。

光の動きを見極め、盗賊の後ろにワープした。

暗い壁を抜けると、カンテラの光に男の姿が浮かび上がる。

盗賊は、カンテラをぶら下げ、足元に光を当てながらゆっくりと森の中を歩いていた。

カンテラの明かりが周囲をぼんやりと照らしている。

こちらの足元の状況もかろうじて分かった。

明かりを持った男の後からついていっているのだから、先々の状況はぼつちりだ。

この距離まで近づけば、もう盗賊を見失う危険はないだろう。

転ばないように小股で、盗賊の動きにあわせてゆっくりと、音を立てないよう慎重に尾行する。

やがて、男は山腹の小さな崖に行き着いた。

崖の中ほどに岩穴がある。

岩穴の入り口には扉が張られ、堅く閉ざされていた。

男が扉をノックする。
ややあつて扉が開き、誰かが顔を見せた。

三十一歳、男、盗賊Lv24。

あそこが隠れ家か。

Lv24の盗賊は何事か話すと、扉を大きく開け、Lv18の盗賊を迎え入れた。

盗賊Lv18が岩穴の中に入る。

盗賊Lv24は、男を迎え入れた後、念入りに周囲をうかがい、左右を確認した。

その注意深さから判断しても、この岩穴が盗賊たちの隠れ家と見て間違いないだろう。

ついに見つけた。

あそこに町を追い出された盗賊たちが潜んでいる。

あの岩穴に攻め込めば一網打尽だろう。

Lv24の盗賊が扉を閉じると、周囲は真っ暗になった。

周囲を一通り確認する。

明かりもなく、何の気配もない。鑑定しても何も浮かんでこなかった。
誰もいないようだ。

俺はワープと念じて、ベイル亭の外壁に戻る。

本当なら、中の人数や盗賊のレベル、普段の行動を日数をかけて確認したいが、そんな時間はない。

いちかばちか、今夜のうちに攻め込むしかないだろう。

この真夜中に盗賊たちが拠点を移動するとは考えにくい。もちろん、追われている身だから、敵に捕捉でもされれば分からないが。

岩穴の周囲には何の気配もなかった。

まだ俺以外の誰かには見つかっていないと考えてもいいはずだ。

今すぐ踏み込むのは、向こうも起きているから、危険である。人間の弱点は夜になると寝ることだ。

旅亭の男のように半分ずつ眠れたら、危険を察知できるのに。

盗賊たちの一日の行動がどうなっているのかは分からない。

しかし、明け方には寝ているのではないだろうか。

交代で寝ずの番を立てているとしても、半分以上は。

今襲撃するより、もっと遅い時間に攻撃をしかけた方がいい。たとえその間に逃げられる可能性があるとしても。

こっちは一人しかいないのだから、見張っているわけにはいかない。

しっかりと寝て、体調を整える必要がある。

俺は部屋に戻り、ベッドの上に横たわった。

盗賊を見つけた興奮からか、どうにも目がさえてしまう。

これから人殺しをするのだと考えると、いろいろと思うところもある。

それでも、俺はいつしか眠りに落ちていった。

目が覚めたのは早い時間だ。

感覚で分かる。おそらく、長い時間ぐっすりとは寝られなかっただろう。

寝過ごしてしまわないように気を張っていたのかもしれない。

デュランダルを出して腰に差し、リュックサックを背負ってから外套を羽織った。

レベルアップのことを気にする必要はないから、戦うには当然デュランダルを使うべきだ。

銅の剣とシミターはアイテムボックスにしまつてある。

何かのときに二本めの剣が必要になるかもしれないが、腰に差していては邪魔になるかもしれない。

両者の可能性や損得を勘定するに、邪魔なものを持ち歩かない方がいいだろう。

二本めの剣を必要とする状況がデュランダルが使えなくなるような事態を意味しているのなら、おそらくはその時点で負けが決定だ。時間的な余裕があるならアイテムボックスから取り出すこともできる。

デュランダルをつけて宿を出入りするのは初めてだが、外套を羽織っているので外からは見えないだろう。

加賀道夫 男 17歳

探索者LV26 英雄LV23 魔法使いLV25 戦士LV16

装備 デュランダル 皮の鎧 サンドルブーツ

皮のミトンもはずしている。

斬り合いになったときには着けていた方がいいが、何かのときに

指を自由に動かさせた方がいいかもしれない。

どこかにつかまる、よじ登る、何かをつかむ、操作する。
人間の手は便利なものだ。

ジョブはもつと増やした方がいいのかもしれないが、よく分からない。

そうではないかもしれない。

普段あまり使っていないレベルの低いジョブを加えることにどこまで意味があるだろうか。

設定したジョブの平均レベルがステータスに反映されるような可能性もある。

現状でも魔法が使えていざというときのラッシュとオーバーホエリングもあるのだから、この四つで十分だろう。

村を襲った盗賊と戦ったときにはデュランダル以外何もない状態で戦闘をこなした。それなりに戦えるはずだ。

準備を整えて宿屋を出た。

旅亭の男との会話は、いつもどおりだっただろうか。

緊張でどこか不自然だった可能性はある。

この世界のルールに従えばおそらく犯罪をしに行くわけではないから、あまり気にすることはない。

宿の外へ出て、大きく深呼吸した。

人を殺しに行くことについてモヤモヤとした感情が浮かぶが、封印する。

俺はすでに最初の村で盗賊を二十人近くも屠っている。

まさにいまさら、というところだろう。

一度外套を脱ぎ、裏返しにして羽織りなおした。
外套は返り血対策だ。
フードもしっかりとかぶる。

デュランダルを抜き、宿の外壁の方を向いて、ワープと念じた。
岩穴のあった森の奥を思い起こす。

出たところは真っ暗だった。
火もないし、鑑定しても誰もいない。

周囲に誰もいないことを確認して、今度は岩穴の中にワープする。
盗賊の男が入っていくときに見た、扉の内側だ。
見ただけだが、見たのだからワープできるだろう。

再びワープで出た場所も真っ暗だった。
明かりもないし、物音もしない。星もないのでさらに暗い。

いや。落ち着いて耳をすませると、静かな寝息が聞こえてきた。
誰かいる。

周囲を鑑定した。
鑑定は便利だ。
光がなくても使える。

岩穴の中に盗賊が四人いた。

L V 1 8、L V 2 4、L V 2 9、L V 3 5。

おあつらえ向きだ。

極端にレベルの高い者もない。

このくらいのレベルなら、十分に戦えるし、懸賞金にも期待でき

る。

下つ端は、すでにやられたか、逃げ出したかしたのだろう。

不寝番も立てずに眠りこけているらしい。

危機意識なさすぎじゃないだろうか。

あるいは他の場所に誰かいるのか。

だとするなら、早めに片付けた方がいい。

真つ暗な岩穴だが、四人の居場所だけは分かる。

岩穴がどういう構造になっているのかは分からない。

奥に二人、Lv35とLv29。その手前に一人、Lv24。入り口に近いところに一人いた。

俺がワープで出たのは、Lv18とLv24がいる場所の中間辺りだ。

敵を片側に集めた方がいいので、まずは盗賊Lv18のところに行く。

足元がどうなっているか分からないのでゆっくりとすり足で移動した。

盗賊Lv18は地面に直接寝ているようだ。

起こさないように、軽く足でつついて位置を確認する。

こっちが下半身だ。

頭の方に移動した。

しゃがんで首を確かめ、デュランダルを向こう側の首筋にあてがう。

手前に寄せながら、思いっきり引き上げた。

盗賊Lv18は声も出さない。

これで首の動脈を何本か断ち切ったはずだ。

思った以上に巧くいったので、続いてLv24のところに入り足で移動する。

途中振り返って確認すると、盗賊Lv18の鑑定結果は出なくなっていた。

盗賊Lv24は、板か何かで作られた粗末なベッドの上に寝ているようだ。

足元に五センチか十センチくらいの段差がある。

多分中は空洞だろう。

盗賊Lv18のときと同様に首の位置を確かめると、デュランダルを向こう側に当てた。

ものの試しに、ファイヤーストームと念じてみる。

魔法は発動しなかった。

やはり、ストームは魔物に対してのみ効果があるらしい。

段差があるので、今度はデュランダルを斜め下方に強く引きつけた。

「ぐっ……」

Lv24の男がうめく。

引き上げるのは障害物がなくなったときにデュランダルの刃がこちにきそつで怖い、下におろすのならその心配がない。

そのために強くやりすぎてしまったようだ。

Lv24はこれで片付いただろうが、まだあと二人いる。

今の声で起きてしまったかもしれない。

俺はあわてて振り返ると、盗賊Lv35に向かってファイヤーボールと念じた。

頭上に火の球ができる。

周囲が明るくなった。

目がくらむほどではないので、対応できる。

岩穴の中は、殺風景な土の床と壁が広がっていた。

家財道具などは置いていない。

板なのか木箱なのか、盗賊は何かを台にしてベッド代わりにしていた。

「うぎゃあ」

火の球が盗賊Lv35に当たり、盗賊が大声を上げた。

その声を聞きながら、デュランダルをかまえLv29の盗賊に向かって走る。

盗賊Lv29は突然の大声に何事かと頭を持ち上げた。

デュランダルで首を断ち切り、その頭を刎ね飛ばす。

盗賊の頭がベッドの向こうに転がった。

盗賊Lv35に視線をやると、男は地面の上で転がり悶えている。自然にベッドから落ちたものか、火を消すためにわざとやっているのか。

あまりに勢いよく転がるために、うかつに近づけない。

火が消え、再び真っ暗闇になった。

真っ暗でも鑑定で男のいる位置は分かる。

男は銅の剣を装備したようだ。ベッドの下にでも隠してあったの

だろう。

何が起こったのか分からないくらいにあわててもいいと思うが、
そう都合よくはいかないらしい。

襲撃される可能性くらいは想定していたということか。

位置が分かるとはいえ、鑑定結果だけを頼りに飛び込むことは難しい。

ファイヤーウォールと念じて、男が寝ていたベッドの辺りを思い
起こした。

火の壁が出現する。

俺のいる場所から見て、盗賊Lv35がいる位置のさらに向こう
側だ。

周囲が突然明るくなって、盗賊が後ろを振り返った。
後ろから光を当てられれば、誰でもそうするだろう。

普通は背後に誰かいるというサインだからだ。

真つ暗な間に俺がそこへ移動したということも考えられる。

しかし、今の場合はそうではない。

盗賊が振り返ったのは、盗賊にとって隙にしかならなかった。

俺は大きく踏み込み、デュランダルを左からスイングした。
デュランダルが男の胸に喰い込む。

そのまま右に移動しながら引き斬ると、盗賊が崩れ落ちた。

身請け

盗賊を四人倒した。

レベル的にも、町を追い出された後で壊滅せずに残っていたことから考えても、それなりの懸賞金を期待していいのではないだろうか。

こんな場所に長居はしたくないので、必要な作業を行う。

まず、盗賊の衣服を裂いて風呂敷を作った。

左手首を切り取って四本収める。

盗賊を倒すときに放ったファイヤーウォールが運よくベッドの板に燃え移っていた。

炎が岩穴の中を照らしている。

ファイヤーボールを浴びせたときに盗賊が大声を上げたが、誰も岩穴には入ってきていない。

近くに仲間がいるというわけではないようだ。

それでも、せっかく倒した獲物を誰かに横取りされるのはまっぴらだし、インテリジェンスカードが出てくるまでここで三十分待つのもごめんこうむりたい。

だから手首を持っていくしかない。

銅の剣も四本集める。

皮の鎧などの防具やその他金になりそうなものは何もなかった。持っていないのか、どこかよそに隠しているのか。

宝物庫が他にある可能性があるが、今となっては調べようがない。

四人全員の口をふさいでしまったのは失敗だったかもしれない。まあしょうがない。あまり他にやりようもなかった。盗賊にブラヒム語がしゃべれたかどうかも分からないし。

剣だけでも身近に置いておいたのは、さすがは抗争中の盗賊と評価すべきか。

今回は役に立たなかったとはいえ。

必要なものを集めて岩穴を後にする。

まずは川の近くにワープして外套を洗った。血を落とすには早い方がいい。

星明りと勘だけが頼りだが、多分そんなに返り血は浴びていないだろう。

手と顔も一応洗ったが、外套以外にはほとんど血はついていないと思う。

外套を木の枝に干した後は、迷宮に移動して時間をつぶす。

感情が高ぶっていたせいで、まともな探索にはならなかったが。

自ら積極的に動いて人を殺すというのは、思った以上に衝撃が大ききようだ。

落ち着こうとしても、冷静に迷宮を探索することはできなかった。魔物は向こうから現れるので狩にはなったが、こんな精神状態であまり戦うべきではないだろう。

早々に切り上げる。

適当に時間を見計らってインテリジェンスカードを回収し、必要のなくなった手首を森へ捨てに行った。

その後、外套を持って宿に帰る。

部屋に入り、ぬるくなった水で体を拭いた。
ベッドで横になり、シミターを抱き枕にして目を閉じる。
気持ちは高ぶっていたが、やがて眠りに落ちた。

目が覚めたのは完全に日が昇ってからだ。

盗賊の隠れ家に行く前の睡眠時間はやはり短かったらしい。

思ったよりもよく寝た。

盗賊を退治したことで精神は高ぶっていたが、それよりも安心したことの方が大きかったのだろう。

報復の危険は除去したし、ロクサーヌを手に入れるめども立った。懸賞金がいくらになるか分からないので決まったわけではないが、一応できることはすべてやった。

これでお金が足りなりなければ、それはもうしょうがないだろう。

インテリジエンスカードの換金をどこで行うか。

それを考えながら、ベッドの中でまどろむ。

具体的には、ベイルの町の騎士団詰め所で行うのがいいか、他の町へ持ち込むのがいいか。

十日前にもベイルの町で換金しているのだから、連続で持ち込めば目をつけられる可能性がある。

ここの騎士団はスラムの盗賊と繋がりがあらし。

そして、盗賊は新しい賞金稼ぎの登場を歓迎したりはしないだろう。

たとえ自分たちに敵対する盗賊を殲滅したのだとしても。

他の町で換金すれば目をつけられる可能性は減らせる。

しかし、今度はきちんと換金できるかどうか分からない。

懸賞金がどのようなシステムになっているか、俺は知らない。普通に考えれば、かつてこの町にいた盗賊に賞金を懸けるのは、この町の人たち、この町の騎士団ではないだろうか。

他の町では、懸賞金が下がる可能性、あるいは出ない可能性があるかもしれない。

問い合わせを行うために即日では賞金が下りない可能性もあるだろう。

ロクサーヌを入手する約束の期限は今日までなのだから、それは困る。

また、盗賊を倒したときの状況を聞かれるおそれもある。

前に換金したときには何も聞かれなかったが、多分村の商人が何か説明したのだろう。

いつもベイルの町に来ている商人と騎士団員とは顔見知りだった可能性もある。

商人に信用があったこと、村ぐるみで嘘をつく可能性は小さいこと、町を追い出された盗賊が近くの村を襲う可能性は十分に考えられること、から、簡単な説明でも受け入れたのではないだろうか。

あるいは、騎士団から村へ予め警告があったとも考えられなくはない。

襲撃の後、村から騎士団へ誰かが報告に走った可能性もある。

今回はどの程度事情を訊かれるだろうか。

他の町にインテリジェンスカードを持ち込んであれこれ事情聴取されたら、かえって面倒なことになりかねない。

現場検証したいのでどこで盗賊を倒したか教えてくれと言われたら、ベイルの町の近場であることに不信感をもたれるだろう。

何故ベイルの町の騎士団に持ち込まないのかと。

そうした可能性を考えると、ベイルの町の騎士団で換金するのが妥当だ。

村を襲った盗賊の仲間が逆恨みして返り討ちにあったと解釈してくれる可能性もある。

目をつけられかねない可能性については、この際多少はしょうがないだろう。

朝食を取った後、宿を出て向かいの建物に赴く。

中をうかがうが、顔見知りの見習い騎士や美人騎士はいないようだ。

さてどうするか。

目をつけられないように、という点では、顔見知りがない方が有利だ。

しかし、事情を知っている人の方が話が通じやすいかもしれない。もし仮に騎士団とスラムの盗賊が繋がっていると、俺のことが盗賊ハンターとして伝わる可能性があるならば、俺の顔を知っている人間は少ない方がいいだろう。

せつかく市が立っている日だ。

市をぶらつきながら、時間をつぶす。

銅の剣も四本うつぱらった。

ロクサーヌがいれば必要になるかもしれないが、そのときはそのときだ。

騎士団の詰め所要員は昼に交代があったらしい。

日が高くなったところに行くと、詰め所の入り口近くに見習い騎士がいるのを発見した。

「よう。がんばってるようだな」
「あ、ども」

見習い騎士に声をかける。

見習いというのはこっちが勝手に思っているだけだが。

騎士Lv5。この間は確かLv4だったので、レベルが上がっている。

「ちよつといいか」

「はい」

「実は昨晚、変なやつに絡まれてな。盗賊のようだ」

盗賊たちのインテリジェンスカードを取り出し、見習い騎士に渡した。

「盗賊ですか？」

「まあもちろん返り討ちだがな」

胸を張る。

大物感を出してごまかす作戦。

別名、たまたまよたまたま、べ、別にこっちからしかけたわけじゃないんだからね、作戦だ。

見習い騎士が愛想笑いを返してきたので、成功だろう。

成功だとしておきたい。

成功だと言って。

あきれたただけかもしれない。

「一応、あなたのインテリジェンスカードを見せてもらえますか」

「うむ」

左腕を見習い騎士の前に差し出した。

騎士は、俺のインテリジェンスカードを確認すると、では調べてきますと言つて、詰め所に引き込む。

詮索されなかったので、作戦成功だ。

たとえ変なやつだと思われて避けられたのだとしても、作戦成功には変わらないだろう。

やがて、小袋を持って見習い騎士が出てきた。

今回は美人騎士はスルーらしい。

「確認できました。盗賊四名、ソマーラの村を襲った盗賊の仲間です。そのために狙われたのかもしれないね」

「物騒だな」

向こうからそう解釈してくれるならありがたい。

「連中の仲間はもう残っていないでしょう。あまり危険はないと思いますよ」

賞金の小袋を渡してきたので、受け取ってさっさと立ち去る。

盗賊の遺体をどうしたとか、詳しい事情聴取もいらないうつだ。

前のときもそうだったし、町で殺されていた盗賊の扱いもぞんざいだった。

この世界の盗賊とはそんなものなのかもしれない。

案ずるより産むがやすし。

思った以上に巧くいった。

素早く物陰に移動して小袋を覗く。

銀貨がたくさんと金貨も何枚か。

金貨が五枚以上あるのを確認して、胸をなでおろした。

すでに金貨三十三枚と銀貨四百枚以上は持っている。

これでロクサーヌを手に入れる資金はそろった。

通りに戻り、悠々と奴隷商の館へ向かう。

この十日間は長かった。

それもあと一歩で終わる。

思わずにやけそうになるのをこらえた。

まだ最後の詰めが残っている。

全部終わるまで安心してはいけない。

奴隷商人が詐欺を働くとか、可能性がないわけではない。

「ミチオという。主人のアラン殿に取り次ぎ願いたい」

奴隷商の館に着き、出てきた男に告げた。

男は一度立ち去り、戻ってくると俺を中に入れる。

「こちらでお待ちください」

入り口横の部屋に通された。

絨毯の敷かれた待合室で、デュランダルを出す。

一応の用心だ。

俺が四十二万ナール以上の現金を持っていることは奴隷商人にも分かっていて、ことさらデュランダルに目をつけられることは

ないだろう。

むしろ、今後の利益をちらつかせるためにも、豪華な装備品を見せつけることに意味があるかもしれない。

デュランダルが豪華に見えるかどうかは分からないが。

今後とも上客になりそうだと思えば、変なことはしてこないだろう。

そう考えると皮の鎧は微妙すぎるか。

「ミチ才様、お待ちしておりました」

「うむ」

奴隷商人はすぐにやってきた。

「資金の方は、ご用意できましたか」

「まあなんとかな」

「それでは、こちらの部屋にお越しく下さい」

「分かった」

過去二回通された部屋に案内される。

「やはり私が見込んだとおりでございました」

「どうだかな」

奴隷商人が言うほどには、迷宮では稼げなかった。

むしろ、奴隷商人の見込みははずれたのではないだろうか。

ソファアに座ると、ロクサーヌではない使用人がやってきて、ハーブティーを置く。

「どうぞ、お飲みください」

使用人が去ると、奴隷商人が勧めてきた。形だけカップを口につけ、飲んだ振りをする。

奴隷商人が何かたくらんでいるとすれば、飲み物に毒を混ぜるのが手っ取り早いだろう。

飲むことはない。

懸賞金の小袋を出して、中を確認した。

懸賞金は十万と何千ナールか。前回の方が多かった。

懸賞金の小袋から金貨十枚を出す。

そして、リュックサックから巾着袋を取り出した。

予め銀貨四百二十八枚を別にしてある。

「銀貨が多くて悪いが」

「もちろんかまいません」

横を向いてアイテムボックスオープンと小声で唱え、アイテムボックスから金貨二十八枚も出した。

これで四十二万二千八百ナールだ。

「確認してくれ」

銀貨が四百枚もあると、数えるのも大変だ。嫌がらせに近い。

「ありがとうございます。確かに受け取りました。すぐに連れてまいりますので、しばらくお待ちください」

奴隷商人は硬貨の数を確認すると、皿に載せ、全部持って出て行った。

ハーブティーも飲まずに待っていると、やがて帰ってくる。
ロクサーヌも一緒だった。

奴隷商人の後ろに隠れるように立っている。
萌黄色のチュニツクに同系色のズボンを着用していた。

顔は、やはり美人だ。

会わない間に思いが募ってかなり美化してしまっているのではな
いかと疑ったが、そんなことは全然なかった。

むしろ現物の方が記憶の中より綺麗かもしれない。

「ありがとうございます」

ロクサーヌが俺を見て頭を下げる。

イヌミミが揺れた。

あの耳は可愛い。

まあ、礼を言われるようなことをしたかどうかは疑問だが。

「よろしくな」

「はい。よろしく願いします」

「それでは、契約を行いますので、インテリジェンスカードを確認
させていただきますか」

奴隷商人が部屋の中に入ってきて告げる。

「うむ」

「はい」

左手を伸ばした。

ロクサーヌも横に来て腕を出す。

奴隷商人が呪文を唱えると、インテリジェンスカードが飛び出してきた。

その後も奴隷商人はなにやらブツブツと唱えている。

「これで契約が終了しました。インテリジェンスカードをご確認ください」

加賀道夫 男 17歳 探索者 自由民
所有奴隷 ロクサーヌ

促されて見てみると、インテリジェンスカードが書き換わっていた。

奴隷商人は詐欺師ではなかったということだろう。
表示をごまかせるような魔法でもあれば、まだ分からないが。

ジョブは探索者になっている。

やはりファーストジョブが表示されるようだ。

「えっと、はい」

少し安心して息をはいた俺の前に、ロクサーヌが手を伸ばしてきた。

ロクサーヌ 16歳 獣戦士 奴隷

所有者 加賀道夫

「なるほど。確かに契約がなされたようだ」

ロクサーヌのインテリジェンスカードも同様になっている。
見せてもらったので、俺も一応ロクサーヌの前に腕を出した。

「あの……よろしいのですか？」

ロクサーヌが美しい瞳で俺の方をうかがうように覗いてくる。
インテリジェンスカードは奴隷に見せるものではなかったらしい。

「まあ見られて困るものでもないだろうし」

「はい」

ロクサーヌが俺のインテリジェンスカードを読んだ。

「これでミチ才様は所有者になりました。所有者には、奴隷に住まいと食事を与え、また税金を支払う義務がございます。これらの義務を放棄したり、奴隷を著しく不当に扱った場合、契約が破棄されることもあります。遺言の作成、変更も奴隷商人の仕事になります。その際にも是非当館をご利用ください」

ロクサーヌにカードを見せている間、奴隷商人が淡々と説明してくる。

通り一遍の通常業務という感じだ。
決まりきった定型文なんだろうか。

アメリカの刑事ドラマにおけるミランダ警告みたいなものか。おまえには黙秘権がある、ってやつ。

著しく不当な扱いというのが具体的にどんなものなのか訊いてみたいが、ロクサーヌの前で尋ねることではないだろう。

限界にチャレンジしたい、と俺が考えているように捉えられても困る。

遺言というのは、おそらく所有者が死んだときに奴隷をどうするか決めておくやつだ。

税金の話は聞いていない。

「税金とは？」

「人頭税です。奴隷には支払う義務はありません。その分は所有者が支払うことになります」

まあ、この世界にも当然税金はあるのだろう。
初めて聞いたが。

「税金については知っているか」

「は、はい。……一応のことは」

ロクサーヌに訊くと、知っているとの回答が返ってきた。

ロクサーヌが知っているなら、後で話を聞けばいいだろう。

「分かった」

俺は奴隷商人に対してうなづいた。

ダブル

「それでは、またのご利用をお待ちしております」

奴隷商人に見送られ、ロクサーヌと二人で商館を出た。

ロクサーヌは大きなケースを前に持ち、両手でぶら下げている。それが彼女の全持ち物のようだ。

チラチラとロクサーヌの方をうかがう。

もっと堂々と見てもいいはずだが、微妙に気恥ずかしい。

明るい日の光の下で見ると、ロクサーヌの美しさはさらに映えた。白い肌は輝いているかのようだ。

チュニツクはだぼだぼだが、思ったとおり胸は大きい。

かなりのふくらみがあった。

うん。楽しみだ。

などと考えているから、堂々とは見れないのか。

「それ、重くない？」

ケースを指差して訊いてみる。

女性が荷物を持つというのは、どうも居心地が悪い。

「は、はい。大丈夫です」

「ちよつと貸してみても」

「は、はい。どうぞ」

右手を伸ばして受け取った。

重さの確認と、もう一つやりたいことがある。

右手でケースの取っ手を持ち、デュランダルを持った左手をケースの裏側に添える。

デュランダルを出したのはいいが、商館では消す機会がなかった。重さを確認しながら、デュランダルをケースで隠す。

キャラクター再設定と念じて、デュランダルを消した。

「確かに、重くないな」

そう言って、ケースをロクサーヌに差し出す。

最初はケースを俺が持つていくつもりだったが、考えを変えた。

奴隷が荷物を持つのは普通のことだろうから、俺が持つ方が変だというのが一つ。

もう一つ、剣のことがある。

ケースをかかえてはいざというときに対応ができない。

ロクサーヌは剣を持っていないし、俺が対応する必要がある。

男が荷物を持ってなどというのは、街中で刀を振るうことがなくなった近代社会だからこそ出てくる観念ではないだろうか。

おそらく、この世界では街中での暴力は想定範囲内だろう。

ロクサーヌの荷物を俺が持つことは、彼女を大切にしているように見えて、その実ロクサーヌを危険に晒していることになる。

俺はいつでも剣を抜けるようにしておくべきなのだ。

従者が荷物を持ち、主人は剣を持つ。

それがこの世界の常識だろう。

アイテムボックスを開いてシミターを取り出しながら、ロクサー
又にケースを戻す。

取っ手を渡すときに指が触れてドキドキした。

白くて細く、柔らかい女の子の指だ。

我ながらどうなんだろうという気がするが、どうなんだろう。

こんなことで大丈夫なんだろうか。

「と、とりあえず、ベイル亭に行って宿を取ろう。この先の通りに
出て、ロータリーまでまっすぐだから。ついてきて」

「は、はい。かしこまりました」

シミターを腰に差し、歩き出した。

ロクサーも俺の後をついてくる。

荷物を持った女性を後ろに従える。

微妙に居心地が悪い。

もっとも、ロクサーの方も緊張しているらしい。

さつきからはいばかりだ。

「そういえば、漢字が読めるのか」

「カンジ、ですか？」

振り返って尋ねると、ロクサーが不思議そうに顔を傾けた。

その顔も美しい。

いや、ではなくて。

うん。漢字が読めないことはすぐに分かった。

漢字がブラヒム語に変換されなかったからだ。

漢字という概念がないから、カンジとそのまま外来語扱いされた
のだろう。

「えっと。インテリジェンスカードは読めてたよな」
「は、はい」

「インテリジェンスカードは何語で書いてある？」
「ブラヒム語でした。……あつ。えっと。インテリジェンスカード
というのは、見ている人の意識に直接働きかけるので、その人が知
っている文字で読めるそうです」

なるほど。そういうことか。

漢字で書いてあるわけではなくて、俺に読める文字で見えたわけ
だ。

文字を読めない人にはどう見えるのだろう。

「ふむ。ロクサー又はブラヒム語が読めるのか」

「は、はい。少し習った程度ですが」

ついでにブラヒム語を読める人材までゲット。

「俺はブラヒム語の読み書きは駄目だから、よかつたら教えてほし
い」

「は、はい。分かる範囲でよろしければ」

「ありがとう。よろしく頼む」

探検者ギルドの前を通る。

今度からは代読屋がいらなくなるな。

「約束どおり十日で迎えに来ていただいたので、まだあまり習って
いませんが」

「ん？ 習ったって、あそこの商館でか？」

「はい。話せば絶対に損はないからと、ブラヒム語を習いました」

奴隷商にそんなサービスがあったとは。
いや、ブラヒム語を使えた方が高く売れるからだろうか。
一方的なサービスというわけではないだろう。

「あそこがベイル亭だ」

「はい」

荷物もあるので、市は素通りして宿屋をまっすぐに目指す。

すれ違った男の何人かが、ロクサーヌのことをまぶしそつに見ていた。

ちよつと優越感。

しかし、俺のロクサーヌを見るんじゃないと言いたい。

俺でさえもまだまともに見れないというのに。

ベイル亭に入る。

「二人部屋に移りたいが、いいか」

鍵を用意しようとする旅亭の男に告げた。

「大丈夫だ。……ダブルでいいか」

「ああ。夕食も二人分つきで」

「ダブルルームは三百八十ナールだ。夕食つきで、ええっと、長期滞在だし、特別サービスで一泊三百五十ナールでいい」

夕食がつくと三割引が効いてかえって安くなる不思議。

疑問には思わないのだろうか。

サービスと言っているから、割り引いている自覚はあるのだろうか

が。

「分かった。三百五十だな」

なにせよありがたい話なのでこっちとしては受けるだけだ。

リュックサックの中の巾着袋から銀貨三枚と銅貨五十枚を出してカウンターに置く。

「じゃあ二人とも腕を出してくれ」

そういえば、インテリジェンスカードのチェックがあるのか。

ロクサーヌを奴隷にしたことが分かってしまう。

しょうがないので、左手を伸ばした。

「ロクサーヌも」

「は、はい」

何故か呆けたようにしているロクサーヌにも手を出させる。

「ダブルは五階だ。前の部屋で荷物を取ってから、五階に案内する」

旅亭の男はインテリジェンスカードを見ても別に何も言わなかった。

客のプライバシーにまでは立ち入らないというところか。

鍵を二つ持って、さっさと階段を上がっていく。

「荷物貸して」

俺もロクサーヌからケースを受け取って、後に続いた。

宿屋の中なら、剣を優先する必要はないだろう。

「あ、ありがとうございます」

ロクサーヌも後をついてくる。
階段を上った。

「まずは部屋の荷物を全部取ってくれ」

旅亭の男が三一一号室の鍵を開ける。

ケースをロクサーヌに渡し、中に入った。

外套を左手に抱え、木の桶の中にロープと洗濯物と残りの荷物を詰め込む。クローゼットに置いてあったジャージも入れた。

クローゼットの下の棚に入れておいた皮の靴も出す。

「これで全部だな」

「じゃあ、五階へ行くぞ」

旅亭の男が三一一の鍵を閉めて先導した。

「あ、あの、お持ちいたします」

「いや、大丈夫」

荷物を持つとうというロクサーヌを制する。

彼女だってケースを持っているのに。

階段を上った。

三階なら何の問題もないが、五階だとエレベーターがほしい。
そんなものはないだろうが。

「ダブルの部屋は最上階にしてある。五階はダブルのお客さんだけだ」

俺の不満を読み取ったかのように、旅亭の男が言い訳する。理屈はよく分からない。

「ふうん」

「ここが部屋だ」

男が部屋の鍵を開けた。

「ふむ」

中に入る。

大きなベッドが一つと、奥に机が置かれていた。イスが二つあるのは、二人部屋だからか。

机の上に荷物を置く。

部屋の大きさは今までいた三ー一号室とそれほど変わらない。

一回り大きくした程度。もう少し大きいか。

広々と感じるのは、クローゼットが置いてないからだ。

「右がクローゼットになっている。下の棚は鍵がかかるようになってるが、貴重品を置いて外には出ないようにな」

旅亭の男に言われて右壁の引き戸を開けると、奥が備えつけのクローゼットになっていた。

クローゼットの分、三ー一よりも広いようだ。

その後、旅亭の男は最初三二一に入ったときにも聞いた説明を繰り返し、鍵を俺に渡して出て行った。

一つしかないベッドに腰かける。
柔らかさは三階の部屋と同程度のもだろう。

見回すと、ロクサーヌは入り口のそばで所在なさに立っていた。

「入ってイスにでも座ったら」

「は、はい……」

おずおずとロクサーヌが通る。

緊張、というよりは少し怯えている感じがする。

「えっと。この数字が五でいいのか」

俺はロクサーヌに鍵を見せた。

こここの部屋番号は五一七。一は分かっているから、残った数字の左側が五のはずだ。

「は、はい、そうです」

「で、これが七？」

「は、はい……」

うーむ。会話が続かない。

ロクサーヌの怯えが伝わってきてしまう。

道中はもう少し会話できていたような気がするが、宿屋に来て戻ってしまった。

いくら俺でも昼間っからいきなり押し倒したりするつもりはないのだが。

まあ、ホテルの部屋で二人つきりになればしょうがないか。
おまけにベッドは一つしかないし。

「えっと……。耳って、触ってもいいか」

どうせだから、思いっきり要求を出してみた。

結局怯えられるなら、もっと野放図に振舞ってもいいような気がする。

多分。おそらく。メイビー。

「あ……は、はい」

「じゃあこっちきて」

ロクサーヌを呼び寄せる。

いや。ただのスキンシップだよ、スキンシップ。

スキンシップは大切だ。

襲われると怯えられているのなら、その手前まではやって手は出さないのが、怖くないとアピールすることになる。はずだ。

シユア、プロバブル、サートウンリー。

美人が目の前にやってきて飛びつきたくなるが、そこはグッと我慢する。

俺は理性の人だ。

英語で言ったら person of reason である。

知らないけど。

煩惱退散。迷妄打破。

「……はい」

「……」

何故か床に座ろうとしたロクサーヌをベッドの横に招いた。床に座ることはないだろう。

隣にきたので思わず抱きつきたくなつたが、こらえる。

だから横には来なかつたのか。

煩惱退散、欲情鎮火。

ロクサーヌの頭に手を置いた。

横から見るロクサーヌも美人だ。

髪の毛がなめらかに俺の手を滑らせる。

柔らかくてふさふさの髪だ。

まさに、見てよし、触つてよし。

い、いかんいかん。つい押し倒したくなつた。

もちろん、忍の一字で耐える。

煩惱退散、邪念除去。

髪の毛の触り心地を十分に堪能した後、イヌミミに触れてみた。

耳は、大きくて柔らかく、力なく垂れている。

厚みにして、一、二センチはあるだろうか。

垂れ耳のせいか硬い部分がなく、なんかのパフみたいな感じ。

ふわふわ、ふかふかだ。

やばい。癖になる。

ええい。遠慮などいるものか。両手で触らしてもらおう。

「ロクサーヌって美人だけど、耳は可愛いよね」

ロクサー又は美人だ。それなのに冷たい印象がないのは、垂れ耳の影響が大きいと思う。

大きな耳が親しみやすさを醸し出しているのだ。

「えっ……あ、ありがとうございます」

こっちを見てくるロクサー又と目が合った。

ロクサー又は恥ずかしげにうつむく。

いやもういくしかないでしょう。

などという不埒な考えを押さえつけた。

煩惱退散、獸心寂靜。

耳をなでる。

無心に耳をなでる。

煩惱退散、妄執粉碎。

耳をなでて、少しはロクサー又も落ち着いてくれただろうか。俺の煩惱は落ち着いてくれないが。

横からロクサー又の様子をうかがった。

特に嫌がっている様子はない。

嫌だとしても、そこは甘受してほしい。

スキンシップは大切だ。

しかし横から見るとやはりロクサー又の胸は大きい。

いや違う。そうじゃない。

確認したくなるが、我慢だ。

煩惱退散、色欲撃砕。

「えっと。改めて、よろしく」

「はい。よろしくお願ひします」

俺が耳に触れているのもかまわず、ロクサーヌが頭を下げた。上がってきた後頭部をキャッチする。

「いいよね、この耳」

「あの……」

「何？」

「ご主人様とお呼びしてよろしいでしょうか」

うん。

ここでロクサーヌに飛びかからなかった俺を誰か褒めてほしい。
煩惱退散、獸性鎮圧。

スキンシップの成果か、少しは会話も続くようになった。
今飛びかかって怯えられたら元の木阿弥だ。

「そうだな。そう呼んでもらえるか」

「はい、ご主人様」

おおっと。

今のは危なかった。

思わず抱きつきそうになった。

平常心、平常心。

煩惱退散、色情封殺。

「そついえば、ここはベッド一つなんだな」

耳に触れながら話す。
いや待て。

そんな話題で大丈夫か。

「え？」

「え？」

案の定、ロクサーヌが聞き返してきた。
ちよつと違うか。なんだろう。

「えつと。頼んだのはご主人様です」

「え？ そうだっけ？」

「はい。ダブルの部屋を頼みました」

「あー」

なるほど。

ダブルがベッド一つでベッド二つはツインか。

確かにダブルでいいかと言われてうなずいたのだった。
旅亭の男のやつ、分かっていたいやがったな。
グッジョブ。

「知らなかったのですか」

宿屋に来てロクサーヌが怯えたのはそのせいか。

まあ知っていてもベッドは一つにしたけどね。

「まず最初に言っておきたいことがある」

「はい」

「俺は、ロクサーヌが聞いても信じられないくらい遠くから来た」

背筋を伸ばし、改まってロクサーヌに告げた。
ただし耳に触れたまま。スキンシップは大切だ。
本当のことを言うことはないし、嘘をついて後でばれても困る。
だから、半分本当のことを伝える。

「遠いというと、カツシームよりも遠くからですか？」

「カツシームというのがどこか知らないが、多分、ロクサーヌが考
えるよりもさらに遠くだ」

「そうなのですか」

ロクサーヌがなにやら考え込んだ。

ロクサーヌが信じられる場所よりも遠い。

いい表現だろう。

「それに田舎でもあった。俺はこちらの常識がよく分からない。常
識については、ロクサーヌにいろいろと教えてもらいたい」

「はい」

「このくらいのことには知っているだろうとか、こんなことも知らな
いのかとは思わずに、何でも説明してもらえるとありがたい」

「かしこまりました」

ダブルとツインは地球でも常識だったかもしれないが。

なんとかごまかせただろうか。

「あと、聞いているかもしれないが、ロクサーヌにも一緒に迷宮に
入ってもらったつもりだから、そのつもりで」

「はい。戦闘ではお役に立てると思います。お任せください」

迷宮のことを話すと、ロクサーヌがまっすぐに俺を見る。

その目が妖しく光ったような気がした。

反応

迷宮に入る話になったらロクサーヌの雰囲気が変わった。
どうやら自信があるようだ。

なんか怖い。

まっすぐ見つめられて、触っていた耳を離してしまった。

パーティーとして一緒にやっていくのだから、戦闘に自信があるのはありがたいことだが。

「服をクローゼットにかけてもよろしいでしょうか。しわになるので」

耳を解放されたからか、ロクサーヌが立ち上がる。

うーん。逃げられてしまった。

「ああ。そつだな」

「ありがとうございます」

ロクサーヌが商館から持ってきたケースを開ける。

入っていたのはメイド服だ。

あれを持ってきてたのか。

ロクサーヌと一緒に買ったメイド服。

支払った金額のうち二千八百ナールが半端だったから、正価が四千ナールということだろう。

それ自体は結構な値段がする。

するが、いい買い物ではあった。

ロクサーヌを単独で買ったのなら、三割引は効かなかっただろう。奴隷商人にカルクのスルがあるかどうか知らないが、いずれにしても単品でものを買うときにはおそらく三割引が効かない。

奴隷商人は、ロクサーヌだけを売れば六十万ナールだったところ、四千ナールの服までついでに売ろうとしたため、売価が四十二万二千八百ナールになってしまったのではないだろうか。

あまり欲をかきすぎてはいけないという教訓だ。

ロクサーヌはメイド服をクローゼットにかけ、服のしわを伸ばしている。

その後ろ姿も可愛い。

後ろから振るいつきたくなるくらいに。

うん。いい買い物だった。

胸の割に、ロクサーヌの体つきはスリムだ。身長は俺と同じくらいなのに一回りは細い。女の子という感じがする。

「あれ。裸足だったの」

改めてロクサーヌの身体をなめるように見ていると、ロクサーヌが裸足であることに気づいた。

「はい、そうです」

ロクサーヌはさも当然という風に答える。裸足のまま、商館からここまでできたのか。裸足は別に珍しくないのかもしれないが。

「この外套もついでに頼む」
「はい、かしこまりました」

立ち上がった机の上の外套を持ち、ロクサー又に渡した。
渡された外套をクローゼットにかける彼女の頭をなでる。

振るいつきたくなくなったからというわけでは、必ずしも、ない。
確認だ。

彼女がどこまで許す気があるかどうかの確認である。
巧く逃げられたような気がしたし。

ロクサー又ほどの美人を奴隷にできたのは詐欺だからではないか
という疑いをまだ完全に払拭したわけではない。

ロクサー又はおとなしく頭をなでさせてくれた。
この態度を見る限り、奴隷として買われて覚悟はできていると判
断していいのだろうか。

内心は分からないが、嫌がっているとしても、それを表情に出し
たりはしなかった。

思わず抱きついてしまう。
いや、違う。誤解だ。

俺の忍耐力がここまでだったということではない。
いきなり押し倒したりするつもりはない。

「残念だけど、逃がすつもりはないから」
「は、はい……」

ロクサー又は小さく答え、身体力を抜いた。
詐欺ということでもなさそうだ。

多分、この場で押し倒しても、それはそれでオツケーだろう。

後ろから抱きついてるので腕に胸が。

これは……思った以上に。

しかし今はまだ我慢だ。他にやらなければいけないこともある。

奴隷を買ったことに罪の意識はほとんど感じなかった。

分からない。奴隷を買ったという実感がないだけかもしれない。

まあ無理に罪悪感を湧き出させる必要もないだろう。

「この皮の靴、ああ、じゃないや、こっちのサンダルがはけるか」

腕を伸ばし、ロクサーヌを解放する。

これ以上は俺の耐久力が持たない。

「よろしいのですか」

「迷宮に入ってもらおう以上、装備品だから」

嫌がらないのをいいことに、俺はしゃがんでロクサーヌの足に触れた。

ロクサーヌの足は人間とあまり変わりはないようだ。

狼人族といっても毛むくじゃらではない。

ただし少し小さい。

かかとからつま先までの長さがふた回りか三回りは短かった。

「ありがとうございます」

「巧くはければ、だが」

「はい。あ、えーっと。装備品には魔法がかかっています。装備した者の体に合わせて、伸び縮みするんです。だから大丈夫です」

ロクサーヌが頭上から説明してくる。

俺に身体を触られているのをどう思っているか知らないが、逃げ出したり、嫌がったりするそぶりは見せなかった。

それをいいことにベタベタと触りまくる。

足はちっちゃくて可愛い。

甲がすべすべとしてなめらかだった。

「なるほど」

「これが、普通の服と装備品との違いです」

装備品というのはずいぶんと便利なものらしい。

そうでもなければ、装備品はワンメイクじゃなくて全部がオーダーメイドになるだろう。

「それって、常識？」

「はい。たいていの人は知っていると思います」

「……えっと。常識でも知らないことが多いから、これからもよろしく」

「はい」

この世界の常識だったようだ。

まあそうなんだろう。ただの村人で装備品を着けている人もいたし。

言い訳がさつそく役立った。

そして、きつちり対応してくれたロクサーヌに感謝しておく。

「剣は、片手剣と両手剣があるけど、どっちがいい？」

立ち上がってロクサーヌに訊いた。

「片手剣を願いできますか」

「うむ」

机の上のシミターをロクサーヌに手渡す。

剣を渡すのは、駄目かもしれないが、そうでないかもしれない。今までの態度を見る限り、渡してもいいと判断した。

奴隷になったのが形の上だけのことで、ロクサーヌや奴隷商人になんらかの思惑があった場合、敵に塩を送ったことになる。

例えば俺を殺して自由になるとか。

そこまで慎重に考えるべきかどうか。

ロクサーヌが剣を持っていなくともなんとかすると考えているのなら、俺にそれを防ぐことは難しいだろう。

一緒にベッドで寝るのだし。

迷宮に入るのだからいずれ剣は渡さなければならぬ。

今は剣を渡すのに絶好のタイミングだ。

早いうちに渡しておくことは、それだけ俺がロクサーヌを信用しているというサインにもなるだろう。

殺されるのなら童貞を捨ててから、せめて明日の朝に渡せばいいんじゃないね、という気もするが、それはどうなんだという気もする。人として。

「悪くはなっていませんが、あまり手入れされていないようです」

そんな俺の思惑を知ってか知らずか、ロクサー又は一心にシミターをチエックした。

顔つきも真剣なものになっている。

「え？ 手入れがいのの」

「はい」

いやまあ当然といえば当然か。

「他の装備品なんかも？」

「もちろんです」

「そっか」

考えてみればそうだよな。

手入れなんてしたことなかった。

「ご主人様。今後の手入れは私がやりますが、装備品は命を預けるものですから、もっと大切にしてください」

「……も、もつともだ」

ロクサー又が身を乗り出して説教してくる。

思わず後ずさってしまった。

「お願いしますね」

ロクサー又は机の上に置いてあった他の荷物をクローゼットにしまいだす。

「えっと。じゃあこっちきて、サンダルブーツはいてみて」

皮の靴は確保し、ベッドに座るとロクサーヌに声をかけた。紐を解いてサンダルを脱ぎ、皮の靴をはく。

見た感じ、サンダルブーツより皮の靴の方がワンランク上の装備だ。

足が半分むき出しになっているサンダルよりも靴の方が防御力が大きいだろう。

足を狙ってくるような魔物はいなかったし、蒸れないでいいと思つてサンダルブーツをはいてきたが、ロクサーヌに主人よりもよい装備品を回すことは避けた方が無難である。

「はい」

「えっと。こつち」

またしても床に直接座ろうとしたロクサーヌをベッドの隣に招き、サンダルを渡した。

ロクサーヌが俺の横に座つてサンダルをはく。

俺の足にフィットしてははずのサンダルは、ふた回り以上小さいロクサーヌの足を何故かぴったりと納めた。

魔法すごい。

「今日は市が立っている日なので、必要なものがあれば買いそろえたい。他に必要な装備品はあるか」

「木の盾でよいので、できればお願いします」

「木の盾だな。他には」

「防具に関しては、基本的にご主人様の装備から充実させてください。私のはあまったお下がりで十分です」

隣に呼んだのでロクサーヌの耳を触りながら会話をする。

もう部屋に入ったときほどの怯えや緊張感はないようだ。
スキンシップの成果だ。
スキンシップすごい。

「分かった。装備品以外で必要なものは」
「手入れをするのに油が必要です。なにかのオイルを持っていますか」

「いや、ないな」
「それでは、オリーブオイルの小さなビンを買いましょう」

オリーブオイルか。

「分かった」

「あとはボロ布を使います。使い古した肌着とか、ありませんか」
「ないな。そこにあっただけだ」
「まだ新しいですね」

洗濯物もロクサーヌがしまったので、五日前に買ったかぼちゃパ
ンツを見られてしまった。

もうお嬢に行けない。

ちなみに、トランクスは今はいている。

「手ぬぐいを使ってくれてかまわない。他に必要なものは」
「水筒があればいただきたいです」
「水筒か。ちょっと待ってて」

俺はリュックサックからコップ代わりの小さな木の桶を取り出した。
た。

クローゼットからロクサーヌがしまった中くらいの木の桶も取り出す。

二つを持って、トイレに走った。

水が入った小さな木の桶を持って部屋に戻り、ロクサーヌに渡す。

「ありがとうございます」

「飲んでみて」

「はい。いただきます」

ロクサーヌが口をつけた。

ウォーターウォールで作った水だ。

匂いはしないし、見た目も味も普通の水である。

何か問題があるかもしれないが、川の水や井戸の水より危険だとはいえないだろう。

俺も何日か前から飲んでいるが、おなかを壊したりはしていない。

ちなみに、ウォーターボールは勢いがありすぎて桶で受けられなかった。

「水は大丈夫かな」

「あの。すみません。水がほしかったわけではなくて、迷宮で使う水筒がいたできたかったのですが」

「うん、分かってる。いずれ分かるけど、大丈夫だから」

「そうですか」

魔法のことを知らないロクサーヌを無理やり納得させる。

もちろん、水筒だつてないよりはあった方がいいだろう。

しかし水は結構重い。そのコストを考えれば、水筒の利便さはかなり小さなものになるはずだ。

ベッドに座った。

ロクサー又は俺がいない間に何故か床の上に移動している。
なるほど。

ベッドの上に座ったら押し倒されると警戒しているのだろう。

「こっちきて」

「はい」

横に招いた。

「別にいちいち移動しなくてもいいから」

「あ、あの。でも、ご主人様のベッドですから」

「ロクサーもここに寝ることになるけどね」

抱きついて、小声でささやく。

とんだ悪代官だ。

「……あ、あの。お情けをいただくときは入りますけど、寝るのは
床でかまいません」

ロクサー又がうつむき加減でつぶやいた。

床に寝かすという発想はなかった。

どんな悪代官だよ。

このままいってしまえ、と俺の中で何かが叫ぶが、抑える。

別に今いっても問題ないのなら、後でしつぽり楽しんで大丈夫
のはずだ。

「それって、常識？」

「商館で、そういうご主人様もいると聞きました」

「俺はいいや。寒いしめんどくさいし、一緒にベッドで寝て」

「は、はい。ありがとうございます」

抱きついたらまま、髪をなでる。

避けられるでもなく、嫌がられるでもなく。

ここまでしても受け入れるということは、もう本当に俺のモノになつたとみていいだろう。

「水は桶をもう一個買うとして、あと何かある？」

「荷物は私はお持ちします。そのリュックサックか、他のものを」

「リュックサックか。分かった」

「私からはこれくらいです」

髪に触れたまま会話した。

耳もいじらしてもらおう。

この垂れ耳は癖になる。

「市は五日に一度だから、最悪五日間買えない可能性もある。よく考えて」

「はい。大丈夫です」

「盾、オリーブオイル、手ぬぐい、桶、リュックサック、鎧は何か買うとして、靴下もいるか。こんなものかな」

指折り数えながら確認する。七項目。

「はい」

「俺からは、石鹸ってこの辺にもあるのか」

大丈夫だ。石鹸はブラヒム語に翻訳された。

「石鹸ですか。石鹸はとても高いので。洗い物なんかにはコイチの実のふすまを使うのが一般的だと思います」

「やっぱり高いのか。シャンプー……いや、なんでもない。コイチの実だな」

「はい」

シャンプーは翻訳されなかった。

まあ石鹸が高価だと言っている世界で、シャンプーだのリンスだのトリートメントだのコンディショナーだのはないだろう。

「あと、歯を磨くものは何かないか」

「房楊枝ですね。シユクレの枝ならどこの市でも売っていると思います」

房楊枝というのか。

「盾、オリーブオイル、手ぬぐい、桶、リュックサック、鎧、靴下、コイチの実、シユクレの枝、で九項目か。忘れないように覚えておいて」

「はい」

「じゃあ、買いに行こうか」

リュックサックを持って立ち上がる。

いつまでもロクサーヌに触れていたい、そうもいかない。というか、用事があるならさっさと済ますに限る。

アイテムボックスから銅の剣を出し、リュックサックを背負った。リュックサックにはお金が入っている。

「かしこまりました」

ロクサーヌもすぐに立った。

鍵を預け、宿の外へ出る。

まず雑貨屋つばいところで、小さな木の桶、リュックサック、オリブオイルの小ビン、コイチの実、シユクレの枝を買った。しめて百三ナール。

コイチの実のふすまは匂い袋のようなものに入っていた。多分、そのまま使えるようにだろう。

シユクレの枝は二本で一ナールだ。安い。

というか、本当に何かの木の枝をそのまま切ってきただけだ。原価はただみたいなもんだろう。

買ったものをリュックサックに詰め、ロクサーヌに背負わせる。

隣の布屋みたいなところで、手ぬぐいを二枚取った。

ロクサーヌが使う分もあるかもしれないし、余分に買って困るものでもないだろう。

「靴下は最低二枚はいるよな。好きなを選んで」

「私を選んでよろしいのですか」

「どうぞ」

「大きさが分かりませんが」

話が通じない。

「いや。ロクサーヌが自分ではなく靴下だから」

「私のですか？ よろしいのですか？」
「大丈夫」

俺がうなずくと、ロクサー又は真剣な表情で靴下を選び始めた。
サンダルだから裸足でも問題ないとはいえ、迷宮に入る以上何か
あつた方がいいだろう。

靴下なんてどれでもいいじゃないか、とはいえない。
俺の靴下は、適当に選んだので少し大きかったりする。

「これをよろしいですか」

「了解」

「ありがとうございます」

ようやく選び終わったロクサー又从靴下を受け取った。
手ぬぐいと一緒に店番の商人に見せ、代金を支払う。

品物はロクサー又のリュックサックに後ろから入れた。
最後に防具商人の店へ移動する。

防具屋ではロクサー又の表情がさつきよりもさらに険しくなった。
木の盾一つに真剣だ。鬼気迫る感じがある。
まあ命を預けるものだからな。

木の盾 盾
スキル 空き

しかし、できればこちらの空きスロットつきのものを選んでほしい。

どうやって薦めるか。

空きスロットについてもロクサーヌに訊いてみたいが、人前でない方がいいだろう。

俺は置いてある木の盾から空きスロットつきのものを二つ見つけた。

「この三つがいい品だな」

「お分かりになるのですか」

「うむ」

ロクサーヌの言葉に、なるだけ自信ありげにうなずいて返す。

ワンメイクの装備品なんだからどれも変わらんかね、とは思うが。

ロクサーヌは俺が渡した三つを真剣に見比べ始めた。

美人なのにおっかない感じがする。

み、眉間にしわが。

怖いのでロクサーヌをおいて移動した。

鎧の置いてある場所に行く。

「皮の鎧はいくらだ」

「八百ナールでございます」

なんか高いような気がする。

そんなにするのか。

村を襲った盗賊の装備を売らなければよかったと思うが、しょうがない。

あのおときにはアイテムボックスもなかった。

「皮のジャケットは」

「千ナールでございます」

一度売ったものを買い戻すのは、なんか負けたような気分だ。
皮のジャケットと皮のグローブの空きスロットつきのものを持って、兜の場所に移動した。

胴装備、腕装備、足装備は一応そろえたから、残るのは頭装備だ。

皮の帽子 頭装備
スキル 空き

他も皮シリーズだし、手ごろなのはこの皮の帽子だろう。

見た目、ロードレーサがつける自転車用ヘルメットみたいな感じ。
頭にちょこんと乗っかるような。

「ご主人様、こちらの木の盾を」

ちょうどロクサーヌが木の盾を選んで持ってきた。

「皮の帽子でも、あつた方がいいか？」

ロクサーヌの頭に皮の帽子を乗せ、訊いてみる。
何故かすっぽり入る不思議。魔法すごい。

「もちろんです」

帽子はイヌミミまでを完全に隠した。

確かに、言われるまでもなくこれは必要だろう。
可愛い垂れ耳に何かあつたら大変だ。

「では、これを。全部で五点だな」

空きスロットつきの皮の帽子をもう一つ取り、防具商人に見せる。

「ありがとうございます。しめて九百三十八ナールにサービスさせていただきます」

代金を支払い、アイテムボックスに入れた。

ロクサーヌが何やら不審そうな目で俺を見てくる。

防具商人に聞こえないよう横を向いて、ムニヤムニヤ、アイテムボックス、とつぶやいたが、横にいたロクサーヌにはかえってばかりと聞こえてしまったようだ。

呪文を唱えるのは面倒だしこっぴどくかしいので避けてきたが、ちやんとすべきだろうか。

「これで全部だな。では戻るか」

「はい」

ロクサーヌは防具商人の前では何も言っただけでこなかった。

不思議に思ったとしても、人前で聞くことではないと考えたようだ。

帰る途中、ロクサーヌはなにやら言いたげな目で俺を見てくる。
やばいかも。

宿の前まで帰ってくると、目の前に服屋があった。

高い外套が置いてあった服屋だ。

高いが、必要なものなら手が出ないというほどでもない。

「雨が降ったら困るし、外套がいるだろう。好きなのを買っていいぞ」

つい話をそらしてしまっ。

いずれ分かるし、ロクサーヌにばれて困ることもないはずだが。

「よろしいのですか」

「うむ」

「ありがとうございます」

嬉しそうに、ロクサーヌが頭を下げた。

お楽しみ

昔、母に連れられて赤坂か広尾あたりのブティックに行ったことがある。

あまりに昔のことでも場所もよく覚えていないが、何かの建物の二階か三階にある瀟洒なお店だった。

店から高速道路を通る車を見ていたことを覚えている。

よく晴れた日で、太陽の光を反射して車がキラキラと光っていた。

なんで車なんか見ていたのかというと、他にやることがなかったからだ。

母親の買い物につき合わされて男の子が楽しむことは難しい。

多分、俺はぐずったかぶうたれたかしたのではないだろうか。

母がブティックに俺を連れ回したのはあの一回きりだ。

母は一度で懲りたに違いない。

買い物を楽しまない俺に。

あの日、母は何を期待して俺を連れ出したのか。

子どもと買い物に行くのを楽しみにしていたのではないだろうか。

死んだ母にもう親孝行はできない。

俺はどうすべきだったのだろうか。

母と一緒に買い物を楽しむべきだったのだろうか。

女性を買う物を楽しむと知ったのはあれからずっと後のことだ。

そして身をもってそれを知る機会は、今の今までなかった。

好きな外套をかうと伝えられたロクサー又は、嬉々として品を選んでいる。

店の外套を全部ひっくり返す勢いだ。というか、文字通り全部ひっくり返すだろう。

平台の外套を左から一着一着取り出して、こと細かに見ていった。

広げて全体を確認し、自分の腕に当てて似合うかどうか考え、襟やすそなどの細かい部分もチェックする。

例外は存在しない。

その赤茶けたのは見るからに駄目だろう、という外套まできつちりと広げて見定めていた。

あ、たたんでしまった。

やっぱり駄目だったんだ。

あれは一目見て色が変わりもんなあ。いちいち確認するなよと。

言いたいのはやまやまだが、もちろん言わない。

店番の商人も何も言わなかった。

下手に声をかけられないようだ。

ロクサー又の場合、「どういったものをお探しですか」とか声をかけても、「全部見せて」と言われそうだ。

お。何か言うか。

「「こちらなどお勧めでございますが」
「……うーん」

撃沈した。

商人が見せた外套はロクサーヌのお気に召さなかったらしい。まあ店員が勧めるのは少しでも高く売れ残っているやつだろうしな。

ロクサーヌ偉い。

外套を買う権利をやるう。

商人はすごすごと他の客のところへ移動する。

好きなのを買っていいと俺が言ったのを聞いただろうし、一着売れば御の字だろう。

俺はロクサーヌが全部の外套をひっくり返すのをただ見つめた。母に対してどんな失態を犯したのか、記憶もないし自覚もしていないが、過ちは繰り返さない。

文句は言わずに見守る。

美人だし可愛いので見るだけでも暇はつぶせる。

その成果か、最後の方は「これどうですか」と聞いてくるようになった。

うん。ファッションセンスのない俺にその質問はタブーだ。

適当にやりすごす文言を必死に考え、「それもいいね」などとお茶を濁す。

俺に見せる品は気に入ったものだろうから、否定する言葉は駄目だ。

それくらいは分かる。

というか、それくらいしか分からん。

店に置いてある外套を全部確認した後、ロクサーヌは候補を二つにまで絞ったようだ。

途中から左腕に抱えた外套と、最後の方に見つけた外套。どちらも似たようなエンジン系の色だ。

「どっちがいいと思いますか」

二つをさんざん見比べた後、ロクサーヌが振り返った。両方の腕に外套を乗せている。

俺に聞いてくるといことは多分、ロクサーヌの中では六・四以上くらいの割合で答えが出ているのだろう。そっちを選んでやれば終了だ。

ここで失敗したらすべてが水の泡である。

安い方で、などという発言が地雷なのは分かる。安い方でいいと思うけどね。

左腕に乗っている外套は、途中からずっと持っていた。気に入ったのでキープしていたのだろう。それがヒントだとすれば、こっちが正解だ。

高速道路を見ていた俺はヒントに気がつけなかった。今日はそうではない。

「こっちの方がまったりとしてシックでたおやかな落ち着きのあるいい色合いだな」

自信を持って、左腕の外套を薦める。理由は適当。

後付けアリアリだ。

というか、まったりとした色合いってなんだ？

自分で言ってるでよく分からん。

甘からず、辛からず、美味からず。

「そうですか？ こっちの方は、縫製なんかはいいんですが、色はちょっと重めかなと思っていました」

「う、うむ」

ありや。

色は向こうの方がよかったらしい。

「でもそうですね。言われてみれば、落ち着きのあるいい色かもしれません。分かりました。こっちでよろしいですか」

「分かった。他に、何か必要なものはあるか」

なんとか納得してくれたらしい。

ロクサー又から外套を受け取る。

「いえ。あの、これ以上は」

「せっかくだし、何か一着買っておくか？」

「ですが……」

「遠慮することはない。今日は記念となる特別な日だしな」

顔を近づけて小声でささやいた。

ロクサー又を買った記念の日。

というか、二着買わないと三割引が効かないのだよ。

「あの……それでは、肌着を買ってもよろしいですか」

「分かった」

「はい。ありがとうございます」

うなずいてみせると、ロクサーヌが衣類を選び始めた。この間俺が買ったようなかぼちゃパンツだ。男女で別ということはないのだろう。何の色気もないし。

もっとも、色気がないのは現代人の目で見るとはかもしれない。ロクサーヌは、外套と違って広げたりせずに選んでいる。肌着だけに、恥ずかしい感覚があるのではないだろうか。

「一枚で大丈夫か」

広げなかったので比較的早く選び終えたロクサーヌに問う。奴隷商館から持ってきたケースにはメイド服しか入っていなかった。彼女自身の持ち物というのはほとんどないのだろう。

「え。あ、あの、でも」

「もう一枚買っとけ。三つでいくらになる」

有無をいわさず申し付け、店番の商人を呼んだ。

「あ、ありがとうございます」

「おありがとうございます。三点で、そうですね、クロークを気に入っていただけたようですし、二千八百五十六ナールとさせていただきますしょう」

ロクサーヌが取り出した同じ色のかぼちゃパンツを含め、三点買
う。

金を支払うと、外套をロクサーヌに持たせ、肌着は後ろからロク

サー又のリュックサックに入れた。

「宿へ帰るか」

「はい」

日はすでに傾きかけている。

たいした買い物でもないのに結構長くかかってしまった。

これからは買い物に時間がかかることを覚悟した方がいいだろう。

「よう。お帰り」

ベイル亭に戻り、鍵を受け取る。

「いったん部屋に行って荷物を置いてくる。夕食はその後で。食事が終わったら、お湯を二つとカンテラを頼む」

「お湯二つにカンテラ一つだな。三十五ナールでいい」

お金を払うと階段を五階まで上り、部屋に帰った。

部屋に入ると、ロクサー又は外套をだいじそうにクローゼットにしまう。

「ありがとうございます」

「いいからいいから」

俺としては、買い物の中に逃げなかったことだけでもありがたい。リュックサックのものをしまおうロクサー又に近づき、頭をなでた。

うん。嫌がられてはいないみたいだ。

さっきまではあった怯えもない。

「まだ日もあるので手入れをいたします。装備品を出してください」
なでられたままロクサーヌが告げる。

「今日買ったばかりだし、いいんじゃないかな」
「いけません」

ロクサーヌが突如俺をにらんだ。
目が力強い。

「そ、そうだよな、やっぱり」

手入れにはうるさいようだ。
ロクサーヌがオリブオイルの小ビンを油を取り出した。

「あ、あの……」

ロクサーヌはこつちを振り向いて、ためらいがちにつつむく。
また突然、雰囲気が一変した。

「何？」

「肌着を買っていただいたので、今私が着ているのを手入れ用のボ
口布にしたいと思います」

「うん。いいんじゃない」

「……ご主人様はどうぞ食事にかれてください」
「食事が先、というわけにもいかないか」

食事を済ますころには日も暮れるだろう。

手入れは食事の前にやっておいてもらった方がいい。

カンテラの油は一時間分しかない。
できれば灯りの下でしっぽりと楽しみたい。

「ですのぞ」

「大丈夫。下で一緒に食べよう」

「よろしいのですか？ 宿屋の食堂は高いと思います。私だけならどこか安いところで食べてきますが」

遠慮しているのか、一緒に食事するのは嫌なのか。

「もう食事つきの値段で払ったしな。一緒に食事は嫌かもしれないが」

「嫌だなんて、とんでもありません」

「じゃ、そういうことで」

銅の剣を机に置く。

「……では、あの、失礼いたします」

ロクサーヌがいきなりズボンを脱ぎ始めた。

何ごとか、と思ったが、そうか。

これから手入れをする、手入れをするのに着ている肌着を使う、となれば、脱ぐしかないわな。

「あー、悪い。気にするな」

軽く手を振った。

俺が気にしろよ、という感じではあるが。

眼福なので見させてもらう。

だばだばのチュニツクがあるので、実際にはよく見えなかった。お尻は見えたと可愛かったけど、一番見たい部分がかぶりつきで見るわけにもいかないし。

あ、尻尾だ。尻尾。

ロクサー又は横を向いてしまったので、尻尾はよく見えた。髪と同じ栗毛色のふさふさの毛。

やっぱり尻尾があるのか。後で触らしてもらおう。

ロクサー又は素早く着替えをすませる。

本当にあつという間だった。

もつと見たかったがしょうがない。文句を言うわけにもいかない。

イスに座ると、ロクサー又は表情が真剣なものに変わる。

怖いくらいの面持ちで、装備品を手入れし始めた。

布に少量の油をつけ、磨いていく。

「こうして手入れをしておけば、いつまでも新品の状態です」

「手入れしないと性能が落ちるとか、あるのか」

「使う者が気分よく使えなければ、性能は発揮できません」

なるほど。気持ちの問題か。

今日のところはデュランダルは手入れしてもらわなくていいだろう。

手入れの後、食堂に下りた。一緒に夕食を取る。

二人がけのテーブルの対面ではなく床にロクサー又は座ろうとしたこと以外は、何ごともなく無事に食べ終えた。

食べ終えるころには日も沈んだ。

再び部屋に戻ると、宿屋の男がお湯と火のついたカンテラを持ってくる。

男はそれを置くとすぐに出て行った。

「背中を拭いてくれるか」

二人つきりになったので、すぐに行動を開始する。
冷静に。かつ大胆に。

下手に恥ずかしがると、かえってロクサーヌも緊張するだろう。

まず俺が裸になる。

トランクスも脱ぎ捨てた。

人間、生まれてきたときは誰しも裸なのだ。

カンテラを机の上に載せ、たらいを部屋の中ほどに引き寄せる。

「はい。ご主人様」

裸になった俺の背中を、後ろからロクサーヌが手ぬぐいで拭いた。
ここまでのところは成功だ。

手ぬぐいをお湯に浸して絞リ、前は自分で拭く。

「これって、使えるか」

買ってきたコイチの実の小袋を取り出し、ロクサーヌに見せた。
後ろを振り向いたので、前にぶら下がっているモノまでがロクサーヌの方を向く。

いや、問題ない、はずだ。多分。

「人の体を洗うことはあまりないと思います」

ロクサーヌにも見えただが、大げさには反応しなかった。それはそれで寂しい気もする。

我が息子は元気もそれなりだ。

さっきトイレに行ったとき暴発してしまったので。

「うーん。そうなのか」

「たいていはお湯で体を拭いて終わりです」

「お風呂……に入ることは」

大丈夫だ。翻訳された。

「王侯貴族なら」

結構大変なようだ。

俺の場合、魔法を使えば水も火も用意できる。風呂はそのうちなんとかなるのではないだろうか。

「これはどうやって使う？」

「房楊枝は水場の近くでないと」

続いてシユクレの枝を見せる。

口をすすぐのに水があるのだろうか。

これは明日でいいか。

体を拭き終え、かぼちゃパンツをはいた。

「じゃあ、次はロクサーヌね」

なるだけ平静に、こともなげに告げる。

なんでもないことのように。ただ順番が回ってきただけのよう

「……は、はい」

「うん」

ロクサーヌが小さな声を絞り出した。

チュニツクに手をかける。

さすがに見ているわけにもいかないの、たらいの方を向き、手ぬぐいを絞りなおした。

「あ、あの……私は狼人族なので毛深いかもしれません。ごめんなさい」

「へえ。そうなの」

かけられたロクサーヌの言葉に振り返る。

ちょうどロクサーヌがチュニツクを脱いだところだった。

カンテラの弱い光の中、ロクサーヌの身体が幻想的に浮かぶ。服と腕の隙間からは暴力的なおっぱいが。

あ、あれは暴力です。

飛び道具です。反則です。

ロクサーヌの前面に突り豊かな最終兵器がこぼれ出ていた。大きい。

そして柔らかそう。

見るものすべてを幸福にする最終兵器がそこにあった。

「実は背中が」

ロクサーヌは俺の視線に胸を隠し、身体をよじって背中を向ける。隠すことはないのに。残念。

ロクサーヌの背中を見ると、背中全体を髪の毛が覆って……。あれ？ 髪じゃなくて、毛なのか。

手ぬぐいを持って近づくと、背中から毛が生えていた。毛が腰まであるが、身体から離れていない。頭から伸ばしているわけではなかった。

髪を伸ばしているのではなく、頭から背中、腰まで、ずつと毛が生えている。

腰まであるベリーショート。

一言でいえば、そういうヘアースタイルだ。

ロクサーヌがズボンと肌着も脱ぐ。毛の生えている部分の終端から、尻尾が伸びていた。毛があるのは尻尾までで、お尻には生えていない。お尻はすべすべとしておいしそうだ。

俺は手ぬぐいを持たない方の右手でロクサーヌの背中の毛をなでた。

毛はしとやかで柔らかく、俺の手を優しく受け止める。

「ふさふさして柔らかいし、俺は好きだ」

「あ、ありがとございます」

手ぬぐいで背中の毛を拭いた。

身体のラインに沿って、上から下になでおろす。

「うむ。何の問題もない」

「あ、あの。ご主人様に拭いていただくわけには」

「大丈夫。この方が早いし」

背中から覗き込むと、胸に巨大な山脈も見えた。
聖なる頂、二つの霊峰が。

ロクサーヌも手ぬぐいで自分の身体を拭いているので、常時隠す
ことはできない。

拝みたい。

いや、拝ませていただきます。

南無、ロクサーヌ。

ビバ、ロクサーヌ。

拝むだけでは物足りない。

あがめなければ。

抱きつくように後ろから前へ手を回した。

隆起を確かめつつ、聖なるふくらみを清める。

「あっ……」

「何？」

「い、いえ……」

何か言おうとしたロクサーヌを気合で黙らせた。

神々しいコーニードは弾力のある手ごたえを返してくる。

素晴らしい。

確かな重量感を享受しつつ、丁寧に磨き上げた。一箇所の漏れもないように、丘陵のすべてを優しく拭き清める。ゆっくりと、注意深く、丹念に。

柔らかい。

手ぬぐい越しとはいえ、重みを味わい、弾力を堪能する。大きい。

手のひらに収まりきらないボリュームである。

「最高だ」

「……」

明らかにロクサーヌが自分で拭くよりも時間がかかっているが、この際たいした問題ではない。

なにしろあまりに雄大なのだ。

人が踏み入ったら出てこられないほどに。

たっぷりと時間をかけて拭き清め、俺はようやくロクサーヌを解放した。

「えっと。尻尾って拭いても大丈夫？」

「はい。あ、いえ、自分でやります」

「いいからいいから」

思わず時間を喰ってしまったことをごまかすため、次に移行する。ロクサーヌの尾を拭いた。

尻尾はふさふさとした毛の塊だ。

芯のようなものはなく、毛だけが集まっている。筆先みたいな感じか。

イ又ミミのふわふわ感もたまらないが、完全に毛だけという尻尾のふさふさ感もいい。

優しく俺の腕に絡まり、かつさらさらと流れるような感触がある。

「あ、ありがとうございます」

「尻尾って、動かせるのか」

「難しいですね。こういう風にしないと」

ロクサー又はそう言って腰を揺すった。

尻尾が左右に振れる。

いや。尻尾を動かしているのではない。明らかに腰を動かしている。

ロクサー又はの腰が情熱的に揺れた。

見方によってはセクシー。

見方によらなくてもセクシーか。

いいものを見せてもらった。

「うーん。なるほど」

「あと、嬉しいことがあると、無意識のうちにピクピクと動きます」

「そっか。じゃあ、ロクサー又はの尻尾がなるべく動くようにしないとね」

ロクサー又はの耳元にささやきかける。

「耳元といっても普通の耳元ではなく頭の横だ。」

「は、はい……。あの、よろしく願います」

あ。尻尾がちょっと揺れた。

その後、可愛らしいお尻とたおやかな足も拭く。
役得だ。

「さてと。じゃあちよつと実験してみるか」

「実験、ですか？」

「うん。ベッドの上でうずくまって、頭をこっちに出して」

ロクサーヌに指示した。

頭を洗えるかどうかのテストだ。

前からやってみたかった。

鏡がないので分らないが、俺の頭は今、ベットベットのギットギトじゃないだろうか。

なにしろ十日以上頭を洗っていない。

濡れタオルで拭くだけでは限界があるだろう。

この世界では普通かもしれないが、どうにも気持ちが悪い。

たらいを持ち上げ、イスの上に置いた。

ベッドと比べるとやはりたらいの方がちよつと高い。ああむけで
は難しいだろう。

「これでよろしいですか」

「たらいに頭をつけるくらいの勢いで」

「はい」

ロクサーヌが頭をたらいの上に伸ばす。

お湯をすくってロクサーヌの頭にかけた。

指ですきながら、髪をもみ洗う。

何度も繰り返しお湯をかけた。

耳にもお湯をかけ、丁寧に洗う。

「じゃあ、頭起こして」

一通り全部洗った後、濡れていない手ぬぐいを頭に乘せた。手ぬぐいで押さえながら、頭を起こさせる。

やや乱暴にワシヤワシヤと髪をすき、水分をぬぐい取った。

「ありがとうございます」

「うむ。二人なら頭洗えそうだな」

「ご主人様の頭もお洗いしましょうか？」

「そうだな。頼む」

手ぬぐいをロクサーヌの肩に置き、場所を入れ替わる。

「たらいを交換しましょうか」

「いや、このままでいい。もう一個の方は、靴下とか洗うから」

たらいに頭を突っ込んで、洗ってもらった。

ロクサーヌの細い指で髪をもみ洗いしてもらった。
いい気分だ。

お湯につけたただけだが、さっぱりした。

手ぬぐいで拭いてもらう。

目を開けると、そこにパラダイスが。

かぼちゃパンツをはいただけのロクサーヌが、正面から俺の髪を拭いてくれていた。

両手は俺の頭の上に伸ばしている。

すると無防備な胸元が。が。が。

「それでは洗濯しますね」

視線が分かったのかどうか、ロクサー又はすぐに離れてしまった。残念だ。

いや。

ロクサー又は裸のままたらいの横にしゃがんで靴下を洗っている。するとロクサー又の動きにあわせて胸も揺れるわけで。

パ、パラダイス。

「コイチの実使わないのか」

「あれは外套やお気に入りの上着などを洗うためのものです。毎日洗うものに使っていたら、すぐに布が駄目になってしまいます」

「そうなのか」

たらいをイスから下ろしながら訊いた。

せつかく買ったのに結構使えないんじゃない。

「これは、なんかすごいです」

靴下の次にトランクスを洗ったロクサー又はゴムに引っかかっている。

手で引っ張って、反応を楽しんでいた。

「こつちにはない？」

「見たことないです」

「そうなのか」

ゴムは珍しいようだ。

かぼちゃパンツが紐で結ぶようになっていたのも当然か。

ロクサーヌが洗い物をクローゼットに干す。

いよいよ全部の作業が終了か。

「えっと。この服を着ますね」

ロクサーヌがメイド服を取り出した。

「あー。いや、着なくていい」

「えっ、でも」

「商館で何か言われたか？」

「これを着ると喜ぶだろうと」

奴隷商人はロクサーヌに何を吹き込んでくれたのだろうか。

確かに喜ぶ。喜ぶが。

「それを着るのはまたでいい」

「はい……」

ロクサーヌが小さくうなずき、メイド服をクローゼットに戻す。

そして、無言でベッドに近づいてきた。

近づいたロクサーヌの手をつかみ、ベッドに引きずり込む。

ベッドに倒れ込んだロクサーヌに抱きついた。

ロクサーヌはされるがままになっている。

両手でがっちりとホールドし、豊かなふくらみを胸板で押し潰した。
顔を近づけると、ロクサーヌは意を決したように瞳を閉じる。

その唇に口づけした。

柔らかな唇に触れる。

しばらく、そのまま俺の口を押しつけた。

もっと強引にいきたいが、我慢する。

最初から舌を入れるのは駄目だとか聞いたことがあるような気がする。

「これから、夜寝る前と朝起きたときはキスをして挨拶すること」

「……はい」

「じゃもう一回」

一度放し、またすぐにむさぼりつく。

今度はちよつと強引にいつてみた。

舌も忍び込ませる。

ロクサー又は素直に受け入れてくれるようだ。

舌と舌を絡ませた。

ロクサー又の舌を味わいながら、かぼちゃパンツを脱ぐ。

それからロクサー又のパンツに手をかけた。

朝のお勤め

目覚めると、ロクサーヌを抱き枕にして眠っていた。

左側にロクサーヌを寝かせ、両手と右足で抱きついている。

心地よい目覚めだった。

いや。心地よい目覚めというか、目が覚めたら心地よかったというか。

ロクサーヌのすべすべとした肌が気持ちいい。

柔らかく、そして優しい肌触りだ。

抱き心地も素晴らしい。しっとりとした弾力が返ってくる。

ロクサーヌと接している部分から快感が染み込んできた。

左腕をロクサーヌの下に滑り込ませているが、それほど重くないし、しびれてもいない。

軽く抱き寄せ、背中をなでた。

ふんわりとした毛の感触を楽しむ。

俺もロクサーヌもかぼちゃパンツしか着ていない。

ブラジャーみたいなものは、ないか、あっても高いのだろう。

左腕の上に、重みのある確かな弾力が乗っかっていた。

と、突然、唇が覆われる。

ロクサーヌがキスをしてきたのだ。

手の動きで俺が起きたのが分かったのだろう。

そういえば、そうするようにと俺が言ったのだった。

律儀に守ってくれたのか。

ご主人様の命令で仕方なく、かもしれないが。

「おはようございます、ご主人様」

しばらく柔らかな唇と舌を味わった後、口を放すと、ロクサーヌが挨拶してくる。

「ありがとう。おはよう、ロクサーヌ」

目を開けたが、ロクサーヌの美しい顔は見えなかった。

まだ暗い。

感覚だけを頼りに抱き寄せ、もう一度唇を奪う。

見えなくてもなんとかなるもんだ。

半開きのロクサーヌの唇の間から、舌を差し入れた。

ゆっくりと誘うように舌を動かし、ロクサーヌの柔らかい舌を絡め取る。

ロクサーヌは、情熱的とまではいえないかもしれないが、きちんと応じてくれた。

嫌がってはいないと考えていいのだろうか。

仕方なく、かもしれないが。

逃げ出したくなるほど嫌というわけではなさそうに思う。

このまま押し倒したくなるが、キスだけで我慢する。

昨晩は遠慮して一回戦しかしていないので、元気はありあまっている。

しかし、この十日間、朝は必ず迷宮に行っていた。

今日だけ宿の外に出ないと、昨夜はお楽しみでしたね、というところが旅亭の男にばれてしまうのではないだろうか。ダブルの部屋を案内された時点でバレバレだとはいえ。

キスをしたまま、手を頭の方に持っていていき、髪をなでる。なめらかなすべり心地を楽しんだ後、口を放した。

「ちょっと迷宮に行ってみようか」
「はい、ご主人様」

名残惜しいが、ロクサーヌを放して上体を起こす。どうせ今夜も楽しめる。今夜も明日もあさっても。ロクサーヌが逃げ出しでもしない限りは。

身を起こしベッドに腰かけて皮の靴をはいていると、ロクサーヌがシャツを着せてきてくれた。

おっと。なんかいいな。

王様気分。

「悪いな」
「いいえ。どうぞ」

まだ慣れていないのか、ぎこちない。腕が当たった。慣れていないというか、真っ暗だからか。

「暗いのに、大丈夫か」
「すみません。あまり夜目が利くほうではないので」
「無理することはない」

ズボンだけ受け取って、後は自分で着る。
アイテムボックスから皮のジャケットも取り出して羽織った。

皮のジャケット 胴装備
スキル 空き

「そういえば、空きスロットって何か分かるか？」

気になったし、いい機会なので訊いてみる。

あれ。空きスロットというのは俺が勝手に言っているだけか。

「何のことでしょう」

「うーんと。装備品にスキルの空きがある状態か」

「装備品にですか？ もちろん溝や隙間がありますけど」

それはスロットの辞書的な意味だ。

「装備品にスキルをつけることができるだろう」

「はい」

「多分そこがあいているということだ」

「申し訳ありません。よく分かりません。スキルがなければ、何も
ないではありませんか」

どうやら通じないらしい。

武器商人もスキルのスキルスロットは分からなかった。

一般的にはスキルの空きは知られていないのだろう。

「装備品にスキルをつけるにはどうやる」

「えっと。スキル付きの装備品を購入するのが一般的です」
「買うのではなく自分でつけるには」

アイテムボックスから皮の鎧も出す。

ロクサーヌに皮の鎧を渡したいが、暗いのでロクサーヌがどこで何をしているのかよく分からない。

ロクサーヌはロクサーヌで着替えているのだろう。

「モンスターカードの融合ができるのは鍛冶師だけです」

鍛冶師のジョブが必要なようだ。

毒消し丸を作るにも薬草採取士のスキルである生薬生成が必要である。同じことなんだろう。

「モンスターカードというのは？」

「魔物が持っているインテリジェンスカードみたいなものです。それを装備品と融合すると、スキルのつくことがあるそうです。魔物を倒すとまれにですが残ることがあります」

まあそうなんだろう。想像通りだ。

もう一つ、想像できることがある。

「スキルスロットに空きがないと、カードが融合できないのではないかな」

「装備品にスキルがつくかどうかは、モンスターカードの状態、鍛冶師の腕や運によって決まるとされています」

「なるほど。やはり失敗することがあるのか」

「失敗する確率の方が大きいと言われています」

試してみなければ分からないが、スキルに空きがないと、スキル

がつかないのではないだろうか。

その場合、鑑定を使える俺には大きなアドバンテージがあることになる。

俺がやれば融合に失敗することがない。

「鍛冶師にはどうやったらなれるかって、知ってるか」

「申し訳ありません。知りません。鍛冶師は種族固有ジョブなので、ドワーフでないとなれません」

がーん。

そして、ドワーフもやはりいるのか。

まだ会ったことはないが。

あるいは、なんらかの方法で鍛冶師のジョブを獲得できるだろうか。

種族の固有ジョブだと難しいだろうか。

ドワーフに鍛冶師だと、なんか難しそうなのはする。

「そうなのか……。では、スキル付きの装備を作るには鍛冶師に頼むしかないのか」

「よほど親しければ分かりませんが、鍛冶師は直接取引を嫌がりません。ご主人様には誰か親しい鍛冶師の知り合いがおられるのでしょうか」

「いないと無理なのか？」

「スキルをつけるのに失敗するとモンスターカードが失われます。ほとんどの鍛冶師は融合を直接は引き受けませんが、引き受ける鍛冶師がいたとしても、信用できるかどうか分かりません」

何故、と訊こうとして、分かった。

モンスターカードがなくなったとき、融合に失敗して失われたの

か、鍛冶師がインチキをしてちよろまかしたのか分からないということか。

鍛冶師は依頼を受けたとき、モンスターカードをどこかに隠して失敗した振りをする事ができる。

依頼人には失敗したと告げ、後でモンスターカードを売るなり自分の装備品に融合するなりすれば、丸儲けだ。

「モンスターカードの融合はトラブルの元か」

「そうです」

「融合するところに立ち会っても駄目なのか」

「昔、依頼人の目の前でやることを謳い文句にしてひと財産作ったドワーフがいたらしいです」

「なるほど」

まあ詐欺のためならどんな方法でも考えつくだろう。

手品師がカードをごまかしたら、俺だって見抜くのは不可能だ。

「ですので、モンスターカードの融合を鍛冶師に依頼することはまずありません。鍛冶師も直接取引を受けることはないでしょう。モンスターカードを得たならば売却し、スキルのついた装備品が欲しいときはどこかで探して買い求めることになります」

じかにやり取りすることが不審と猜疑の原因にしなければならないなら、そうなるのだろう。

種族固有ジョブなので俺が就くことができず、かつ直接取引も望めないのだとしたら、厄介だ。

鑑定で装備品の空きスロットが分かっても、使い道がない。装備品の鑑定は死にスキルなんだろうか。

盗賊や他人のジョブ、魔物を見るのにさんざん鑑定を重宝してき

だから、文句を言えた義理ではないが。

種族固有ジョブでもなんとか獲得するか、鍛冶師とのコネを作るか。

もう一つ、可能性がないわけではない。

鍛冶師をパーティーメンバーに加えるか。

もちろん、ただのパーティーメンバーとして加えても、不正を防ぐことはできない。

「鍛冶師を……」

奴隷に持つことができるかと訊こうとして、やめた。

ロクサーヌに尋ねることではないかもしれない。

奴隷のことは奴隷商人に訊けばいいだろう。
ある程度お金が貯まったら、訪ねてみるか。

ロクサーヌにはなんでもないといい訳をして、勘を頼りにドアのところまで行った。

「ドア開けるけどいいか」

「はい。大丈夫です」

返事を待つて、ドアを開ける。

廊下のカンテラの光が室内に入ってきた。

薄暗いとはいえ、ものがある場所くらいは分かるようになる。

「ロクサーヌはこの皮の鎧を」

「……はい。ありがとうございます」

靴下を取り出して皮の靴をはきなおした。

床にはたらいが置いてある。

昨夜は手ぬぐいで後処理をしてゆすいだから、白いのとか赤いのとかが水に混じっているのではないだろうか。

このままにしておく、片づけにきた宿屋の人に、昨夜はお楽しみでしたねと。

木のコップを浮かべ、たらいを両手で抱えてトイレに持っていった。

中の水を捨て、言い訳代わりに新しく水を入れる。

「ロクサーヌ、水飲む？」

「あ、はい。ありがとございます。いただきます」

部屋に戻り、小さな木の桶をロクサーヌに渡した。

廊下から入ってくるカンテラの明かりにロクサーヌの姿が浮かび上がる。

ロクサーヌは皮の鎧を着けていた。

装備品なので、皮の鎧は装着者に合わせて伸び縮みするという。だからロクサーヌに合わせて……。

見た目、コルセットみたいになっていた。

胸のカップがでかい。

もちろんロクサーヌに合わせて。

これはいかん。

これはいかんぞ。

「えっと。こっちのジャケットを着てみて」

「すみません。皮の鎧は女性が単品で着けるものではあまりないの
で」

ロクサーヌが謝ってきた。

変だとは思っていたらしい。

主人である俺に遠慮して指摘できなかったのか。

「いや。俺の方こそ悪い。俺はこっちの常識は知らないから、何で
も教えてくれ」

ロクサーヌと装備を交換する。

ジャケットの方は身体のラインが強調されるということとはなかつ
た。

あの姿を他人に見せてやることはないし、迷宮で俺が興奮しても
困る。

「えっと。水がめとかなかったと思うのですが、どこにあったので
すか」

「まあ後で説明する。その前に、一度閉めるぞ」

「はい」

俺はドアを閉めた。

誰かに聞かれてもよくない。

「傷薬を使わずに回復できるスキルや魔法があるか？」

ロクサーヌに訊く。

迷宮に行くのなら、受けた攻撃から回復することを考えなければ
ならない。

俺一人ならば、まだデュランダルのHP吸収で大丈夫だろう。ロクサーヌも、一度や二度攻撃を受けたくらいなら、デュランダルの渡して回復させるといふ手もある。

しかし、今はよくても先々はおぼつかない。

デュランダルがあるから大丈夫だとはいかないかもしれない。

例えば乱戦のとき、戦闘中に剣をやり取りするのは難しいだろう。戦闘終了を待って次の戦闘で回復するとばかりはいつていられない。

滋養丸を使うのもコスト的に大変である。

ならば、回復職を獲得するしかない。

「はい。僧侶や神官といったジョブのかたが使えるそうです」

幸い、回復職もちゃんとあるみたいだ。

「僧侶や神官にはどうやったらなれるか知っているか」

「えーっと。厳しい修行を積むそうです」

「ふむ」

修行か。

それだけではちょっと分からないが。

「修行方法は、各地のギルドでいろいろなやり方が伝わっているようです。私が聞いたのは、滝を使うとか」

「滝行か」

「八十八箇所を徒歩で回るとか」

「お遍路さんか」

ロクサーヌが「オヘンロ？」とかつぶやいているのは無視して考える。

滝行があるのを見る限り、修行は精神修養を目的に行われているのではないだろうか。

僧侶、神官といった宗教的なジョブだから、なんらかの宗教的な体験と関連があるのかもしれない。

瞑想による宗教的な境地、あるいは神秘体験によって、回復職のジョブが得られると。

結構大変そうだ。

神秘体験まで行くとまず無理だろう。

ただの精神統一だってできるかどうか。

「かしこみ、かしこみ。南無阿弥陀仏。急急如意令。エロイムエツサイム。アラアアクバル。アーメン」

とりあえず、いろいろ祈ってみた。

ジョブ設定と念じてみるが、新しいジョブは獲得していない。

「臨・兵・闘……」

しかしこの先は知らない。

というか、これって印を結ばないといけないのではないだろうか。もちろん知っているわけもなく。

「羯諦羯諦カキチカキチのうまくさんまんだーうんたらかんたら」

やっぱり全部は知らない。

くそつ。

俺の中二知識はこの程度か。

来い、ロクサーヌよ。ともに嘆け。

「エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ
神は我を見放した」

ジョブ

いろいろ聖句を唱えてみたが、回復職のジョブは獲得できなかった。

まあ考えてみれば当たり前か。
そんな簡単に獲得できるなら、そもそも修行が行われるはずがない。

聖句といってもおまじないみたいなもんだしな。

しかし、この世界では魔法もスキルも呪文で起こす。

おまじないだと馬鹿にはできないだろう。

ジョブ取得に合った呪文があるかもしれない。

なんか他にないだろうか。

「そういえば、僧侶になるには魔物を素手で倒す修行をするそうです。それなら私にもできそうだと考えたことを覚えています」

悩む俺にロクサーヌがヒントをくれた。

早く言つてよロクサーヌ、と思ったが、口には出せない。

私にもできそうなのか。

魔物を素手で倒す、ってどんだけ。

ロクサーヌって実はとっても恐ろしい娘なんじゃないだろうか。

しかし、魔物を素手で倒すというのはありだ。

剣士のジョブは、多分剣で戦ったから得た。

剣で戦うことで剣士のジョブが獲得できるのなら、素手で戦うこ

とで得られるジョブがあってもいいだろう。

素手で戦うのが僧侶か。

あるいは僧侶が駄目でも、闘拳士みたいなジョブがあるかもしれない。

試してみる価値はありそうだ。

いろいろと問題はあある。

戦うといっても、一度でいいのか、倒さないといけないのか。倒すとして、最初からなのか、とどめだけさせばいいのか。

最初からとして、一人で戦うのか、パーティーを組んでもいいのか。

とりあえずやってみるより他はない。

俺は部屋のドアを開けた。

ロクサーヌから返ってきた木の桶を入れ、リュックサックを背負う。

銅の剣を腰に差して準備終了だ。

あ。まだパーティー組んでなかった。

パーティー編成と念じる。

「パーティーの編成って、どうやるんだ」

「さあ。確か、探索者のスキルにあると思います」

「まあそうだが」

独り言だったのだが、ロクサーヌが返事をしてきた。

ロクサーヌをパーティーに編入すると念じてみる。

「あつ」

お。いったらしい。

ロクサーヌが小声をあげた。

ロクサーヌがパーティーに入ったのが俺にも分かる。

このパーティーには、俺はデフォルトで入っているのだろうか。

俺をパーティーに編入すると念じてみたが、何も起こらなかった。まあ俺が作ったパーティーだからな。

不安だが、とりあえず大丈夫だろう。

ロクサーヌがパーティーに入ったのが分かったのは、俺がすでにパーティーメンバーだったから、と考えるのが妥当だ。

「パーティーの効果って何だ？」

「移動魔法はパーティーに入っていれば一緒に移動できます。パーティーメンバーが見えなくなったときにも、どの方向にいるかが大体わかります。あと、経験を共有すると言われています」

「共有ねえ」

経験値がならして入ってくるということだろうか。

「貴族の子どもが生まれると、赤ちゃんを入れた六人でパーティーを組み、家臣の五人が迷宮に入ります。五人の経験によって赤ちゃんも成長するとされています」

汚いさすが貴族きたない。

「あれ？ それなら大人になっても、別に迷宮に入る必要はないのでは」

「複数の家臣団を使い分ける人はいるそうです。ですが、まったく

入らないという人は」

まあそうか。自身が迷宮に入らないなら、何のためにレベルアップするのかってことだよな。

「家臣団だけを迷宮に入れて、そのあがりて暮らすとか、可能？」

「えっと。あの……その……」

「あ、いや。別にロクサー又だけを迷宮に入れるつもりはないから
言ってから、意味するところに気がついた。」

奴隷を迷宮に入れて、その稼ぎで左うちわという手もあるのか。
まあ難しいだろうけどな。

適当にサボって働かないだろうし。

「探索者のレベルを上げるのに使えるかもしれませんが、あまりそういう話は聞きません。迷宮で見つけたものはその場にいた人が処分していいとされています。ですので、誰かを迷宮に送ってというのは」

無理らしい。

「なるほど。じゃあ、行くか」

「はい」

部屋の外に出る。

鍵をかけ、階段を下りた。

旅亭の男にいつもどおり鍵を預ける。

いつもどおり。いつもどおりだ。

「気をつけてな」

外に出た。

いつもどおり真っ暗だ。

「じゃあ、ちょっとついてきて」

念のため、ロクサーヌの手を取る。

宿屋の壁に向いて、ワープと念じた。

そのまま入っていく。

「え？ あ、あの」

ロクサーヌの手を引っ張って、迷宮一階層に抜けた。

ロクサーヌもすぐに現れる。

「大丈夫のようだな」

「え？ え？ え？ ここは、迷宮？」

ロクサーヌは少し混乱したようだ。

しかし、周囲を見てここが迷宮であることを理解すると、すぐに表情を引き締めた。

真剣な顔つきになる。

宿屋で迷宮の話になったときにも見せた、ちょっと怖いぐらいの表情だ。

「ベイルの町のすぐ外にある迷宮の一階層だ」

「ですが、ダンジョンウォークは迷宮の中でしか使えないはずでは……。フィールドウォークならあの場所でも使えますが、迷宮の中

には入れないはずですし」

なるほど。

フィールドウォークは迷宮内に飛べないと。

まあそうなんだろう。

でなければ、冒険者と探索者が同じパーティーにいた理由がない。わざわざ冒険者ギルドの壁にフィールドウォークしてくるのではなく、直接迷宮に移動した方が早いだろうし。

「やっぱそうなんだ」

「そもそも、ご主人様は探索者でしたので、フィールドウォークは使えないはずですよ」

ロクサーヌは俺のインテリジェンスカードを見たから、俺が探索者であることは知っている。

「これはワープという移動魔法だ」

「聞いたことはありません」

ポーナス魔法はあまり知られていないらしい。

「俺以外に使えるやつは少ないかもしれん、だから内密にな」

「は、はい」

「頼む」

ロクサーヌを無理矢理納得させた。

「ご主人様、すごいです」

強引だが、分かってくれたらしい。

ロクサーヌがちょっと尊敬したまなざしを向けてくる。

「それでもない」

美人に見つめられるのは悪くない。

アイテムボックスから皮の帽子を取り出し、キラキラした瞳で見
てくるロクサーヌの頭に乗せた。

皮の帽子がイヌミミを隠す。ちよっともったいないが、安全第
一だ。

もう一個は自分でかぶった。

「えっと。アイテムボックスの使い方も、少し違うみたいなので
が、それも異なる魔法なのでしょうが」

「いや。これはただのアイテムボックスだ」

「そうですか」

皮のミトンを出してロクサーヌに渡す。

着けるのを見計らって木の盾も持たせた。

皮のグローブは自分でつけて、ワンドを出し、準備完了だ。

ロクサーヌがワンドを見て変な顔をしたような気がした。

しかし何も言わない。

やはり主人に対して遠慮があるのだろうか。

「ワンドは魔法使いが使う武器か？」

「はい。そう聞いています」

「魔法攻撃力が上がるかどうか、知ってるか」

「さあ。すみません。詳しいことは知りません。魔法使いの知り合
いがいなかったのです」

魔法使いは金持ちじゃないとなれないみたいだしな。

「ふむ。知力は知っているか？」

「頭のよさのことでしょうか？」

「いや。まあそうなんだが……」

どういえばいいのだろう。

「知能のことか？」

「魔法攻撃力を上げるのは、知力か？」

「頭がよいと魔法攻撃力が上がるのですか？」

質問で返されてしまった。

ステータスやパラメーターという知識はないのだろうか。

「レベルが上がると知力とかが上がるよな」

「レベルというのは、探索者のレベルのことでしょうか？」

「まあそれでもいいけど」

「探索者のレベルが上がっても、別に頭がよくなるとは思えません
が」

話を通じないというか何というか。

知力のこととは諦めて、他のことを訊くか。

「うーんと。ロクサー又って、どこかの迷宮に入ったことある？」

「はい。三箇所くらいですが」

「迷宮って、どこもこんな感じ？」

迷宮についての情報収集をする。

迷宮について知っていることを全部教えてくれ、でもいいが、さすがにそれは答えにくいだろう。

具体的に尋ねた方がいい。

「そうです。ご主人様は探索者なのですから、知っていると思いますが」

「……いや。あんまり数は入ってないから」

「そうですか」

やっぱり全部教えてくれがよかったか。

「えっと。この部屋は魔物とか出ないよね」

「ダンジョンウォークで移動できる小部屋には魔物が出ません。ご主人様の魔法がどうかは分かりませんが」

「それなら大丈夫。ここは一階層の入り口入ってすぐの部屋だから」

俺はロクサーヌに後ろの黒い壁を示した。

入り口や他の階層との通路となる壁だ。

「はい。そのようですね」

「じゃあここから出るけど、最初はいろいろと実験につき合ってもらうから、ロクサーヌが戦うのは後になると思う。あんまり緊張しないで」

「かしこまりました。私のことならば大丈夫です」

なんか本当に大丈夫そうだ。

というか、俺より落ち着いているよな。

ロクサーヌに告げた実験というのは、簡単なテストだ。

キャラクター再設定でボーナスポイントをパラメーター上昇に振

った場合にどうなるか。

今まで資金作りのため探索優先でやってきたので、試していなかった。

まずは知力上昇に99ポイント振っておく。

キャラクター再設定と念じて、操作した。

ついでに、ボーナススキルに目がいく。

ボーナススキルの中に、レベル制限解除、ダメージ限界解除、パーティー項目解除の三つの解除が仲よく並んでいた。

レベル制限解除とダメージ限界解除は、なんとなく分かる。

探索者Lv27程度の低レベルで引つかかることはないだろうか
ら、ほうつてある。

しかし、パーティー項目解除とは何だろうか。

ソロのときは問題にならなかったが、今はロクサーヌとパーティーを組んでいる。

何かの制限に引つかかるかもしれない。

キャラクター再設定のついでに、パーティー項目解除にチェックを入れた。

キャラクター設定画面がリフレッシュされる。

新しく、いくつかの項目が導入されたようだ。

ボーナス魔法に、パーティライゼーションが入っている。

何だろう。パーティー化？

誰かをパーティーに入れるのか。

それはパーティー編成か。

とりあえずチェックを入れてみる。

ボーナススキルにも変更があった。

ジョブ設定が変化して、パーティージョブ設定になっている。
チェックは入っていない。未取得のようだ。

チェックを入れ、パーティージョブ設定を取得した。

かかったボーナスポイントは、思ったとおり2ポイントだ。

キャラクター再設定を終了し、パーティーライゼイションと念じる。

使い方が分からない以上、試してみるより他はない。

頼りないが、危険な魔法ではないだろう。

念じると、何かを求められるのが分かった。

その何かは、おそらくアイテムだろう。

アイテムの効果をパーティー全体に施す魔法ではないだろうか。

「ロクサーヌ、何か変わったことあった？」

「何でしょうか」

ロクサーヌの方には特に変化はないらしい。

使用者の方にしか変化はないようだ。

まあ当然か。

次に、ロクサーヌを見てパーティージョブ設定と念じる。

ジョブが浮かんできた。

獣戦士Lv6、村人Lv8、農夫Lv1、戦士Lv1、剣士Lv

1、探索者Lv1。

これがロクサーヌの持っているジョブなのだろう。
ちゃんと変更もできるようだ。

盗賊系のジョブを持っていないのは偉い。
生まれてこのかた盗みなどはしていないということだから。

獣戦士 Lv6

効果 敏捷中上昇 体力小上昇 器用小上昇
スキル ビーストアタック

獣戦士は効果もいらしい。

このままでいいか。

パーティーメンバーのジョブを変更できるのは、使い方次第でかなり強力なスキルになるだろう。

残念なことに、キャラクター再設定はパーティーキャラクター再設定にはならなかった。

「じゃあ行こうか」

「えっと。魔結晶を貸していただいた方がいいと思うのですが」

小部屋の外に出ようとした俺をロクサーヌがとどめる。

「え？ 何？」

「魔結晶です」

「魔結晶？」

ロクサーヌがうなずいた。

「えっと。魔物は魔力からできています。魔物を倒すと、その魔力が魔結晶に少しずつたまっていくのです。たまった魔力は、売却するとギルド神殿などのエネルギー源になります」

「それを貸すというのは」

「魔結晶を持っていなければ、魔物を倒しても魔力はたまりません」

なんかやらかしちまったらしい。

今までそんなものは持っていなかった。

「つまり、魔結晶を持っていれば魔物を倒すたびに魔力がたまる」と

「はい」

「ひょっとして、魔結晶って高く売れるのか？」

「そうですね。迷宮で手に入る品の中で、一番高く売れると思います」

な、なんだって。

「……そうなのか」

「あ、いや。高くは売れますが、魔力は本当に少しずつしかたまりません。魔結晶を売るのは一生のうちにも何度もありません。今まで持っていなかったとしても、大きな損失にはなりません。大丈夫です」

落ち込む俺に気を使われてしまった。

「魔結晶はどうすれば手に入る」

「迷宮で拾うこともありますし、探索者ギルドへ行けば、魔力を使った残りを売ってもらえます」

「では後で買いに行くか。迷宮ではそれらしいものは見なかったが」

ここでは魔結晶なんかは見ていないと思う。
あるいは、見ても知らないのでスルーしていたのか。

「この迷宮は、見つかってまだ新しいではありませんか」

「そう聞いた。まだ十何日しか経ってないらしい」

「それでは魔結晶はないかもしれませんが。魔力がたまって結晶化するのに時間がかかるので」

見過ごしたわけではなさそうか。

「迷宮で金を稼ぐのに、魔物が残したアイテムと魔結晶の他に何か方法はあるか」

「宝箱があります」

あら。やっぱり宝箱はあるのか。

「見たことはないと思うが」

「新しい迷宮では少ないでしょう。あるとしても、上の方です」

「上？」

「はい。探索が進んでいる最前線の辺り、初めて人が来たところになら、あると思います」

下じゃなくて、上なのか。

迷宮は地下に広がっている、というイメージだったのだが。
いろいろと齟齬があるものだ。

「まあいいや。さて、どっちに行こうか」

二階層へ行くのは右だが、別に探索が目的ではない。
なら、真ん中へ行ってみるか。

外に出ようとする、ロクサーヌが押しとどめた。

「ご主人様、魔物が近くにいる方なら左です」

「え？ 分かるの」

「はい。おいがします」

なにそれ。

「狼人族だから？」

「狼人族の中でも私は特に鼻が利きます。魔物を探知するのは得意です」

「すごい」

「ありがとうございます」

左右と前に伸びる三本の通路のうち、左の洞窟を進む。
一分も歩かないうちに、ニードルウッドが現れた。

ロクサーヌ、すごい。

見てよし、ベッドでよし、迷宮でよし。

三拍子そろっている。

「ほんとにすごい」

「来ました」

「いや。ちょっと待て」

ニードルウッドに向かおうとするロクサーヌを止める。
ファイヤーボールと念じた。

「え？」

ロクサーヌが不審の声を上げる。
俺の頭の上に火球が現れた。

内密

ボーナスポイントを知力上昇に99そそぎ込んだファイヤーボールは、ニードルウッドレベルを一撃で粉砕した。

何も振らなければ二発か三発必要はずだ。

知力上昇によって魔法攻撃力が上がるのは間違いない。

大きさはそれほど変わりがないと思うが、スピードは速くなっていた。

移動速度が上がれば、かわすのが難しくなる。

ありがたい変化だ。

知力上昇にマックスまで振っても、大きさは一回りくらいは大きくなったか、という程度だ。

こちらの方はそれほど変わらないらしい。

一発で沈めた以上、威力は上がっているので問題はないが。

「え？ えっ？ ええっ？ ……こ、これは魔法ではないのですか？」

俺の魔法を見たロクサー又は少し混乱したようだ。

「魔法だな」

「ご主人様は探索者では？ 探索者がこんな魔法を使えるという話は聞いたことがありませんが」

しかし、すぐに冷静さを取り返す。

表情が迷宮に入ったときの真剣な顔つきに戻った。

やはりセカンドジョブを扱える人間はあまりいないらしい。

「まあ、これも内密にな」

「な、内密ですか」

なんでも内密にでまかせ俺。

実際、説明のしようもないしな。

キャラクター再設定でセカンドジョブをつけて、で分かるのだから。
うか。

「キャラクター再設定って分かるか？」

「再……設定ですか？」

「ボーナスポイントは？」

「何かの特別にもらえる報酬でしょうか」

「うーむ」

やはり説明は無理だ。

「な、何か分かりませんが、魔法が使えるなんてすごいです」

「ありがとうございます」

「しかも、魔法とはいえ魔物を一撃にするのはすごいです。魔法は剣よりも威力が上ですが、それでも一発で倒すのはなかなか難しいと聞きました」

「まあいつもは一撃ではない。気は抜かないようにな」

ロクサー又はあまり迷宮では気を抜かないタイプだとは思いますが。

ロクサー又はニードルウッドの倒れたところへ行き、ブランチを拾った。

リュックサックを降ろそうとしたところで、横から俺が受け取る。

「あの。私がお持ちします」

「大丈夫。アイテムボックスにまだ空きがある」

ランチをアイテムボックスに入れた。

「空きがあるのですか？ えっと。失礼ですが、ご主人様のレベルを聞かせてもらってもよろしいでしょうか」

「探索者のか？ Lv27だな」

「Lv27……。すごい……。確かに、それなら空きがありそうです」

アイテムボックスにはレベルの数だけものが入る。

ロクサーも知っているのだろう。

しかし、「私と一歳しか変わらないのに」とか言っているロクサー

又は、俺のレベルをどのくらいだと考えていたのだろうか。

低レベルで買えるような値段ではなかったというのに。

あれか。親の金を使ったと思われているのか。

遠くから来て親の遺産で暮らすボンボン息子。

常識のない言い訳にはなるかもしれない。

俺のレベルは、年齢的に見てちょっとは高いがありえないほどではない、というところではないかと思う。

経験値二百倍で十日間迷宮に入ったとして、休みを考えなければ六年分足らずというところだ。

この世界では十一歳から迷宮に入る子どももいるのではないだろうか。

レベルが上がっていくことを考えると、今後どうなるかは分から

ないが。

「レベルのことは内密にな」

「もちろんです」

失礼ですが、と聞いてきた時点で、そこは大丈夫だろう。

重要な個人情報であることはロクサーヌにも分かっているはずだ。

「それでは、どっちへ行けばいい」

「魔物のいる方へ案内するということでよろしいでしょうか」

「魔法を使っているところはあまり人に見られたくないので、できれば人のいない方へ頼む」

「分かりました。内密ですからね」

内密で納得してくれたらしい。

命令だから、機密保持が優先ということだろう。

しかし、人のいない方へ、であっさり了承できるのがすごい。

魔物のおいが分かるなら人のおいも分かるだろうとはいえ。

「頼む。ロクサーヌは本当に役に立つな」

「ありがとうございます。こちらです」

ロクサーヌが先導する。

「魔物の種類や数もおいで分かるのか？」

「ある程度は分かります。ですが完全ではありません。また、隠し扉の向こうのおいは分からなかったり、途中で魔物が湧く場合もあります。常に魔物への最短の道がわかるわけでもありません」

ロクサーヌと話しながら進むと、すぐに魔物のいる場所に到着した。

本当に役に立つ。

今度は知力上昇に50ポイント振ったファイヤーボールを放った。ニードルウッドLv1が業火を耐える。

「駄目か」

「おまかせください」

ロクサーヌがシミターを抜いた。

俺の返事も待たずに駆け出す。

これは想定外だ。

ファイヤーボール二発で十分なのに。

ロクサーヌが俺と魔物の間に入ってしまったため、魔法は撃てない。

火球がパーティーメンバーを素通りすることは、期待できないだろう。

盗賊相手に作用しなかったファイヤーstormなら、パーティーメンバーにもおそらく作用しないだろうが。

ロクサーヌが剣を持った右手を振り、ニードルウッドに斬りつけた。

振られた枝を軽く身を引いて避ける。

空振りした魔物の肩口に追撃を加えた。そのまま斬り上げるように一撃。

ロクサーヌは右から振られた枝をまたも軽々と避けた。

踏み込んで正面からシミターを振り下ろす。

振られた枝を半歩引いてかわした。かわしながら一撃入れる。

すごい。

ちよつと見入ってしまった。

ロクサー又はニードルウッドの攻撃を完璧に避けている。魔物の攻撃が当たりそうな気がしない。

軽々と避けるだけでなく、避ける距離も紙一重だ。

魔物の攻撃を、センチ単位、いやミリ単位でかわしていた。

一見すると余裕がなさそうに見えるが、実際は逆だ。

大きく避ければ無駄な動きになる。攻撃に転じるのも難しくなる。敵の攻撃を完璧に見切れるなら、ギリギリでかわすことが一番だ。

ロクサー又の動きはまさにそれである。

華麗に踊っているようだ。

軽いステップで避ける、あるいは身体をひねってやり過ごす。

ニードルウッドの攻撃って、こんなに単調だったけ？

まあ確かに枝だけだよ。

ワンドを腰に差し、銅の剣を抜いて俺も後に続いた。

ロクサー又がいることで武器を持ち替える余裕が生まれている。デュランダルを出すくらいに余裕もあったかもしれない。

次からはそうしよう。

銅の剣を持って参戦した。

ロクサー又から少し離れて左に陣取り、銅の剣を振り下ろす。

左から振られた枝を受けた。

そこへ右から枝が振られて。

ロクサー又にかわされ、空振りした枝が近づくとあわてて上体をそらした。姿勢の崩れたところに左から枝が振られる。なんとか銅の剣で受けた。

うん。はつきりいって無理だ。

ロクサー又みたいにやすやすとは避けられない。

しかも、ロクサー又はその間に何度も斬りつけている。俺もようやく隙を見つけて銅の剣を叩き込んだ。

ニードルウッドが倒れる。

ブランチを残して、煙が消えた。

「す、すごいな。攻撃を全部避けてたし」

「ありがとうございます。二人で相手にしたので楽でした」

「いやいや。あんた一人のときも全部かわしてたじゃん。」

「そ、そうか」

「よく見れば、あのくらいの攻撃はかわせるものです」

「そうなのかもしれないが。」

「しかしぶつちやけ、誰でもはできないと思う。」

「ロクサー又って、実はすごい人なんじゃないだろうか。魔物の居場所まで分かるし。」

「次の魔物は俺が行くから、まかせてほしい」

「分かりました」

このままでは主人としてなめられてしまう。
魔法を使えるとはいえ。

一度戦えるというところをガツンと見せた方がいい、ような気がする。

大体、ロクサーヌの動きは半分神がかった。

あれは普通の人には無理だ。

少なくとも俺には無理だ。

オーバーホエルミングがあるから、少しならまねできるかもしれないが。

そう。ロクサーヌのは、いってみれば常時オーバーホエルミング状態だ。

ひよつとしたら本当に使っているのではないだろうか。

「ビーストアタックだっけ。あれって、どんなスキル？」

獣戦士が持つスキルはビーストアタックだった。

オーバーホエルミングみたいな効果があるのかもしれない。

名前的には、攻撃スキルみたいに思えるが。

「魔物に対して大きなダメージを与える技です。ですが、すみません。私には使えません」

「使えないの？」

「スキルや魔法の呪文は全部ブラヒム語で成り立っています。ブラヒム語はいにしえより言霊を扱うとされる聖なる言語です。ブラヒム語が使えない人にはスキルも使えないのです」

そうだったのか。

ブラヒム語は役に立つ言語だったらしい。

スキルを使おうとすればブラヒム語を覚えなければならないと。共通語にもなるわけだ。

「でもブラヒム語は使えるようになったよね」

「はい。ですが、まだ足りないようです」

「呪文が分からないとか」

「いいえ。呪文はスキルを使おうとすれば浮かんでいきますから。ただ、発音やアクセント、イントネーション、細かなニュアンスの違いなど全部が完璧でなければ詠唱は成功しません。日常会話ができる程度でなく、ブラヒム語を自在に扱えるようでないスキル詠唱として使うのは無理らしいです」

そういえば、呪文は何故か頭に浮かんできて分かった。

これは他の人も同じらしい。

「そうなのか」

「それに、スキルを使おうと詠唱するときにはどうしても隙ができます。スキルを使えないことは、あまり大きな問題ではありません。私のような初心者がスキルを使うのはよくないとされていますし」

「なるほど」

前衛が使う攻撃スキルはそうなのだろう。

ロクサーヌが初心者とも思えないが。

「えっと。一つ聞いてもよろしいですか？」

「何だ」

「ご主人様が使う魔法には呪文の詠唱がないのでしょうか。スキルや魔法には詠唱が必要だと思いますが」

やば。

スキルのことを聞いたのはやぶへびだった。

「教えてできることではないし、俺以外には無理だと思う。内密にな」

「か、かしこまりました」

「うむ」

もう全部内密にでいいや。

「やはりご主人様はすごいです。それに、ブラヒム語をやすやすと使いこなしておられます。ブラヒム語を使いこなせる人は本当にすごいおかたなのです」

ロクサーヌが熱い視線を送ってくる。

ちょっと気恥ずかしい。借り物の能力だけに。

なんでブラヒム語が話せるのかも分かっていないし。

「そ、そうか」

「はい……」

気を取り直して、ロクサーヌの先導で進んだ。

ついていきながら、デュランダルを出す。

他のスキルは、必要経験値は五分の一、獲得経験値を十倍までつけた。

ボーナススキルには必要経験値の軽減と獲得経験値の上昇とがある。

パーティーを組むと、獲得経験値の方はパーティーメンバーにも分配されるのではないだろうか。

必要経験値の方は、恩恵があるのは本人だけだろう。

数分で魔物のいる場所に着く。

「やはりロクサーヌはすごいな」

「私がですか？」

今までは魔物に遭遇するのを待ってひたすらに歩き回っていた。効率が圧倒的に違ってくる。

「うむ。ところで俺の剣を見てくれ。こいつをどう思っ？」

「とても素晴らしい剣のようです」

ロクサーヌにデュランダルを見せた。

返事にちよつと物足りない感じはしたが、いい剣だと分かるようだ。

魔物に向かって駆ける。

走りながらデュランダルを振り上げ、ニードルウッドレーヴに叩きつけた。

魔物が一撃で倒れ、煙と消える。

「い、一撃だなんて、ご主人様、すごいです」

ブランチを拾ったロクサーヌがちよつとときまぎした表情で渡してきた。

美人にそんな目で見られて、かつてないいい気分だ。所詮デュランダル頼みというのはおいといてだ。

ロクサーヌの中で俺の株が上がったのは確実である。

「まあ、すごいのはこの剣だが」
「確かによい剣のようです。それに、きちんと手入れもされていて
新品同然です」

俺がかざしたデュランダルをロクサーヌが検品する。

デュランダルはロクサーヌのメガネにかなう状態らしい。

思うに、キャラクター再設定で出すとき、まったく新しく出てくる
のではないだろうか。

でなければ、さんざん使ってきたのに、ほとんど使っていないシ
ミターや銅の剣よりいい状態だということはないだろう。

シミターや銅の剣はロクサーヌに怒られる状態だった。

俺が手にする前にどういう使われ方をされてきたのかは分からな
いが。

「この剣のことは、内密にな」

「内密ですか」

「そう。この剣のことが知られると、例えば……」

俺はロクサーヌの手を取って引っ張った。

首に腕を回し、手刀をつきつける。

「えっ」

「この女の命が惜しければ剣を渡せ、と、こういうこともできる」

「は、はい。確かにそうですね。分かりました」

「うむ」

ロクサーヌを解放した。

多少脅しておけば、内密に、を変な風には捉えないだろう。

実際にありえることだし。

「ですが、もしそんなときになった場合には、どうか遠慮せず剣の方を選んでください」

「まあロクサーヌの方を選ぶがな。いずれにしても、どちらかを失うような事態は避けたい」

「かしこまりました。……あの、ありがとうございます」

そういう可能性もあると分かれば、言いふらしたりはしないだろう。

その後、いろいろと試した。

実験方針は、まずニードルウッドLv1を魔法一発で倒すために知力上昇にボーナスポイントを最小いくつ振る必要があるか割り出す。

フォースジョブやフィフスジョブを設定して、知力小上昇の効果を持つ商人や薬草採取士などをジョブに加える。

そして、ニードルウッドLv1を魔法一発でしとめるのに必要な知力上昇に振るボーナスポイントに変更があるかどうかテストした。必要なボーナスポイントが減っていれば、加えたジョブの知力小上昇の効果があったということだ。

結果。

多分フォースジョブとフィフスジョブの効果もちやんと重複するらしい。

戦士Lv16を加えても多分変わらず。戦士が持つ効果の体力小上昇では魔法攻撃力には関係ないようだ。

剣士Lv2をつけても多分減りはしなかったので、効果は上乘せされる分だけが発揮されるのかもしれない。

多分ばつかりなのは、同じボーナスポイントを振っても倒せるときと倒せないときがあったからだ。

魔物にも個体差があるらしい。

あるいは、魔法で与えるダメージと知力との相関が一定ではないのか。

しかし、同じポイントで倒せる場合と倒せない場合があるということにも使い道はある。

「よし。素手で倒すぞ」

「はい」

倒せる場合もあるということは、一撃で倒せなかったとしても生き残った魔物はダウン寸前ということだ。

ワンドを収め、俺はロクサーヌと一緒に魔物に殴りかかった。

ロクサーヌが右から、俺が左から素手でニードルウッドレベルを殴る。

木肌に拳を叩きつけるが、ダメージは与えられているのだろうか。

左から枝が振られた。

大きく上体をそらして、なんとか避ける。

二、三步後ずさり、しりもちをつきそうになった。

剣を使わない分、魔物との距離が近いので大変だ。

ロクサーヌの方はニードルウッドの攻撃を華麗にかわしている。なんであんなに軽く避けられるのだろうか。

くそつ。

この際、蹴るのも問題ないだろう。

横に回ってキックをお見舞いした。
蹴りの後、パンチを叩き込む。
そこに杖が振られて。

駄目だ。これは避けられない。

一撃もらつのと引き換えに、ジャブを三発放つ。
続いて渾身の右ストレート。

ニードルウッドの体が大きく揺れた。

ややあつてその場に崩れ落ちる。

魔物が煙となって消えた。

ジョブ設定と念じる。

これで大丈夫か。

あれ？ ない。

次にパーティージョブ設定を。

獣戦士Lv6、村人Lv8、農夫Lv1、戦士Lv1、剣士Lv1、
探索者Lv1、薬草採取士Lv1、僧侶Lv1。

ロクサーヌの方にはあつた。

「最後はロクサーヌが倒した？」

「はい。ご主人様が殴った後、私が突きを入れると倒れました」

そうだったのか。見えなかった。

どうやら、とどめをささないと言った僧侶のジョブは取得できないよう
だ。

僧侶

僧侶のジョブを取得するには魔物を素手でしとめる必要があるらしい。

とどめをさしたロクサー又は僧侶のジョブを獲得したが、一緒に戦いに参加した俺のジョブは増えていなかった。

仕方ないので、その後も実験を繰り返しつつ、僧侶のジョブ取得を目指す。

「とどめは俺がさすから、ロクサー又は困むだけにして攻撃するな」

魔法を当てても一撃では倒れなかったニードルウッドに挑んだ。

一発で倒せる場合もあるのだから、かなりのダメージは与えているはずだ。

とはいえ一人で相手にするのは危険が大きい。

というか、無理。

ロクサー又と二人で困む。

こうすれば、こっちにくる攻撃は半分だ。

おおっと。

まあときにはロクサー又を空振った枝が俺のところまでくるともあるが。

ニードルウッドに前後の別があるかどうかはよく分からない。

枝を振り回すだけで三百六十度攻撃できるし。

さすが木人変人。

二人で前後から囲んでもあまり優位にはならないような気がする。

しかし、魔物からの攻撃は確実に減る。
実際に攻撃しているのは俺だけだが、ニードルウッドは俺だけを相手にすることはなかった。

どう見ても俺よりロクサーヌの方が強そうだしな。
無視はできないのだろう。

ロクサーヌは相変わらず魔物の攻撃をすべて紙一重でかわしている。
る。

ニードルウッドの枝振りがまったく当たらない。
なんだ、あの動きは。

ロクサーヌが軽く身を翻して魔物の攻撃を避ける。
隙ができたところで、俺がパンチを見舞う。
枝が振られ、俺が大きく体をそらす。
上体が崩れるが、魔物はロクサーヌの方を狙う。
振られた攻撃をロクサーヌがまたしても軽々と。

さつきからこれの繰り返しだ。
ときたま違いがあるのは、魔物の攻撃が俺に当たることくらいか。
ロクサーヌにはもちろん当たりませんよと。

あるいは、ニードルウッドからするとロクサーヌへの攻撃は当たり
りそうであつたらないと見えているのかもしれない。
一見するとギリギリの攻防に見えなくもない。
完全に見切られてるけどな。

攻撃は俺しかしていないので、長時間の戦闘となつた。
ジャブの後のストレートをワンツで放つ。

腰を回転させ、力を乗せた。

俺のこぶしの方がダメージを受けた気がしないでもない。
振られた杖をあわてて避ける。

相手が空振りしたときがチャンスだが、こつちも体勢を崩している
ので追撃できない。

次に魔物がロクサーヌを攻撃して空振りした。

ここぞとばかりにラッシュをかける。

一步踏み出して左、右。さらにもう一步踏み込んで左で正拳突き
を放った。

ようやく魔物が倒れる。

長い死闘を征した。

死闘だったのはもちろん、俺とニードルウッドだけだ。

俺しか攻撃していないので、今度こそ確実にとどめをさした。

ジョブ設定と念じる。

僧侶 L V 1

効果 精神小上昇 M P 微上昇

スキル 手当て

これか。

早速ジョブを設定し、手当てと念じた。

魔物の攻撃を何度か浴びたので、肩口が痛い。

「確かに痛みが引いたようだ。これから魔物の攻撃を浴びたときに

はスキルを使って俺が回復させるから、必ず申し出るように」

ロクサーヌに告げる。

「できるのですか？」

「うむ。内密にな」

「か、かしこまりました。ご主人様、すごいです」

ロクサーヌもブラヒム語のでき次第では使えるのだが。

大体、さつきから何度もすごいと言われていたような気がするが、単に複数のジョブを持てるというだけなんだよな。

詐欺くさい。

ロクサーヌの話では、僧侶のスキルでは多分簡単な怪我くらいしか治せないらしい。

腕を切り落とされるような大ケガを負った場合、上位の傷薬である滋養錠などが必要になるのだとか。

しかし要は金を出せばなんとかなるということで、俺は安心した。

その後も検証を進めて、冒険者ギルドの壁に戻ってくる。

ワンドにもちゃんと効果があることを確認した。

ファイヤーボール、ファイヤーストーム、ブリーズボール、サンドボールでは多分威力に違いはないようだ。

腕力上昇にボーナスポイントを99振って銅の剣で戦ってみたが、一撃では倒せなかった。

基本的に魔法の方が剣よりも威力があるらしい。

デュランダルはどれだけすごいんだろう。

宿屋に帰って、ロクサーヌと一緒に朝食を取る。その後、いったん部屋に入った。

「ロクサーヌがいるとすごく役に立った。これからもよろしく頼む」

ロクサーヌに礼を述べ、ベッドに腰かける。

実際、すごく役立った。

まず、魔物を探す能力があるので、素早く魔物に行き当たる。

一回の探索で今回ほど多くの魔物を倒したことはなかった。

それほど長い時間迷宮にはもぐっていない。探索をしたのは一階層なので全部一匹ずつ。しかも、実験や僧侶のジョブを獲得するために一部の魔物とは無駄に長く戦っている。

アイテムボックスの中では現在、ランチが二列を満杯にし三列めにも一つ入っていた。

今は探索者Lv27なので、アイテムボックス一列には二十七個入る。

つまり今朝の探索で得たランチは五十五個。他にリーフが六枚だ。

また、ロクサーヌがいれば敵を魔法で攻撃するときにも前衛を安心して任せられる。

今日、ロクサーヌはただの一回も魔物の攻撃を浴びていない。

全部かわしきっていた。

ロクサーヌが相手をしている間にデュランダルを出すこともできる。

好きなときに好きな相手でデュランダルを使ってMPを回復でき

るので、効率が上がるだろう。

「はい。ありがとうございます。こちらこそよろしくお願いします」

ロクサーヌが入り口近くに立ったまま頭を下げる。
頭を上げて、そこから動くつもりはないようだ。

「頼む」

「こんなにたくさんの魔物を倒したのは今回が初めてです。ご主人様はすごいです」

「いや。俺も初めてだ。これはロクサーヌの案内があったおかげで、すごいのはロクサーヌだな」

「そんなことはないです。たくさん倒せたのはご主人様の攻撃力が圧倒的だったからです。他にもいろいろとすごかったです」

なんか褒めあいになってしまった。

「まあこっちに来て座れ」

「は、はい」

ロクサーヌを招く。

いちいち言っでやらないと駄目なのかね。

「これからは部屋に入ったら勝手に座ってよい。いや、なるべく俺の近くがいいな。俺の近くに座るように。近くに座ったからといって押し倒すようなことは、ええっと、絶対とはいわないけどあんまりしないようにするから」

ロクサーヌが隣に来たので、無性に抱きつきたくなった。

未来永劫我慢するというのは無理だ。

チュニツクの襟から少しだけ覗く白い肌がみだりに艶かしい。

「わ、私なら、大丈夫です。かまいませ、あっ……………」

そんな嬉しいことを言ってくれるので、思わず抱きついてしまっただではないか。

今のはロクサーヌが悪いと思います。

かまわないというのは、押し倒してもかまわないという意味だろうか。

あ。押し倒したりしないようにするなら大丈夫ということか。ちくしょー！

しょうがないので、押し倒す代わりにイヌミミをぱふぱふして気分を落ち着けた。

柔らかくて弾力もあって、いい感じ。

「味わってもいいかな」

「えっ…………。あ、あの…………美味しくないと思います」

いや、絶対旨いだろう。

って、何を言っているのだ、俺は。

ロクサーヌはちょっと困ったようにうつむいている。違うから。

食べないから。

食べちゃいたいけど、食べないから。

「別に取って喰ったりはしないから。いじるだけ」

甘かみしたり唾えたりはしたい。

「は、はい」

「耳ってこんな風にいじっても大丈夫なのかな。痛かったり嫌だったりしたら、すぐに言ってくれ。やめるから」

「変なことをしなければ大丈夫です。それに、あの……なでられると気持ちいいです」

ちよつと視線をそらしながら気持ちいいと小声で言うロクサーヌが抜群に可愛かった。

やっぱり食べてもよろしいでしょうか。

しかし、このイヌミミは何かを思い出すな。

ベビーパウダーについているパフとかじゃなくて、食べられるやつ。つ。

シュークリームでもシフォンケーキでもマシュマロでもなく、もつともつちりした。

そうだ。磯辺焼きだ。

焼けたモチの伸びる感がこの垂れ耳にはある。力なくフニヤンとたれるところが。

適度に弾力があって柔らかく、人の心をひきつけてやまない。

磯辺焼きか。

好きな食べ物だが、もう一生食べることはないかもな。

モチもしょう油も海苔もこの世界にあるかどうか。

「磯辺焼きって、この辺りでもあるか」

「磯辺焼きですか？」

「うん。俺の故郷にあった、好きな食べ物だ」

「この辺りでは知りませんが、海の方へ行けば、磯で魚を焼いたりして食べることもあると思います」

それは本当に磯辺焼きだな。

多分、ブラヒム語が直訳してしまったのだろう。

翻訳されてもその概念があるとは限らないということか。

「そうか。まあ探してみるか」

「あ、あの。……ご主人様は、いつか故郷に帰られるのでしょうか」

ロクサーヌが訊いてきた。

やはり気にはなるのだろう。

「故郷にか？」

「はい」

「故郷に帰るよりもいいものを手に入れたからなあ」

イヌミミをいじりながら会話する。

これは日本にはない。磯辺焼きを補ってあまりある。

柔らかくてなめらかで弾力がある、最高の一品だ。

「……」

「故郷には帰らないし、多分帰れない」

ロクサーヌが黙ってしまったので、ちょっとまじめに答えてみた。考えなければいけないことだと分かっている。

「そうなのですか？」

「うむ。ロクサーヌにとっては残念ながら、故郷に帰るから解放する、ということにはならないだろう」

イヌミミを手で持ち上げ、パタパタと振った。

「いえ、あの。そんなつもりでは」

「大丈夫。分かってる」

「必要なくなつた奴隷は売るのが一般的だと思います」

なるほど。それが常識なのか。

売られるのは困るといのがロクサーヌの心配事か。

「ロクサーヌにはずつつといてもらうつつもりだから」

「はい。ありがとうございます」

「ただし、パーティー戦力の充実を図るのは当然だから、パーティーメンバーは増やすと思うけどね」

ドサクサにまぎれてハーレム宣言もする。

パーティーメンバーを増やすと言っただけで、ハーレム要員を増やすとは言っていないが。

前衛はガチムチのむさいおっさんでしょうがないとしても、後衛は美少女で固めるべきだろう。

常識的に考えて。

「はい。それは当然のことです」

ロクサーヌがどこまで分かっているか知らないが、言質を取つたと解釈しておこう。

パーティーメンバーを増やすことが、本当に当然かどうかは分からない。

パーティーメンバーをそろえるということは、これからも迷宮に

入って稼ぐということだ。

しかし、それ以外に道があるだろうか。

難しい。

農業、料理、商業、運輸といった、この世界でも役に立ちそうなことについて何か特別の知識があるわけでもなく。

現代知識に基づいて何か開発したとしても、それで巧くいくかどうか。

昔、ジェームズ・ワットの伝記を読んだことがある。

彼はビジネス的にも成功したらしいが、それはライバルとの特許裁判を勝ち抜いてのことだった。

特許なんてものもこの世界にはないだろう。

可能性があるとするれば、ロクサーヌに助産婦をさせることくらいか。

助産婦をするのはおそらく女性が中心だろう。

赤ん坊を取り上げるときには石灰水で手を消毒する。

はさみなどの器具は熱湯消毒。

シーツやタオルは天日干しして日光消毒でいい。

これだけで、産褥熱による死亡を大幅に減らせられるはずだ。

カガ流産婦人科がこの世界の標準医療となる日も近い。

実際問題としてはあまり現実的ではないが。

まず、ロクサーヌを助産婦にすることが大変だ。

人、狼人族、エルフ、ドワーフで助産婦は別かもしれない。

兼務できるとしても、産褥熱の発生率が違うかもしれない。

こっちの助産婦は赤ん坊を取り上げる前に何とかの薬草を煎じた

水で手を洗うようにしている、とかいう習慣でもあれば、アウトだ。助産婦以外では、ロクサー又に楽器を弾かせるか歌い手をやらせて楽団結成とか。

俺の知っている現代の名曲がこの世界でも名曲であるならば、いける。

流行曲、オールディーズ、童謡、唱歌、クラシックの小品など、知っている曲は百や二百ではきかない。多分一生困ることはないだろう。

俺自身は、楽器も弾けないし楽譜も読めないから、難しいだろうが。

全部ロクサー又頼みというのが情けない。

パーティーメンバーのジョブを変えられることが分かったので、最悪、それを仕事にできるかもしれない。

本当に最悪の場合だが。

ジョブ変更を仕事にするなら、一部とはいえ俺の能力を明かすことになる。

能力を狙って近づいてくる者がいたり、あるいはトラブルに巻き込まれるおそれもある。

できれば、やめておいた方が無難だ。

結局、迷宮で稼ぐことが一番堅実か。

俺の能力的にもそうだろうしな。

メリットもある。

迷宮に入ってレベルを上げたり、新しいジョブを得たりしていけば、もしものときに役立つだろう。

迷宮がことさらに危険なわけでもない。

と考えてしまうのは、慣れによって思考がたるんでいるだろうか。しかし、早急に下に、じゃなかった上に行こうなどと考えなければ、今のところそう危険でもないように思う。

じっくりとレベルを上げながら、ゆっくりと上がっていけばいい。

なんならずつつと低階層にとどまってもいい。

一日で数千ナールは稼げるから、生きていくのに支障はないはずだ。

「今後のことはそれでいいとして、後は住むところくらいか。ホテル暮らしをするより、どこかで部屋でも借りた方が安くすむか？」

考えごとをつぶやきながら、ロクサーヌに尋ねた。

「そうですね。詳しくは知りませんが、部屋を借りるなら一年契約で一万から三万ナール。五万ナールも出せば大きな一軒家が借りられると思います」

「そうか」

高いが安いのかはよく分からないが、宿に住むよりは安い。

宿代を一日二百五十ナールとして三百六十五日なら九万ナールを超える。

パーティーメンバーを増やすことを考えればさらに跳ね上がるだろう。

「掃除などは私がいたしますから」

「あー、なるほど。ロクサーヌにはちょっと迷惑かけるね」

「いいえ。かまいません」

ホテル暮らしなら雑用も掃除も従業員任せである。
ロクサー又は奴隷兼メイドだから、負担をかけることにはなる。
もちろん俺もやるが、掃除機も水道も洗濯機もないこの世界では
手間も膨大だろう。

「ロクサー又つて、料理はできる?」

「はい。多少の料理ならできると思います」

奴隷兼メイド兼コック決定。

「そういえば、所有者は奴隷に食事と住む場所を提供する義務がある
そうだけど、宿屋でも、家を借りても大丈夫なの」

「はい。もちろんです」

「一緒のベッドでも?」

声を落とし、抱きついてみる。

「は、はい。むしろありがたいくらいです」

これはロクサー又に言わせたかった。

ちよつといじわるだったかな。

床に寝かせられると思っていたらしいし、まあこつ答えるだろう。

抱きついたので、柔らかく豊かな弾力が腕に当たる。

服の下にはノーブラの隆起が。

いかん。

このまま押し倒したいが、なるべく押し倒したりしないようにす
ると言ってしまった。

なんであんなことを言ってしまったのだろう。

「一年って何日？」

「えっと。三百六十日と何日かです」

しょうがないので質問を続ける。

ロクサーヌの説明によると、一年は四つの季節からなり、春夏秋冬で各九十日。季節と季節の間に一日か二日の休日が入るそうだ。

一日だったり二日だったりするのは閏日ということだろう。

すると一年は三百六十四日とプラス何日かで、地球とほぼ一緒か。

今は春に入って間もない時期だとか。

正確な日付は知らないらしい。

一年が三百六十五日あるなら、やはり部屋を借りた方がいいだろう。

「俺が部屋を借りるとして、どこでも借りられるのか」

「ある程度大きな町なら大丈夫だと思います」

「なるほど」

村やなんかだと、よそ者には厳しいところもあるのだろう。

「ただ、探索者ならクーラタルか帝都に住む人が多いと聞いています」

「クーラタルか。聞いたことはあるような」

「クーラタルには大きな迷宮があります。私も一度行ったことがあります。探索者相手の店があつて便利です。ご主人様の場合は、魔法があるのでどこに住んでもいいと思いますが」

魔法というのは、ワープのことだろう。

迷宮にワープで行くとすれば、確かにどこに住んでも問題はない。

「だが一つ忘れてるな。魔法を持っていることは知られないようにしたい。探索者が住んでもおかしくないところに住むべきだろう」

迷宮があるなら、探索者がクーラルタルに住むことはおかしくないだろう。

一度行ってみるか。

金貨が残り五枚あるので、五万ナールなら払える。

三割引は効かなそうだ。

二年契約なら効くだろうか。

十万ナール用意できるまで様子を見るか。

しかし、今後どうなるか分からないのに二年契約はリスクが大きいか。

二年契約にすれば三割引が効くと決まったわけでもない。

一年契約で様子を見た方がいいかもしれない。

あれ。しかし税金もあるのか。

「そういえば、税金について聞いてなかったな。税金はどうやって払う」

「……あ、あの。ぜ、税金は……」

ロクサーヌが答えにくそうにしている。

「なんか悪いこと聞いた？」

「すみません。何も問題ありません。私は両親が死んだ後、叔母の家で厄介になっていました。今年は家族全員分の税金を払えなかつ

たので……」
「そっか」

税金を用意できなかったのでロクサーヌが売られたということだ
ろう。

年貢が払えないから娘を売るとか、時代劇だけの話かと思ってい
た。

ロクサーヌの頭をなでる。

安心させるように、ゆつくりとなでおろした。

「税金は人頭税です。毎年冬に領主に支払います。ご主人様は自由
民なので十万ナール、奴隷は一万ナールです。ご主人様の今年の分
は、多分誰かが払ったのだと思います」
「なるほど」

払ってないと思うけどね。

勝手に解釈してくれる分にはありがたい。

税金は二人分で十一万ナールか。
今は春に入って間もない時期ということなので、時間はある。
問題ないだろう。

なでていたロクサーヌの頭を引き寄せる。

「ええつと。あの。こうしてご主人様に仕えることができたのです
から、私としてはよかったですと思います」

ロクサーヌが俺の肩にもたれかけた。

魔結晶

その後、ロクサーヌに迷宮のことなどを聞いた。

迷宮というのは生き物であると考えられているらしい。

何それ？

各地に迷宮があるのは、あちこちに迷宮がいるからだとか。

「うーん。ウスバカゲロウの幼虫がいるみたいなもんか」

「ウスバカ？」

「いや、気にするな」

迷宮は、アリではなく人間を呼び寄せる。

魔物を使って人間を消化吸収し、生きていく。

そして増殖していくと。

迷宮は迷宮という生き物が魔法で作り出した空間である。

迷宮がある場所の地下を掘っても何も出てこないらしい。

だから、下ではなく上に広がっているのか。

迷宮を殺すには迷宮の最上層へ行つてボスを倒すしかない。

人が住んでいる場所にできた迷宮の駆除は領主の責任において行う。

「逆に、迷宮のせいで人が住めなくなっている地域の迷宮を倒すと、その地域の領主として叙されます」

ロクサーヌがいやに熱心に説明してきた。

「なるほど。よく分かった。ありがとう」
「どういたしまして」

受講はとりあえずここまでにしよう。
意識を部屋に帰ってきた目的に戻す。
アイテムボックスから、リーフを取り出した。

「ロクサーヌ、リュックサックを用意して」
「はい？」

「リーフって、毒消し丸になるだけか？」

一応訊いてみる。

「え？ そうですね。そう聞いています。ギルドに売ると、薬師や薬草採取士の人に分配されて毒消し丸が作られるそうです」
「やはりそうか」

俺はリーフを手のひらの上に乗せ、ロクサーヌの目の前に持ち上げた。

生薬生成と念じる。
リーフが毒消し丸十個に変じ、俺の手のひらからこぼれ落ちた。

「え？ こ、これは……。あの、す、すごいです」
ロクサーヌが素直に尊敬の視線を向けてくる。
やっぱりやりたくなるよね。
なにしろいちいち驚いてくれるから。

「内密にな」

「はい。……ご主人様、すごすぎです」

種明かしをすれば別にたいしたことじゃない。

ジョブを変更すればロクサーヌにも可能なのだし。

ロクサーヌのまなざしがこそばゆい。

毒消し丸を作って、五十九個をロクサーヌのリュックサックに入れる。

一個はアイテムボックスに入れた。

すでに二十六個の在庫はあるが、一つ空きが増えている。

「毒を使う魔物って多いのか」

「そうですね。かなり多いと聞いています」

「やはり毒消し丸は必須か」

「魔物の攻撃が当たらなければどうということはありません」

それはロクサーヌだけだ。

そのうち刻が見えるとか言い出しそうだ。

毒消し丸を作った後、探索者ギルドに赴いた。

買取を済ませ、ロクサーヌに言われた魔結晶を買い求める。

「魔結晶を二つくれ」

「黒魔結晶でよろしいですか」

おい、ロクサーヌ。聞いてないぞ。

「えっと。魔力を使った残りだ」

「それでは黒魔結晶です。少々お待ちください」

ロクサー又は、毒消し丸をリュックサクから出した後、張り紙のあるボードのところへ行っていた。なにやら熱心に読んでいる。文字が読めるというのは便利だ。

黒魔結晶二つを二十ナールで購入した。探索者ギルドの職員にもやはり三割引は効かないらしい。魔結晶一つと銅貨十枚をはっきり分かるよう慎重に交換していた。

魔結晶は鶏卵くらいの大さきの丸っこい小石だ。黒魔結晶の名のとおり、色は黒い。

迷宮の中で見たことはないと思う。この大きさだと見逃している可能性もあるが。ただし、鑑定はできる。名称は黒魔結晶ではなく魔結晶だった。

「滋養丸の上位の傷薬は何になる」

「滋養剤です」

「いくらだ」

「一つ六百ナールです」

いきなり高い。

「滋養剤の上位の傷薬は」

「滋養錠です」

「いくらだ」

「一つ六千ナールです」

さらに十倍とか。

さすがに考えてしまう値段だが、滋養剤を二つ、滋養錠を一つ買った。

大ケガは、しないことを望もう。

「黒魔結晶だそうだ」

ロクサーヌのところへ行つて、黒魔結晶を見せる。

「魔結晶は蓄えている魔力によって色が変わります。魔物を十匹ほど倒すと赤、百匹ほど倒すと紫に変化します。千匹で青、一万匹で緑、以下、十万で黄色、百万で白に変わるそうです」

色が変わるのか。

「魔力のない今は黒いから、黒魔結晶か」

「魔結晶は色によって値段が変わります。色が変わったときが売却のチャンスです。白になるまでためる人は少なく、普通は黄色か緑に変わったときに売却するそうです」

百匹分の魔力をためても九百匹分の魔力をためても同じ紫魔結晶だから値段は変わらないと。

しかし、魔物十万で黄色、白にするには百万も倒す必要があるとなると、ためるのも大変だ。

一日百匹程度として、黄色で三年、白にするには三十年かかる。

ロクサーヌの言うとおり、売る機会は本当に人生で何度かだろう。

「分かった。では迷宮に行くか」

ギルドの外に出た。

宿屋でいろいろ話したとはいえ、日は頭上に達していない。まだ昼前だ。

明るい日差しの中、俺はちらちらと後ろを振り返りながら歩く。

いや、ロクサーヌの胸元が。

後ろをついてくるロクサーヌの胸が歩きたび揺れるような気がした。

だぼだぼのチュニックに皮のジャケットを羽織っているのだから分りにくい、身体の動きに合わせて揺れているような気がする。

気がするではない。多分揺れている。

薄暗い迷宮の中では分からなかったが、確実だ。錯覚とか思い込みとかではない。

おそらくはリュックサックの肩紐が両側から寄せて上げる効果を。ただでさえ大きな甘い果実がところせましと暴れて。

こ、これは目に毒だ。

ロクサーヌに目が合うと、ニツコリと微笑まれた。

完全にばれてます。

毒消し丸生成などで得た尊敬がすべて台無しだ。

背後からのいたたまれなくなるような視線を浴びながら、迷宮に急ぐ。

揺れを確認するには横を歩かせればいいが、この世界では男女が横に並んで歩いている姿は見かけない。

後ろをついてくるなら周囲の男の目からロクサーヌの胸の揺れを隠すことにもなるし。

「やはり一階層は混んでいるようです」

迷宮に入ると、周囲のにおいを確認したロクサーヌが開口一番告げた。

視線のことはスルーしてくれるようだ。

「混んでる？」

「はい。ベイルの町外れにある迷宮一階層の探索終了宣言が出ていました」

なにやらよく分からないが、探索者ギルドに書いてあったのだろう。

人がいるというならここではあまり聞かない方がいいか。

「上へ行った方がいいか？」

「はい。私は三階層まで行ったことがあります。三階層までなら戦えると思います」

「じゃあ二階層から行ってみるか」

後ろの黒い壁に戻り、二階層に抜ける。

「二階層はそれほど混んでいないようです。魔物は右ですね」

「そうか。魔結晶というのは持っているだけでいいのか？」

アイテムボックスから装備品と魔結晶を出して、ロクサーヌに渡した。

「はい。リュックサックに入れておけば大丈夫です。アイテムボックスの中では魔力がたまりません」

リュックサックを下ろして、黒魔結晶を入れる。

装備を整え、右側の洞窟へ出た。

「魔物はなるだけ魔法で倒す。指示があるまで勝手に飛び出さないように」

「かしこまりました」

「それで、探索終了宣言って何だ？」

ロクサー又に注意を与えてから、質問する。

「一階層のすべての探索を終えたという宣言です」

「探索を終えると人が増えるのか？」

「探索が終了しないと、魔物の大量にいる部屋があるかもしれない」

そういえば、そんな部屋があった。

一階層にニードルウッドが十匹以上もいた小部屋があり、苦戦した。

「あれは探索が終了するとなくなるのか」

「探索が完了したなら、魔物がいる部屋も探索されたということですよ」

「ふうむ」

「えっと。魔物が湧いたとき、このような洞窟に出てくれば、魔物はやがてどこかに移動します。小部屋の中には魔物が湧く小部屋もあります。魔物が小部屋に湧くと、魔物はどこへも移動できません。長い時間がたつと、小部屋の中に大量の魔物が残ることになります」

首をかしげる俺に、ロクサー又が説明してくれる。なるほど。あの魔物部屋はそうしてできたのか。

「探索を終了したので魔物が大量にいる部屋もなくなったということか」

「はい。何日か人が来なかったくらいでは、そこまで大量の魔物はたまりません。魔物が大量にいる部屋は極めて危険な罠です。探索終了宣言が出たからといって安心できるものではありませんが、やはり一番危ないのは迷宮が見つかったばかりで誰も入っていない状態のときでしょう」

全体攻撃魔法を使える今となつては魔物が大量にいる部屋はおいしいのだが、今後は望み薄ということか。

上に行けばまだ残っているかもしれないが。

魔法を使えないときに当たったのは、運がいいのか悪いのか。

「分かった。それで人が増えた」と
「魔物です」

ロクサーヌが会話を中断して警告した。
前方に魔物が現れる。

ニードルウッドLv2だ。

知力上昇に99ポイント振ったファイヤーボールを放つ。

しかし、一発では倒せなかった。

二発目を撃って倒す。

魔物もレベルが上がると結構強くなるようだ。

ロクサーヌからブランチを受け取りつつ、リュックサックの中を確認した。

魔結晶の色は黒のままだ。

次のテストは、この魔結晶である。
ポーナススキルの中に、結晶化促進というスキルがあった。
今までは意味が分からなかったが、結晶化とは魔力の結晶化とい
うことだろう。それを促進してくれるのだ。

キャラクター再設定と念じ、結晶化促進にチェックを入れる。
スキルが結晶化促進四倍になった。
知力上昇に振ったポーナスポイントをはずして、結晶化促進につ
ぎ込む。

結晶化促進は八倍、十六倍、三十二倍と進み、結晶化促進六十四
倍で打ち止めとなった。

次に現れたニードルウッドLv2を知力上昇に1ポイントも振っ
ていない魔法二発で倒す。
振っても振らなくても魔法二発なのか。
恩恵が感じられない。

魔結晶を確認した。
赤っぽくなっている。
これが赤魔結晶か。

もう一匹倒して、再度確認した。
色は紫っぽい。

「百匹倒すと、紫だっけ？」
「そうです」

六十四倍だから二匹倒せば百二十八匹倒したことになる。
スキルが有効なのは間違いない。

「ロクサーヌ、見るか？」

返事を待たずにリュックサックから紫魔結晶を取り出した。
どうせいつかは見られる。
失った尊敬も回復したい。

「え？ それは？ 何で、ですか？」

「うむ。内密にな」

「は、はい。……ご主人様、すごいです」

ロクサーヌに少しだけ見せて、リュックサックに戻す。
やはりいちいち驚いてくれた。

そろそろ全部内密にごまかすのはつらいような気もするのだが、
ロクサーヌが納得してくれるうちはこれでいいだろう。

「魔結晶って、いくらで売れるか知ってるか」

「緑が一万ナール、黄色だと十万ナールのはずです」

緑魔結晶になるのに一万匹狩る必要があるとすると、一匹一ナールか。

六十四倍で六十四ナール。ドロップアイテムより効率がいい。

お金を稼ぎたいなら結晶化促進、強くなりたいなら経験値スキル、
今強い敵と戦うならデュランダルにボーナスポイントを振れということだろう。

よくできてやがる。

「それでは、これより最後の実験を行う。いや、実験は今後とも適宜行っていくが、当面は多分これが最後だ」

ロクサーヌに宣言した。

「えっと。そういえば、何の実験を行っていたのでしょうか」
「まあいろいろだ。今回はロクサーヌにも協力してもらおう」
「は、はい」

パーティージョブ設定で、ロクサーヌのジョブを僧侶にする。
続いて、自分にも僧侶のジョブをつけた。

加賀道夫 男 17歳

探索者LV27 英雄LV24 魔法使いLV26 商人LV22

僧侶LV1

装備 ワンド 皮の帽子 皮の鎧 皮のグローブ 皮の靴

ロクサーヌ 16歳

僧侶LV1

装備 シミター 木の盾 皮の帽子 皮のジャケット 皮のミトン
サンダルブーツ

手当てを何回か使ったが、俺もロクサーヌも僧侶はほぼまっさらだ。

この状態で、経験値を稼ぐ。

複数のジョブをつけたときに経験値が分割されているかどうか、俺とロクサーヌの僧侶レベルを比較すれば分かるだろう。

必要経験値の減少スキルは使わず、獲得経験値二十倍をつける。
俺のレベルアップが早ければ、獲得経験値の上昇スキルは俺の

経験値だけに作用している。

俺とロクサーヌのレベルアップが同時ならば、獲得経験値の上昇はパーティーで効いている。

ロクサーヌのレベルアップが早ければ、複数のジョブを持ったときに経験値が分割して配分されている。

そう判断していいだろう。

「何か身体に変わったところはないか」

「いいえ。特には」

俺も英雄をはずしたときに体が重くなったとは感じなかった。自覚はないのだろう。

「本当は一階層で試したかったのだが、しょうがない。危険があるかもしれないので、実験が終わるまでロクサーヌは戦わないように」

「危険なのですか」

「実験そのものに危険はない。そうだな。言ってみれば、戦闘能力に少し制限を加える実験だ。普段どおりには戦えなくなるかもしれない」

獣戦士Lv6と僧侶Lv1でどこまで違うかは分からないが、用心にこしたことはないだろう。

「今までそんな実験をしていたのですか。それなら、私も戦った方がいいのではないですか」

「そのうちに試してもらうかもしれないが、今はいい」

ロクサーヌのジョブを変えるとどうなるかは、この実験の本義ではない。

やってもらうにしても、最初は一階層でやるべきだろう。
僧侶Lv1だからといって一撃でやられることはないと思うが、
あえて試してみる必要もない。

その後、二階層で狩を行う。

レベルが上がったのは俺とロクサーヌで同時だった。

獲得経験値の上昇スキルはパーティー全体に作用している。

そして、おそらくフィフスジョブでも経験値は分割されない。

可能性としては、経験値がジョブの数に分配される、俺の五つと
ロクサーヌの一つで六分の一ずつ入っているということも考えられ
るが。

次に、必要経験値減少のスキルもつけて試してみる。

俺の僧侶だけがあつという間にLv3に上がった。

まあそれはそうだろう。

僧侶Lv2に上がるのに二十匹以上狩る必要があつた。

必要経験値十分の一をつければ、三匹でまかなえる計算だ。

ロクサーヌのレベルは上がらなかったなので、必要経験値減少のス
キルはやはり俺にだけ効果があるようだ。

当面、デュランダルを使わないときのボーナスポイントは、

必要経験値十分の一で31、

獲得経験値十倍で31、

結晶化促進三十二倍で31、

ファイフスジョブで15、

MP回復速度三倍で7、

詠唱省略で3、

パーティージョブ設定で3、
ワープ、鑑定、パーティー項目解除、
キャラクター再設定で4を割
り振っておけばいいだろう。

クーラタル

「魔物が三匹出てくるのは、三階層からか？」

「いいえ。四階層からと聞いています」

「では四階層で四匹出てくることはないな」

「四匹出てくるのは八階層からだそうです」

二階層と三階層でロクサーヌの戦いぶりを確認し、四階層に移動した。

最初に出てきたミノ二匹、コボルト一匹の団体を魔法三発で沈めた後、ロクサーヌに尋ねる。

ファイヤーストームが魔物にだけ作用することは確認済みだ。

「そうすると十六階層からは五匹か」

「よくお分かりになられるんですね。そのとおりです」

妙なところで感心されてしまった。

二匹出てくるのが二階層、三匹が四階層、四匹が八階層なら、五匹出てくるのは十六階層からだろう。

次にロクサーヌが案内したのも、ミノ一匹、コボルト一匹の団体だ。

まずファイヤーボールでコボルトLv4を焼き払う。

「ロクサーヌ、ミノの相手をしてみる」

確認のため、ロクサーヌを送り出した。

ロクサーヌは二階層と三階層でニードルウッドLv2とニードル

ウッドレベル3を問題なくあしらっている。

前後が詰まった牛のようなミノレベル4とどこまで戦えるのか。

ロクサーヌがシミターをかざして駆けた。

正面から軽く一撃。振られたツノを難なくかわして一撃。

さらに一撃加えた後、ひらりと身を翻してミノの攻撃を避ける。

おまえ、どこの闘牛士だよ。

一匹相手なら四階層でも完璧のようだ。

ロクサーヌが魔物の相手をしている間に、俺はデュランダルを用意する。

離れた左側を進み、ミノの側面からぶち当てた。

ミノを倒し、MPを回復する。

「四階層でも問題ないようです」

「ただ、数がな。三匹でも大丈夫か？」

「そうですね。二匹ならまったく問題ありません。三匹に囲まれると、ひよっとしたら攻撃を受けることがあるかもしれませぬ」

こんな感想が返ってきやがりましたですよ。

俺がミノ三匹に囲まれたらパニックになるね。

「ツノは怖くないか」

「よく見れば問題ありません」

「よ、よくかわせるよな」

「ツノが振られるときには、こうヒュツと来ますから、体をスツと引いてパツとかわせば大丈夫です」

「……分かった」

ロクサー又は人に教えることができないタイプだ。
天才肌ってやつだろう。

「そもそもツノが頭にあっても力をこめようとすれば勢いよく突進するか大振りするかしがなく、それでは動き出しで何をするつもりなのかいっぺんに分かってしまいます。避けてくれといっているようなものです」

とはロクサー又談である。

言葉だけ聞いていると、そのようにも思えるが。

いやいや。だまされてはいけない。

そんなことができるのはロクサー又だけだ。

まあ、先々の心配をしても仕方がない。

四階層は魔法三発でけりがつくので問題ない。

上に行けば、魔法を発動するまでの間、前衛が魔物三匹を相手にしなければならぬとしても。

ロクサー又も二匹までは問題ないと言っているのだから、一匹は俺ががんばるしかないだろう。

四階層で少し狩をして、冒険者ギルドの壁に帰った。

迷宮にこもりっぱなしはよくない。

迷宮ではどうしても緊張を強いられる。

適宜気分転換が必要だ。

狩を終えたとき、魔結晶の色は青くなっていた。

ロクサー又の魔結晶は紫になっている。

魔物にとどめをささないで、魔力はたまらないらしい。
紫にしたのはロクサーヌが持っているときではなく俺が借りたときだ。

複数の魔結晶を持てば、複数の魔結晶に魔力がたまるとはならないか？

ロクサーヌによれば、もちろんそんなうまい話はないらしい。とはいえ、結晶化促進スキルをつけると、違つかもしれない。ものは試しと、二個の魔結晶をリュックサックに入れてみた。

ロクサーヌから借りた黒魔結晶が紫魔結晶に変わったのは、魔物を九匹倒したときだ。

うち二匹は結晶化促進スキルをつけずにデュランダルで倒している。

得た魔力は、七匹×三十二倍＋二匹分だ。

紫魔結晶にするには魔物百匹分の魔力が必要だから、魔結晶を二個持つとたまる魔力はきつちり半分になると考えていい。

やっぱりうまい話はないようだ。

紫魔結晶を返すとき、十匹も狩っていないのに百匹狩らないとまらない紫魔結晶になっていたことで、ロクサーヌは驚いていたが。

コボルトはおいしくないかとロクサーヌに伝えてあるので、あまりコボルトとは戦っていない。

本当にロクサーヌは役に立つ。

冒険者ギルドは、いつもより人が多いような気がした。

終了宣言のせいだろうか。

買取のカウンターにも人が並んでいる。

売りに来た人は皿の上にランチを四、五本とリーフ一枚を載せていた。

まさに探索が終了した一階層でがんばったのだろう。数は少ないとはいえ。

「リーフって買い取れないものかねえ」

小声でロクサーヌに話しかける。

リーフは確か八十ナールだったから、倍額で買って三割引が効かないとしても、毒消し丸十個を三割アップで売れば、一枚あたり百六十五ナールの利益が出る。

「リーフの取引はギルドの利となります。やめた方がいいと思います」

ロクサーヌがやはり小声で答えた。

なるほど。ギルドの権益を侵害すれば、目をつけられてどんなしっぺ返しがかかるか分かったものではないか。

この方法で稼ぐのはやめておこう。

小声だったし、誰にも聞かれてはいないはずだ。

それにしても今日は人が多い。

ギルドの壁からも、すでに何組かのパーティーがやってきていた。

また誰か出てきた。

今度は二人組みだ。

「クーラタル、片道のかた、いませんか」

最初に出てきた方の男が告げる。
おっと。クーラタルから来た冒険者が。
これは都合がいい。

俺は、パーティー編成を念じ、ロクサーヌをパーティーからはずした。

「ちょっと行ってくる」

「はい」

ロクサーヌもすぐに意味するところを理解したようだ。

主人の命令に従っただけかもしれないが、理解したような目をしていた。

多分理解しただろう。

俺がいない間にどこかへ逃げ出すようなことは、しないといいな。

まあ、ちょっと目を離しただけでいなくなるなら、すでに逃げている。

四六時中一緒というわけにもいかない。

銀貨一枚を払って、クーラタルに連れて行ってもらう。

日の高さを確認して、すぐに帰った。

ロクサーヌは……いた。

ちゃんといてくれた。

「ただいま。クーラタルに行ってみるか？」

「はい。お供します」

パーティーを組み、ベイルの日の高さを確認した後、クーラタル

の冒険者ギルドにワープする。

ベイルの時刻は午後三時より前、二時を少し回ったあたりか。夕方まで三時間ぐらいの余裕はあるだろう。

クーラタルも昼間だが、方位も経度も分からないので時差は不明だ。

クーラタルの冒険者ギルドは、ベイルの町の冒険者ギルドを一回り大きくした程度だった。

帝都の冒険者ギルドとは比ぶべくもない。

買取カウンターも三つしかない。

一つしかないベイルの冒険者ギルドよりは大きいが、話を聞くにもっと大きい町かと思っていた。

「うーん。こんなものなのか」

「クーラタルは迷宮と探検者が中心の町なので、探索者ギルドの方が充実していて大きいのです」

ロクサーヌが説明してくる。

冒険者ギルドを出て思わず放ったつぶやきを聞かれましたらしい。

「そうなのか。ロクサーヌは来たことあるのか」

「はい。一度だけ迷宮の見学に来ました。迷宮に入ろうとするものは、多くが一度は訪れます」

「じゃあ、一度迷宮行ってみる？」

「かしこまりました。あちらです」

ロクサーヌはためらうことなく指差した。

「北がどっちか分かる？」

「すみません。分かりません」

「それでよく迷宮のある方向が分かったな」

あ。においか。

「クーラタルの町は迷宮を中心にできています。迷宮がいるのは町の中心で、道はその中心から放射状に延びています」

においでもないようだ。

見れば、道の片方向は建物がだんだんまばらになっていつている。片方は建物が密集している。

なるほど。あっちが町の中心か。

町の中心部へ向かって歩き出した。

それでも、クーラタルの町並みはさすがに帝都より小さい。

ベイルの町よりは繁栄している、という程度だろう。

中心部近くでは何軒かの店が建物一階の壁を開放して営業していた。

魚屋とパン屋があって、その向こうにあるのは金物屋だ。

露店以外でやっている店は、この世界に来てから初めて見た。

特にどうということはない普通の店だ。

店舗の形態なんてそう複雑なものではないということか。

金物屋の向こうは道が交差するロータリーになっており、中央にこんもりとした小山がある。

迷宮の入り口だ。

町の中心からは道が何本か延びており、どの道にも両側に何軒かの店が並んでいた。

「あれが迷宮か」

「そうです。入り口から道をはさんで正面に建っているのが騎士団の詰め所、入り口の反対側にある大きな建物が探索者ギルドです」

迷宮入り口の黒い壁が右側に少し見える。

その反対側には、中央から延びる二本の道にはさまれるようにして五、六階建てくらい大きなビルが建っていた。

赤茶けたレンガ造りの建物はかなりの威容を誇っている。

なるほど、探索者ギルドが充実しているというわけだ。

一階の扉は開かれ、何人もの人が出入りしていた。

騎士団の詰め所にも多くの人が並んでいる。

「あれはなんで並んでるんだ」

「クーラルの迷宮は入り口から入るときにお金を払わなければいけないのです。一人一回百ナールです」

入場料を取るのか。

観光名所みたいだ。

「料金があるのならもっと時間のあるときに入った方がいいな。家を借りるにはどうすればいいか、知ってるか」

「世話役の人がいます。どこかの商店で聞けば教えてくれるでしょ

う」

「ふむ」

この金物屋にでも入ってみるか。

金物屋に入ろうとすると、ロクサーヌが腕を引っ張った。

「ですが、ご主人様」

「ん？」

「ご主人様の魔法を使つて入れればよいのではないですか」

小声で伝えてくる。

なるほど。

ワープを使えば直接迷宮の中に行けるのだから、一度入ってしまったば次からはいちいち金を取られることはないのか。

越後屋、おぬしも悪よのう。

帯をくるくるとほどきたい。

金物屋に入った。

鍋、はさみ、鋏、シャベル、その他よく分からない金属製品が置いてある。

南京錠もあった。

武器は武器屋で。鋏やシャベルは農具扱いということなのだろう。

「いらっしやいませ」

出てきたのは中年ちよい手前くらいのおばちゃんだ。

37歳、商人Lv44。

微妙にレベル高い気がする。

「この辺りで住むところを探しているのだが。世話役の人がどこ」「それはようございました。六区の世話役はうちになります」

全部言う前に返ってきた。

「ここが世話役なのか。ラッキー。」

「六区？」

「この町は中央から延びる六本の道によって区画されています。探索者ギルドのある区画が一区、以下左回りで二区、三区、ここが六区になります」

「なるほど」

迷宮に面した一番目立つ位置は各区に一つずつだ。

六区ではこの店がその一番目立つ場所にあるのだから、世話役になるのも実力相応ではあるのかもしれない。

「探索者のかたですか」

「そうだ」

「どのような物件をお探しでしょう」

そう言われると困ってしまう。

「逆にどういう物件があるのか教えてほしい。年に四万ナールちょっとで借りられるところで、他には特に条件はない」

「お二人で住まわれるのですか」

「当面はそうだが、今後は」

「なるほど。探索者ですからね」

みなまで言わせずにおばちゃんが引き継いだ。
しゃべり好きな人らしい。

迷宮に入る探索者なら六人までパーティーを組める。
パーティーメンバーと一緒に住む探索者も多いのだろう。

おばちゃんはロクサーヌの方に少しだけ目をやると、次に俺の顔

を見ていやらしくにやけた。

ロクサーヌが奴隷だということが分かったようだ。
そしてまた、値踏みするかのようにロクサーヌをぐっとにらむ。

何故ロクサーヌが奴隷だと分かったのか分からないが、あの顔は分かったという顔だろう。

さすがは世話役ということなのか。

あるいは、奴隷商人が俺に告げたように、迷宮に入るのに奴隷をパーティーメンバーとする人は多いのかもしれない。

「……あの」

「いい娘を持ったようですね。迷宮に近い方がいいでしょうか」

にらまれて何か言おうとしたロクサーヌを置き去りにして、おばちゃんが俺に話しかけた。

「特にこだわりはない」

迷宮に近い方が家賃は高いだろう。

迷宮に近いということは町の中心に近いということでもある。

しかし俺の場合、迷宮に行くにはワープを使えばいい。

町の中心にある繁華街に用があるとしても、冒険者ギルドの壁に出てくれば十分だ。

迷宮の近くに住む理由はない。

むしろ、迷宮から遠ければ家賃が安くなるだろうから、遠い方が有利だ。

「冒険者でないなら、一軒お値打ちな家がありますが、どうでしょうか」

「冒険者では駄目なのか？」

「前の住人が遮蔽セメントで全部おおってしまったので、使いにくいのです」

意味が分からん。

「遮蔽セメントを使った壁にはフィールドウォークで移動できませんから、冒険者には使いにくいでしょうね」

助けを求めるようにちらりとロクサーヌを見ると、フォローしてくれた。

ロクサーヌ、まじ役立つ。

しかも、俺が遮蔽セメントを知らないことがばれないよう、さりげないフォローになっている。

なるほど。

冒険者は迷宮から離れたところに住むのだろう。

移動するにはフィールドウォークを使えばいい。わざわざ家賃の高いところに住む理由はない。

しかし遮蔽セメントでおおっている、その家は使えないと。

「一度見せてもらえるか」

ワープが使えるかどうかは、試してみるよりないだろう。

「分かりました。準備してきます」

おばちゃんは一度店の奥に引っ込んだ。

しばらくして現れると、外に出て道を冒険者ギルドの方へ戻る。

家を借りるのは早計かもしれない。

この世界についてもっと知ってから、あるいは今後のことについて真剣に考えてからの方がいいかもしれない。

地震や火山や熱帯低気圧やその他天災の有無について、調べなければいけないかもしれない。

「この辺りの気候はどうですか」

「いいところですよ。夏は涼しくて、冬もあまり雪は降りません」
「雨はどのくらい降りますか」

ロクサーヌがおばちゃんから聞き出そうとしているが、その程度では足りないだろう。

しかし、どのみち俺にはあまり選択肢はない。

現状クーラタルか帝都かの二択だ。

他にも問題なく住める場所があるかもしれないが、調べたり考えたりするのに何ヶ月も費やすなら、借りてしまった方が安上がりだろう。

ここがよほど酷い場所だったならともかく、他にもっといい町があったのにといい程度なら、後悔するほどでもない。

世話役のおばちゃんが俺とロクサーヌを先導しながら道を進む。

クーラタルの町は、高いビルが建っているのは中心部だけで、少し外れると住宅街になっていた。

二階建て程度の家が多少の間隔をあけて並んでいる。
どこかの田舎の郊外という感じだ。

さらに進んで家よりも空き地や畑が多くなったところ、一人の男性がいて、おばちゃんとなにやら挨拶した。

40歳、村人Lv53、だと？

かつてない高レベルの村人だ。

精悍でたくましく感じるのは、実際に強いのか、俺がレベルに惑わされているのか。

「今のがうちの亭主です」

男性と一言、三言会話して別れたおばちゃんが告げる。

「非常に、強そうな人だな」

「この町には城壁がないでしょう。迷宮を取り囲んで造られていますから、城壁には意味がありません。魔物は町のどこにでも現れます。弱いですけどね。魔物を怖がるような人はこの町には住めません。私も亭主も三日と空けずに迷宮に入るようにしています」

ロクサーヌによれば、魔物は迷宮の中だけでなく、近くにも湧く。最初の村の裏手の森にいたスローラビットや、馬車で移動中に出会ったグミスライムがそうだ。

そうした魔物に襲われないように、都市は城壁で囲む。

クーラタルでは迷宮が町の中心にあるのだから、町を城壁で囲んでも意味がないのだろう。

考えてみれば恐ろしい町である。

そんな町に住んでいる以上、この夫婦も鍛えている。

その結果が、村人Lv53というわけだ。

デュランダルを出せばいい俺はともかく、ロクサーヌは大丈夫だろうか。

「魔物が湧く町でも問題ないか」
「何の問題もありません」

愚問だった。

「亭主はあそこの小屋で鍛冶職人をやっています。うちで扱っているのは亭主が作った品物です」

「鍛冶職人？」

「ええ」

「鍛冶師なのか？」

鍛冶師なら、ジョブを獲得する方法が聞けるかもしれない。

「鍛冶師はドワーフのみが就けるジョブですよ」

「違うのか」

「小屋の中に小さな溶鉱炉を持って、商品を鑄造しています。これは種族に関係なく、技術があれば誰にでもできる仕事です。鍛冶師は武器や防具をスキル魔法によって作り出すジョブで、ドワーフにしかありません」
「そうか」

なにやらよく分からないが、鍛冶師と鍛冶職人は別物らしい。
考えてみればジョブは村人Lv53だったしな。

ワンメイクの装備品はスキルで作るということが。
残念ながら、鍛冶を行って鍛冶師のジョブを得ることは無理だろう。

「さあ、あそこです」

もう少し進み、細い路地に入ったところで、世話役のおばさんが

白い家を指差した。

クーラタル（後書き）

感想でいろいろ突っ込まれたことのフォロー回となっております。
の割に、クーラタルの迷宮についての説明は全部積み残し。

家

住む場所を周旋してくれるという世話役のおばちゃんが一軒の家に俺とロクサーヌを案内した。

モルタル塗り二階建ての白い家だ。

この辺りやベイルの町でもよく見かける、普通の家という感じだろう。

それでも結構大きいように感じるのは、日本人の悲しい性か。

この世界が現代日本よりも進んでいるところがもう一つあった。

町から少し出ただけで森が広がっているし、土地はあるのだろう。

一つはイヌミミ様ですが何か。

「木窓の修復は行っているので、家具を運び込めばすぐにも住める状態です」

おばちゃんが鍵を開ける。

家の中はコンクリートむき出しの無機質な部屋が広がっていた。

やはり大きい。

日本の感覚では、もう邸宅といっていい。

「ほっ」

「前の住人がいろいろと手直しをしまっているんで、中はどんな改装をしてもかまいません。特に手を加えてしまったのは、水洗トイレですね」

おばちゃんが部屋の中をずんずんと進んで、奥の部屋のドアを開ける。

向こうの小部屋がトイレになっていた。

「水洗トイレ？」

「上の容器に水を入れると、外のドブへ流れるようになっていきます。ドブには近くの川から取水していますが、こちらが上流側なので十分きれいです」

トイレは排水口に直接つながっているだけの便座だ。

上のタンクに水を入れると、その勢いで流れるようになっていくのだらう。

水洗というのもおこがましいが、甕に糞尿をためて捨てに行くよりはよっぽどいい。

「ふむ」

「ここに作っても不便なんですけどね。前の住人の趣味です。二階にも作るうとしたので、それはやめさせました」

「二階にもトイレが？」

「やめさせたので、二階には排水口だけがつながっています」

トイレの隣の部屋は、シンクや台があるところを見ると、キッチンだらう。

ロクサーヌがおばちゃんに質問している。

「ではちょっと二階を見てくる」

世話役のおばちゃんがロクサーヌに捕まっているのをこれ幸いと、二階に上がった。

ワープの実験をしなければならない。

階段を上がると、ロクサーヌがどこにいるか分かるようになった。これがパーティーの効果か。

用心のためロクサーヌをパーティーからはずし、隣の部屋を思い浮かべて、部屋の壁に向かってワープと念じる。

移動はパーティー単位なので、ロクサーヌがいないときにどう動作するか分からない。

目の前に黒い壁ができた。

通ってみる。

見事に隣の部屋に抜けた。

成功だ。

フィールドウォークは駄目らしいがワープならできる。

迷宮内にも移動できるし、ワープは使い勝手がいい。

ただし、厄介なことが一つ増えた。

ワープでどこにでも移動するのは避けた方がいい。

移動した先がフィールドウォークやダンジョンウォークでは移動できない場所だったりしたら大変だ。

フィールドウォークやダンジョンウォークが通じる場所であることを確認してから、移動すべきだろう。

冒険者ギルドの内壁や迷宮内の小部屋以外にはあまり移動していないので、今までとたいして変わりはない。

ロクサーヌを得る資金を稼いだとき盗賊たちがのん気に眠りこけていたあの岩穴にも、ひよっとしたら遮蔽セメントが使われていたのかもしれない。

深夜早朝とはいえ、追われている盗賊が見張りも立てずに全員寝

ていたのは無用心すぎる。

フィールドウォークが使えない場所だったので、誰も来ないと安心していたのではないだろうか。

不自然に思われぬように二階も多少見て回ってから、一階に下りた。

「いかがでしょうか。この家の欠点は他に、井戸が遠いので少し離れたところまで水を汲みに行かなければいけないことです。ですが問題ないでしょう」

下に来た俺をおばちゃんが迎える。

最後にちらりとロクサーヌの方を見ながら。

井戸が離れた場所にあっても奴隷に汲みに行かせるなら問題ないということだろう。

「私なら大丈夫です。よい物件だと思います」

ロクサーヌがどこまで本気なのかは分からない。

水は魔法で作り出せることを分かっているのだろうか。

「そうだな」

ワープとウォーターウォールが使えるので、俺にはこの家の欠点が欠点にはならない。

よい物件だといえるだろう。

問題は、最初の一軒めで決めてしまっただけということだ。

ただ、いろいろ調べれば時間がかかる。

宿屋に住むよりは安いのだから、とりあえずここに決めて、駄目

なら後で他の場所に移ってもいい。

ロクサーヌもよい物件だと言っているから、悪い家ではないだろう。

「この家なら一年契約で四万五千ナール。契約は、今日はもう引越しもできないでしょうから、明日からなら来年の春の十三日までになります」

つまり、今日は春の十三日か。

相場というものがあるから、値段的にも悪いものではないはずだ。

世話役の人も悪人ではないだろう。

ロクサーヌを奴隷と見定めた眼力。明日からの契約にしてくれる優しさ。

世話役にはそれなりの人物が選ばれるだろうし、一区から六区まで複数人の世話役がいるなら競争もある。

客をだますようなあくどい世話役ではやっていけないだろう。

一度ロクサーヌを見ると、ロクサーヌが大きくうなずいた。

「分かった。この家を契約しよう」

その後、歩いて騎士団の詰め所に連れて行かれ、俺のインテリジエンスカードをチェックされた。

世話役といってもジョブが商人ではインテリジエンスカードのスキルは使えないらしい。

「契約書類を作りますが、字が書けますか」

金物屋に帰つてくると、おばちゃんが訊いてくる。
字の書けない人はやはり多いようだ。

「代筆でかまわないか」

「もちろんです」

「では、ロクサーヌ、頼む」

「かしこまりました」

おばちゃんとロクサーヌが書類を準備している間、店を見回した。
中華鍋が置いてある。

「これは？」

「それはプロの料理人が使う鍋です。強い火力で調理するときに使います」

「ふむ」

完全に中華鍋というわけでもないのだろうが、似ている。

目的は同じだから、同じような形にはなるのかもしれない。

懐かしい感じがして、俺はしばらく中華鍋に見入った。

「この辺りではうちでしか扱っていないものです。あまり見かけないかもしれません」

「では家賃とあわせてこれももらおう。全部でいくらだ」

「うち特製の鍋を気に入っていただけだよ。こっちも嬉しくなります。ですから特別にサービスして、全部で三万一千八百五十ナールでいいでしょう」

よっしや。

ダメモトでやってみたが、やはり商人相手だと三割引が効くようだ。

金貨三枚に加えて、銀貨と銅貨を出して支払う。
おばちゃんがさっきの家の鍵を渡してきた。

家具もベッドもないので、今日はベイル亭に帰ることにする。
クーラタルの冒険者ギルドから、いったん借りた家に飛んだ。
契約は明日からだが、かまわないだろう。

「この家には遮蔽セメントが使われているという話ではありません
でしたか」

中華鍋を適当にその辺に転がすと、ロクサーヌが声をかけてきた。
おまえは何を言っているんだ。

「いや。ちゃんと使えるかどうか試したから。フィールドウォーク
は使えなくても、俺のワープなら大丈夫らしい」

ワープが使えなかったら契約するはずがない。

「え？ ……それって、すごいことでは
「どうだろうな」

現代日本なら、密室殺人でも完全犯罪でもやりたい放題だが。

この世界に銀行の貸し金庫のようなものがあるかどうか、調べて
みてもいいかもしれない。

やらないけどね。

というか、遮蔽セメントでワープが使えない場合、ロクサーヌは
この家から毎回迷宮なり冒険者ギルドなりまで歩くつもりだったの
だろうか。

まあそんなものか。

あるいは、玄関脇に扉でも作ればいいのか。
家の外になるから、それもめんどくさいが。

俺がだらけすぎなのか。

移動魔法の味を一度知ってしまうと、歩いて移動するのは面倒だ。
家を借りたのだって、ベイル亭では冒険者ギルドまでいちいち歩
かなければならない、という理由が大きい。

自分の家なら誰にはばかることなくワープできる。非常に楽だ。

家からベイルの冒険者ギルドにワープした。

ベイルの町は夕方。

クーラタルの方が若干西にある感じだろうか。

一泊分の料金を払って部屋に入る。

ベッドに腰かけると、すぐにロクサーヌが横に座ってきた。

そうするようにと命令したからか。

ロクサーヌが隣に来て嬉しいが、なんか申し訳ない感じだ。

それに押し倒すのも駄目なのだ。

最初からやり直したい気分である。

しょうがないので、しばらく我慢する。

装備品を手入れし、食事を終えて再び部屋に上がってくるまで。

「じゃあ、身体拭くので、脱いで」

「いけません。ご主人様をお拭きするのが先です」

しかしここまで我慢したのに断られましたよ。

議論する暇も惜しいので、全部脱いで背中を拭いてもらう。

その後でたつぷり拭いた。
拭きたおした。
思うがまま拭き尽くした。

背中から前に手を回して、気高くも美しい霊峰を拭き清める。

丹念に。丁寧に。繊細に。

一平方ミクロンの拭き残しもないように。

一ピコグラムの垢も残さないように。

何回も。何度も。何度でも。

心ゆくまで。心飽くまで。

満足である。

まあ直後にはもっと満足したわけだが。

翌朝、暗いうちはベイルの迷宮に入り、朝食の後、引越した。
宿屋の部屋と家をワープでつなぎ、メイド服の入ったケースと荷物を詰めたロクサーヌのリュックサックを家に置いてくる。

体を半分出し、一度のワープで荷物だけを移動させる作戦だ。

ケースも手荷物扱いでよかつたらしく、無事成功した。

ベイル亭を引き払い、居を移す。

クーラタルの町で、ベッド、机とイス、戸棚、クローゼットといった最低限の家具と、調理器具、掃除用具、日用品などで必要なものを買いそろえた。

家具は店の人が荷車で家まで運んでくれるらしい。

家具はすべて中古品だが、ベッドのマットレスは新品に換えてく

れるらしいので、かまわないだろう。

中心街の端にある冒険者ギルドと新居を何度もワープで往復する。それだけで一日仕事だ。

ちなみに、絨毯は高級品で、クーラタルでは売っていなかった。行商人から手に入れるか、帝都に行かなければないそうさだ。

「それでは水を汲みにいってきますね」

水がめを買って家に帰ってくると、それを持ってロクサーヌが告げる。

やっぱり分かっていなかったのか。

「水は魔法で作れるから問題ない」

「よろしいのですか。魔法を使うのはかなり大変だと聞きますが」

「ロクサーヌが手伝ってくれば大丈夫だ」

「えっと。何をすればよろしいでしょう」

デュランダルを出して、迷宮に飛んだ。

玄関も開けずに仕事場直行とか。まじ便利。

「じゃあ、魔物を探して」

朝からワープを繰り返したため、ちょっと気が重い。

MPの使いすぎだろう。

「はい。それでは、装備品を貸してもらえますか」

「一匹か二匹狩るだけだから」

「いけません。迷宮では何が起こるか分かりません。準備は怠りな

くやるべきです」

ロクサーヌに促され、皮の帽子と皮のグローブを着ける。
めんどくさい。

ロクサーヌがすぐに見つけたミノ二匹の団体をデュランダルで屠り、MPを回復した。

ロクサーヌ、まじ便利。

帰ってきてから、排水口のある二階の部屋に水がめを四つ並べ、その上にウォーターウォールを作る。

一回の魔法で、満杯とはいかなくても半分以上は水が溜まった。効率はあまりよくないが、しょうがないだろう。

昼過ぎに家具が届き、少しは住居らしくなった。

一応人の住める場所になっただろうか。

二階の一部屋を寝室と定め、ロクサーヌと二人でベッドを運ぶ。クローゼットは他の部屋に置いたので、ひどく殺風景だ。

壁紙もない広い部屋の真ん中に、ベッドだけが一つ置かれている。ロクサーヌがシートと布団カバーを用意し、ベッドの横にマットを敷いて、多少は寝室らしくなっただろうか。

「やはり最初になすべきことは、ベッドの使用感を確かめることだ
と思うのだが、どうか」

ロクサーヌを軽く抱き寄せ訊いてみる。

「え？ は、はい……んっ」

肯定と受け取って、唇をふさいだ。
そつと舌を差し入れても受け入れてくれたので、勘違いではない
だろう。

ベッドに寝かせて、使用感を確かめる。

もちろんベッドの使用感は最高でした。
何の使用感だか、分かったものではない。

その後、二人で夕食を作った。
時間もないので、クーラタルの迷宮には行っていない。
話だけを聞く。

クーラタルの迷宮は、もっとも古くから存在しており、どこまで
の大きさがあるのか、最上階のボスを倒した人はいないので、知ら
れていない。

一般に、迷宮は五十階層の大きさになると、入り口を出して人を
誘うようになるそうだ。

その後も、人を消化しながら、ゆつくりと成長していく。

クーラタルの迷宮の最高到達記録は九十一階層。

それも初代皇帝パーティーが成し遂げたという伝説的記録であり、
現状では八十階層台まで行ければ十分に一流と認められるらしい。

迷宮のどの階層にどの魔物が出るかは、ある程度の決まりはある
ものの、迷宮ごとに異なる。

クーラタルの迷宮は、一階層がコボルト、二階層がナイーブオリ
ーブ、三階層がスパイスパイダー。

コボルトは弱くて初心者向きなので、クーラタル迷宮の一階層は
新しく迷宮に入ろうとする者の見学先として人気があるらしい。

以上、ロクサーヌが料理を作りながら教えてくれた。

ロクサーヌは寸胴鍋で野菜シチューを作り、俺は中華鍋で肉を炒める。

味は、食べられないほどではなかった、とだけ。

野菜シチューなんかはもっと煮込めばよいのだろうが、ガスコンロでなく柴木を使うこのキッチンで長時間煮込むのは現実的でないだろう。

誰かが火の前についてずっと見張っていなければならぬし、それでは迷宮に入れない。

つまり、俺の肉炒めがもっとがんばらないといけなかったということだ。

初日なのでしょうがないといえばしょうがない。

調味料や香辛料もいろいろと探してみるべきだろう。

この世界ではおそらく、美食は一日中料理だけをしていればいいコックを雇えるような富裕階層の特権だ。

化学調味料も固形ダシも粉末のスープの素もないのだし。

夕食後にお湯を沸かしたところで日没。

薄暗い中、ロクサーヌの身体を拭いた。

「蠟燭が一本あるが」

「燭台がありません」

蠟燭、燭台、蠟燭消しはセットで必要なものらしい。知らなかった。

確かに、ケーキにローソクを立てるようなわけにはいかないよな。

「今日買ってあげばよかった」

「すみません。蝋燭は安いものではないので、必要ないかと思いましたが」

まあロクサーヌの胸の弾力は視覚に頼らずとも楽しめる。

手のひらに与えるどっしりとした重量感。

収まりきれずにこぼれだしそうな躍動感。

柔らかく、なめらかで、拭こうとした手を押し返してくる弾力もある。

むしろ視界に頼らない分、神経を手のひらに集中させることができた。

明かりがないので恥ずかしくもないだろうから、前の方も拭かせてもらおう。

昼間にベッドの使い心地を試しているが、関係ない。

夜は別腹だ。

地図

ロクサーヌに抱きついたまま目覚めるのは気持ちがいい。
まどろみながらロクサーヌの抱き心地を味わうのも快い。

「ん……」

そして目覚めたとき、ロクサーヌからキスをしてくれるのは最高の気分だ。

ロクサーヌの口づけは、柔らかく、甘い。

舌をうごめかせながら、徐々に頭を起動させる。

ひとしきりロクサーヌの口を吸った後、ゆっくりと唇を放した。

「おはようございます、ご主人様」

「おはよう、ロクサーヌ」

目を開けるが真っ暗だ。

装備品も含め、着るものは全部ベッド横のマットの上に置いてある。

生活の知恵らしい。

暗い中、感覚だけを頼りに全部着けた。

迷宮に行くのをおろそかにするわけにもいかないし、他にやることもない。

いや。やることはあるのだがあまりそういうわけにも。

一日だけなら、ちょっとだけならと思わなくもないが、どこかで

歯止めは必要だ。

今の俺なら誰はばかることなく二十四時間ロクサー又とベッドの中ですごすことができる。

淫靡で自堕落な生活には憧れるが、ブレーキが効かなくなるだろう。

せめてもう一度キスを。

ワープで移動する前に、ロクサー又を抱き寄せた。

ロクサー又の舌を絡め取り、吸い込む。

「んん……」

ロクサー又が軽くうめくが、拒否するような様子はない。

唇で甘噛みするようにロクサー又の舌を圧迫すると、ロクサー又は俺の口の中で舌をちるちるとうごめかせた。

ベイルの迷宮から帰って食事をしながら、ロクサー又と会話する。

「このおひたしはなかなか旨いな」

「ありがとうございます。ハムエッグもとても美味しいです」

朝食は、買ってきたパンと、ロクサー又が作った何かの葉野菜のおひたしと、俺が作ったハムエッグ。

おひたしは塩茹でして酢であえたもの、ハムエッグは焼いただけという、極めてシンプルな料理だ。

シンプルな分、味は悪くない。悪くなりようがないところか。

煮込んでブイヨンを探ったりするのは難しいのだから、こういう料理にすべきなのだろう。

「パンはこつちにして正解だったな」

昨日の夕食の一個二ナールのパンはパサパサしてあまり美味しくなかった。

ケチつても駄目ということだ。

迷宮帰りに買った今日のパンは一個八ナール。それをロクサーヌと半分ずつ食べる。

「ですが、私も同じものをいただいてよろしいのでしょうか」

「迷宮に入ってもらつ以上、体が資本だからな」

「ありがとうございます。がんばります」

卵は一個五ナールを一人二つ、ハムは、百ナールの燻製肉の塊から切り出したから、一人分十五ナールと考えて、全部で一人前三十ナールくらいか。

おひたしの葉野菜は、昨日の野菜シチューに使ったものとあわせて、一山数ナールだ。

この世界では結構豪華な部類に入る食事だと思う。

ハムだって、切つて焼いただけでこれだけ旨いものだから、塩も香辛料も効いた高級品だろう。

量も多めだ。

一日二食のこちらの生活にも慣れてきた。

朝食は日が昇ってから、夕食は日が沈む前に。

時間があくので、朝食前は結構腹が減る。

食事に関しては、妥協するつもりはない。

江戸時代の日本人と現代の日本人とでは平均身長が二十センチく

らい違うという。

DNAに違いはないのだから、栄養がいかに大切か分かるうというものだ。

一日二食だし、甘いものはそれほどないし、迷宮にも入っているのだから、太ることはそれほど考えなくていいだろう。

「今日はクーラタルの迷宮に行ってみたいと思う」

食事をしながら、予定についても話す。

「かしこまりました」

「後は、部屋が殺風景なのをなんとかしたいが」

なにしろ家具がいくつか置いてあるだけだ。

「絨毯を飾ればよいと思います」

「絨毯を、飾る？」

「はい」

「敷くんじゃなくて？」

「はい」

ロクサー又によれば、絨毯を敷くのは金持ちだけらしい。

普通の家では絨毯は壁掛けとして使うそうだ。

文化の違いか。

まあ壁紙がない世界だから、いい装飾品なのだろう。

「絨毯となると帝都か。ロクサー又は帝都に行ったことある？」

「残念ながらありません。私は家の掃除をしたいので、その間に行かれてはどうでしょうか」

「じゃあ、午前中はちょっと帝都に行ってみるか。クーラタルの迷

宮は午後からで

「かしこまりました」

クーラタルの迷宮にワープするにはどうせ一度は俺が中に入らなければならぬ。

帝都の帰りがけに寄ればいいたろう。

朝食の後、家から帝都の冒険者ギルドにワープした。

帝都をぶらついて、どこにどんな店があるか確認する。

帝都は広く、あちこちに様々な店があった。

クーラタルにある店は、ほとんど探索者相手なので、店の数も商品の種類も多くはない。

装備品や、ドロップアイテムの買い付けも兼ねた食材屋などが中心だ。

多くの店や商品が集まるのはやはり帝都らしい。

絨毯屋、服屋、調味料屋などを見つけ、場所を覚える。

見るだけで買いはしなかった。

買うときにはロクサーヌを連れてきた方がいいだろう。

それに、場所柄なのかたまたまなのか、高そうな店しかない。

服屋なんかも、クーラタルにあるのを田舎の洋品屋とすれば帝都にあったのは銀座の高級ブティックだといつくらいに違いがある。

見るからに高そうだ。

一階なのに段差があつて何段か上がるようになっていいるし、入り口にはマットが敷いてあるし、中は広々としているし。

奥には生地が置いてある。

オートクチュールってやつだろう。

帝都だからなのか、冒険者ギルドのある一角が特別に高級店ぞろいなのかは知らない。

おかげで高級品の絨毯を売っている店が見つかったのだからよしとしよう。

昨日あれこれ買いそろえたので残金も心もとない。

金貨は二枚残っているが、銀貨は残り百枚を切った。

帝都からの帰りがけ、その少ない銀貨の中から入場料一枚を払おうと騎士団詰め所に並ぶ。

「迷宮攻略地図もいかがですかー」

騎士団詰め所ではクーラルタル迷宮の攻略地図も売っていた。

商売っ気の多い騎士団だ。

台の上に、茶色い粗末な紙が並んでいる。

紙には簡単な矢印が書いてあって、地図になっているようだ。

「階層別の攻略地図は一枚二十ナール、全階層がそろった冊子は一冊千ナール、羊皮紙の謹製本は二万ナールになります」

とりあえず分かることは、二万ナールは高い。

地図を一枚一枚買いそろえるよりは冊子を買った方が安いだろう。

九十一階層は攻略できていないはずだから、全階層という冊子が九十ページなのか九十一ページあるのかは知らない。

しかし、どうにもペラッペラの小汚い紙だ。

それほど時間が経たないうちにボロボロになるのではないだろうか。

冊子で買っても無駄になる可能性がある。
一枚一枚買うべきか、冊子を買うべきか。

「この冊子もくれ」

冊子にすることにして、差し出した。

一階層から順に地図を買っていくと、こちらの攻略状況をかんぐられる可能性もある。

地図だけ買って迷宮に入らないのも、変に思われるだろうし。

きちんと保管しておけばすぐ駄目になることもないと期待しよう。

「ええっと……。全部で銀貨十一枚になります」

騎士が悩みながら伝えてくる。

三割引は効かないようだ。

騎士なのに売り子までさせられて、大変ではあるのだろう。

入場料とあわせて銀貨十一枚を払った。迷宮の入り口に向かう。

迷宮入り口には案内の探索者もいた。

クーラタルの迷宮の案内をする探索者は、初代皇帝の偉業を今に伝える者なので、格が高いらしい。

今は九十階層を突破できるパーティーはないが、行くだけならば九十一階層にも行ける。

案内をする探索者が代々伝えてきたからだ。

この探索者に金を払って三階層か四階層に飛んでもいいが、将来何かのときに必要になることがないとも限らないから、一階層から入る。

前のパーティーに続いて、迷宮に入った。

中はベイルの町近くの迷宮と変わりが無い。
殺風景の見慣れた洞窟だ。

違いは、クーラタルの迷宮には人が多いということだ。
結構そこかしこに人がいる。

こんなんで狩になるのだろうか。

先の方に進んでも、人影が途絶えることはなかった。

なるべく人の少ないところで、ワープと念じ家に帰る。

探索者がダンジョンウォークを使うことは何もおかしくないので、
無詠唱がばれなければ問題ない。

「ただいま、ロクサーヌ」

「お帰りなさいませ、ご主人様」

家に帰った俺をロクサーヌが迎えた。

拭き掃除の手を休めて、頭を下げる。

これでメイド服だったら完璧だったのに。

まあかなり高価な衣装だったので、実作業をするときに着ないの
はしょうがない。

「そういう挨拶って、ベイルの商館で習ったのか」

ロクサーヌの立ち居振る舞いは堂に入ったものだ。

誰にも教えられずに身につけたということはないだろう。

奴隷商人の下にいた時代のこと、少なくとも愉快な思い出では
ないだろうから、あまり思い起こさせたくはないが。

今回はあえて訊いてみた。

次の奴隷を買うときにも必要な情報だろうから。

「はい、そうです。おかしいでしょうか」

「いや。すばらしい」

やはり奴隷商人のところで覚えたらしい。

近くに寄って、イヌミミをなでる。

「はい。ありがとうございます」

「クーラタルの迷宮にちよっと行ってきた。あそこは人でいっぱいだな」

すぐに話題を変えた。

「クーラタルの迷宮は、攻略地図が誰でも簡単に手に入り、人が多いので魔物が大量に湧く小部屋に遭遇する危険があまりありません。倒される魔物も人も多いので魔結晶や宝箱が多く出ます。お金を払っても、それ以上の恩恵があるとされています」

「倒される魔物が多いと魔結晶が多いのは分かるが、宝箱はなんでだ」

魔結晶は魔物を形作っていた魔力が集まってできる。

人が多くいてたくさん魔物が倒されれば、魔結晶も多くできるのだろう。

「魔物に倒された人が着けていた装備やアイテムボックスの中身が宝箱の実体だといわれています」

うーん。なんかひどい話のような。

身もふたもない。

人が多ければ倒される人も多い。

だから宝箱がたくさん出る。

その宝箱を目当てにますます人が集まる、ということか。

「しかしあれだけ人がいて、狩になるのか」

「クーラタルの迷宮は相当に広いので、奥へ行けば人も少なくなりますが。それに、一階層は初心者が多いので、周りに人がいた方が安全なのです」

「それもそうか」

「上に行けば、人はだんだん減っていくはずです。あるいは、人の少ない夜中に探索するという手もあります」

惑星の裏側から飛んできたりしたら、向こうは昼間だが。

さすがにそんな遠くからは来ないのか。

フィールドウォークで飛べる距離にも限界があるかもしれない。

「じゃあクーラタルの迷宮に行くのは明日の朝にして、今日はベイルの迷宮に行くか」

「かしこまりました」

その後、掃除などで使った水を補給して、ベイルの迷宮に行った。帰ってから魔法で水を作るが、まだ足りない。

夕食用、トイレ用、寝る前の湯浴み用と、必要な水は多い。

「悪い。ちょっと手伝って」

MPをかなり消費したので、ベイルの迷宮の四階層に飛ぶ。

ロクサーヌの案内にしたがって進むと、ミノ二匹、グリーンキャタピラー一匹の団体がいた。

糸を吐かれると厄介なので、まずグリーンキャタピラーから片づける。

ミノ二匹はロクサーヌが相手をして。

と思ったら、うち一匹が俺を狙っていた。

ツノが振られる。

あわてて避けたが、かわしきれなかった。

デュランダルを握っていた左手人差し指が、ツノとデュランダルの間にはさまってしまう。

いってええええ。

思わず涙が出るくらい痛い。

打ちどころが悪かった。

ジンジン響いてくる。

報復のため、ミノ二匹を思いっきり斬りつけた。

八つ当たりだ。

分かっている。油断した俺が悪かった。

少し狩るだけだからと、皮のグローブもはめていない。

ロクサーヌには皮のミントを渡したが、自分に着けるのはさぼっていた。

魔結晶もアイテムボックスに入れたままだ。

これはしょうがない。

デュランダルを出すときには、結晶化促進と獲得経験値のスキルから削っている。

必要経験値は、どういう風に働くのか仕様が分からないので、な

るべくいじらないようにしていた。

例えば、魔物を二十匹倒してレベルが一上がるとしよう。必要経験値十分の一をつければ、魔物二匹でレベルが上がる計算だ。

では、必要経験値のスキルをつけずに一匹倒し、必要経験値十分の一をつけてもう一匹倒したとき、どうなるだろうか。

逆に、必要経験値十分の一をつけて一匹倒し、必要経験値のスキルをつけずに十匹倒したら、レベルは上がるのだろうか。

ある程度の感触は得ているが、厳密に検証しようとするは大変だ。二階層より上では魔物の種類と数を完全にそろえることはできないし、一匹の魔物の経験値がすべて同じとも限らない。

検証するときにデュランダルをつけたりはずしたりはできないから、武器六をつけたままでの検証になる。

それでは必要経験値や獲得経験値のスキルに多くのボーナスポイントを回すことができない。

下手をすれば魔物を何十何百と狩ることになるだろう。

そこまでして検証するメリットがあるだろうか。

魔物を二十匹倒してレベルが一上がるときに、必要経験値のスキルをつけずに一匹倒し、必要経験値十分の一をつけてもう一匹倒しても、多分レベルは上がらない。

それが分かればとりあえず十分ではないだろうか。

後は、無駄になる可能性を考えて、必要経験値のスキルをなるべく動かさないようにすれば、それでいいだろう。

迷宮から家に帰ってきた。

指がまだ痛い、ような気がする。

慣れのせい、隙があった。侮っていた。

やはり迷宮は恐ろしいところだと、いい教訓になったろう。

人差し指をしてみるが、一応、何ともないようだ。

あの痛みから察するに内出血ぐらいはしていたかもしれないが、デュランダルのHP吸収で治ったのだろう。

「どうかしましたか」

指を見つめる俺に、ロクサーヌが訊いてきた。

「ちよっとかすってしまった」

「大丈夫ですか」

割と心配そうだ。

ロクサーヌの忠告を無視して皮のグローブをつけなかった俺が悪いのに。

「大丈夫ではないな。ちよっとなめてもらえるか」

そんなロクサーヌの眼前に、人差し指を差し出す。

「え……あ、あの……」

ロクサーヌは戸惑ったようだが、特に拒否するでもない。いけそうだ。

そう判断して、指を口元に近づけた。

ロクサーヌが唇を開く。

淡い薄紅色の唇がゆつくりと隙間を広げた。
深紅の中身がさらされる。
真っ赤な舌が艶かしい。

ロクサーヌが指に顔を近づけ、唇を閉じた。
人差し指がふわりとした感触に包まれる。
しっとりとして温かく、そして柔らかだ。
肉厚の舌が優しく絡みつき、俺の指を包み込んだ。

ロクサーヌが瞳を閉じ、俺の指をしゃぶる。
ロクサーヌの栗色の睫毛は、狼人族のせいかわ、量が多く、長い。
妖艶というほどではないが、華麗だ。
しつかりと化粧をした大人の女性という趣があった。

俺は指を動かさず、ロクサーヌのするがままにまかせる。
人差し指の周りをロクサーヌの舌が何度か往復した。
優しく絡みつくようにこすられる。

穏やかで慈愛に満ちた口の中で、人差し指が癒された。
再び薄紅の唇が開かれ、深紅の口の中が見える。
指と口蓋の間に白い糸ができるが、舌が動き、なめとった。
ロクサーヌの顔がゆつくり離れていく。

追撃したくなるのをかろうじてこらえた。
これは追撃したくなる。
ロクサーヌ、あんななんちゅうことを。

「う、うむ。完璧なまでに痛みが引いた。ありがとう」
「はい……」

ロクサーヌが恥ずかしげに顔を背けた。

「これは何かのスキルか」

「いいえ。違います」

「それにしてもすごいな。治癒魔法レベルだ」

「そんなことはないと思います」

「いや、絶対にすごい。これからも何かあったら、頼む」

「……あ、あの……はい」

褒めちぎり、最後にはまたやってもらうことを認めさせる。

すごいことをしてもらった。

油断して痛い目にあってしまったが、これでプラマイゼロ、むしろ差し引きプラス、怪我の功名だ。

地図（後書き）

舌でなめて傷を治すスキルは、『はいばーわんこすとーりー』作者の aketi さんからいただきました。

ロクサー又はそんなスキルを持っていません。

クーラタルの迷宮

翌朝、クーラタルの迷宮に入った。

暗い中装備を整え、一階層入り口の小部屋にワープする。

空いていると期待した割にはすぐ見える場所に人がいたが、入り口の小部屋はダンジョンウォークでも移動できるので問題はない。

「ええつと。まっすぐ前みたいですね」

ロクサーヌにも見せ、攻略地図を確認した。

地図は、階層全域が載っているわけではなく、二階層へ通じる壁への順路を示しただけの簡略な攻略図だ。

それ以外の情報があるわけでもなく、しかも紙質も悪い。

「しかし大丈夫かね、これは」

「パピルスですね」

「パピルス？」

「はい」

おおつ。これがパピルスなのか。歴史の授業で習った。

茶色でこわこわした薄っぺらい紙。いや紙もどきか。

いかにもすぐに破れそうだ。

初めて見た。

片面にしか書いてないのは、裏も使うと破れそうだからか。

あるいは、ばらで売っている地図を九十枚まとめただけだからなのか。

昨夜のうちに紐で閉じられているだけの冊子を解き、一階層から三階層までの地図をリュックサックに入れておいた。

全階層の攻略地図があるという冊子は九十階層まで九十枚。階層を示すだろ数字が書いてある。

一から三までの数字はベイル亭で覚えた。

「結構人がいるな」

「一階層だと特に、時間をずらして入るパーティーもいるみたいで
す」

「ふうん」

「それに、お金を払うので、無理して長時間こもる人も多いそう
す」

早朝だというのに、結構人は多い。

昨日の昼よりは少ないという程度だ。

というか、前のパーティーも地図を見ているらしく、常に二、三
十メートルほど前を進んでいた。

地図いらなかったじゃん。

地図どおりに進み、ボス部屋に到着する。

ベイルの町の迷宮の軽く三倍以上は歩いた。

やはりクーラタルの迷宮は広いようだ。

人には会ったが、魔物には遭っていない。

ボス部屋横の待機部屋にも何組かパーティーがいた。

多少待って、順番が巡ってくる。

一階層ボスのコボルトケンプファー戦は、正面をロクサーヌが受け持ってくれたので、非常に楽だった。

ロクサーヌが敵の攻撃をかわしている間に後ろからデュランダルで体力を削るだけの簡単なお仕事です。

二階層は一転してまったく人がいない。
何度も魔物と遭遇した。

ただ、いつ人に見られるか不安なので、魔法は使わずに全部デュランダルで倒す。

ボス戦はやはりロクサーヌと前後から挟撃して。

デュランダルで体力を削るだけの簡単なお仕事です。

「三階層って二階層より人多くない？」

「そうですね。二階層の半分はコボルトなので」

「あー。なるほど」

二階層の魔物と戦えるくらい力をつけたなら、もうコボルトはおいしくないということだろう。

それで二階層には人がいなかったのか。

「コボルトは弱くて初心者向きの魔物なので、コボルトが出てくるクーラルの迷宮の一階層には人が集まります。しかし、二階層の魔物も半分はコボルトになってしまつので、二階層には人気がありません。三階層になるとコボルトも減るので、人が増えます」

三階層は一階層ほどではないが何度か人に出会った。

デュランダルを使っているところもできれば見られたくないが、しょうがない。

ボス戦は、やはり正面はロクサーヌが担当するので後ろからデュランダルで叩くだけの。

三階層のボス、スパイススパイダーはペッパーを残した。

「おお。胡椒だ、胡椒。確か金と同じ重量で取り引きされるといふ」

「まさか。そんなに高くはありません」

勝手な思い込みだったらしい。

考えてみれば肉料理に結構使われていた。

特殊なレアアイテムというわけではなく、スパイススパイダーを倒せばいつでも手に入るのだろう。

ぬか喜びか。

四階層に移動する。

「混み具合はどうだ」

「そうですね。三階層よりさらに少なくなっています。奥の方まで行けば、誰にも見られずに狩ができるでしょう」

「では、奥まで行くか」

攻略地図も持ってきていないし、今四階層をクリアするつもりはない。

クーラタルの迷宮には攻略地図があるからほとんど上の階層に行けばいいようにも思えるが、そういうわけにはいかない。

必ずどこかで壁にぶち当たる。

今のレベルではとても攻略できない階層、倒せないボスがいるはずだ。

それがどこかが分からない。

もっと上の階層かもしれないし、五階層のボスかもしれない。

ほいほいと進んでいけば必ず危険なことになる。

だから、ベイルの迷宮の探索を自力で進め、クーラタルの迷宮の進行状況はそれにあわせることにしていた。

ロクサーヌがもう人がいないというところまで進み、小部屋を見

つけて、朝の探索を終了する。
家に帰り、朝食を作った。

今日俺が作るのはシエーマ焼きだ。
シエーマというのは、香味野菜っぱい何かの葉っぱ。
これで肉を巻いて焼くらしい。

肉を包丁代わりのジャックナイフで叩いて下ごしらえをする。
コボルトソルトとペッパーをミルで砕いたもので塩コショウし、
シエーマで巻く。

中華鍋にオリーブオイルをひいて、焼く。

オリーブオイルはクーラタル迷宮の二階層に出てきた植物魔物ナ
イブオリーブのドロップ品だ。

コボルトソルトはコボルトの、ペッパーは三階層ボスの落とし物で
ある。

味の方もまずまずだった。
シエーマの味はピリ辛系。葉唐辛子みたいな感じか。
ここまでできればとりあえず上出来だろう。

朝食の後、クーラタルの街中にある服屋へ行く。
俺もロクサーヌもほとんど一張羅だから、いつまでもこのままと
いうわけにはいかないだろう。

俺にはジャージが、ロクサーヌにはメイド服もあるが。
帝都にある高級ブティックは、ロクサーヌにはともかく俺には必
要ない。

「上下二着ずつくらい買っておくか？」

「ここは新品の服を売っている店だと思いますが、よろしいのですか」

店の入り口でロクサーヌが訊いてきた。

俺の外套が中古品みたいなのだが、中古品というのは、現代日本人としてはどうもあまりぴんとこない。

ジーンズのヴィンテージとかなら逆に高そうだ。

「別にいいんじゃないか」

「奴隷には中古の服を着せるのが一般的だと思います」

なるほど。貴族 庶民 奴隷という流れなのか。

金持ちや貴族が新品を買って、数回着て中古に売る。庶民がそれを買って、着たおして、また売る。それを奴隷が、と流れていくのだろう。

「かまわないだろう。好きなのを選べ」

背中を押して、ロクサーヌを店に入れた。

服の上下といっても、あまり種類はない。

上はだぼだぼのチュニックかシャツ、下もやはりだぼだぼのズボンがほとんどだ。

ちなみに、チュニックというのは頭からかぶるタイプ、シャツは前開きで袖を通して着るタイプのものを、俺が勝手にそう呼んでいる。

村人の女性は裾の長いスカートをはいたりもするが、迷宮に入るような女性はみんなズボンをはいていた。

そんな少ない種類の服を、ロクサーヌが丹念に選んでいく。

ロクサーヌの分だけでなく、俺の服も一着一着細かく見ていった。ときおり俺の体に服を合わせ、「これはどうでしょう」「とか」「これは色が」とか駄目出ししている。

服を買って店を出たとき、日は頭上を過ぎていた。

借りた家は、町の中心から見ると東側にある。

半日くらいはかかるかもしれないと覚悟していたら、本当に半日以上かかってしまった。

「ありがとうございます、ご主人様」

「俺の服も選んでもらって、ありがとうございます」

まあロクサーヌのこの笑顔が見られただけでよしとしよう。

服代は全部で千五十ナール。特に高いということもないだろう。

「服を買ったので洗うために大きめの桶がほしいのですが、よろしいですか」

帰りがけ、途中にある木製品を扱う雑貨屋をロクサーヌが指差した。

一つものが増えると、付随して必要なものが増えてしまうようだ。

「いいだろう」

店に入ると、入り口横に桶やたらいが並んでいる。

ロクサーヌが大きめの桶を選んで俺に渡した。

「らっしゃい」

「たらいというのは、これが最大か？」

出てきた職人に、直径が一メートル弱くらいある店頭で一番大きなたらいを示して訊いてみる。

この雑貨屋は、店といつても奥で職人が木を加工している工房だ。ここなら、アレが手に入るかもしれない。

「特注で作ることもできるぜ」

「頼む人もいるのか？」

「おうともよ。大きな布を何人かで手分けして洗う場合なんかに使われることがある」

「できるのか」

何がほしいのかというと、バスタブだ。

せつかく家を借りたのだから、次は風呂場をなんとかしたい。

この世界では一部の金持ちを除いて風呂に入る習慣はないらしい。水を運んで火をたいて、となるとコストもかかる。

春なのでまだ分らないが暑くもなく湿つてもいないので、気候的にもどうしてもということはないのだろう。

俺だって、日本にいたときにはほとんどシャワーだったし、どうしてもというほどではない。

たまには入りたい、という程度だ。

しかし、今の俺なら事情が異なる。

今俺が風呂に入るとすると、ロクサー又がついてくる。

俺が風呂に入るということはロクサー又も一緒に入るということだ。

ロクサー又も入るのだから、風呂に入りたい。

というか、ロクサーヌと一緒に入りたい。

ロクサーヌと一緒に湯船につかって、ロクサーヌに洗ってもらおうじゅるり。

これはもう風呂を作るしかないわけだ。

なんとしても、風呂は作らなければならない。

絶対に作らなければならない。

いらないうつのか？

よろしい、ならば戦争だ。^{クリック}

しかしどうやって作るのか。

それが問題だった。

家具屋でもクーラタルの他の店でも湯船は見たことがない。

家の内装は勝手にいじっていいと世話役のおばちゃんから言われているので、業者に頼むという手もあるが、ごまかすのが大変だ。

俺は水も火も魔法で用意できるが、それを明かすことはやめた方がいい。

水を井戸や川から持ってくる、柴で湯を沸かす、となれば、本来なら相当なコストになるだろう。

風呂好きの趣味人ということで、納得してもらえるものだろうか。

業者に頼むとしても、ボイラーは必要ない。

ファイヤーボールで水を温められることはすでに検証済みだ。

必要のないものを作ってもらうことはないが、どうやっていらな
いと断るのか。

湯船はDIYで素人にも作れるものなんだろうか。

などと考えていたのだが、たらい職人が作ってくれらしい。案ずるより産むがやすしだ。

「実績もあるので、間違いのないものを作れると思うぜ」

「そうなのか」

「どの程度の大きさのものがいるんだ」

「人の高さよりも少し大きいくらいのもものがほしいが、可能か」

葛飾北斎の絵に描いてあったようなやつ。

「大丈夫だ。深さは普通サイズでいいか」

「そうだな。これくらいでいい」

置いてあるたらいの中で一番深いサイズのもの指差す。

せつかく他の需要もあるというのに、変なものを頼んでは目的が疑われてしまう。

深さは五十センチをちょっと切るくらいだろうか。

底の厚みがあるから、実際にはもう少し浅いか。

目的はただ風呂に入ることではなく、ロクサーヌと一緒に入ることだ。

それなりの大きさがなければいけない。

ただし、広い分、浅くてもいいだろう。

深い風呂は心臓によくないというし。

「うむ。……そうだな、二十ナールほどかかるが、いいか」

職人がしばらく考えてから値段を提示した。

思ったより断然安い。

まあ、他のたらいは、二十ナールとか、いっても百ナールもしな

いような値段なのだから、それに比べればずっと高いが。

「頼む」

「受注生産になるので、五日ほどもらうぜ。できあがったら、連絡に使いをやる。都合のいい日にこっちから届けよう」

送料はジャパネットが負担してくれるようだ。

ちなみに、この世界の都市にはちゃんと住所がある。

クーラタルの六区、七丁目、百二十三番地が借りている家の住所だ。

「分かった。これももらおう」

「ありがとよ。そっちは五十ナールだ」

ロクサーヌが選んだ洗濯桶を見せる。

職人はジョブ村人なので、三割引は効かなかった。

「大きなたらいを、何に使うのですか」

「まあ楽しみにしている」

服をロクサーヌに持たせていたので、桶は俺が持って家に帰る。

家に帰り、買ってきたばかりの服に着替えた。

「服は洗濯します」

「そうだな。だいぶ時間も使ったので、今日は迷宮に入るのは休みにしよう」

「かしこまりました。それでは、あいている時間に掃除も進めますね」

日の出前に迷宮に入ったのは別カウント。

洗濯用と掃除用と夕食用と湯浴み用に水を大量に作り出したのでMP回復のために二回迷宮に行ったのも、数のうちに入らないだろう。

洗濯桶でこれだと、湯船に水を張るのがちよつと心配だ。

「では夕食は俺が作るう。メニューはホワイトシチューだ」

「ホワイトシチュー、ですか？」

「食べたことないか」

「ありません」

「まあ楽しみにしている」

ホワイトシチューなら、この世界の食材でも作れるはずだ。

まず、寸胴鍋の肉をワインと水で煮込む。

エキスを採るために三十分は煮込んだ。

この世界では、ワインと牛乳は持っていったビンに店に入れてもらう。

紙パックとかペットボトルとかないし。

次にロクサーヌが野菜シチューで使っていたような野菜を加え、弱火でさらに煮込む。

肉の臭みを取るにはネギがいいが、ネギは犬に毒だ。

ロクサーヌに訊いたところ、食べられない野菜はないと言っていた。

ロクサーヌが自分で使っていた野菜だから、問題ないだろう。

煮込んでいる間にホワイトルーを作る。

中華鍋にバターをひいて、小麦粉を炒めた。

そこに牛乳を入れ、とろみが出るまでよくかき混ぜながら弱火で煮る。

ホワイトルーフはきっちりとできた。

これでクリームコロッケやクラムチャウダーも作れるはずだ。
グラタンは、オーブンで焼くので難しい。

できたホワイトルーフと緑の色合いをそえる葉野菜を寸胴鍋に入れる。

最後に、味見をして、塩と胡椒で味を調えた。
成功だ。

ロクサーヌもおいしそうに食べてくれた。

「ご主人様、とっても美味しいです」

白いものを口の中に入れたまま言うんじゃないといたい。

宝箱

たらいの完成を待つ間、探索を進め、ベイルの迷宮でようやく四階層のボス部屋に到着した。

ロクサーヌがいると便利だが、探索は進めにくい。

魔物の出た方向が分かっても反対側なら来た道を戻ることになる。隠し扉の向こう側においては察知しにくいということなので、下手をすると同じところを行ったり来たりになってしまう。

探索を進めるか、狩を優先するか。

ベイルの迷宮と、人のいない早朝に入るようにしたクーラタルの迷宮とでもまた異なる。

クーラタルの迷宮は地図があるから、攻略する必要はない。

かといって同じ場所を何度うろついても魔結晶も宝箱も見つかるとはならないから、ある程度は動かなければならない。

ベイルの迷宮で四階層のボス部屋に到着したのは、少し時間が経って探索の進め方に慣れたところだ。

四階層のボスはハチノスLv4。ミノと同じような牛の魔物である。

正面はロクサーヌにまかせて、後ろからデュランダルで殴るだけの。

と想像していたら、蹴りが飛んできてびびったのは内緒だ。

お返しとばかりにめったやたらと斬りかかる。

右から袈裟がけ、左から袈裟がけ、右下から左上へと逆袈裟に斬り上げた。

真後ろへの攻撃手段も持った恐ろしい敵を打ち破り、五階層に移動する。

まずロクサーヌが見つけたのはミノレベル5だ。
デュランダルを一振りするが倒れない。

さすがのデュランダルも一撃で屠れるのは四階層までのようだ。
知力をアップするジョブが中心で英雄以外には腕力上昇の効果を持ったジョブをつけていないし、しょうがないだろう。
二振りです。

デュランダルをしまつて、次にロクサーヌが見つけたのがチープ
シープだった。

クーラタルの迷宮では四階層に出てくるこの魔物が、ベイルの迷宮だと五階層から出てくるらしい。

羊といっても結構凶暴そうで、不敵な面構えをしている。
ツノまである。

ファイヤーボールを放つが、懸念したとおり三発では倒せなかった。

これもまあしょうがない。

ロクサーヌが対応している間に横に動き、斜めからファイヤーボールを撃つてしとめる。

三匹出てきたときが大変だ。

一応、ロクサーヌにそう言えば三匹の団体を避けることはできるが、において数まで完璧に分かるわけではないので、完全に回避することは無理らしい。

逃げてばかりでいざというときに対応できなくても困るので、積極的に狙っていく。

基本的にはたくさん倒した方が稼げるのだし。

とはいえ、狙っているとなかなか出ないもので、団体でも二匹だったり、三匹いても一匹はコボルトLv5だったりということが続いた。

コボルトLv5は魔法二発で沈む。

ロクサーヌは宣言どおり、魔物二匹をまったく相手にしなかった。ミノの攻撃もチープシープの攻撃もかすりもしない。優雅に、軽々と、ほんの紙一重のところでもかわしていく。

「ロクサーヌの動きはすごすぎて、手本として参考にすべきなのか、まねなんかできっこないから参考にすべきではないのか、よく分かんない」

「私程度の動きなら、ご主人様にもできると思います」

自己認識もおかしいしな。

ロクサーヌの意見は参考にならないだろう。

ようやく出会った三匹の団体は、チープシープ一匹、ミノ一匹、グリーンキャタピラー一匹の組み合わせだった。

「ロクサーヌ、頼む」

まずファイヤーストームを三発お見舞いする。

三発めを放った直後、ミノが追いついてきた。

続いてチープシープとグリーンキャタピラーもやってくる。

ロクサーヌがミノにシミターを入れ、振られたツノを軽く避けた。かわしながら、さらに一撃。

俺も、左に来たチープシープのツノをワンドで受ける。

「来ます」

ロクサーヌの警告が飛んだ。

横にチラリと視線をやると、グリーンキャタピラーの胸下にオレンジ色の魔法陣ができていた。

糸を吐くつもりだ。

かまうことはない。

俺は動じずに四発めのファイヤーストームを念じた。

グリーンキャタピラーが倒れれば、糸も消える。

ロクサーヌが飛び退くのと、グリーンキャタピラーが糸を吐くのと、俺が念じた四発めのファイヤーストームが発動するのがほぼ同時だった。

火の粉が舞う中、白い糸が大きく広がり、周囲を覆いながら伸びる。

糸が俺に少しかかった。

ときを同じくして魔物三匹も倒れる。

魔物が煙となり、糸も空気に溶けるように消え去った。

「ふう。グリーンキャタピラーはこれがあるから厄介だな」

息を一つはく。かまえていたワンドを下ろした。

「そうですね。今回は二人を狙える位置に巧く回りこまれてしまいました」

ロクサー又は一メートルくらい後ろに下がっている。
糸はかからなかったようだ。
あれをかわすのか。

「糸を吐かれても避けられるか？」

「どうでしょうか。今回は途中で魔物が倒れて糸が消えたので。消えなければさらに移動するつもりではいましたが」

一メートルも飛び退いているのに、さらに動けるとか。

「さすがだな。まあ、糸を吐かれるのと同時に四発めの魔法を撃てるのなら、五階層はなんとかなるか」

「はい。三匹出てきてもご主人様が一匹相手にしてくださるのなら、私も楽に戦えます」

二匹を相手にしている時点で楽もないもんだ。

とはいえ、魔物三匹でもなんとかなる。

五階層でも戦えそうだ。

ベイルの迷宮は五階層でも無事戦えたので、クーラタルの迷宮も五階層に移動することにする。

翌朝、四階層の攻略地図を持って、ボス部屋まで進んだ。

ビーブシープ Lv4

これがクーラタルの迷宮四階層のボスらしい。
メエメエうるさいだけの普通の羊だ。

凶暴そうな顔つきには慣れた。

ツノがある正面はロクサーヌにまかせる。

攻撃を警戒しながら横に回り、背後からデュランダルで斬りつけた。

ビーブシープの足元にオレンジ色の魔法陣ができる。

もう一度デュランダルで叩き、中断させた。

「ビーブシープは何のスキルを持っている」

「分かりません」

ロクサーヌに訊くが、知らないらしい。

グリーンキヤタピラーみたいに糸を吐くわけではないだろう。

糸ならばファイヤーウォールで防ぐ手もあるが、どんなスキルか分からないのでは防ぎようもない。

詠唱中断のスキルがついているデュランダルで斬りつけるしかない。

もう一度デュランダルで攻撃したところで、今度は羊が前脚をかめた。

これは後脚で蹴りが来る。

ビーブシープが後ろを蹴ったところで、大きく飛び退いた。

馬鹿め。

後ろ足で蹴られるのはハチノスで経験済みだ。

ちゃんと見ていれば対応できる。

グリーンキヤタピラーの吐く糸から飛び退いたロクサーヌのように、一メートル以上は後ろに下がった。

追撃がこないかビーブシープの様子をしっかりとうかがう。

羊の足元にオレンジ色の魔法陣が浮かんだ。

やばい。

デュランダルを振り上げ、あわてて駆け寄る。

馬鹿は俺だった。

ビーブシープは最初からスキル発動の時間を稼ぐのが目的だったのだ。

こちらが大きく飛び退くよう、わざと力をためるところを見せたのだろう。

もの見事に引っかけってしまった。

デュランダルを振り下ろすが間に合わない。

今から念じたのではオーバーホエルミングも間に合わないだろう。

メエメエ啼いていた羊が、ビー、と警告音を発した。

……。

……。

……。

ぐおっ。

いきなり、ビーブシープに突き飛ばされた。

二歩、三歩とよろけ、なんとか踏ん張る。

何が起こった？

ロクサーヌも攻撃されたらしい。

おなかを押さえている。

瞬間移動？

あるいは無差別同時攻撃？

「どうなった」

次のビーブシープの頭突きは、なんとかデュランダルで受けた。ツノがあるのにあんな攻撃を繰り返されてはたまらない。

最初の攻撃は皮の鎧にクリーンヒットしたらしい。

それがかえってよかったのだろう。

当たりどころが悪ければ突き破られていた可能性もある。

「分かりません。私は突然攻撃を受けました」

デュランダルで羊の攻撃をいなし、隙を作る。

ビーブシープの攻撃の合間に、ロクサーヌの方を見て手当てと念じた。

俺はデュランダルで回復できるが、ロクサーヌはそうはいかない。レベルも低いので、ロクサーヌの回復が優先だろう。

「俺も突然攻撃を受けた」

「ご主人様はずっと動きませんでした」

「動かなかった？」

「はい。眠ったように」

なるほど。

ビーブシープのスキルは敵を眠らせるか気絶させる技なのだろう。

あの警告音とともに意識を失ってしまったのだ。

攻撃を入れられて、ようやく意識が戻る。

だから、突然攻撃されたように感じると。

「敵を眠らせるスキルか」

「確かに。そのようです」

あのスキルが出ると、最低でも一撃は必ず攻撃を喰らってしまう。そんなスキルを何度も出させるわけにはいかない。

俺はいつでもデュランダルで攻撃できるよう、魔物に張りついた。

ロクサーヌがどのくらいのダメージを負ったのか、俺には分からない。

そもそも、どれだけのダメージを喰らい、どの程度回復したのか、自分でさえ大体の感覚でしか分からない。

とりあえず三回も手当てをしておけばいいだろうか。

前後が入れ替わってしまったので横に回ろうとする。

羊もツノをこちらに向けたままついてきた。

俺の方がくみしやすいとばれてしまったか。

振られたツノを剣で受け、弾きざまに一撃入れる。

そこにまたツノが振られた。

あわてて腕を引き、攻撃をかわす。

ビーブシープが小さくかがみ、半歩下がったところに突進してきた。

大きくのけぞって、なんとかそらす。

さつきから後手後手に回っているような。

その間ロクサーヌも攻撃しているが、シミターでは大きなダメージは与えられないだろう。

羊が小さくかがんだ。
後ろに蹴りを飛ばす。

ロクサー又は真横に静かに動き、伸ばしてきた脚に攻撃を加えた。

敵の攻撃を避ける見本のような動きだ。

まったく体の軸を動かさず、ゆったりと平行移動している。

ぎりぎりのところでかわしているの、敵を射程外に逃すこともない。

大きく飛び退いて隙を作ってしまった俺とは対照的だ。

今の俺も、前に突進してくるかと警戒して攻撃できなかったというのに。

魔物がけん制するように小さく振ったツノを弾き、ようやく一撃入れる。

ビーブシープの頭が右に動いた。勢いをつけて振られる。

今の攻撃は読めた。

のけぞってツノをかわし、隙となった首元にデュランダルを叩きつける。

柔らかな首をデュランダルが切り裂いた。

ようやく魔物が倒れる。

アイテムを残し、煙となって消えた。

「ようやく倒れたか。身体は大丈夫か」

「はい。何度か回復していただいたので、もう平気です。ありがとうございます」

「少しでもダメージが残っていると思ったら、言え。体力の回復は第一に優先させるべきだ」

「分かりました。そうさせていただきます」

デュランダルを出したまま、五階層に移動する。
ロクサーヌの先導で奥に進んだ。

五階層は四階層よりも人が少ないが、それでも結構いるらしい。

カラーゲンコーラル L V 5

クーラタル迷宮五階層の魔物は、このカラーゲンコーラルのよう
だ。

丸っこい岩石型の魔物である。

下から一本足が生えており、ホッピングしながら迫ってきた。

デュランダルで斬りつける。

カラーゲンというので硬くないかと思っただが、表面はしっかりと
硬かった。

見た目どおりの岩石か。

いや、岩石ではなくて、珊瑚コーラルなのか。

一撃では倒れなかったので、もう一振りして倒す。

コーラルゼラチン

煙が消えてアイテムが残った。

残るアイテムの方は、しっかりカラーゲンらしい。

「ゼリーでも作るのか」

「ゼリー？」

「いや。なんでもない」

拾い上げて渡してきたロクサーヌに訊くが、違うようだ。

「コーラルゼラチンは接着剤です。お湯に溶かすと粘着力が出ます。絨毯を壁に貼るときにも使えます」

なにやら便利なアイテムらしい。

コラーゲンコーラルLv5も現状魔法三発では倒せなかった。

ゴロゴロと転がりこそしなかつたが、近寄ると飛びかかってくる。ロクサーヌが半身になってかわした。

かわされて着地したところに、四発めのファイヤーボールをぶち当てる。

「飛びかかるのか」

「そのようですね。飛び上がるタイミングが分からないので、一瞬ヒヤリとしました」

その割には華麗に避けていた。

ジャンプする前に脚を曲げて力をためる動物と違って、コラーゲンコーラルの足は曲がらない。

予備動作が分かりにくいのだろう。

「まあ慣れるしかないか」

「そうですね。よく見れば大丈夫だと思います」

俺なら大丈夫な気はしない。

コラーゲンコーラルの表面はでこぼこしている。

あれに当たったらちょっと痛いのではないだろうか。

それでもツノのあるチープシープよりは怖くないので、三匹の団体のときには積極的に俺が受け持った。

体当たり攻撃なので、俺でもなんとかワンドでいなせる。

避けるのではなくワンドで魔物の体当たりを受け流すので、コーゲンコーラルが飛び上がってから反応しても十分に間に合う。

基本的には一対一だし。

二匹を相手にしても余裕でかわし続ける狼人のことは気にしないことにしよう。

気にしたら負けかなと思っている。

そのロクサーヌの先導で進みながら、ときには袋小路にも寄ってみた。

こうして移動していかないと、魔結晶や宝箱が見つからない。

隠し扉が開き、その向こうに小部屋が現れる。

中に入った。

いつもの小部屋だが、真ん中が微妙に盛り上がっているようだ。

「ご主人様、宝箱です」

「宝箱？　これが？」

「はい、そうです」

これが宝箱か。

宝箱というよりも、床がせり上がったただのこぶだ。

そのこぶに、ロクサーヌがためらわずシミターを突き入れた。畏とかないんだろうか。

「大丈夫なのか」

「^{ミック}擬態だったとしても、倒すより他にありません」

力強い返事をありがとう。

せめてデュランダルを出しているときにしてほしかった。

シミターで床が切り裂かれる。

新聞紙のように大きくめくれた。

皮のグローブ 腕装備

中から、一個の籠手が出てくる。

何の変哲もないただの装備品だ。

なるほど。迷宮内で斃れた人が着けていた装備品が宝箱として出てくるというのは、本当のことらしい。

軽く黙祷して元の所有者の冥福を祈りつつ、俺は装備品を手にした。

風呂

クーラタルの迷宮五階層では、魔結晶も見つけた。
偶然に。

コラーゲンコーラル L V 5

コラーゲンコーラル L V 5

魔結晶

チープシープ L V 5

魔物が現れたときに鑑定をしたら、その中に入っていた。
一瞬四匹出てきたのかと思ってあせった。

まずは魔物にファイヤーストーム三発を喰らわせる。

コラーゲンコーラルの体当たり攻撃をワンドでいなし、四発めを
放ってけりをつけた。

「戻ったところ、すぐ近くにいます」

「いや。あそこに魔結晶がある」

来た道に戻ろうとするロクサーヌを抑えた。

前に進む。魔物を見つけた辺り。

岩肌のような洞窟のくぼみに隠れるように、黒魔結晶が半分埋ま

っていた。

「暗くて距離があつたのに見つけるなんて、ご主人様、さすがです」
「たまたま魔物を見つけた辺りにあつたからな」

「それでも、黒い魔結晶は光らないので見つけにくいのです」

なるほど。黒魔結晶は光らないのか。

これまでも見逃していた可能性はある。

そうそういつもいつも鑑定ばかりするわけにはいかないが、これからは折に触れて何もないとこでも鑑定していくようにしよう。

「他は光るのか」

「はい。ほんやりとですが」

最後は白魔結晶になるのだし、光るのだろう。
光る方が見つけやすいには違いない。

「黒魔結晶だと、売らずに取っておいて魔力をためるしかないか」
「えっと。魔結晶は融合できます」

ロクサーヌが黒魔結晶を取って、渡してきた。

「融合？」

「はい。二つの魔結晶を押しつけると、簡単に一つになります」

「そうなのか。融合で魔力が失われることはないな」

「大丈夫です」

予備の魔結晶も何個かは持っておきたいが、試しに使ってみても
かまわないだろう。

所詮は十ナールだし。

俺はリュックサックから緑魔結晶を取り出した。

右手の手のひらの上に置き、見つけた黒魔結晶を左手に持って重ねる。

さしたる抵抗もなく、黒魔結晶が緑魔結晶の中に沈んだ。手で押すとぐんぐん入っていく。

なんか気持ちいい。

硬くもなく、軟らかくて反応がないのでもない絶妙の抵抗感。

ダンボールに入っているプチプチを手でつぶしていく感じに似ている。

ちょっとくせになる。

「で、こうなるのか」

入りきると緑魔結晶が一つ残った。

見つけたのは黒魔結晶だから十四分未満の魔力しかなかったはずだ。

一万匹以上の魔力がある緑魔結晶の色を変えさせるほどの魔力はなかったのだろう。

結局、たらいができるまでにベイルの迷宮五階層の探索も終えた。ベイルの迷宮五階層のボスはすでに一度戦っているビーブシープだ。

その階層に現れる魔物とボスの組み合わせは、どの迷宮でも同じらしい。

ビーブシープにスキルを出させるわけにはいかない。

ぴったりと張りつき、詠唱中断の効果を持つデュランダルで常に

つけ狙う。

蹴ってきたときにも飛び退かずに剣で受けるようにしたので、隙は作らせなかった。

スキルさえ封じれば、後は正面をロクサーヌにまかせて、ひたすら背中から斬りつけるだけだ。

クーラタルの迷宮の方は、珊瑚魔物には前後の区別がないらしく、ちよつと苦労した。

それでも二人いれば攻撃してくる回数は半分になる。

デュランダルを振り回してなんとか勝利した。

「薬をお返ししますね」

ロクサーヌがリュックサックを下ろす。

何が起こるか分からないので、ボス戦の前にロクサーヌに薬を渡していた。

前回のボス戦から得た教訓だ。

俺が眠らされている間にロクサーヌが毒でも受けたら、大変なことになる。

普通の攻撃に追加効果があるだけなら、ロクサーヌの場合何事もなく避けるだろうが。

「六階層の魔物を見るまでは持っていた方がいいんじゃないか」

「大丈夫です。クーラタルの迷宮の六階層に出てくるのはミノのほ
ずです」

ベイルの迷宮の六階層の魔物も、クーラタルでは二階層の魔物だったナイーブオリーブだ。

すでに戦ったことのある魔物ならば比較的安心である。

Lv6の魔物も魔法四発で倒すことができたので、六階層での狩も問題ないだろう。

デュランダルや薬をしまい、六階層へと移動した。

木製品屋からの使いは、約束どおり五日で来た。

すぐに受け取れるというのと、一旦引き返し、荷馬車を引いて戻ってくる。

「でか」

そのまま外で待っていたので、荷馬車が遠くに見えたときに思わず口に出してしまった。

大きい。

荷台の上に円形の巨大なたらいが縦に置かれている。

荷台の高さが一メートル、たらいの大きさが二メートルとして、合計で三メートルもあるのだろうか。

馭者の頭の上からたらいが半分くらい突き出ている。

同じくらいの高さの家具もあるだろうから、実際は極端にでかいわけでもないのだろうが、所詮はたらいかと思うと異様に迫力がある。

荷馬車が近づき、受け取ってみてもやはり大きい。

本当に二メートルくらいある。

人の高さより少し大きいという俺の注文どおりに作ってくれたよ
うだ。

「こちらが注文の品になります」

「板も厚くて、丈夫そうだな」

板はかなり分厚いものが使われている。
底の板の厚みも相当あるようだ。

「これくらいはないとすぐに壊れてしまいます」

運んできた使いの人はそう言い残して帰っていった。
これくらいないと壊れるって。
どれだけ水が入るのだろう。

考えてみよう。

一リットルは千シーシーだ。

一シーシーは一立方センチだから、一センチ×一センチ×一センチ。

百センチ×十センチ×一センチで千シーシー、一リットルになる。
一メートルは百センチなので一メートル×十センチ×一センチで
一リットル、一メートル×一メートル×一センチは十リットルである。

面積が縦横一メートルで深さ一センチの容器には水が十リットル
入る。

あれ？

思ったよりだいが多いな。

たらいの面積は、半径×半径×円周率だから、直径が二メートル
の半径一メートルとして、三・一四平方メートル。

深さは五十センチとして、三・一四平方メートル×五十センチ×
十リットルは、千五百七十リットル？

落ち着くじ。

落ち着け。

計算間違いは……ない。

再度計算してみたが、間違いはなかった。

このたらいには水が千五百七十リットルも入るのか。

水一リットルは一キログラムだから、千五百七十キログラム。

約一・五トンということになる。

ものすごい水量だ。

トンなんていう重さが日常生活に出てくるとは思わなかった。

それは板も厚くなるわ。

「と、とりあえず二階に運ぼうか」

「はい、ご主人様」

ロクサーヌと二人でたらいを二階に上げる。

いや。もうたらいではなく湯船でいいだろう。

重さも結構あるようだが、転がすことができるので無理なく運べた。

階段も二人で押せば問題ない。

排水口のある二階の部屋に入れる。

中に入れた後、ロクサーヌと二人して注意深くゆっくりと寝かせた。

部屋は八畳間くらいの広さがあるので、湯船を置いても余裕がある。

「さすがは邸宅だな」

「えっと。これは何なのでしょう?」

「聞いて驚け見て笑え。これを湯船として利用する」

ロクサーヌに宣言した。

入って極楽、水を作るのが地獄だ。

ウォーターウォール一回で十リットルの水が作れるとして、満杯にするには百五十七回も魔法を念じなければならない。

百五十七回か。

しかも水を作るだけで。

頭が痛い。

「湯船というのは、お風呂に使うものですか」

「そうだ。風呂に入る。早速これから準備したい」

「かしこまりました」

どれだけ時間がかかるか分かったものではない。

準備は早めしておくべきだろう。

まずは湯船を軽く水洗いし、ウォーターウォールで水がめに水をためた。

たまつたら、水がめにファイヤーボールをぶち込んで水を温める。ファイヤーボール一発だとぬるま湯程度、二発で熱湯になる。

準備の間にお湯が冷めることも考え、二発撃ち込んでから湯船に移した。

最後に熱すぎたら水で薄めればいいだろう。

陶器の水がめと違ってたらいは木だから、湯船に水をためてからファイヤーボールを撃つのはやめた方がいい。

燃え移ったら大変だ。

湯船にお湯をためながら、魔力を消費すると迷宮に飛んで充填す

る。

大変だ。

「これでは風呂に入るのは一週間に一度くらいだな」

「イツシユウカンですか？」

「……十日に一回か二回だ」

何回めかに迷宮にワープしたとき、思わず愚痴が出てしまった。

この世界には週という概念はない。

ロクサーヌから見れば、俺はときおりわけの分からない言葉を話す変人だろう。

大変な変人である。

途中からは、風呂場の温度が上がってもっと大変になってしまった。

サウナ状態だ。

ロクサーヌは外に待たせ、俺だけが入って作業する。

少しいるだけで汗びっしょりだ。

「はい」

外に出ると、ロクサーヌが手ぬぐいを渡してくれた。

汗を拭き、さらに迷宮と往復する。

こうまでしてロクサーヌと風呂に入りたいのか、俺は、大変な変態だ。

最後は意地になって風呂に湯をためた。

やけくそだ。

それはもうためてやりましたですよ。

準備を始めてからおそらく二時間以上はかかっている。
水がめに予備の水を用意し、外に出た。

「今日のところはこのくらいにしといてやる。完成だ」

たらいには九割がたお湯がたまっている。

風呂場の中は白い蒸気が充満していた。

「おつかれさまでした」

「時間もあるし、一度迷宮に行き、夕食を取ってから風呂に入ろう」

ロクサー又から手ぬぐいを受け取り、汗を拭く。

手を入れたらまだかなり熱かったので、数時間は大丈夫だろう。

「えっと。私もよろしいのですか」

「もちろん、そのつもりだが？」

ロクサー又は風呂嫌いなんだろうか。

嫌だと思っても入ってもらいたい。

命令してでも入ってもらおう所存である。

「風呂に入るのは王侯貴族だけです。それに、途中から外で待つように言われましたので」

「外で待つてもらったのは中が蒸し暑いからだ。二人とも汗まみれになることはない」

「そうだったのですか。何かご主人様にとって特別なことがあるのかと思っていました」

そんなことを思っていたのか。

手ぬぐいを返しながら、イヌミミをなでた。

「まあ特別は特別だな。ロクサー又と一緒にいるから」

「え。……あ、あの」

「一緒に入ってくれるよな」

「は、はい。ありがとうございます」

よかった。

一緒に入ってくれるようだ。

最後の最後で断られたりしたら、何のために苦労したのかまるっきり分からなくなるところだった。

その日の作業をすべて終えてから、風呂場に入る。

お湯はまだ少し熱かった。

たらいの上に直接ウォーターウォールを作り出し、水で薄める。

温度の調整も一苦労だ。

魔法だと微調整するのは難しい。

右手を湯船に突っ込み、かき回した。

こんなもんだらうか。

お湯を作るのにかかる時間も大体把握したし、次からは半分くらいのお湯は水がめにファイヤーボール一発でいい。

少しは楽になるだらう。本当に少しだが。

レベルが上がったらもうちょっとは楽になるのだらうか。

湯船には、夕食の前にレモンを浮かべている。

正確にレモンと同じかどうか分からないが、レモンで翻訳されたのでレモンだらう。

菖蒲湯では代わりにどんな草を入れたらいいか分からない。変に生ぐさいにおいがしても大変だ。

柚子湯ならば、何かの柑橘類で代用可能ではないだろうか。

レモンなら香りはいい。

食用だから変な成分が溶け出すということもないはずだ。

ロクサーヌが部屋についている穴にカンテラをセットした。体にお湯を浴びて軽く洗い流す。

ロクサーヌの身体も洗い流してから、二人して風呂に入った。

気持ちいい。

温かなお湯が全身を包み込んだ。のびのびと手足を広げる。

湯船が大きいだけに、温泉気分だ。

檜ではないので芳醇な木の香りこそないが、それでも素晴らしい。たらいのふちに手ぬぐいを敷き、その上に頭を乗せて寝転がった。

ロクサーヌも横に寝転がる。

腕を伸ばし、抱き寄せた。

気持ちいい。

細くしなやかな身体が隣に来る。

浮力のおかげか軽々と抱き寄せることができた。

足を絡めて、しがみつく。

お湯の中、ロクサーヌの肌はなめらかだ。

しっとりかつさらさらしていて、非常に気持ちがいい。

「うーん。最高だ」

「はい。とてもいい気分です」

ちよつと意味が違うような気がしたが、ロクサーヌも喜んでるようなのでどうでもいいだろう。

俺の膝の辺りを、さわさわと何かがこすった。
妙に心地よい。

何だろうと思ひ、手を伸ばす。

尻尾だ。

ロクサーヌの尻尾が、風呂の中で水草のように広がっていた。
腕ですくうと、柔らかい筆で刷いたかのように、手をなでる。

お湯の中、どこまでも軽く、繊細に、腕をさすった。

これは意外な発見だ。

「ロクサーヌの尻尾が気持ちいい」

「そうですね？　ありがとうございます」

手を伸ばし、何度も尻尾をゆする。

お湯の中で優しく揺らめいた。

そよ風が通り過ぎるように尻尾がなびく。

ロクサーヌの尻尾は風呂こそよけれ。

ロクサーヌと一緒に風呂に入るのは、思った以上に素晴らしい。

準備が大変なので毎日は無理だが、十日に一度、いや、一週間に

一度、いや、五日に一度は入りたい。

三日に一度でもいいくらいだ。

体をずらし、頭ごと湯船につかった。

髪の毛一本一本の間にお湯がしみこんでくる。

お湯の中で髪の毛をかきむしった。

今までの汚れを全部落とすように何度も手ですいてから、頭を上げる。

「気持ちいい。ロクサーヌもやってみな」

「はい」

ロクサーヌが頭部をお湯につけた。

俺も腕を伸ばし、お湯の中でロクサーヌの髪の毛をすく。

イヌミミももみ洗った。

髪の毛にはさすがに尻尾のようなさわさわ感はない。

それでも、お湯の中でしっとり指に絡みついてくる。

ロクサーヌは優に一分近くお湯に沈んでいた。

やがて上半身を持ち上げ、水を払う。

水から上がったとき、巨大な山がぶるんぶるん震えていたのを俺が凝視していたのは内緒だ。

やはり風呂はいい。

風呂は最高だ。

レア食材

武器商人 L V 1

効果 体力小上昇 知力微上昇 精神微上昇

スキル 武器鑑定 カルク アイテムボックス操作

防具商人 L V 1

効果 体力小上昇 知力微上昇 精神微上昇

スキル 防具鑑定 カルク アイテムボックス操作

料理人 L V 1

効果 器用小上昇 体力微上昇 敏捷微上昇

スキル レア食材ドロップ率アップ アイテムボックス操作

ジョブが増えた。

武器商人と防具商人と料理人だ。

正直なところ、効果とスキルはどれもこれも微妙ではある。

俺には鑑定があるから、武器商人と防具商人には有効な使い道がない。

せめて効果が知力小上昇だったらよかったのに。

派生ジョブがあったりしたら厄介なことこの上ない。

料理人のスキル、レア食材ドロップ率アップは使えるかもしれない。

コボルトに効いてコボルトソルトばかり落とされても嫌だが。

あれはレアドロップではないから大丈夫なのか。

料理人といっても、料理を作るのに役立つようなスキルはないらしい。

あくまでも迷宮探索用ということだろう。

役に立つとしたら、アイテムボックスに食材を保管できることくらいか。

アイテムボックスの大きさは、三職とも三十種類×三十個。

つまり、探索者Lv30になったので出てきたジョブだと考えていい。

ジョブをつけたらアイテムボックスの大きさがいきなり三十種類×六十個になったので、最初はちょっとびっくりした。

Lv1でこの大きさなので、レベルにかかわらず固定だろう。

ジョブの出現条件は、それにプラス、武器や防具を売買すること、料理を作ることかもしれない。

加賀道夫 男 17歳

探索者Lv30 英雄Lv27 魔法使いLv29 僧侶Lv26

料理人Lv1

装備 ワンド 皮の帽子 皮の鎧 皮のグローブ 皮の靴

ロクサーヌ 16歳

獣戦士Lv14

装備 シミター 木の盾 皮の帽子 皮のジャケット 皮のグローブ サンドルブーツ

ものは試しと料理人をつけてみる。

しかし、せっかくなのでつけたのに、六階層の敵はレア食材を残さなか

った。

ギルドで買い取ってもらえるオリブオイルが食材扱いかどうか分からないが、少なくともレアではないだろう。

ミノとかも残さない。

使えない牛だ。

せいぜい探索を進めることにする。

お湯を張るのが面倒だということが分かったので、風呂に入るの
は何か特別なことがあったときにしようと思っていた。

次の階層に進んだときこそが、それにふさわしいだろう。

おかげで張り切って探索が進んだのか、たまたまボス部屋が近く
にあったのか、ベイルの迷宮六階層の探索は比較的早く終了した。

自分が面倒だから風呂を沸かすのは特別なときだけにしようと思
えたのに、それを早く達成するためにがんばってしまうのは本末転
倒という気がする。

ままならない。

現れる魔物とボスの組み合わせはどの迷宮でも同じなので、六階
層のボスとともに撃破経験がある。

問題なくクリアした。

エスケープゴート L V 7

エスケープゴート L V 7

ベイルの迷宮七階層の魔物は、このエスケープゴートのようだ。

二匹現れたので一発めのファイヤーストームを念じる。

「エスケープゴートは逃げると聞いたことがあります。魔法は使わず、ご主人様の剣で倒した方がいいかもしれません」

魔法が発動したところで、ロクサーヌが忠告してくれた。もう遅いって。

名前のとおりエスケープする山羊なのか。

しかし、エスケープゴートは逃げ出すことなく向かってくる。

ロクサーヌが前に出て、対峙した。

俺はその間にデュランダルを用意する。

エスケープゴートは、チープシープほど凶暴そうではないが、いかつい顔つきの山羊だ。

少なくとも可愛くはない。

頭のツノはチープシープよりも大きい。緩やかな曲線を描いて上を向いており、まがまがしい。

左に回り込んで、山羊にデュランダルをお見舞いした。胸を斬りつけたが倒れない。

Lv7ともなると、魔法一発プラスデュランダル一撃でも倒れないようだ。

エスケープゴートが頭を低くかまえた。

動きを警戒していると、思ったとおり突進してくる。

身を翻して山羊の突進を避けた。

これくらいは余裕で避けられる。

俺とロクサーヌの間を山羊が通った。

しかし魔物は立ち止まらない。
そのまま反対側に抜けて駆け出す。

しまった。

エスケープゴートは逃げるのだった。

あわててデュランダルを振るが、もう届かない。

追いかけて間に合うはずもないので、魔法にかけるしかない。
ファイヤーストームと念じた。

火の粉が舞い、二発めの魔法が作動する。

まだ見える位置で逃げているエスケープゴートにも襲いかかった。
魔物が火にまみれ、倒れる。

よかった。

デュランダルと魔法ですでに相当のダメージを与えていたらしい。

ロクサーヌが相手をしている残りの一匹はまだ逃げ出さない。

横からデュランダルを叩き込んだ。

魔物が倒れ、煙となって消える。

こっちは一撃でしとめた。

エスケープゴートレベル7は魔法二発とデュランダル一撃で倒せる
ようだ。

逃げ出されるのは厄介だ。

次にロクサーヌが見つけたのはチープシープレベル7だった。

一匹なのでファイヤーボールで迎え撃つ。

一発、二発、三発。ロクサーヌが正面に陣取って羊の攻撃を避け
るの見守りながら、横に回って四発、五発。

倒すのに五発かかってしまった。

「恐れていたように、ついにLv7からは魔法五発か」
「七階層からはそのようですね」

簡単に言ってくれる。

倒すのに時間がかかるということは、それだけ長い間魔物と対峙しなければならぬということだ。

長時間戦えば、敵の攻撃を喰らう回数も増える。

ロクサー又ならばかわせばいいと言っただろうが、俺はそういうわけにはいかない。

七階層は、様子を見つつ、ゆっくりと攻略するのがよいだろう。

一匹で出たエスケープゴートを魔法で迎撃してみた。

三発めが当たったところできびすを返して逃げられる。

おそらく、ランダムで逃げ出すのではなく、ある一定のダメージを受けると逃げるのだろう。

現状、魔法二発はセーフ、三発めはアウトということか。

体力はチープシープLv7と似たようなものだろうから、多分倒すのに魔法が五発必要だ。

三発めを当てた時点でほとんど剣が届く位置に近づいていたから、逃げ切られるまでに二発当てられる。

はずだったが、五発めのファイヤーボールを避けられた。

背中を向けて逃走しているのに。

三発めで逃げ出されたのでは厄介か。

ストーム系の魔法を使えば大丈夫だが。

「面倒な魔物だな」

「あまり戦わないようにしますか」

「そうだな。欲をいえばそうなるが、あまり考えないことにしよう。その他の条件が同じときだけ、別の魔物優先で」

魔法二発を撃った後、デュランダルを出して処理することもできる。

MPや効率との兼ね合いになるが、特別に避けることはないだろう。

前衛のロクサーヌには余分な負担がかかるが、しょうがない。

厄介とはいっても、エスケープゴートは逃げるだけだ。

ベイルの迷宮七階層はなんとか戦えるか。

クーラタルの迷宮も七階層に移動した。

クーラタルの迷宮七階層の魔物は、懐かしいスローラビットLv7だ。

スローラビットとは最初の村の裏手にある森で戦った。

あそこにスローラビットがいたのは、森のどこかに迷宮がいて、その迷宮の一階層の魔物がスローラビットである、ということに興味しているらしい。

入り口はなかったなので、まだ五十階層の大きさに達していない幼い迷宮だ。

スローラビットは、動きも遅いし、武器もなく体当たり攻撃だけだし、非常に戦いやすい。

クーラタルの迷宮七階層もなにかなるか。

魔物はこちらを見つけると飛び跳ねて近づいてきた。

別に久しぶりの再開に喜んでなついてきたわけではない。

迷宮内ではどの魔物もアクティブに人を襲うようだ。

ファイヤーボール五発で丸焼けにする。

スローラビットLv7も五発か。

スローラビットはレア食材である兎の肉を残す。

ジョブ料理人の本領を発揮するときがきた。

と思ったが、最初に残したのは兎の毛皮だった。

「兎の毛皮か。あの村の商人のところへでも売りに行くか」

「兎の毛皮なら、帝都にある高級服屋で買い取ってくれると思います」

ロクサーヌが兎の毛皮を拾い、渡してくる。

「そうなのか？」

「はい。この間ご主人様が見たとおっしゃっておられたようなお店で大丈夫でしょう」

「なんで兎の毛皮だけは買い取ってくれるんだろう」

低階層の魔物が残すアイテムは、多くの人が自分で手に入れられる。珍しいものではないし、ギルドに行けば在庫がいっぱいある。

だから、特別に買取依頼が出るようなことはまずない、と聞いた。それなのに何故兎の毛皮は買い取ってくれるのか。

「兎の毛皮で作ったコートは防寒具として優れ、とりわけ貴族女性の間で大変な人気があるそうです。コートを作るには大量の兎の毛皮が必要のため、兎の毛皮だけはどうしても足りないのです」

「なるほど」

「高級服を作る工房や店は最新流行のコートを作り出そうと常に競

い合っています。小さな兎の毛皮をたくさん縫い合わせるので、加工の手間賃を多く取れて利益が大きいとも聞きました」

「こちらの世界でも女性のファッション競争は苛烈らしい。ノーファー運動とかもないのだろう。」

「ロクサーも兎の毛皮のコートとかほしい？」

「私は別に。狼人族は寒さに強い種族です。それに、奴隷が着るようなものでもありませんし」

「寒さに強いんだ」

「はい」

つまり薄着でよいと。

ロクサー人には薄着が似合う。

肌の露出が多い服、胸の曲線が分かる服が最高に似合うと思いますです。

朝食に兎の肉をソテーしたものを食べた後、帝都へ赴いた。
高級ブティックに行く。

ちなみに、あまった兎の肉はクーラタルの肉屋で買い取ってくれた。

スローラビットを四匹近く狩ったのに、出た兎の肉は四個だ。

料理人のスキル、レア食材ドロップ率アップといっても、そう極端に上がるものではないらしい。

「いらっしやませ」

帝都のブティックに俺とロクサーヌが入っていくと、店員が頭を

下げた。

完全に顔を下に向けており、非常に慇懃な感じだ。さすがは高級店か。

「兎の毛皮の買取を頼めるか」

「こちらへどうぞ」

キャッシャーのいる場所に先導される。店に入って左奥の壁だ。

「いらつしゃいませ」

「こちらのお客様に兎の毛皮の買取をお願いします」

店員の女性がキャッシャーの男性に話しかけ、引継ぎを行った。

「それでは、兎の毛皮をお乗せください」

「頼む」

キャッシャーの人が出したトレーに兎の毛皮を置く。全部載せると、トレーが引っ込められた。

「全部で三十四枚になります。よろしいですか」

キャッシャーが一つ一つ検品してから告げる。

うなずくと、一度奥に入り、トレーを持って再度出てきた。

トレーには銀貨が八枚と銅貨が大量に入っている。

兎の毛皮一枚二十ナールの三十四枚に三割アップで八百八十四ナール。

銅貨は八十四枚あるはずだ。

めんどくさいので数えずに受け取る。

この高級店でごまかしてくるようなことはないだろう。

「確かに受け取った」

「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております」

キャツシヤアの男性が最敬礼をした。

客ではないのに丁寧な態度だ。

荒々しい仕事をしている探索者や冒険者がこのような店の上客になることが多くあるとも思えない。

兎の毛皮のコートは貴族女性に人気があると言っていたし、帝都にあるこれだけの高級店だと、客層もそういう女性が多いのではないだろうか。

やや場違いな感じもあるが、歓待されていていい気分です。店を出ようとする。

横に服が並んでいるのが目に入った。

つややかな光沢のある綺麗な服。おそらく女性服だろう。

そこに細い肩紐がついているのが見える。

キャミソールだ。

手にとって広げてみると、結構な長さがあり、下の裾が開いてワンピースになっていた。

キャミソールドレスだ。

布はサテン地だろうか。

生地は結構薄い。

透けはしないものの、微妙なところではあるだろう。

「そちらは貴族女性などに大変人気のある品でございます。インナーや寝間着として使用されます」

最初に出てきた女性店員が説明してきた。

男の俺がじろじろと見るような商品でもなさそうだ。

あわてて服を戻す。

「どうだ？」

ロクサーヌに訊いてみた。

「えっと。あの」

悪くない服だ。

ロクサーヌには薄着が似合う。

素肌の上からこれを着れば。

「やはり似合うだろう。いくらだ」

「八百ナールと、大変お求めやすくなっております」

高いには高い。

俺が今着ている装備品を除いた服全部よりも高いくらいだ。

しかし、絹だろうからもっと高いかとも思ったが、それほどでもない。

「二着ほど、買ってあげ」

「よろしいのですか」

うなずいて、ロクサーヌに選ばせた。

ロウサーヌがかぶりつくように一着一着見ていく。
高級店だけあるせいか、色も結構あるようだ。

青。なんか違う。

赤。ちよつとどぎつい感じ。

緑。落ち着いていて、いい色。

黄。淡く、綺麗な黄。これもいい色だ。

黒。黒もいいが。

「一着はこの系統の色がいい」

薄紅色のものを指差した。

やはりピンク系のものが可愛らしいだろう。

鮮やかなピンクはなかったが、淡い薄紅色でも十分だ。

「かしこまりました」

「頼む」

ロクサーヌは、あれこれ店員と会話をしながら、じっくりと選んでいった。

「丁寧に縫製してありますが、すぐに破れてしまいそうですね」

「そうですね。これはそういう布地でございますので」

「どのように洗濯するのでしょうか」

「水とコイチの実のふすまで一着ずつ優しく押し洗いしてください」

結局、長い時間かかってロクサーヌが選んだのは白と薄紅色の二着だ。

三割引でそれを買った。

なんか、店側の計略にまんまとはまってしまったような気がする。こちらに悪い気を起こさせない慇懃な態度。レジ近くに、探索者にも買えそうな安い小物。いかにもきつちり販売戦略ができあがっている感じがする。

まあでも、悪い買い物ではなかったらう。

風呂から上がった後に薄紅色のキャミソールを着たロクサーヌを見て、その想いを強めた。

悪い買い物ではない。

素晴らしい逸品だ。

「おおつ。すごい。似合ってる」

「ありがとうございます」

淡い薄紅色がロクサーヌの肌をほんのりと色づけている。

上品でしなやかに、優しくロクサーヌを覆っていた。

身体のラインを強調するわけでも肌にぴったりと張りついているわけでもないが、しっとりとしてロクサーヌの身体を包んでいる。

いや。二つの大きな山塊には張りついていた。

張りついているというか、押し上げられている。

内側からの恐ろしい造山活動によってきつく突き上げられていた。

その頂には小さな出っ張りが。

この果実はレア食材だ。

薄手の服を着ると胸のふくらみが猛々しい。

迫力が違う。

ロクサーヌの胸だから服を着ないのもすごいが、一枚あることによって存在感がいや増すのだろうか。

服はしつとりと清楚だが、中身は暴力的だ。

シルクの光沢とあいまって、つやつやと輝いて見えた。

やはり買ってよかったと、そう思う次第であります。

「最高に綺麗だ」

「……あの、んっ……」

反論は口で封じた。

くっ。

これは我慢がならん。

さつき風呂で済ませたのだが、一回戦に突入する必要があるようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4259s/>

異世界迷宮で奴隷ハーレムを

2011年10月28日20時07分発行